

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（6）

東九州自動車道建設（鹿屋串良JCT～曾於弥五郎IC間）に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

天神段遺跡 2

（曾於郡大崎町）

縄文時代前期～晩期編

2016年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（6）

天神段遺跡 2

縄文時代前期～晩期編

二〇一六年三月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター





遺跡遺景



曾煩式土器



深浦式土器



石剣

序 文

この報告書は、東九州自動車道（鹿屋串良 JCT～曾於弥五郎 IC 間）の建設に伴って、平成 19 年度から平成 25 年度にかけて実施した曾於郡大崎町野方に所在する天神段遺跡の発掘調査の記録（縄文時代前期～晩期編）です。

天神段遺跡では、7 年に及ぶ調査で、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古代・中世・近世といった複数の時代の遺構・遺物が数多く発見されており、当時の人々の生活及び地域の歴史を知る上で貴重な資料となるものと考えます。

本報告書では、縄文時代前期～晩期までの調査成果を報告していますが、特筆すべきは、縄文時代前期に帰属すると思われる完形の「石剣」が発見されたことです。

この時期の石剣は、西日本で発見例が現段階ではないため、「西日本最古の石剣」として全国に報道され、注目を集めています。

この石剣をはじめとする多くの調査成果は、当時の生活がうかがえる貴重な資料であり、今後の調査・研究に大きな役割を果たすものとなるでしょう。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々にご利用され、埋蔵文化財に対する正しい理解と認識を深めていただき、文化財保護の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘から報告書刊行までの一連の調査にあたり、御協力いただきました国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、鹿児島県立埋蔵文化財センター、大崎町教育委員会及び志布志市教育委員会等の各関係機関並びに調査において御指導いただいた先生方や発掘作業、整理作業に従事された方々に対し、厚くお礼申し上げます。

平成 28 年 3 月

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長 堂 込 秀 人

報告書抄録

ふりがな	てんじんだんいせき に じょうもんじだいぜんきからばんきへん							
書名	天神段遺跡2 縄文時代前期～晩期編							
副書名	東九州自動車道建設（鹿屋申良 JCT～曾於弥五郎 IC 間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第6集							
編集者名	松下建生 長野眞一 倉元良文 深川祐子							
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576							
発行年月	西暦 2016 年 3 月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査起因
		市町村	遺跡番号					
天神段遺跡	鹿児島県 曾於郡 大崎町	46468	468-62	31° 30′ 18″	130° 55′ 48″	① 2007.05.16～ 2008.03.19 ② 2008.05.22～ 2009.03.19 ③ 2009.05.08～ 2010.03.19 ④ 2010.05.10～ 2011.03.11 ⑤ 2011.05.09～ 2012.03.09 ⑥ 2012.05.08～ 2013.03.08 ⑦ 2013.04.22～ 2013.10.25	19,042	東九州自動車道 建設（鹿屋申良 JCT～曾於弥五 郎 IC 間）に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
天神段遺跡	散布地	縄文時代 前・中期	落とし穴 土坑 集石遺構 石斧集積遺構	3基 14基 19基 1基	骨製土器、深浦式土器、 春日式土器、条痕文土器 石鏃、石匙、石斧、石皿、磨石、 敲石、石剣			
		縄文時代 晩期	竪穴住居跡 落とし穴 土坑 集石遺構	1軒 16基 139基 3基	入体式土器、黒川式土器、石 鏃、石斧、磨石、敲石、石皿、 石刀、軽石製品			
遺跡の概要	<p>本遺跡は、古墳時代を除く旧石器時代～近世の複合遺跡で、各時代とも貴重な遺構や遺物が確認されている。</p> <p>本報告書では、縄文時代前期～晩期の遺構及び遺物を報告している。中でも、V層出土の石剣は、縄文時代前期の骨製土器に伴うと判断したもので、西日本最古の発見例として注目されている。</p> <p>遺構では、縄文時代後期末～晩期初頭の入体式土器が廃棄された竪穴住居跡が遺跡の北東部で1軒発見されている。</p>							

例 言

- 1 本編は、東九州自動車道建設（鹿屋串良JCT～曾於弥五郎IC間）に伴う天神段遺跡発掘調査報告書2編時代前期～晩期編である。
- 2 天神段遺跡は鹿児島県曾於郡大崎町野方と一部、志布志市有明町に所在する。
- 3 発掘調査事業は、平成19年度から平成24年度までは国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という。）が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「県埋文センター」という。）が実施した。平成25年度からは国土交通省九州地方整備局から鹿児島県が受託し、県教委の管理のもと公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「(公財)埋文調査センター」という。）が実施している。
- (1) 発掘調査（本調査）は、平成19年度から平成24年度までは県埋文センターが、平成25年度は(公財)埋文調査センターが実施し、発掘調査（本調査）のすべてを終了した。
- (2) 整理・報告書作成は、平成22年度から平成24年度までは県埋文センター東九州自動車道関係遺跡整理作業所で、平成25年度からは(公財)埋文調査センター第一整理作業所で行った。平成26年度に弥生時代～近世編を刊行した。
- 4 掲載遺構番号は、時代及び遺構の種類ごとに番号を付し、本文・挿図・表・図版の遺構番号は一致する。掲載遺物番号は通し番号であり、本文・挿図・表・図版の遺物番号は一致する。
- 5 遺物注記等で用いた遺跡記号は「TJ」である。
- 6 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対対高である。
- 8 本書で使用した方位はすべて磁北である。
- 9 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、主として調査担当者が行った。また、空中写真の撮影は、

(有)スカイサーバイ九州、ふじた航空写真、九州航空株式会社へ委託した。

- 10 遺構実測図の作成及びトレースは、松下建生が整理作業員とともに行った。また、遺物出土状況図の作成は担当者の意向を踏まえ松下建生が整理作業員とともに行った。
- 11 本編に係る出土遺物の実測・トレースは、土器を長野眞一・倉元良文が担当し、石器を長野眞一が担当し、整理作業員とともに行った。また、石器実測の一部を(株)九州文化財研究所、株式会社パスコに委託し、長野眞一が監修した。
- 12 出土遺物の写真撮影は、吉岡康弘・辻明啓が行った。
- 13 本報告に係る自然科学分析は、種実同定・放射性炭素年代測定を(株)加速器分析研究所、黒曜石産地推定を有限会社遺物材料研究所、テフラ分析をバリノ・サーグエイ(株)、炭素年代をパレオ・ラボAMS年代測定グループに委託した。また、編集作業を深川祐子が行った。
- 14 本編の執筆は次のように分担し、編集は松下建生が行った。
第1章～第III章 松下建生
第IV章第1節(縄文時代前・中期)
遺構：松下建生 土器：倉元良文 石器：長野眞一
第2節(縄文時代晩期)
遺構：松下建生 土器・石器：長野眞一
第V章 深川祐子
第VI章 長野眞一・倉元良文・松下建生
写真図版
遺構：松下建生 遺物：長野眞一・倉元良文
助言：吉岡康弘
- 15 本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は県埋文センターで保管し、展示・活用を図ることにしている。

凡 例

- 1 本報告書掲載の遺構位置図・遺物出土状況図は、1グリッド(1マス)が10m四方であり、各図に縮尺を提示してある。
- 2 本報告書掲載の遺構・遺物の縮尺は基本的には以下のとおりである。ただし、大型の土器・石器についてはレイアウト用紙に合わせて縮尺を変えてあるので、各図に提示してある縮尺を参照していただきたい。
遺構：1/20、土器・礎石器：1/3、剥片石器：原寸
- 3 土器の実測図については、基本的に左に外面・中央に内面・右に断面という形で掲載してある(図1)。
本遺跡で出土した縄文時代晩期の土器は破片資料が多かったため、住居内及び包含層出土の土器について、

主として口縁部の形状を比較・確認しやすいように断面図を中央に、左に内面、右に外面の拓本もしくは実測図を配置した(図2)。



図1

図2

- 4 第V章自然科学分析の遺構・遺物番号については、本報告書に係る遺構・遺物のみ掲載番号に合わせて変更してある。

本文目次

巻頭図版

序文

報告書抄録

遺跡位置図

例言・凡例

目次

第I章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 整理・報告書作成作業	1
第II章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第III章 調査の方法と層序	7
第1節 調査の方法	7
1 発掘調査の方法	7
2 遺構の認定・分類・時期判断と検出方法	9
3 整理・報告書作成作業の方法及び内容	9
第2節 層序	10
第IV章 発掘調査の成果	15

第1節 縄文時代前・中期の調査成果	15
1 調査の概要	15
2 遺構	15
3 土器	35
4 V層出土の石器	88
第2節 縄文時代晩期の調査成果	127
1 調査の概要	127
2 遺構	127
3 土器	179
4 IV層出土の石器	216
第V章 自然科学分析	267
第1節 自然化学分析の概要	267
第2節 テフラ分析	267
第3節 放射性炭素年代測定	296
第4節 種実同定	313
第5節 黒曜石製石器産地推定	314
第VI章 総括	347
写真図版	353

挿図目次

第1図 周辺遺跡位置図	6
第2図 天神段遺跡グリッド配置図	8
第3図 土層断面図 (H-16 ~ 23区①)	11
第4図 土層断面図 (H-16 ~ 23区②)	12
第5図 土層断面図 (E ~ L-21区①)	13
第6図 土層断面図 (E ~ L-21区②)	14
第7図 縄文時代前期の全遺構位置図	16
第8図 縄文時代前期の落とし穴・土坑位置図	17
第9図 縄文時代前期落とし穴	18
第10図 縄文時代前期落とし穴内出土遺物	18
第11図 縄文時代前期土坑1	19
第12図 縄文時代前期土坑2	20
第13図 縄文時代前期土坑内出土遺物	21
第14図 縄文時代前期集石・石斧集積 (デポ) 遺構位置図	23
第15図 縄文時代前期集石遺構1 (1号)	24
第16図 縄文時代前期集石遺構2 (2号)	25
第17図 縄文時代前期集石遺構3 (3号・4号)	26
第18図 縄文時代前期集石遺構4 (5号・6号)	27
第19図 縄文時代前期集石遺構5 (7号~9号)	28
第20図 縄文時代前期集石遺構6 (10号~12号)	29
第21図 縄文時代前期集石遺構7 (13号~17号)	30
第22図 縄文時代前期集石遺構8 (18号・19号)	31
第23図 石斧集積 (デポ) 遺構	32
第24図 縄文時代前期集石遺構内出土遺物1	32
第25図 縄文時代前期集石遺構内出土遺物2・6号集積 (デポ) 遺構内出土遺物1	33
第26図 縄文時代前期集石遺構 (デポ) 遺構内出土遺物2	34
第27図 I 類土器文様模式図	36
第28図 縄文時代前・中期I類土器全出土分布図	38
第29図 縄文時代前・中期I類土器出土分布図 (掲載分)	39
第30図 縄文時代前・中期I類土器1	40
第31図 縄文時代前・中期I類土器2	41
第32図 縄文時代前・中期I類土器3	42
第33図 縄文時代前・中期I類土器4	43
第34図 縄文時代前・中期I類土器5	44

第35図 縄文時代前・中期I類土器6	45
第36図 縄文時代前・中期I類土器7	46
第37図 縄文時代前・中期I類土器8	47
第38図 縄文時代前・中期I類土器9	48
第39図 縄文時代前・中期I類土器10	49
第40図 縄文時代前・中期I類土器11	50
第41図 縄文時代前・中期I類土器12	51
第42図 縄文時代前・中期I類土器13	52
第43図 縄文時代前・中期I類土器14	53
第44図 縄文時代前・中期I類土器15	54
第45図 縄文時代前・中期II類土器全出土分布図	60
第46図 縄文時代前・中期II-3類土器出土分布図 (掲載分)	61
第47図 縄文時代前・中期II-1類土器1	62
第48図 縄文時代前・中期II-1類土器2	63
第49図 縄文時代前・中期II-1類土器3	64
第50図 縄文時代前・中期II-1類土器4	65
第51図 縄文時代前・中期II-1類土器5	66
第52図 縄文時代前・中期II-1類土器6	67
第53図 縄文時代前・中期II-2類土器1	68
第54図 縄文時代前・中期II-2類土器2	69
第55図 縄文時代前・中期II-2類土器3・II-3類土器1	70
第56図 縄文時代前・中期II-3類土器2・II-4類土器	71
第57図 縄文時代前・中期II-5類土器	72
第58図 縄文時代前・中期III類土器出土分布図	75
第59図 縄文時代前・中期III類土器	76
第60図 縄文時代前・中期IV類土器出土分布図	78
第61図 縄文時代前・中期IV-1-a類土器1	79
第62図 縄文時代前・中期IV-1-a類土器2・IV-1-b類土器1	80
第63図 縄文時代前・中期IV-1-b類土器2・IV-1-c類土器1	81
第64図 縄文時代前・中期IV-1-c類土器2	82
第65図 縄文時代前・中期IV-1-d類土器	83
第66図 縄文時代前・中期IV-2-b類土器・IV-3類土器	84
第67図 縄文時代前・中期IV類土器 (胴部①)	85
第68図 縄文時代前・中期IV類土器 (胴部②・底部①)	86

第 69 回	縄文時代前・中期IV類土器(底部②) ……	87
第 70 回	V層出土土器 1 (石鈎) ……	88
第 71 回	V層出土土器出土分布図(掲載分) ……	89
第 72 回	V層出土土器 2 (I類①) ……	90
第 73 回	V層出土土器 3 (I類②) ……	91
第 74 回	V層出土土器 4 (I類③) ……	93
第 75 回	V層出土土器 5 (II類①) ……	94
第 76 回	V層出土土器 6 (II類②) ……	95
第 77 回	V層出土土器 7 (III類) ……	96
第 78 回	V層出土土器 8 (IV類①) ……	97
第 79 回	V層出土土器 9 (IV類②) ……	98
第 80 回	V層出土土器 10 (V類) ……	99
第 81 回	V層出土土器 11 (VI類①) ……	101
第 82 回	V層出土土器 12 (VI類②) ……	102
第 83 回	V層出土土器 13 (VI類③) ……	103
第 84 回	V層出土土器 14 (VII類①) ……	104
第 85 回	V層出土土器 15 (周辺加工土器) ……	105
第 86 回	V層出土土器 16 (石匙①) ……	108
第 87 回	V層出土土器 17 (石匙②) ……	109
第 88 回	V層出土土器 18 (石匙③) ……	110
第 89 回	V層出土土器 19 (石匙④) ……	111
第 90 回	V層出土土器 20 (石匙⑤) ……	112
第 91 回	V層出土土器 21 (削器①) ……	113
第 92 回	V層出土土器 22 (削器②) ……	114
第 93 回	V層出土土器 23 (削器③) ……	115
第 94 回	V層出土土器 24 (挾入土器) ……	116
第 95 回	V層出土土器 25 (楔形石器) ……	117
第 96 回	V層出土土器 26 (石錐) ……	118
第 97 回	V層出土土器 27 (石核①) ……	120
第 98 回	V層出土土器 28 (石核②) ……	121
第 99 回	V層出土土器 29 (磨製・打製石斧・砥石) ……	122
第 100 回	V層出土土器 30 (石皿①) ……	123
第 101 回	V層出土土器 31 (石皿②) ……	124
第 102 回	縄文時代晩期竪穴住居跡位置図 ……	127
第 103 回	縄文時代晩期の全遺構位置図 ……	128
第 104 回	縄文時代晩期竪穴住居跡(埋土状況) ……	129
第 105 回	縄文時代晩期竪穴住居跡(遺物出土状況) ……	130
第 106 回	縄文時代晩期竪穴住居跡内出土土器 ……	131
第 107 回	縄文時代晩期竪穴住居跡内出土土器 ……	132
第 108 回	縄文時代晩期の落とし穴・土坑位置図 ……	134
第 109 回	縄文時代晩期落とし穴 1 ……	136
第 110 回	縄文時代晩期落とし穴 2 ……	137
第 111 回	縄文時代晩期落とし穴 3 ……	138
第 112 回	縄文時代晩期土坑 1 (Type 1) ……	139
第 113 回	縄文時代晩期土坑 2 (Type 1) ……	140
第 114 回	縄文時代晩期土坑 3 (Type 1) ……	141
第 115 回	縄文時代晩期土坑 4 (Type 1) ……	142
第 116 回	縄文時代晩期土坑 5 (Type 1) ……	143
第 117 回	縄文時代晩期土坑 6 (Type 1) ……	144
第 118 回	縄文時代晩期土坑 7 (Type 1) ……	145
第 119 回	縄文時代晩期土坑 8 (Type 1) ……	146
第 120 回	縄文時代晩期土坑 9 (Type 1) ……	147
第 121 回	縄文時代晩期土坑 10 (Type 1) ……	148
第 122 回	縄文時代晩期土坑 11 (Type 1) ……	149
第 123 回	縄文時代晩期土坑 12 (Type 1) ……	150
第 124 回	縄文時代晩期土坑 13 (Type 1) ……	151
第 125 回	縄文時代晩期土坑 14 (Type 1) ……	152
第 126 回	縄文時代晩期土坑 15 (Type 1) ……	153
第 127 回	縄文時代晩期土坑 16 (Type 1) ……	154
第 128 回	縄文時代晩期土坑 17 (Type 2) ……	155

第 129 回	縄文時代晩期土坑 18 (Type 3) ……	157
第 130 回	縄文時代晩期土坑 1 (1・3・4号) 内出土遺物 ……	159
第 131 回	縄文時代晩期土坑 5 (5・6・8・10号) 内出土遺物 ……	160
第 132 回	縄文時代晩期土坑 11 (11・13号) 内出土遺物 ……	161
第 133 回	縄文時代晩期土坑 14 (14・15・17・18号) 内出土遺物 ……	162
第 134 回	縄文時代晩期土坑 19 (号①) 内出土遺物 ……	164
第 135 回	縄文時代晩期土坑 19 (号②) 内出土遺物 ……	165
第 136 回	縄文時代晩期土坑 21 (21号) 内出土遺物 ……	166
第 137 回	縄文時代晩期土坑 25 (25・45・46・50号) 内出土遺物 ……	167
第 138 回	縄文時代晩期土坑 52 (52・55・56・59・62・65号) 内出土遺物 ……	169
第 139 回	縄文時代晩期土坑 73 (71・78・79・81・86号) 内出土遺物 ……	170
第 140 回	縄文時代晩期土坑 92 (92・100・102・107・128号) 内出土遺物 ……	172
第 141 回	縄文時代晩期土坑 130 (130・132・138号) 内出土遺物 ……	173
第 142 回	縄文時代晩期集石遺構位置図 ……	177
第 143 回	縄文時代晩期集石遺構 ……	178
第 144 回	縄文時代晩期土器全出土分布図 ……	180
第 145 回	縄文時代晩期土器(深鉢・鉢形土器) 出土分布図 ……	181
第 146 回	縄文時代晩期土器 1 (深鉢 2 a 類①) ……	182
第 147 回	縄文時代晩期土器 2 (深鉢 2 a 類②) ……	183
第 148 回	縄文時代晩期土器 3 (深鉢 2 a 類③) ……	184
第 149 回	縄文時代晩期土器 4 (深鉢 2 b 類) ……	185
第 150 回	縄文時代晩期土器 5 (深鉢 3 a 類①) ……	186
第 151 回	縄文時代晩期土器(中華鍬形・木鏟形) 出土分布図 ……	188
第 152 回	縄文時代晩期土器 6 (深鉢 3 a 類②) ……	189
第 153 回	縄文時代晩期土器 7 (深鉢 3 b 類①) ……	190
第 154 回	縄文時代晩期土器 8 (深鉢 3 b 類②) ……	191
第 155 回	縄文時代晩期土器 9 (深鉢 3 c 類) ……	192
第 156 回	縄文時代晩期土器 10 (鉢形①) ……	193
第 157 回	縄文時代晩期土器 11 (鉢形②) ……	194
第 158 回	縄文時代晩期土器 12 (粗製浅鉢①) ……	195
第 159 回	縄文時代晩期土器 13 (粗製浅鉢②) ……	196
第 160 回	縄文時代晩期土器 14 (粗製浅鉢③) ……	197
第 161 回	縄文時代晩期土器 15 (浅鉢 2 a 類) ……	198
第 162 回	縄文時代晩期土器(浅鉢Ⅱ類・Ⅲ類) 出土分布図 ……	199
第 163 回	縄文時代晩期土器 16 (浅鉢 2 b 類①) ……	200
第 164 回	縄文時代晩期土器 17 (浅鉢 2 b 類②) ……	201
第 165 回	縄文時代晩期土器 18 (浅鉢 2 b 類③) ……	202
第 166 回	縄文時代晩期土器 19 (浅鉢 3 a 類) ……	203
第 167 回	縄文時代晩期土器 20 (浅鉢 3 b 類①) ……	204
第 168 回	縄文時代晩期土器 21 (浅鉢 3 b 類②) ……	205
第 169 回	縄文時代晩期土器(ヤリ形・匙形・扇形) 出土分布図 ……	206
第 170 回	縄文時代晩期土器 22 (マリ形) ……	207
第 171 回	縄文時代晩期土器 23 (リボウ・楕円突起・意形) ……	208
第 172 回	縄文時代晩期土器(底部・土質不明・与互・不明) 出土分布図 ……	209
第 173 回	縄文時代晩期土器 24 (底部・土質不明・与互・不明) ……	210
第 174 回	IV層出土土器 1 (I類①) ……	216
第 175 回	IV層出土土器出土分布図(掲載分) ……	217
第 176 回	IV層出土土器 2 (I類②) ……	218
第 177 回	IV層出土土器 3 (I類③) ……	219
第 178 回	IV層出土土器 4 (I類④) ……	220
第 179 回	IV層出土土器 5 (I類⑤) ……	221
第 180 回	IV層出土土器 6 (II類・III類) ……	222
第 181 回	IV層出土土器 7 (IV類①) ……	223
第 182 回	IV層出土土器 8 (IV類②) ……	224
第 183 回	IV層出土土器 9 (IV類③) ……	225
第 184 回	IV層出土土器 10 (IV類④) ……	226
第 185 回	IV層出土土器 11 (V類) ……	227
第 186 回	IV層出土土器 12 (VI類①) ……	228
第 187 回	IV層出土土器 13 (VI類②) ……	229
第 188 回	IV層出土土器 14 (周辺加工土器・石錐①) ……	230

第189 図	IV層出土石器 15 (石鏃②・石匙①) ……	231
第190 図	IV層出土石器 16 (石匙②) ……	232
第191 図	IV層出土石器 17 (石匙③) ……	233
第192 図	IV層出土石器 18 (石匙④) ……	234
第193 図	IV層出土石器 19 (削器①) ……	235
第194 図	IV層出土石器 20 (削器②) ……	236
第195 図	IV層出土石器 21 (削器③) ……	237
第196 図	IV層出土石器 22 (削器④) ……	238
第197 図	IV層出土石器 23 (削器⑤) ……	239
第198 図	IV層出土石器 24 (挾入石器・楔形石器) ……	240
第199 図	IV層出土石器 25 (二次加工剥片・微細鉤鎌直削片) ……	241
第200 図	IV層出土石器 26 (石核類①) ……	243
第201 図	IV層出土石器 27 (石核類②) ……	244
第202 図	IV層出土石器 28 (石核類③) ……	245
第203 図	IV層出土石器 29 (石核類④) ……	246

第204 図	IV層出土石器 30 (磨製石斧) ……	247
第205 図	IV層出土石器 31 (打製石斧①) ……	248
第206 図	IV層出土石器 32 (打製石斧②) ……	249
第207 図	IV層出土石器 33 (打製石斧③) ……	250
第208 図	IV層出土石器 34 (石皿①) ……	251
第209 図	IV層出土石器 35 (石皿②) ……	252
第210 図	IV層出土石器 36 (石皿③) ……	253
第211 図	IV層出土石器 37 (砥石) ……	254
第212 図	IV層出土石器 38 (磨石・蔽石類①) ……	255
第213 図	IV層出土石器 39 (磨石・蔽石類②) ……	256
第214 図	IV層出土石器 40 (磨石・蔽石類③) ……	257
第215 図	IV層出土石器 41 (甌製品) ……	258
第216 図	曾畑式土器分類図 ……	348
第217 図	深溝式土器と桑須土器出土状況図 ……	350

表目次

第1 表	周辺遺跡一覧表 ……	5
第2 表	天神段遺跡の基本土層 ……	10
第3 表	縄文時代前期落とし穴内出土石器観察表 ……	18
第4 表	縄文時代前期土坑内出土石器観察表 ……	21
第5 表	縄文時代前期集石遺構内出土石器観察表 ……	34
第6 表	縄文時代前期集石・石斧集積(テホ)遺構内出土石器観察表 ……	35
第7 表	縄文時代前期石斧集積(テホ)遺構内出土石器観察表 ……	35
第8 表	縄文時代前・中期Ⅰ類土器観察表 1 ……	55
第9 表	縄文時代前・中期Ⅰ類土器観察表 2 ……	56
第10 表	縄文時代前・中期Ⅰ類土器観察表 3 ……	57
第11 表	縄文時代前・中期Ⅱ類土器観察表 ……	73
第12 表	縄文時代前・中期Ⅲ類土器観察表 ……	76
第13 表	縄文時代前・中期Ⅳ類土器観察表 1 ……	81
第14 表	縄文時代前・中期Ⅳ類土器観察表 2 ……	82
第15 表	V層出土石器観察表 1 ……	97
第16 表	V層出土石器観察表 2 ……	93
第17 表	V層出土石器観察表 3 ……	99
第18 表	V層出土石器観察表 4 ……	100
第19 表	V層出土石器観察表 5 ……	106
第20 表	V層出土石器観察表 6 ……	107
第21 表	V層出土石器観察表 7 ……	110
第22 表	V層出土石器観察表 8 ……	112
第23 表	V層出土石器観察表 9 ……	118
第24 表	V層出土石器観察表 10 ……	119
第25 表	V層出土石器観察表 11 ……	124
第26 表	V層出土石器観察表 12 ……	125
第27 表	V層出土石器観察表 13(非掲載①) ……	125

第28 表	V層出土石器観察表 14(非掲載②) ……	126
第29 表	縄文時代晩期壑穴住居跡内出土石器観察表 ……	133
第30 表	縄文時代晩期壑穴住居跡内出土石器観察表 ……	133
第31 表	縄文時代晩期落とし穴内出土石器観察表 ……	138
第32 表	縄文時代晩期土坑内出土石器観察表 1 ……	174
第33 表	縄文時代晩期土坑内出土石器観察表 2 ……	175
第34 表	縄文時代晩期土坑内出土石器観察表 ……	176
第35 表	縄文時代晩期土器観察表 1 ……	211
第36 表	縄文時代晩期土器観察表 2 ……	212
第37 表	縄文時代晩期土器観察表 3 ……	213
第38 表	縄文時代晩期土器観察表 4 ……	214
第39 表	縄文時代晩期土器観察表 5 ……	215
第40 表	IV層出土石器観察表 1 ……	233
第41 表	IV層出土石器観察表 2 ……	234
第42 表	IV層出土石器観察表 3 ……	240
第43 表	IV層出土石器観察表 4 ……	247
第44 表	IV層出土石器観察表 5 ……	250
第45 表	IV層出土石器観察表 6 ……	254
第46 表	IV層出土石器観察表 7 ……	258
第47 表	IV層出土石器観察表 8 ……	259
第48 表	IV層出土石器観察表 9 ……	260
第49 表	IV層出土石器観察表 10 ……	261
第50 表	IV層出土石器観察表 11 ……	262
第51 表	IV層出土石器観察表 12 ……	263
第52 表	IV層出土石器観察表 13 ……	264
第53 表	IV層出土石器観察表 14 ……	265
第54 表	IV層出土石器観察表 15 ……	266

図版目次

巻頭図版

巻頭図版 1	遺跡遠景
巻頭図版 2	曾畑式土器
巻頭図版 3	深溝式土器
巻頭図版 4	石剣

巻末図版

図版 1	遺跡近景 ……	353
図版 2	土層断面, 作業風景, 発掘調査成果説明, 実測風景, 石剣出土状況 ……	354
図版 3	縄文時代前期落とし穴, 土坑 ……	355
図版 4	縄文時代前期集石遺構 1 ……	356
図版 5	縄文時代前期集石遺構 2・石斧集積(テホ)遺構 ……	357

図版 6	縄文時代前期遺構内出土遺物 1	358	図版 44	縄文時代晩期土坑 3, 集石遺構	396
図版 7	縄文時代前期遺構内出土遺物 2	359	図版 45	縄文時代晩期竪穴住居跡内出土遺物 1	397
図版 8	縄文時代前・中期 I 類土器 1	360	図版 46	縄文時代晩期竪穴住居跡内出土遺物 2	398
図版 9	縄文時代前・中期 I 類土器 2	361	図版 47	縄文時代晩期土坑内出土遺物 1	399
図版 10	縄文時代前・中期 I 類土器 3	362	図版 48	縄文時代晩期土坑内出土遺物 2	400
図版 11	縄文時代前・中期 I 類土器 4	363	図版 49	縄文時代晩期土坑内出土遺物 3	401
図版 12	縄文時代前・中期 I 類土器 5	364	図版 50	縄文時代晩期土坑内出土遺物 4	402
図版 13	縄文時代前・中期 I 類土器 6	365	図版 51	縄文時代晩期土坑内出土遺物 5	403
図版 14	縄文時代前・中期 I 類土器 7	366	図版 52	縄文時代晩期土坑内出土遺物 6	404
図版 15	縄文時代前・中期 I 類土器 8	367	図版 53	縄文時代晩期土坑内出土遺物 7	405
図版 16	縄文時代前・中期 I 類土器 9	368	図版 54	縄文時代晩期土器 1 (深鉢 2 a 類①)	406
図版 17	縄文時代前・中期 I 類土器 10	369	図版 55	縄文時代晩期土器 2 (深鉢 2 a 類②)	407
図版 18	縄文時代前・中期 II 類土器 1	370	図版 56	縄文時代晩期土器 3 (深鉢 2 a 類③, 2 b 類, 3 a 類①)	408
図版 19	縄文時代前・中期 II 類土器 2	371	図版 57	縄文時代晩期土器 4 (深鉢 3 a 類②)	409
図版 20	縄文時代前・中期 II 類土器 3	372	図版 58	縄文時代晩期土器 5 (深鉢 3 a 類③, 3 b 類①)	410
図版 21	縄文時代前・中期 II 類土器 4	373	図版 59	縄文時代晩期土器 6 (深鉢 3 b 類②, 3 c 類)	411
図版 22	縄文時代前・中期 II 類土器 5	374	図版 60	縄文時代晩期土器 7 (鉢形①)	412
図版 23	縄文時代前・中期 II 類土器 6	375	図版 61	縄文時代晩期土器 8 (鉢形②, 浅鉢 3 b 類①, マリ形①)	413
図版 24	縄文時代前・中期 II 類土器 7	376	図版 62	縄文時代晩期土器 9 (鉢形③, 粗製浅鉢①)	414
図版 25	縄文時代前・中期 III 類土器	377	図版 63	縄文時代晩期土器 10 (粗製浅鉢②)	415
図版 26	縄文時代前・中期 IV 類土器 1	378	図版 64	縄文時代晩期土器 11 (浅鉢 2 a 類, 2b 類①)	416
図版 27	縄文時代前・中期 IV 類土器 2	379	図版 65	縄文時代晩期土器 12 (浅鉢 2b 類②)	417
図版 28	縄文時代前・中期 IV 類土器 3	380	図版 66	縄文時代晩期土器 13 (浅鉢 2 b 類③, 3 類)	418
図版 29	縄文時代前・中期 IV 類土器 4	381	図版 67	縄文時代晩期土器 14 (浅鉢 3 b 類②)	419
図版 30	縄文時代前・中期 IV 類土器 5	382	図版 68	縄文時代晩期土器 14 (浅鉢 3 b 類③, マリ形②)	420
図版 31	V 層出土石器 1 (石剣)	383	図版 69	縄文時代晩期土器 15 (ゾロン・楕円形、垂形、土製円盤・与玉、平刷)	421
図版 32	V 層出土石器 2 (石鏃 1)	384	図版 70	IV 層出土石器 1 (石刀, 軽石製品)	422
図版 33	V 層出土石器 3 (石鏃 2)	385	図版 71	IV 層出土石器 2 (石鏃 1)	423
図版 34	V 層出土石器 4 (石鏃 3)	386	図版 72	IV 層出土石器 3 (石鏃 2)	424
図版 35	V 層出土石器 5 (石匙①)	387	図版 73	IV 層出土石器 4 (石鏃, 石匙①)	425
図版 36	V 層出土石器 6 (石匙②, 削器①)	388	図版 74	IV 層出土石器 5 (石匙②)	426
図版 37	V 層出土石器 7 (削器②, 挟入石器, 模形石器, 石鏃)	389	図版 75	IV 層出土石器 6 (石匙③)	427
図版 38	縄文時代晩期竪穴住居跡	390	図版 76	IV 層出土石器 7 (石匙④, 挟入石器, 削器①)	428
図版 39	縄文時代晩期落とし穴 1	391	図版 77	IV 層出土石器 8 (削器②)	429
図版 40	縄文時代晩期落とし穴 2	392	図版 78	IV 層出土石器 9 (削器③)	430
図版 41	縄文時代晩期落とし穴 3	393	図版 79	IV 層出土石器 10 (磨製石斧・打製石斧①)	431
図版 42	縄文時代晩期土坑 1	394	図版 80	IV 層出土石器 11 (打製石斧②)	432
図版 43	縄文時代晩期土坑 2	395			

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

県教委は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は、東九州自動車道の建設を計画し、志布志IC～末吉財部IC区間の事業に先立って、事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下「文化財課」という。）に照会した。

この計画に伴い文化財課は、平成11・12年に志布志IC～末吉財部IC区間の埋蔵文化財の分布調査を実施し、50か所の遺跡が存在することが明らかとなった。

この結果をもとに、事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所、鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室、文化財課、県埋文センターの4者で協議を重ね対応を検討している最中に日本道路公団民営化の政府方針が提起され、事業の見直しと建設コストの削減も検討される中で、遺跡の緻密な把握が要求されることとなり、埋蔵文化財の詳細分布調査、試掘調査、確認調査を実施した。

その後、日本道路公団民営化（現在の西日本高速道路株式会社）の協議決定がなされ、新直轄方式に基づく道路建設に係る確認書・協定書が締結された。ただし、曾於弥五郎ICまでは、日本道路公団からの受託事業、曾於弥五郎ICからの先線部は国土交通省からの受託事業となった。さらに、国土交通省は、平成25年度から東九州自動車道（志布志IC～鹿児島JCT間）の建設工事を推進する意向を示し、発掘調査期間の短縮を要請してきた。そこで、県は関係機関で協議を重ね、職員確保や予算運用が柔軟にでき、発掘調査を効率かつ効果的に実施できる財団の設置を決定し、平成25年4月に公益財団法人鹿児島県文化振興財団に埋蔵文化財調査センター（以下例言の記載どおり。）が設置された。そして、文化財課は、国事業に関する業務を（公財）埋蔵文化財調査センターへ委託し、調査を実施することとなった。

天神段遺跡の主な調査経過は、以下のとおりである。

- 1 分布調査：平成11年1月
- 2 詳細分布調査：平成13年7月
- 3 試掘調査：平成13年12月
- 4 確認調査：平成19年5月～7月
- 5 本調査：平成19年12月～平成25年10月
- 6 整理・報告書作成作業：平成22年4月～

なお、事前調査（試掘調査・確認調査）、本調査、整理・報告書作成作業の詳細は、平成27年2月に刊行した「天

神段遺跡1-1弥生時代～近世福一」を参照していただき、本報告書では、整理・報告書作成作業に係る調査体制について第2節で記載することとする。

第2節 整理・報告書作成作業

報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は、平成22年度～平成24年度は県埋文センター東九州整理作業所で、平成25年度から（公財）埋蔵文化財調査センター第一整理作業所で実施している。各年度の作成体制は、以下のとおりである。

【平成22年度】

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
作成主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所 長 山下吉美
作成企画	〃 次長兼総務課長 田中明成
	〃 次長兼南の縄文室長 中村耕治
	〃 調査第二課長 井ノ上秀文
	〃 文化財主事兼調査第二課第一調査係長 前迫亮一
作成担当	〃 文化財主事 長崎慎太郎
	〃 文化財調査員 岩永勇亮
事務担当	〃 総務係長 大園祥子
	〃 主 事 高崎智博

【平成23年度】

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
作成主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所 長 寺田仁志
作成企画	〃 次長兼総務課長 田中明成
	〃 次長兼南の縄文室長 井ノ上秀文
	〃 調査第二課長 富田逸郎
	〃 文化財主事兼調査第二課第一調査係長 八木澤一郎
作成担当	〃 調査第二課長 富田逸郎
	〃 文化財主事 國師洋之
	〃 〃 田畑智治

作成担当	〃 文化財主事	永濱 功治
	〃 〃	藤山 賢一郎
	〃 〃	市村 哲二
事務担当	〃 総務係長	大園 祥子
	〃 主 査	高崎 智博

【平成24年度】

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所	
作成主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所 長	寺田 仁志
作成企画	〃 次長兼総務課長	田中 明成
	〃 次長兼南の縄文室長	井ノ上 秀文
	〃 調査第二課長	富田 逸郎
	〃 主任文化財主事兼 調査第二課 第一調査係長	八木澤 一郎
作成担当	〃 文化財主事	平木場 秀男
	〃 〃	松下 建生
	〃 文化財調査員	橋口 拓也
	〃 〃	花齒 友美
事務担当	〃 総務係長	大園 祥子
	〃 主 査	岡村 信吾

【平成25年度】

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所	
作成主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
作成統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター	
	センター長	富田 逸郎
作成企画	〃 総務課長兼総務係長	山方 直幸
	〃 調査課長	鶴田 静彦
	〃 調査第一係長	八木澤 一郎
作成担当	〃 文化財専門員	平木場 秀男
	〃 〃	田畑 哲治
	〃 文化財専門員	松下 建生
	〃 〃	井手上 馨弘
	〃 文化財調査員	花齒 友美
	〃 〃	岩元 康成 (10月～3月)
	〃 〃	花田 寛典
	〃 〃	江神 めぐみ
	〃 〃	深川 祐子 (10月～3月)
事務担当	〃 総務課長兼総務係長	山方 直幸
	〃 主 査	岡村 信吾

作成指導	大学共同利用機関法人人間文化研究機構		
	理 事	小野 正敏	
	日本考古学協会並びに鹿児島県考古学会		
	会 員	橋口 尚武	

【平成26年度】

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
作成主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
作成統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター		
	センター長	堂込 秀人	
作成企画	〃 総務課長兼総務係長	山方 直幸	
	〃 調査課長	八木澤 一郎	
	〃 調査第二係長	寺原 徹	
作成担当	〃 文化財専門員	長野 眞一	
	〃 〃	松下 建生	
編集補助(協力)	〃 〃	平木場 秀男	
	〃 〃	田畑 哲治	
	〃 〃	井手上 馨弘	
	〃 文化財調査員	花齒 友美	
	〃 〃	江神 めぐみ	
	〃 〃	深川 祐子	
事務担当	〃 総務課長兼総務係長	山方 直幸	
	〃 主 査	岡村 信吾	

【平成27年度】

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
作成主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
作成統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター		
	センター長	堂込 秀人	
作成企画	〃 総務課長兼総務係長	有村 賢	
	〃 調査課長	八木澤 一郎	
	〃 調査第二係長	寺原 徹	
作成担当	〃 文化財専門員	松下 建生	
	〃 〃	長野 眞一	
	〃 〃	倉元 良文	
	〃 文化財調査員	深川 祐子 (4月～6月)	
事務担当	〃 総務課長兼総務係長	有村 賢	
	〃 主 査	荒瀬 勝己	
報告書作成指導委員会	平成27年11月27日実施 八木澤課長ほか6名		
報告書作成検討委員会	平成27年11月30日実施 堂込センター長ほか5名		

第二章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

天神段遺跡の大半は、曾於郡大崎町野方に所在する。大崎町は、鹿児島県の東部を形成する大隅半島の中央部東側に位置し、東西に約8km、南北に約18km、総面積は100.82km²である。東側に志布志市、西側に鹿屋市、南側に肝臓郡東串良町、北側は曾於市と接し、南部では黒潮の流れる志布志湾に面している。

大隅半島の地形は、九州山地の延長をなす東西の山地と、その間の丘陵、台地及び低地などの低地帯から形成されている。東側の山地は、志布志湾北部から宮崎県に突出した形で北から南へ延びている鰐塚山地（南那珂山地ともいう）である。主峰は宮崎県内の鰐塚山（1,119m）で中生層の地質からなっている。西側の山地は、北部の霧島火山の分脈から湧奥に形成された始良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈連山へと連なっている。高隈山地は、北部の白鹿岳・荒磯岳など500～600m級の山々と南部の大窪柄岳（1,236.8m）を主峰に横岳・御岳など1,000m級の山から成る山地で、山容は急峻で深い森林に覆われている。

地質は、高隈山周辺に分布している新生代古第三紀の日南層群によって大隅半島の基盤をなしている。山間地を埋めるような形で、洪積世の火山活動による火砕流が堆積し、丘陵や台地が広く分布した典型的なシラス地形となっている。この火砕流は、南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や、湧奥に形成された始良カルデラの入戸火砕流である。火砕流堆積物は、堆積後現在に至るまで大小多くの河川で開析され、断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や原面はほとんど浸食されず残った広大な台地となっている。一方、低地は、高隈山地や鰐塚山地などに水源をもつ大小の河川が走り志布志湾、鹿児島湾などに注いでいる。この河川は、上・中流域で狭い谷底平野を形成し、また何段かの河岸段丘も認められる。

大崎町の地形は、志布志湾に面した大崎地区と、内陸部に位置する野方地区の二つの地区が南北に連絡する瓢箪状を呈する。南部は海岸線に向かい緩やかな傾斜をなす起伏の少ない平坦な地形である。北部は、標高150mから200mの丘陵地帯であり、北端部では谷間の多い起伏の激しい地形である。高隈山系などに端を発する菱田川、田原川、持留川の三つの川が南流し、志布志湾に注いでいる。南部は、この3河川によってシラス台地を開析された水田地帯がひろがっている。北部は、台地上に畑地が形成されている。地質は、シラス台地上に形成された黒色火山灰土壌が多く、低地部に位置する水田の一部

では泥炭層をなしているところがある。

遺跡が所在する野方地区は、標高200mのシラス台地を菱田川の支流である大鳥川が浸食し、小台地群に分断された起伏の多い地形である。台地上は、畜産や畑作地として利用されており、天神段遺跡はこの台地の縁辺部に位置している。（第1図・第2図）

第2節 歴史的環境

天神段遺跡の所在する大崎町では、主に田原川、持留川、菱田川、大鳥川を臨む台地の縁辺部に沿って遺跡の分布がみられる。本遺跡の周辺は、これまで本格的な発掘調査がなされていないため詳細は不明であったが、近年の東九州自動車道建設に伴い発掘調査された遺跡などから、次第に様相が明らかになりつつある。

旧石器時代

天神段遺跡から、ナイフ形石器文化と細石刃文化の石器製作跡及び石器類が検出・出土している。

縄文時代

近年、町内において、縄文時代の遺跡の発掘調査が増えつつある。金丸城跡で石版式土器・石織・凹石、二子塚A遺跡では落とし穴状遺構2基・塞ノ神式土器、下塚遺跡では土坑2基・集石遺構13基・燃土文土器・山形押型文土器・下刺葉式土器・打製石器、天神段遺跡では多数の集石遺構・連穴土坑・落とし穴状遺構・前平式土器・桑ノ丸式土器・石版式土器・塞ノ神式土器・入佐式土器・黒川式土器・石織・打製石斧等縄文時代早期の遺構・遺物の発見が報じられている。

本遺跡と同じ野方地区にある立山B遺跡では、前期の曾畑式土器、中期の阿高式土器、晩期の黒川式土器が出土している。細山田段遺跡では後期の西平式土器が出土している。

弥生時代

名勝「くのにの松原」の砂丘後背地に立地する沢目遺跡は、砂丘に埋没した中期から終末期にかけての遺跡である。

平成11年の町教育委員会による発掘調査では、堅穴住居跡53軒・土坑約20基・柱穴約180基が発見され、入来I式・II式土器、山ノロI式・II式土器、須玖式土器・鉄製品・軽石製加工品が出土している。内陸部の標高約50mの台地に立地する下塚遺跡では、山ノロ式土器の他、須玖式土器を伴い直径8mの円形大型住居2軒・掘立柱建物跡5棟が検出されている。板迫遺跡では山ノロ式土器が出土している。田原川・持留川沿いには弥生土器片の散布地としての遺跡が多く点在し、特に河口付

近に当たる横瀬地域では甕棺破片が採集されている。

古墳時代

大崎町とその周辺の志布志湾沿いは、南九州では数少ない前方後円墳をはじめとした古墳群を有し、畿内との関連を窺わせる。

横瀬古墳は古墳時代中期（5世紀後半頃）の大型前方後円墳で、隣接する肝属郡東串良町唐仁大塚古墳について県内第2の規模を誇る。平成2年の鹿児島大学と琉球大学の測量調査では、全長160m、墳長132m、前方部幅72m、前方部長68m、後円部径64m、くびれ部幅48mを測り、墳丘からは円筒埴輪片、象形埴輪片が出土している。昭和53年の大隅地区埋蔵文化財分布調査で実施した範囲確認調査では周濠跡も確認され、周濠跡からは伽耶系陶質土器及び大阪府陶色産の須恵器も出土している。なお、濠の幅は12～23m、深さは約1.5mである。墳丘の高さについては、後円部が10.5m、前方部が11.5mであるが、後円部の頂上部に石室が露呈していることから、もともと後円部は現在より高かったと考えられる。被葬者については明らかにされていないが、明治35年に盗掘を受け、その際に腐食した直刀や鏝、勾玉類が出土し、石室内は朱塗りであったと伝えられ、被葬者の実力を窺わせる。

神領古墳群では、前方後円墳4基、円墳8基で構成され、また、地下式横穴墓7基の存在が知られている。特に6号墳は全長43m、後円部径19m、高さ3m、前方部幅16m、高さ2mの前方後円墳で、後円部に堅穴石室がある。昭和37年に日光鏡・仿製帯鏡各1面が採集され、昭和43年の調査では、石室は花崗岩質板石6枚を使用した組合せ石棺で、鉄剣・鉄刀・鏡などの副葬品が確認された。神領古墳群の地下式横穴墓1号は、昭和35年に調査され、長方形で家形の玄室、妻入りの羨道部取り付け、鉄剣・イモガイ製貝剣・内向花文鏡などの副葬品が確認された。地下式横穴墓3・4号は、昭和55年に調査された。地下式横穴墓5号は、昭和62年に調査され、イモガイ製貝剣が出土した。地下式横穴墓6号は、平成2年に調査され、玄室内には南側に甕が数本、北側に大甕が残存しており、副葬品は確認できなかった。

町内では他に、高塚古墳として飯塚遺跡群・田中古墳群・後古墳群が知られ、地下式横穴墓として飯塚地下式横穴墓群・鷲塚地下式横穴墓群が知られている。

その他、二子塚A遺跡で住居跡・土師器・成川式土器、沢日遺跡で古墳時代初期の住居跡や布留式土器をまねて作られた土師器、下瀬遺跡で住居跡・溝状遺構・地下式横穴墓・鉄剣・鉄鏡が確認されている。

古代・中世

古代の遺跡としては、天神段遺跡で古代の掘立柱建物跡が確認されている。また、下瀬遺跡では土師器と土坑

が確認されている。

中世の遺跡はほとんどが山城であり、大崎城跡・胡摩ヶ崎城跡・野卸城跡・竜相城跡・金丸城跡・椀谷城・遠見ヶ丘があげられる。金丸城跡は、平成11～12年に調査され、溝状遺構・土坑・龍泉窯系及び同安窯系の青磁・東播系須恵器・白磁・青花・瓦質土器・備前系播鉢・天目碗などが確認されている。

また、近年の発掘調査から、下瀬遺跡では、溝状遺構・鉄跡・青磁・青花・中国陶器などが確認されている。天神段遺跡では、掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・土坑・土師器・須恵器・青磁・白磁・天目碗・鉄製品・青銅製品・鉄滓・砥石・滑石製石鍋片などが確認されている。中でも土坑墓1号からは、同安窯系青磁6点・青磁1点・青白磁1点・銅鏡1点・滑石製石鍋2点・鉄製品・木製品・土師器などの副葬品が確認されている。

近世

金丸城跡では、掘立柱建物跡・焼土を伴う土坑・軽石集積区・肥前系染付・龍門司窯および苗代川窯産の薩摩焼・鉄製品・鉄滓などが確認されている。天神段遺跡では、安永ボラ（1779年）を埋土とする畝状遺構・薩摩焼などが確認されている。

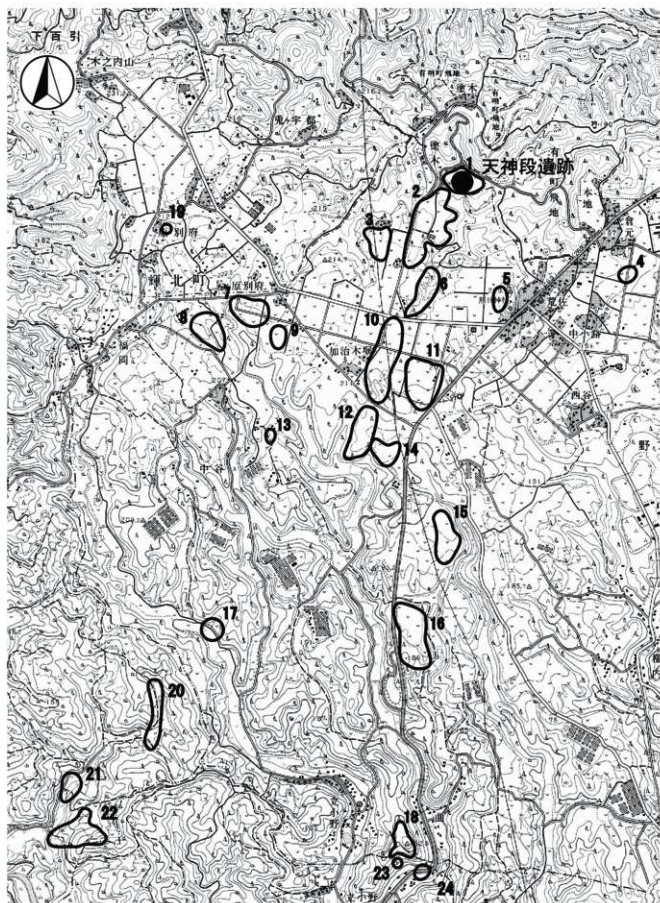
近世の野方地区は、寛永年間（1624～1643）に薩摩藩の私領主（一門家）である加治木島津家の領地（持切在）として開墾された。一方、荒佐野の照日神社には、大坂夏の陣後の元禄2年（1689）に摂津・河内と和泉から薩摩藩へ移住し、荒佐野を開拓した人々の記念碑がある。荒佐野の氏神として移住の際に勧進された伊勢神社は、明治期に旧野方村の村社であった照日神社に合祀され、現在の照日神社となった。字名の加治木堀の由来については、荒佐兼と加治木楽の領地境界を示す堀があったことから、名付けられたと言われている。

（参考・引用文献）

- 救仁郷断 2 1951 「大崎町史」
- 大崎町 1975 「大崎町史（明治百年）」
- 大崎町教育委員会 2001 「立山B遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）
- 大崎町教育委員会 2005 「金丸城跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
- 大崎町教育委員会 2005 「下瀬遺跡・大崎細山田段遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010 「加治木堀遺跡・宮ノ本遺跡・椿山遺跡・柿木段遺跡・野方前段遺跡A地点」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（154）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012 「宮ヶ原遺跡・野方前段遺跡B地点・柿木段遺跡2」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（173）

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡台帳番号	遺跡名	所在地	種類	現状	時代	地形	遺物等	備考
1	468 62	天神段	鹿児島県曾於郡大崎町野方天神段	散布地		縄文	台地	本編関係遺物 香焼式、環溝式、春日式、条溝文、入佐式、黒川式等の土器・石器、磨石、磨石、土師器	本報告書（縄文時代前期～晩期編） ※弥生時代～近世編はH27年2月に報告書刊行
2	468 63	野方前段	鹿児島県曾於郡大崎町野方前段	散布地		縄文、古墳	台地	塞ノ神式・黒川式・吉ヶ崎式・土師器	A地点はH22年、B地点はH24年3月に報告書刊行
3	468 64	内ヶ迫	鹿児島県曾於郡大崎町野方内ヶ迫	散布地		古墳	台地	成川式	H9年農政分布
4	468 45	倉元	鹿児島県曾於郡大崎町野方倉元	散布地			台地	土器片	H3年農政分布
5	468 14	荒佐野	鹿児島県曾於郡大崎町野方荒佐野	散布地	畑地	弥生(中)	台地	土器片・磨製石斧	
6	468 91	宮ノ本	鹿児島県曾於郡大崎町野方	散布地		弥生	台地		H22年3月報告書刊行
7	468 108	亀形	鹿児島県曾於郡大崎町野方2622-1外	散布地		弥生	台地	土器	H12農政分布
8	468 107	岩井場	鹿児島県曾於郡大崎町野方2572-2外	散布地		古墳	台地	土器	H12年農政分布
9	468 10	原別府	鹿児島県曾於郡大崎町野方	散布地	畑地	縄文(後)	台地	土器片・打製石斧	
10	468 7	加治木堀	鹿児島県曾於郡大崎町野方加治木堀	散布地	畑地	縄文、弥生、中世	台地	土器片・山之口式・鉄鏃	H22年3月報告書刊行
11	468 109	椿山	鹿児島県曾於郡大崎町野方3179-5	散布地		縄文、弥生、古代	台地	岩崎式・吉ヶ崎式	H22年3月報告書刊行
12	468 118	椿山	鹿児島県曾於郡大崎町野方	散布地		古墳	台地		
13	468 54	岩井場段	鹿児島県曾於郡大崎町野方中段	散布地		縄文、弥生	台地		H8農政分布
14	468 65	瀬ノ堀A	鹿児島県曾於郡大崎町野方瀬ノ堀・椿山・又合流	散布地		縄文、古墳	台地	磨石・土器片・成川式	H9農政分布
15	468 66	瀬ノ堀B	鹿児島県曾於郡大崎町野方瀬ノ堀	散布地			台地		H9農政分布
16	468 39	二松	鹿児島県曾於郡大崎町野方瀬ノ堀	散布地		弥生、歴史	台地		
17	468 139	柿木段	鹿児島県曾於郡大崎町立小野柿木段	散布地		縄文、古代、中世	低地	入佐式・石斧・土師器・須恵器・鉄旗	H24年3月報告書刊行
18	468 43	遠見ヶ丘	鹿児島県曾於郡大崎町野方立小野	散布地		中世	台地		
19	203 247	徳光ヶ丘	鹿児島県鹿児島市輝北町下百引東原別府	散布地		縄文時代前期・後期・晩期	台地	春日式・岩崎式・泉野式・磨石・夜臼式	S56分布調査
20	203 151	大牧	鹿児島県鹿児島市上高隈町	散布地		古代			H19分布調査
21	203 152	樋ノ口I	鹿児島県鹿児島市上高隈町	散布地		古墳、古代			H19分布調査
22	203 153	樋ノ口II	鹿児島県鹿児島市上高隈町	散布地		古墳、古代			H19分布調査
23	203 293 294	立小野A 立小野B	鹿児島県鹿児島市串良町細山田立小野	散布地	畑地	縄文	畑地	市来式・指宿式・石器	
24	203 299	立小野	鹿児島県鹿児島市串良町細山田立小野	散布地	畑地	縄文(後)、弥生	畑地	弥生土器	



第1図 周辺遺跡位置図 (1 : 25,000)

第三章 調査の方法と層序

第1節 調査の方法

本節では、発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法等、整理・報告書作成作業の方法について簡潔に述べる。

1 発掘調査の方法

天神段遺跡の発掘調査は、平成19年度から平成25年度まで7年にわたり実施した。調査対象表面積は19,042㎡、調査対象延面積は97,240㎡である。

調査区割り(グリッド)は、センタライン上の「ST A76+60」と「STA76+80」の延長線を基準に、10m間隔に、南側から北側に向かって1, 2, 3・・・、西側から東側に向かってA, B, C・・・と設定した。

このグリッドを基にして、遺構・遺物の測量作業を行った。また、トータルステーションで測量作業を行う場合、測量座標はN-1区の左下を原点(0, 0)とし、縦軸をX、横軸をYとした。

発掘調査は、重機で表土を除去した後、確認調査の結果に基づき、遺物包含層については人力で掘り下げを行った。無遺物層、火山灰の硬化層については、一部重機を用いて慎重に掘り下げた。遺構については、移植ごて等の遺構調査に適した道具を用いて慎重に調査し、実測、写真撮影等を行った。遺物については、平板実測やトータルステーションを用いて取り上げを行った。

各年度の発掘調査の方法等は、以下のとおりである。

平成19年度

確認調査と本調査を隣接する野方前段遺跡と並行して実施し、調査延面積は5,400㎡であった。

確認調査は、平成19年5月16日から7月13日までの約2か月間、調査対象地域にグリッドに沿ってトレンチを18か所設定し、調査区全体の包含層の確認を目的として行った。トレンチの形状は5×4mの長方形を基本とした。表面を覆う雑草の除去・雑木の伐採を人力で行った後、重機で表土を除去し、トレンチ内の掘り下げを人力で行った。検出した遺構については、写真撮影、平板実測のみを行った。出土遺物については、平板実測で取り上げを行った後、掘り下げを続けた。いくつかのトレンチでは、遺構に影響のない部分について、安全対策をしながら下層確認トレンチを設定し、XVI層上面まで確認調査を実施した。しかしながら、未買収地が調査対象区の半分近くを占め、かつ、多くのトレンチから遺構も検出されたため、旧石器時代の全体把握は不十分であった。

本調査は、平成19年12月から本格的に実施し、平成20年3月19日まで行った。調査区は、南東側の谷地形の斜面にあたるJ～L-4～6区、台地上に広がるG～N-7

～12区の平坦面である。J～L-4～6区は谷地形のため、表土下の黒色土が傾斜に沿って厚く堆積していた。しかも、下層に掘り進むに従って傾斜が険しくなったため、安全対策上、V層上面で調査を終了した。G～N-7～12区は、III層で多くの溝状遺構、土坑、ピット等が検出されたため、IV層上面で調査を終了した。その後、立入禁止柵の設置・一部埋め戻し等安全対策を行った。

平成20年度

隣接する野方前段遺跡と並行して調査を実施した。調査期間は平成20年5月22日～平成21年3月19日で、調査延面積は10,800㎡であった。調査区は、前年度からの引き続きとなるG～N-7～12区と隣接するD～M-13～16区の平坦面であった。主に、G～N-7～12区はIV～VII層上面まで、D～M-13～16区はI～VIII層上面までの調査を実施した。VIII層上面までの調査終了後、2×5mを基本としたトレンチをE-16区、F-14-16区、H-12-13区、K-11区、L-11-12区に設定し、旧石器時代の確認調査を行った。

平成21年度

調査期間は平成21年5月8日～平成22年3月19日、調査延面積は14,800㎡であった。調査区は、前年度からの引き続きとなるD～M-9～16区と隣接するE～M-17～20区の平坦面である。D～M-9～16区はIX～XVI層上面まで調査を行い、一部を除き調査を終了した。E～M-17～20区はI～VIII層上面までの調査を実施した。

平成22年度

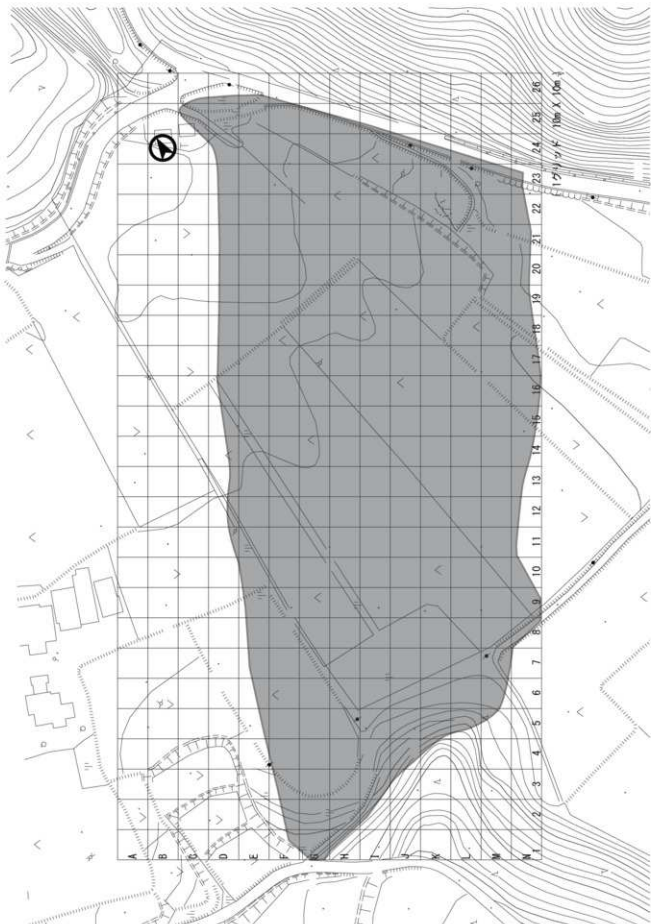
調査期間は平成22年5月10日～平成23年3月9日、調査延面積は13,720㎡であった。調査は、前年度からの引き続きとなるD～L-15～20区のIX～XVI層、林道迂回路用地となるC～N-21～25区のI～XVI層、東側側道予定地のL～N-8～21区のI～IV層上面まで行った。C～N-21～25区は調査終了後部分的に引き渡しを行い、D～L-15～20区は、一部を除き調査を終了した。

平成23年度

調査期間は平成23年5月9日～平成24年3月9日、調査延面積は27,000㎡であった。調査は、前年度からの引き続きとなるL～N-8～21区のIV～XVI層上面と新たに林道迂回路用地となったC～M-18～25区のI～XVI層、さらにD～M-3～24区で未調査部分をIII層途中まで行った。東側側道予定地は10月に、林道迂回路用地は3月に、それ以外の調査終了箇所は次年度以降の調査に支障がない範囲で引き渡しを行った。

平成24年度

調査期間は平成24年5月8日～平成25年3月8日、調



第2図 天神宮通りグリッド配置図

査延面積は17,520㎡であった。調査区は、宮精用地の1～6区を除き、7～25区の未調査部分であった。調査は、Ⅲ～ⅩⅦ層上面まで行ったが、工事の関係上、14～25区の調査を先行し、11月末に引き渡しを行った。その後、残りの箇所を調査を行い、3月に次年度の調査に支障のない範囲で引き渡しを行った。

平成25年度

調査期間は平成25年4月22日～平成25年10月25日、調査延面積は8,000㎡であった。調査区は前年度の宮精用地であったE～J-1～6区で、そのうちE～G-3～6区はⅢ～ⅩⅦ層上面、それ以外はⅠ～ⅩⅦ層上面まで調査を行い調査を終了した。その後、引き渡しを行い、7年に及ぶ本遺跡の本調査のすべてを終了した。

2 遺構の認定・分類・時期判断と検出方法

本遺跡では、多く検出された遺構の認定と検出方法については、以下のとおりである。

(1) 遺構の認定・分類・時期判断

本編掲載の遺構は、検出面・埋土状況や色調・規模等を基に発掘調査担当間で検討し、遺構の認定及び時期判断が行われたものを掲載した。主な遺構の認定及び時期判断については、以下のとおりである。

堅穴住居跡・落とし穴・土坑については、埋土や形状、床面の炉跡や柱穴の有無、遺物の出土など総合的に検討し、分類・認定・時期判断を行った。ただし、落とし穴・土坑の中には、検出面が該当時期の地層よりもかなり下層で検出されたものもあるが、埋土の堆積状況や色調・遺構内（埋土中のもも含む）、遺物等から総合的に検討し、時期判断を行った。

集石遺構については、時期を問わず概ね5個以上のものを集石遺構と認定した。時期については、検出面や集石遺構内外の出土遺物の種類等で総合的に検討し、判断した。

(2) 遺構の検出方法

本編掲載の堅穴住居跡・落とし穴・土坑・集石遺構等の検出については、各年度とも共通の調査方法として、当時の掘り込み面に限りなく近い位置での検出を目指して調査を進めたが、判別のしやすい地層上面での検出が多くなったのは否めない。

また、畑地や雑木林があった箇所では、攪乱を受けている箇所があり、遺構の検出をはじめとする調査に支障があった。この場合、ミニトレンチの設定、攪乱部分の埋土除去等最善の調査方を担当職員で検討し、遺構の推定ラインも含め残存部の記録保存に努めた。

3 整理・報告書作成作業の方法及び内容

平成22年度から平成25年度までは発掘調査作業と並行して整理作業を実施した。各年度とも前年度までの発

掘調査成果品の整理作業を中心に、平成23年度以降は前年度の整理作業の成果を引き継ぎ実施した。そのため、大まかな整理作業の方法は同じである。したがって、本項では整理・報告書作成作業が開始された平成22年度の作業方法及び内容を中心に述べ、平成23年度以降は簡潔に述べることにする。

平成22年度

平成19～21年度までの発掘調査成果品の整理を行った。図面整理は、遺構実測図、遺物出土分布図、土層断面図等に仕分けし、台帳と遺物との照合を行った。

水洗いは、未洗い遺物や発掘現場で行った水洗いが不十分な遺物について行った。その際、遺物に付着している重要な情報を除去することがないように洗ったり、細石刃等微細な剥片石器については、超音波洗浄機を使用したりした。

注記は、水洗い終了後順次行った。注記を行う際、薬品を使用するため換気に注意しながら手作業で進めた。これまで刊行された遺跡の記号と重複しないようにデータを管理している南の縄文調査室に確認をとり、遺跡名を表す記号を「TJ」とした。

分類・接合は、遺構内遺物と包含層遺物に分けた後、包含層出土石器については、土器の胎土や文様等で分類し、さらにグリッドごとに分けて接合を行い、その後エリアを広げて接合する方法をとった。石器については、剥片石器と礫石器に分けた後、器種及び石材別に分類した。出土石器については、作業の効率化を図るため、予算の範囲内で石器実測委託を行った。

遺物出土分布図は、平板実測で取り上げた情報については、デジタイザを用いてデータ化し、トータルステーションで取り上げたデータと統合し、図化ソフトを使用して作成した。

土層断面や遺構のトレースは、鉛筆トレースで下図を作り、点検・修正後、ペントレース及びデジタルトレースを行った。

平成23年度～平成25年度

先述したとおり、大まかな整理作業の方法は平成22年度と同じである。平成23年度は注記作業の効率化を図るためジェットマーカーを使用した。また、原稿執筆も開始した。平成24・25年度は刊行計画に基づき本編（弥生時代～近世編）の報告書作成作業を行った。

平成26年度

弥生時代～近世編の報告書作成作業及び旧石器時代、縄文時代前期～晩期の整理作業を実施した。

平成27年度

縄文時代前期～晩期編の報告書作成作業及び縄文時代早期、旧石器時代の遺構・遺物の分類・数量把握を実施した。

第2節 層序

天神段遺跡の基本土層は隣接する野方前段遺跡B地点(2012年3月報告書刊行済)と同じで、包含層や遺構や遺物の年代を把握する手掛かりの1つとなる火山灰等の詳細については、以下のとおりである。

I層は表土(旧耕作土)である。

II層はP2(安永ボラ, 1779年の桜島起源の噴出物)が点在する層である。耕地改良等でボラ抜きが行われており、集めたボラを使った畦状の「ボラ塚」もみられた。III層は黒色系の色調をもつ層である。色調の違いで3層に分層した。

III a層: 黒色土で、中世～近世の遺物包含層である。

III b層: 暗茶褐色土で、弥生時代～古代の遺物包含層である。

III c層: オリーブ褐色土で、III b層と同じく、弥生～古代の遺物包含層である。

IV層は黄褐色パミス(P7, 約5,000年?前の桜島起源の噴出物)を含む層で、色調の違いで2層に分層した。

IV a層: 茶褐色土で、P7の高植土層である。縄文時代晩期～弥生時代の遺物包含層である。

IV b層: 黄褐色土(P7を含む。)で、縄文時代前期～晩期の遺物包含層である。

第2表 天神段遺跡の基本土層

層位	色調等	平均厚
I層	表土	20 cm
II層	明黄色パミス(P2)	3 cm
III a層	黒色土	5 cm
III b層	暗茶褐色土	5 cm
III c層	オリーブ褐色土	5 cm
IV a層	茶褐色土	10 cm
IV b層	黄褐色土(P7混)	20 cm
V a層	褐色土	20 cm
V b層	赤褐色土	30 cm
V c層	明赤褐色パミス層(アカホヤ一次)	10 cm
VI層	明黄褐色土	20 cm
VII層	黒褐色土(P12・P13混)	50 cm
VIII層	黄白色火山灰(P14)層	25 cm
IX層	黒褐色粘質土	10 cm
X層	茶褐色弱粘質土	20 cm
X I層	黒褐色粘質土	5 cm
X II層	茶褐色硬質土(P16混)	20 cm
X III層	暗茶褐色硬質土(P16混)	40 cm
X IV層	黄茶褐色硬質土(P17混)	20 cm
X V層	暗黄褐色土	5 cm
X VI層	明黄白色砂質土	20 cm
X VII層	黄白色砂質土(AT=シラス) ※シラス上面で調査終了	—

V層はアカホヤ火山灰関連の層である。色調の違いで3層に分層した。

V a層: 褐色を呈するアカホヤ火山灰の高植土層で、縄文時代前期～中期の遺物包含層である。

V b層: 赤褐色土で、アカホヤ火山灰一次の軽石が点在するアカホヤ二次堆積層である。縄文時代前期～中期の遺物包含層である。

V c層: アカホヤ火山灰一次の軽石(約7,300年前、鬼界カルデラ起源の噴出物)層。無遺物層である。

VI層は明黄褐色土で、縄文時代早期後葉を主体とする遺物包含層である。

VII層は黒褐色土で、縄文時代早期前葉～中葉の遺物包含層である。P12やP13を含む層である。

VIII層は薩摩火山灰層(P14, 約12,800年前の桜島起源の噴出物)である。無遺物層である。

IX層は黒褐色粘質土である。この層から下位の層は旧石器時代該当層となり、細石刃文化期の遺物包含層である。

X層は茶褐色弱粘質土である。IX層と同じく細石刃文化期の遺物包含層である。

X I層は黒褐色粘質土で、IX層よりも粘質が弱い。ナイフ形石器文化期の遺物包含層である。

X II層は茶褐色硬質土で、P16(桜島起源の噴出物で、詳細な年代は不詳)と呼ばれるパミスを含む層である。

X III層は暗茶褐色硬質土で、P16(桜島起源の噴出物で、詳細な年代は不詳)と呼ばれるパミスを含む層である。

X IV層は黄茶褐色硬質土で、P17(約28,000年前の桜島起源の噴出物)と呼ばれるパミスを含む層である。

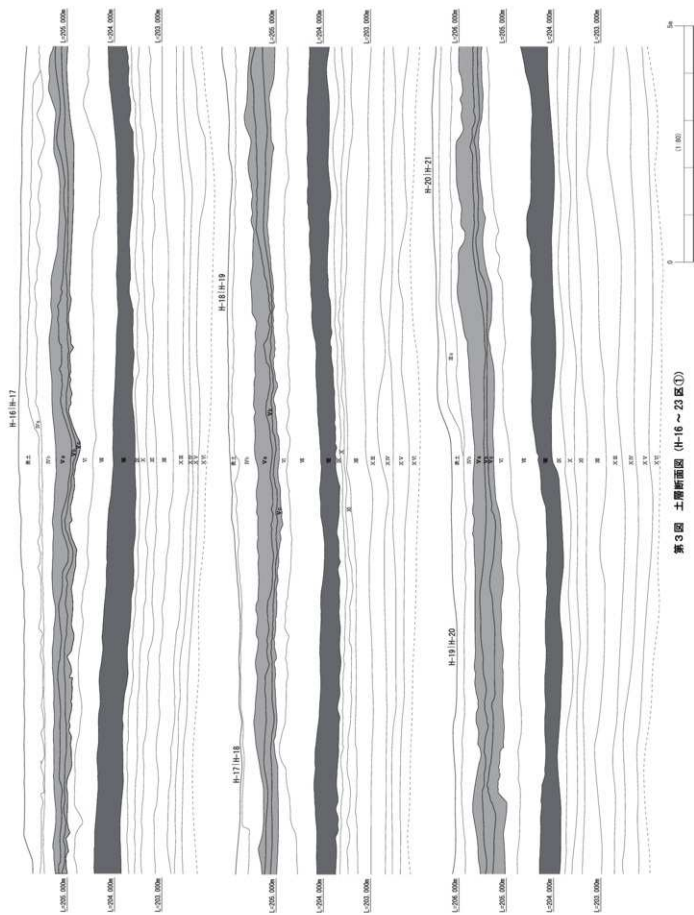
X V層は暗黄褐色土で、ナイフ形石器文化期の遺物包含層である。

X VI層は明黄白色砂質土である。

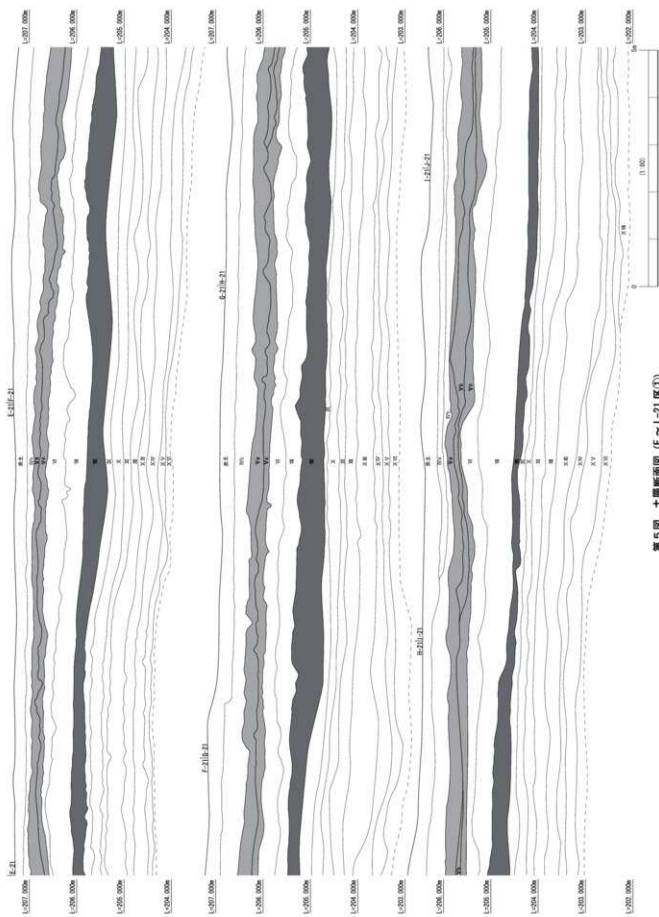
X VII層は黄白色砂質土で、この層からAT(シラス)と呼ばれる約26,000～29,000年前の始良カルデラ起源の火山灰層となる。

この層は無遺物層で、南九州本土では厚く堆積していることが、これまでの調査や火山の研究等で周知されている。そのため必然的に掘削深度が深くなるので、安全面や調査の効率化を図るという観点から、このシラス上面で調査を終了した。

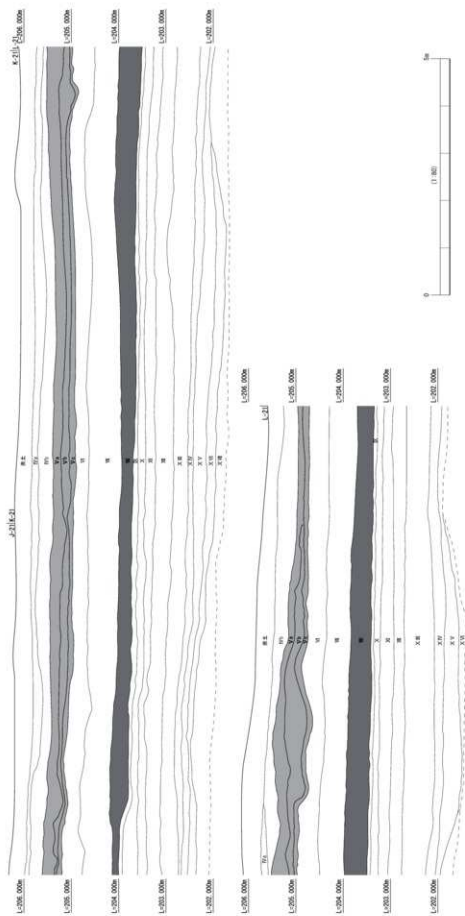
※火山灰の年代については、2003 町田洋 新井房夫著 東京大学出版会『新編火山灰アトラス—日本列島とその周辺—』(p108～110)から引用した。なお、年代は放射性炭素年代測定法で算出され、暦年較正した年代である。



第3圖 土層断面図 (H-16 ~ 23区①)



第5図 土層断面図 (E-21区①)



第6図 土層断面図 (E~L-21区②)

第四章 発掘調査の成果

第1節 縄文時代前・中期の調査成果

1 調査の概要

本遺跡の縄文時代前期～中期の該当層は、IV b～V b層であるが、一部、IV a層からも遺物が出土している。

調査は、人力による掘り下げて進めながら、遺構を当時の生活面で可能な限り確認するように努めた。

調査の結果、遺構は落とし穴・土坑・集石遺構・石斧集積遺構等が検出された。遺物は多種多様の土器・石器等が出土した。中でも、V a層で出土した石剣は西日本最古のものとして注目される。

2 遺構

遺構は、落とし穴3基、土坑14基、集石遺構19基、石斧集積遺構1基が検出された。遺構検出面や埋土の状況、遺構内遺物(埋土中のもも含む。)等から縄文時代前期該当のものと判断した。(第7図)

(1) 落とし穴(第8図)

落とし穴は3基検出された。2基は当時の生活面より下のVI層上面で、1基はV b層に近いV a層下面で検出された。

1号落とし穴(第9図)

M-12区、VI層上面で検出された。平面観は、長径83cm、短径60cmの楕円形である。深さは、最深部で103cmを測る。また、底面で逆茂木痕と思われる小ピットが1基確認された。埋土は、V a層と同じ色調の褐色土(埋土①)を主体とし、明赤褐色土(埋土②)や明黄褐色土(埋土③)、V a層とV b層の混土)等が堆積していた。また、小ピットの埋土は、砂質で黄褐色パミスを少し含む暗茶褐色土(埋土④)、やや粘質があり赤褐色パミスが混在する暗茶褐色土と黒褐色土の混土(埋土⑤)、X層の入り込みと思われる暗黒褐色土(埋土⑥)であった。埋土中から遺物の出土はなかった。

2号落とし穴(第9図)

E-14区、VI層上面で検出された。平面観は、長径106cm、短径64cmの楕円形である。深さは、最深部で116cmを測る。また、底面で逆茂木痕と思われる小ピットが1基確認された。埋土は、粘質が弱い黄褐色土が点在する明黄褐色土(埋土①)を主体とし、粘質の弱い黄褐色土(埋土②)、黄褐色土とオリブ褐色土と黄褐色パミスの混土(埋土③)、粘質のあるオリブ褐色土(埋土④)等が堆積していた。また、小ピットの埋土は、上部は埋土④が、下部は粘質の強い暗茶褐色土と淡黒褐色土の混土が堆積していた。埋土中から遺物の出土はなかった。

3号落とし穴(第9図)

D-15区、V a層上面で検出された。平面観は、長径95cm、短径80cmの楕円形である。深さは、最深部で135cmを測る。また、底面で逆茂木痕と思われる小ピットが1基確認された。埋土は、黄褐色パミスを少し含む灰黄褐色土(埋土①)、粘質が弱い黄褐色パミスを多く含む明黄褐色土(埋土②)を主体とし、黄褐色パミスを少し含む褐色土(埋土③)や暗褐色土(埋土④)等が堆積していた。また、小ピットの埋土は、粘質のある赤褐色土(埋土⑤)であった。埋土中から石鏡が1点出土した(第10図 1)。

1は安山岩製の石鏡である。三角形鏡で、基部の挟りは浅く、側縁部はわずかに内側に湾曲する。

(2) 土坑(第8図)

土坑は14基検出された。このうち9基の土坑については、当時の生活面より下のVI層及びVII層上面で検出されているが埋土の状況等から前期の土坑と発掘調査担当者で検討の上判断されたものである。

1号土坑(第11図)

F-G-13・14区、V c層上面で検出された。平面観は、長径105cm、短径70cmの楕円形である。深さは、最深部で24cmを測る。埋土はV a層と同じ色調の褐色土の単一埋土であった。埋土中からは遺物の出土はなかった。

2号土坑(第11図)

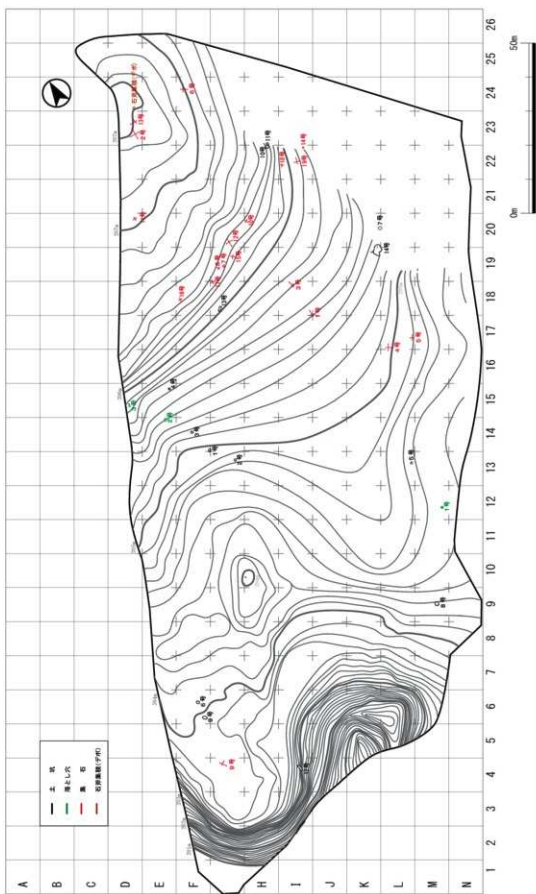
G-13区、VI層上面で検出された。平面観は、長径84cm、短径74cmのほぼ円形である。深さは、最深部で26cmを測る。埋土はV b層と同じ色調の赤褐色土(埋土①)を主体とし、褐色土(埋土②)や明赤褐色土(埋土③)等が堆積していた。埋土中からは遺物の出土はなかった。

3号土坑(第11図)

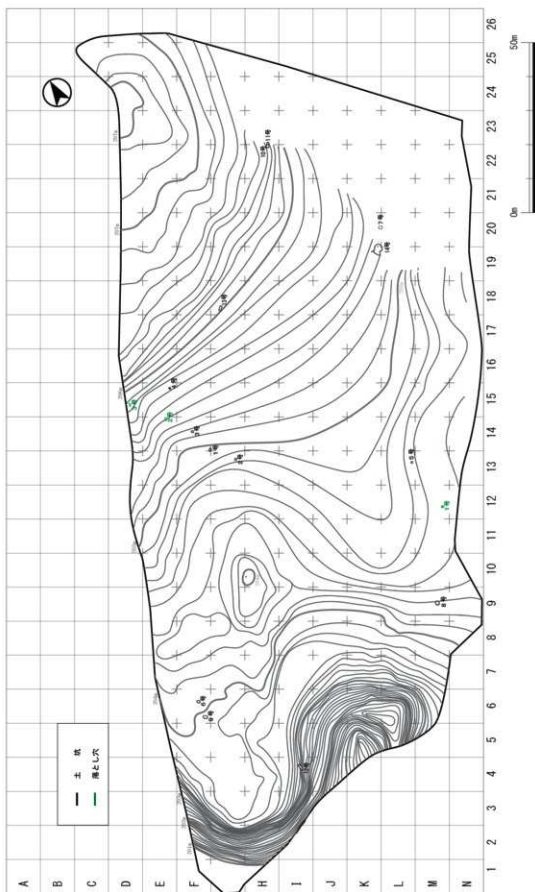
F-14区、VII層上面で検出された。平面観は、長径82cm、短径72cmのほぼ円形である。深さは、最深部で43cmを測る。埋土は、V a層とV b層が混ざったような黄茶褐色土の単一埋土であった。埋土中からは遺物の出土はなかった。

4号土坑(第11図)

E-15区、VIII層上面で検出された。平面観は、長径75cm、短径60cmのやや楕円形である。深さは、最深部で71cmを測る。埋土は、V a層とV b層が混ざったような黄褐色土を基本とした土が堆積していた(埋土①～③)。埋土①・③は明黄褐色土、埋土①はオリブ褐色土が混ざり、埋土③は黄白色パミスが混ざっていた。埋土②は黄褐色土でオリブ褐色土を含み、埋土①・③よりやや暗い色



第7図 縄文時代前期の全遺構位置図

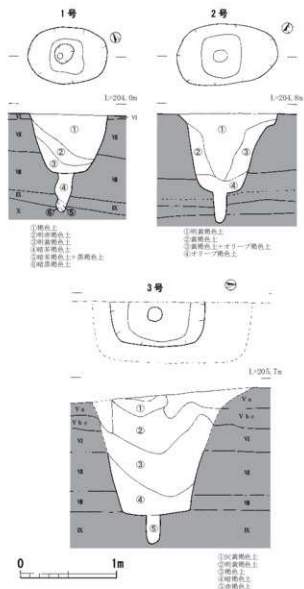


第8図 縄文時代前期の溝とし穴・土筑位置図

調であった。埋土中から遺物の出土はなかった。

5号土坑 (第11圖)

L-13区, VII層上面で検出された。平面観は、直径約60cmの正円形である。深さは、最深部で84cmを測り、やや深い。埋土は、黄褐色土(埋土②)を主体とし、褐色土と赤褐色土の混土(埋土①)や赤褐色土(埋土③)等が堆積していた。埋土全体に黄褐色及び赤褐色バミスが



第9図 縄文時代前期落とし穴

含まれる。埋土の堆積状況から樹痕等の可能性もあるが、土坑として掲載した。埋土中から遺物の出土はなかった。

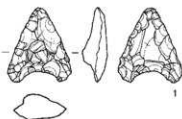
6号土坑 (第11圖)

F-6区, VI層上面で検出された。平面観は、長径100cm, 短径78cmの楕円形を呈する。深さは、最深部で17cmを測り、浅い。埋土は、V a層の色調に近い赤褐色バミスを含む茶褐色土の単一埋土であった。埋土中から遺物の出土はなかった。

7号土坑 (第11圖)

K・L-20区, IV b層で検出された。平面観は、長径116cm, 短径87cmの楕円形である。深さは、最深部で66cmを測る。埋土は、茶褐色土(埋土①)、褐色土と黄褐色土の混土(埋土②)や暗茶褐色土(埋土③・④)が堆積していた。埋土③は埋土①より暗く、埋土④は埋土③より暗い。埋土中からは22点の土器が出土したが、曾畑式土器に比定できる比較的大きめの土器が2個体復元でき、この2個体を含め3点を図化した(第13図 2~4)。

2~4は曾畑式土器に比定できる土器である。2・3については、2は37頁, 3は36頁で述べているので参照していただきたい。4は底部に近い胴部片で、外面は縦位と横位の浅い沈線を組み合わせた区画割付文様が施されている。底部付近は剥落しているため詳細は不明だがわずかに縦位の沈線が観察できる。内面はヘラ状工具によるナデ調整が施されている。



第10図 縄文時代前期落とし穴内出土土物

第3表 縄文時代前期落とし穴内出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	石材	遺構番号	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	調査時の遺構番号	備考
10	1	打製石鏃	AN	3号落とし穴	D-15	-	2.0	1.7	0.65	1.39	土坑 1141	三角形鏃

8号土坑 (第11図)

M-9区, VI層上面で一部削平された形で検出された。平面観は, 長径134cm, 短径117cmの楕円形である。深さは, 最深部で31cmを測る。埋土は, 暗黄褐色土(埋土④)・赤褐色パミスを多く含む赤褐色土(埋土③)・褐色土(埋土②)・黄褐色土(埋土①)の順にレンズ状に堆積していた。埋土中からは遺物の出土はなかった。

9号土坑 (第11図)

F-6区, Vb層上面で検出された。平面形は, 長径145cm, 短径89cmの楕円形である。深さは, 最深部で17cmを測る。埋土は, 茶褐色土(褐色土と赤褐色パミスの混土)の単一埋土であった。埋土中から遺物の出土はなかった。

10号土坑 (第11図)

H-22・23区, Va層で11号土坑を切る形で検出された。平面観は, 長径103cm, 短径94cmの楕円形である。深さは, 最深部で18cmを測る。埋土は, 褐色土(埋土③)・

暗黄褐色土(埋土②)・暗褐色土(埋土①)の順にレンズ状に堆積していた。埋土中から1点遺物が出土し, 図化した(第13図 5)。

5は条痕文土器の胴部片である。外面は横位の条痕文が, 内面はヘラ状工具によるナゲ調整が施されている。

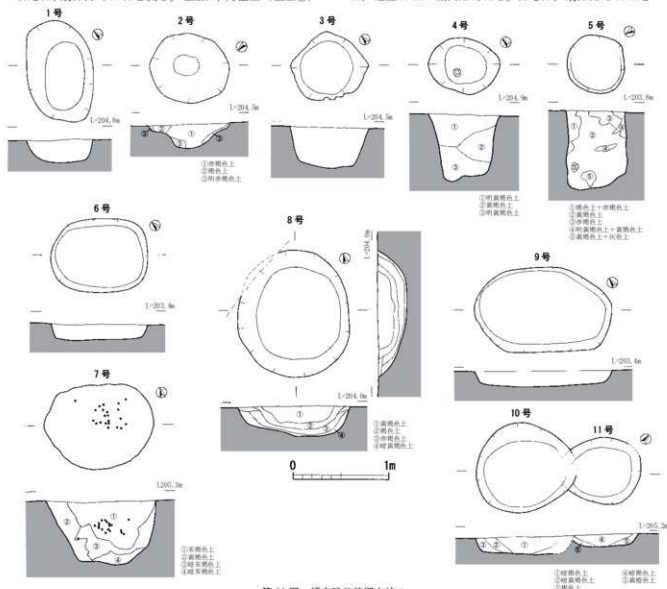
11号土坑 (第11図)

H-22・23区, Va層で10号土坑に切られる形で検出された。平面観は, 長径が推定で80cm, 短径70cmのやや楕円形と思われる。深さは, 最深部で12cmを測る。埋土は, 黄褐色土(埋土⑤)・暗褐色土(埋土④)の順にレンズ状に堆積していた。埋土中から1点遺物が出土し, 図化した(第13図 6)。

6は胴部片である。明瞭な文様は観察できない。内・外面ともヘラ状工具等によるナゲ調整が施されている。

12号土坑 (第12図)

I-4区, VI層上面で検出された。平面観は, 長径200cm, 短径60cmの楕円形である。深さは, 最深部で61cmを

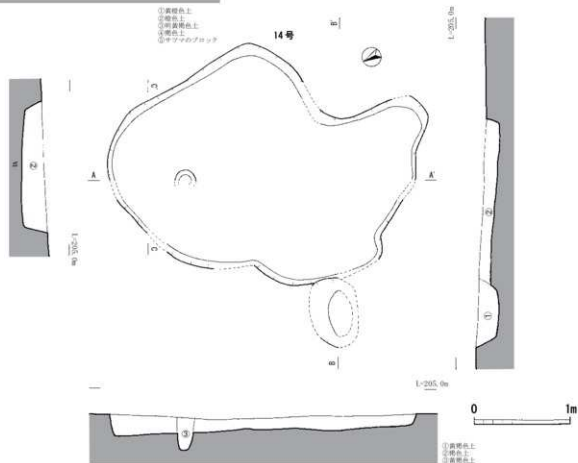
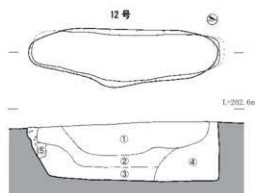


第11図 縄文時代前期土坑 1

測る。埋土は、黄色バミス (P7) を多く含む黄褐色土 (埋土①)、IV b 層と V a 層の混土) を主体とし、V b 層の色調に類似した橙色土 (埋土②)・明黄褐色土 (埋土③)・褐色土 (埋土④) 等が堆積していた。埋土中から遺物の出土はなかった。

13号土坑 (第12図)

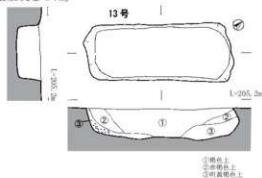
G-18区, VI層上面で検出された。平面形は、長径154cm, 短径88cmの楕円形である。深さは、最深部で33cmを測る。埋土は、褐色土 (埋土①) を主体とし、赤褐色土 (埋土②) や明黄褐色土 (埋土③) 等が堆積していた。埋土中から遺物の出土はなかった。

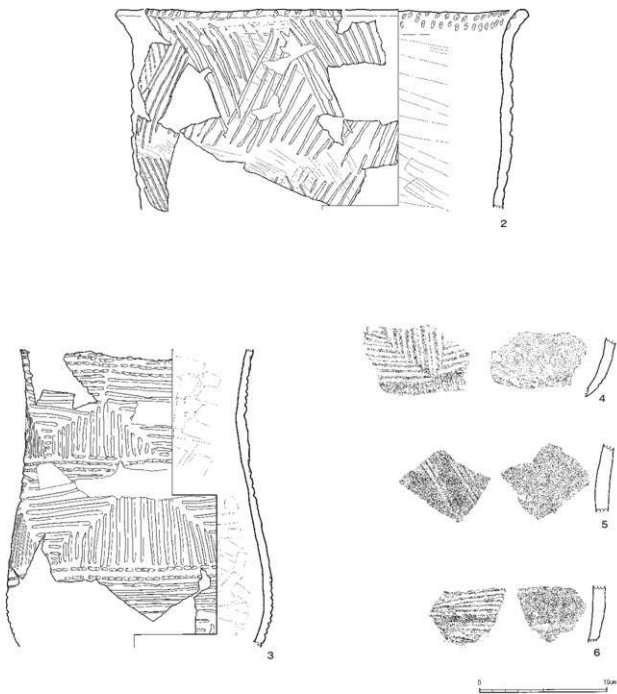


第12図 縄文時代前期土坑2

14号土坑 (大型土坑) (第12図)

K・L-19・20区, V b層で、一部、埋土がIV b層の色調に類似した黄褐色土 (埋土①) の土坑に切られる形で検出された。また、同時に土坑内でピット (埋土がIV b層の色調に類似した黄褐色土; 埋土③) も検出されたが、土坑の埋土を掘り抜いていることや埋土の状況等から、縄文時代晩期該当のピットとした。本土坑の平面観は、不定形で、長軸320cm, 短軸230cmを測る。深さは、最深部で13cmを測るが大きさの割には浅い。埋土は、V a層に類似した褐色土 (埋土①) の単一埋土で、埋土中から遺物の出土はなかった。遺構調査時は、竪穴住居跡と考えていたが、竪穴住居跡とする明確な根拠がないので大型土坑とした。





第13図 縄文時代前期土坑内出土遺物

第4表 縄文時代前期土坑内出土土器観察表

採掘 番号	発掘 番号	器種	遺構番号	出土区	層位	部位	法量 (cm)		文様・調整		胎土				調査時の 遺構番号	備考			
							口径	器高	外面	内面	白色 粘土	黑色 粘土	向陽 石	炭目			輝石		
13	2	深鉢	7号土坑	K-4-20	-	口縁部	32.0	-	-	斜み+斜位の化粧	刺青+ナデ (ヘラ)	○	○						
	3	深鉢				胴部	-	-	-	-	斜交文+波線の青灰土	ナデ (ヘラ・指)	○	○				土坑 895	
	4	-				胴部	-	-	-	-	波線の区画彫りけ文	ナデ (ヘラ)	○	○					
	5	-	10号土坑	B-22	-	胴部	-	-	-	横位の条痕文	ナデ (ヘラ)	○					土坑 978		
	6	-	11号土坑	B-22	-	胴部	-	-	-	横位の条痕文	ナデ (ヘラ)	○					土坑 979		

(3) 集石遺構 (第14図)

集石遺構は、19基検出された。遺構内外から出土した土器等からすべて縄文時代前期該当の集石遺構として掲載する。

1号集石遺構 (第15図)

I・J-17・18区、V層で検出された。礫はすべて角礫で、長軸180cm、短軸80cmの範囲に広がる。掘り込みは確認することができなかった。構成礫数は25個で6cm大のものが大部分を占める。また、土器片が2点出土し、1点を図化した(第24図 7)。

2号集石遺構 (第16図)

D-23区、Va層で検出された。礫は大部分が角礫で、長軸360cm、短軸310cmの範囲に広がる。掘り込みは確認できなかったが、礫の集まりからすると掘り込みがあった可能性がある箇所もある。構成礫数は114個で7~8cm大のものが大部分を占めるが、10cm大のものもある。また、土器片が8点出土し6点を図化した(第24図 8~13)。

3号集石遺構 (第17図)

I-18区、Va層で検出された。礫は大部分が角礫で、長軸200cm、短軸100cmの範囲に広がる。比較的まとまっている箇所と散在している箇所があり、両者の間には空白が見られる。掘り込みは確認できなかった。構成礫数は46個で5cm大のものが大部分を占める。遺構関連の遺物はなかった。

4号集石遺構 (第17図)

L-16・17区、Va層で検出された。礫はすべて角礫で、1か所比較的まとまっている箇所があるが、長軸210cm、短軸180cmの範囲に広がる。掘り込みは確認できなかった。構成礫数は79個で7~8cm大のものが大部分を占める。また、土器片が4点出土し1点を図化した(第24図 14)。

5号集石遺構 (第18図)

L-17区、Va層で検出された。礫は大部分が角礫で、長軸65cm、短軸50cmの範囲に集中して出土した。掘り込みは確認できなかった。構成礫数は51個で7~8cm大のものが大部分を占め、15cm大のものもある。遺構関連の遺物はなかった。

6号集石遺構 (第18図)

F-24区、Va層上面で検出された。礫は大部分が角礫で、長軸200cm、短軸190cmの範囲に広がる。掘り込みは確認できなかった。構成礫数は100個で5~10cm大とばらつきがある。遺構関連の遺物はなかった。

7号集石遺構 (第19図)

G-19区、Va層で検出された。礫は大部分が角礫で、長軸55cm、短軸45cmの範囲に集中して出土した。掘り込みは確認できなかったが、礫の集まりからすると掘り込みがあった可能性がある。構成礫数は39個で5cm大の

の大部分を占める。また、安山岩製の磨石片が1点出土したが図化していない。

8号集石遺構 (第19図)

G-19区、Va層からVb層へ移り変わる層で検出された。礫はすべて角礫で、55cm四方の中に収まる。掘り込みは確認できなかったが、礫の集まりからすると小さな掘り込みがあった可能性がある。構成礫数は23個で5cm大のものが大部分を占める。遺構関連の遺物はなかった。

9号集石遺構 (第19図)

G-4区、Va層で検出された。礫はすべて角礫で、長軸230cm、短軸185cmの範囲に広がるが、一部は長軸45cm、短軸25cmの範囲に集中して出土した。掘り込みは確認できなかったが、礫の集まりからすると小さな掘り込みがあった可能性がある(図の推定ライン参照)。構成礫数は39個で5~7cm大のものが大部分を占めるが、10cm大のものもある。土器片1点と石鏃と思われる石器が1点出土したが、小片や破損が激しかったため図化できなかった。

10号集石遺構 (第20図)

H-20区、Va層で検出された。礫はすべて角礫で、長軸100cm、短軸55cmの範囲に広がる。掘り込みは確認できなかった。構成礫数は16個で7cm大のものが大部分を占めるが、16cm大のものもある。遺構関連の遺物はなかった。

11号集石遺構 (第20図)

D-20区、IVb層下面で検出された。礫はすべて角礫で、長軸75cm、短軸55cmの範囲に広がる。掘り込みは確認できなかった。構成礫数は20個で7~8cm大のものが大部分を占める。また、土器片が3点出土したが、そのうち2点は同一個体で接合できたため、この1点を図化した(第25図 15)。

12号集石遺構 (第20図)

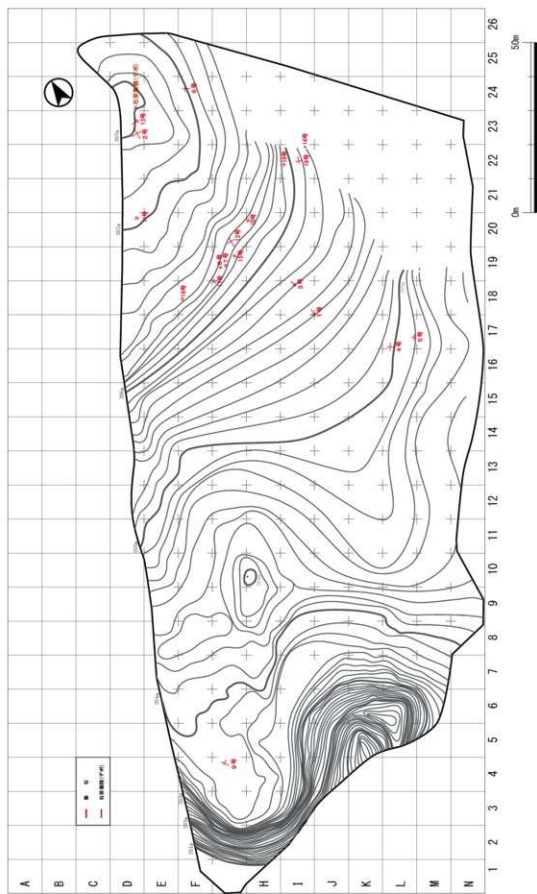
G-20区、Va層で検出された。礫はすべて角礫で、長軸260cm、短軸190cmの範囲に広がる。掘り込みは確認できなかったが、礫の集まりからすると掘り込みがあった可能性がある。構成礫数は60個で7~8cm大のものが大部分を占める。また、土器片7点が出土し、4点の土器片を図化した(第25図 16~19)。

13号集石遺構 (第21図)

D-23区、Va層で検出された。礫は大部分が角礫で、長軸200cm、短軸110cmの範囲に広がり、比較的まとまっている箇所がある。掘り込みは確認できなかった。構成礫数は84個で5cm以下のものが大部分を占める。また、土器片が8点、石器の小剥片が2点出土したが、土器片1点を図化した(第25図 20)。

14号集石遺構 (第21図)

I-22区、Va層で検出された。礫はすべて破砕礫で、



第 14 圖 縄文時代前期集石・石斧集積（字布）遺構位置図

長軸50cm、短軸30cmの範囲に集中して出土した。掘り込みは確認できなかったが、礫の集まりからすると掘り込みがあった可能性がある。構成礫数は16個で7～10cm大のものが大部分を占める。遺構関連の遺物はなかった。

15号集石遺構 (第21図)

G-19区、V a層で検出された。礫はすべて角礫で、60cm四方の範囲に収まる。掘り込みは確認できなかったが、礫の集まりからすると掘り込みがあった可能性がある。構成礫数は27個で7～8cm大のものが大部分を占める。遺構関連の遺物はなかった。

16号集石遺構 (第21図)

F-18区、V a層下面で検出された。礫はすべて角礫で、1点を除き長軸45cm、短軸35cmの範囲に集中して出土した。掘り込みは確認できなかった。構成礫数は24個で5～7cm大のものが大部分を占める。遺構関連の遺物はなかった。

17号集石遺構 (第21図)

G-18・19区、V a層で検出された。礫はすべて角礫で、長軸110cm、短軸75cmの範囲に広がるが、大部分は長軸35cm、短軸25cmの範囲に集中して出土した。掘り込みは確認できたが、半分以上削平されており、規模は不明である。掘り込みより高い位置にある礫は使用后外されたものとする。構成礫数は50個で10cm弱のものが大部分を占める。また、土器片が3点、軽石が1点出土し

ているが、土器片2点を図化した(第25図 21・22)。

18号集石遺構 (第22図)

I-22区、V a層で検出された。礫はすべて角礫で、長軸85cm、短軸60cmの範囲に集中して出土した。掘り込みは長軸80cm、短軸70cmのやや楕円形を呈し、深さは最深部で30cm弱であった。掘り込みの埋土はV a層の色調に類似した暗褐色土で明黄色パミスを含む。

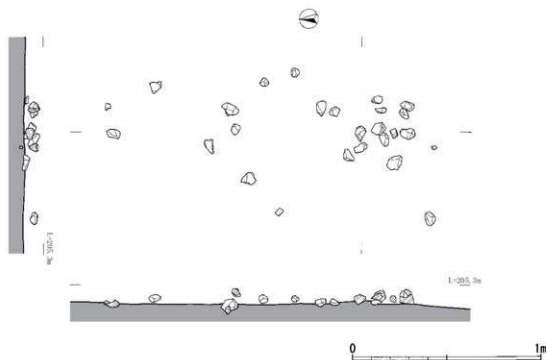
出土した礫は上部と下部が被熱を受け赤色のものが多く、中間のものは被熱したものがほとんどなかった。このことから、もともとは最深部に近いところに礫が集中しており、使用後礫を取り出した時に本集石が構成されたものとする。

構成礫数は72個で10cm大のものが大部分を占める。遺構関連の遺物はなかった。

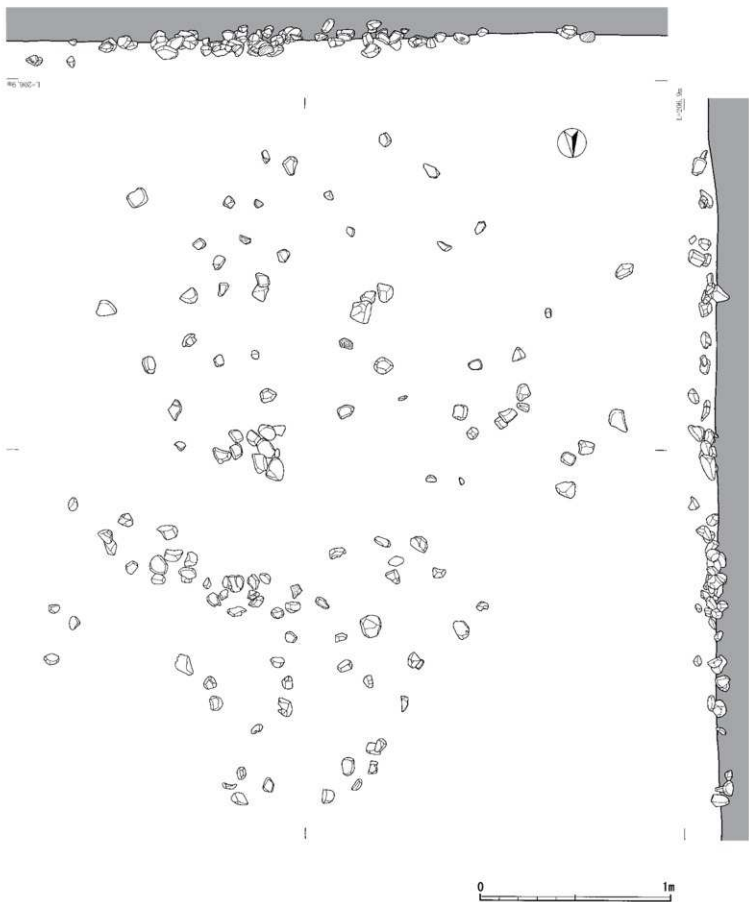
19号集石遺構 (第22図)

I-22区、V a層上面で検出された。礫は大部分が角礫で、長軸85cm、短軸55cmの範囲に集中して出土した。掘り込みは長軸110cm、短軸80cmの不定形を呈し、深さは、30cm強である。掘り込みの埋土はV a層に類似した褐色系の土が堆積していた。

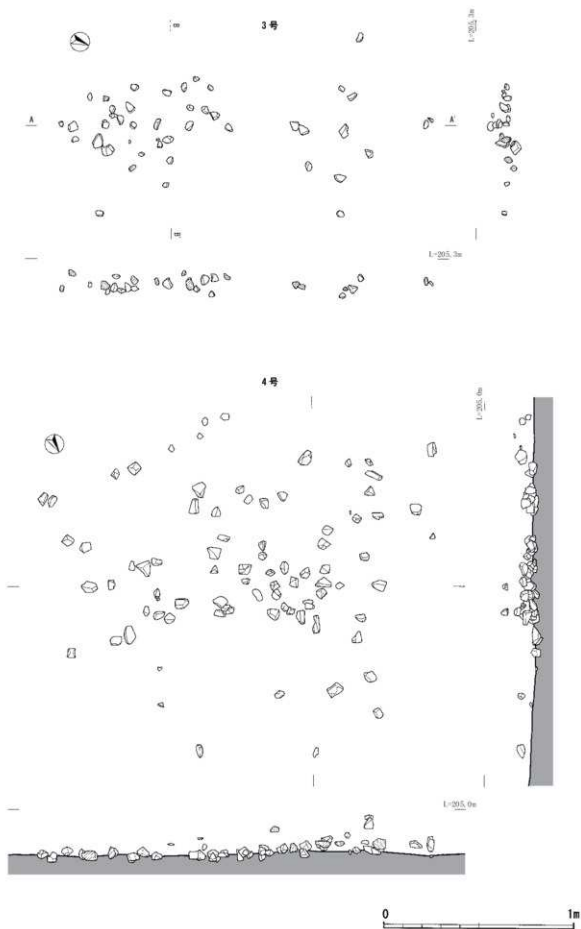
構成礫数は93個で5～20cm大とばらつきがあるが、5～10cmのものが大部分を占める。遺構関連の遺物は石皿と思われるものが1点出土したが破損が激しく図化できなかった。



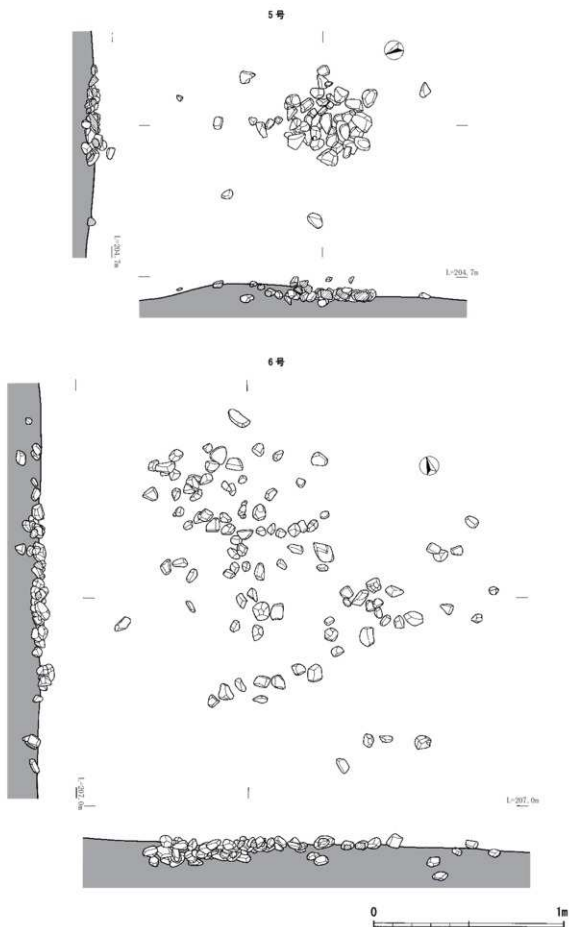
第15図 縄文時代前期集石遺構1(1号)



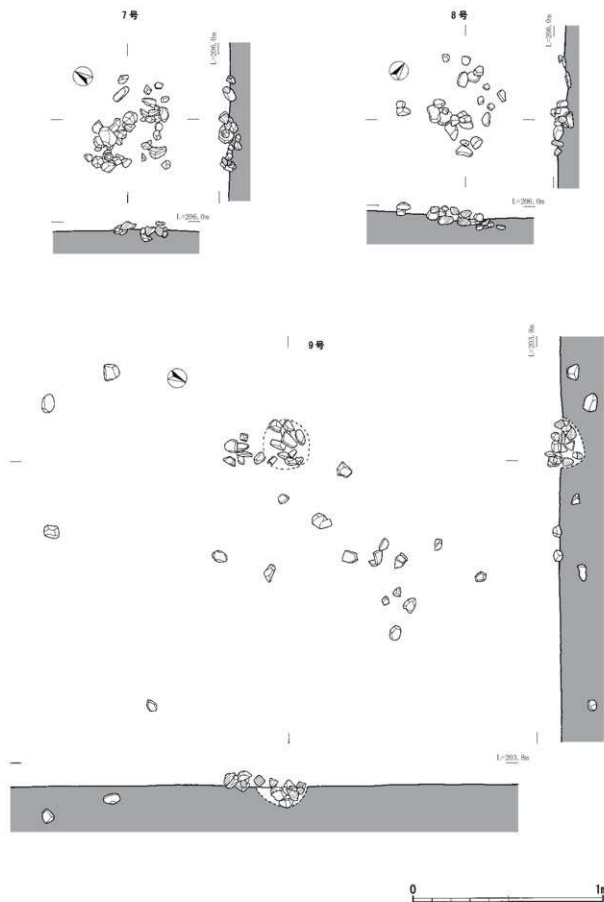
第16図 縄文時代前期集石遺構2（2号）



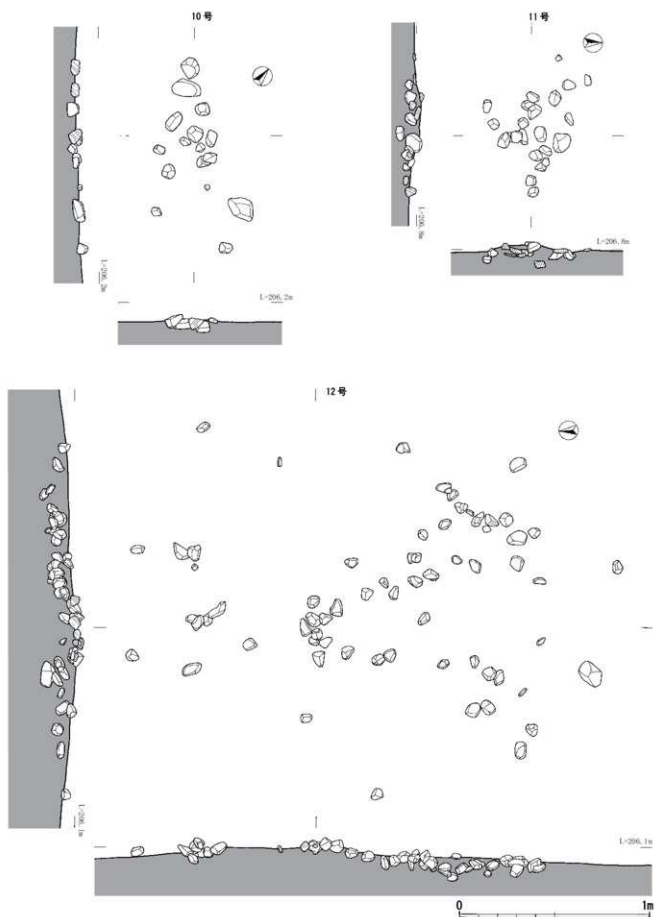
第 17 図 縄文時代前期集石遺構 3 (3・4号)



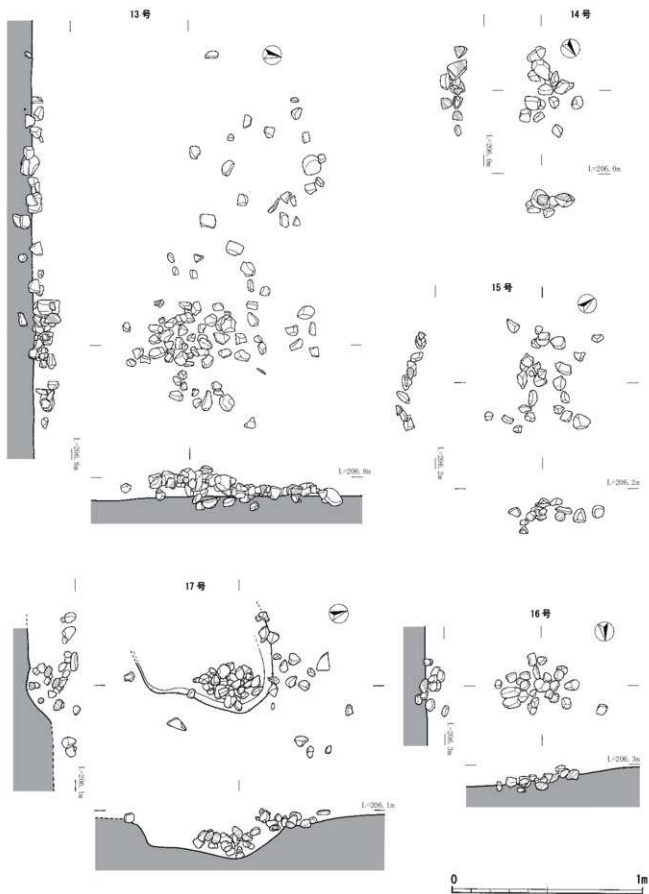
第 18 回 縄文時代前期集石遺構 4 (5・6号)



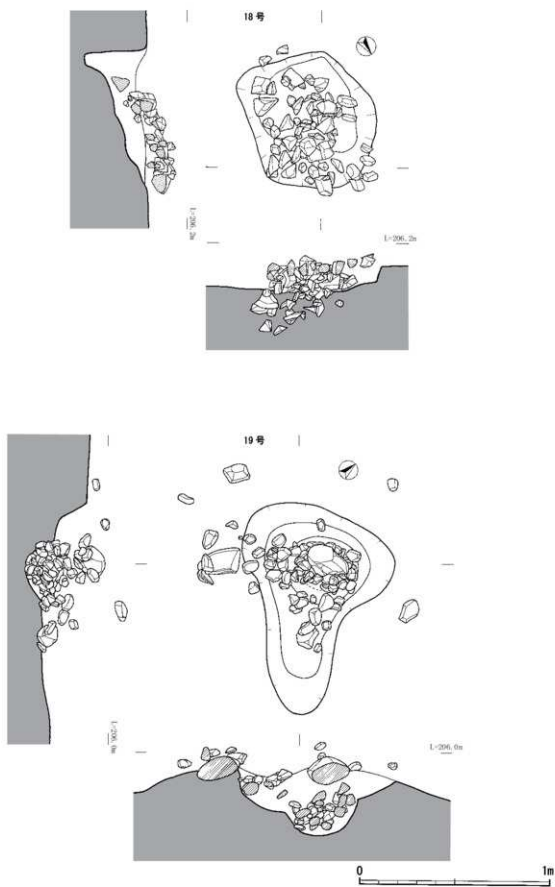
第 19 図 縄文時代前期集石遺構 5（7～9号）



第20図 縄文時代前期集石遺構6 (10～12号)



第21図 縄文時代前期集石遺構7 (13～17号)



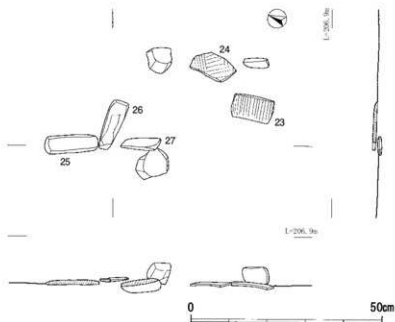
第22図 縄文時代前期集石遺構8（18・19号）

(4) 石斧集積（デポ）遺構（第23図）

D-24区，Va層で検出された。25と27がほぼ南北方向30cmの間で並び、その中間に26が存在することから3点が一括して集積されたと判断し、「集積（デポ）」と判断した。しかし、この3点を包括する掘り込みのある遺構等の埋納施設は確認されていない。

また、27の石斧の下から礫が1点、石斧集積の東側で土器（本報告書における前・中期の土器Ⅰ類の管畑式土器該当；23・24）と礫が各2点ずつ出土している。ここでも掘り込みは確認されていない。

第23図はこの8点を含む南北60cm，東西30cmの範囲を「集積（デポ）遺構」とし、掲載してある。3点の礫を除く、5点を図化した。



第23図 石斧集積（デポ）遺構

(5) 集石・石斧集積遺構内出土遺物（第24～26図 7～27）

集石・石斧集積遺構内出土遺物については、遺構の掲載番号順に報告する。

7は1号集石遺構から出土した管畑式土器に比定できる胴部片である。横位の沈線の下に短沈線の四角文が施されている。

8～13は2号集石遺構から出土した土器片である。8・9は内外面とも工具による条痕が施されている土器片で、8は口縁部、9は胴部である。10～13は外面に浅い沈線

で文様が施されており、管畑式土器に比定できる土器片である。10・11は胴部片で、10は折帯文もしくはX字状の文様が施されていると思われる。11は横位と縦位の沈線による四角文が観察できる。12・13は底部である。12は外面に浅い沈線で文様が施され、内面には調整のための指頭痕が観察できる。13は内面に工具による調整が施されている。

14は4号集石遺構から出土した口縁部片である。口唇外面はやや外に張り出している。外面は工具によるケズリが施されており、内面はヘラ状工具によるナデ調整が



第24図 縄文時代前期集石遺構内出土遺物 1

施されている。

15は11号集石遺構から出土した胴部片である。曾畑式に比定できる土器片で、外面は横位の2条の連続刺突文の間に横位の沈線が施されている。内面は工具によるナデ調整が施されているが、一部、指押さえの痕が観察できる。

16～19は12号集石遺構から出土した曾畑式土器に比定できる土器片である。16は口縁部である。内外面とも横位の沈線が施されており、口唇部は連続刺突文が施されている。17・18は胴部片である。17は破片が小さいため外面は縦位の短沈線のみ観察できる。内面はナデ調整が施されている。18は口縁部に近い胴部片で、口縁部に向かって緩やかに外反している。外面は横位と縦位の沈線が交互に施され、内面は工具によるナデ調整が施されている。19は底部で内外面ともヘラ状工具によるケズリ及びナデ調整が施されている。

20は13号集石遺構から出土した口縁部片である。口唇部と内面は工具による刺突文が施され、外面は工具による浅い沈線が横位に施されている。

21・22は17号集石遺構から出土した土器片である。21

は口縁部で内外面ともヘラ状や棒状の工具でケズリナデ調整が施されている。22は胴部で外面は斜位の沈線が羽状に施され、内面はヘラ状工具によるナデ調整が施されている。前・中期土器I類の曾畑式土器に比定できるものである。

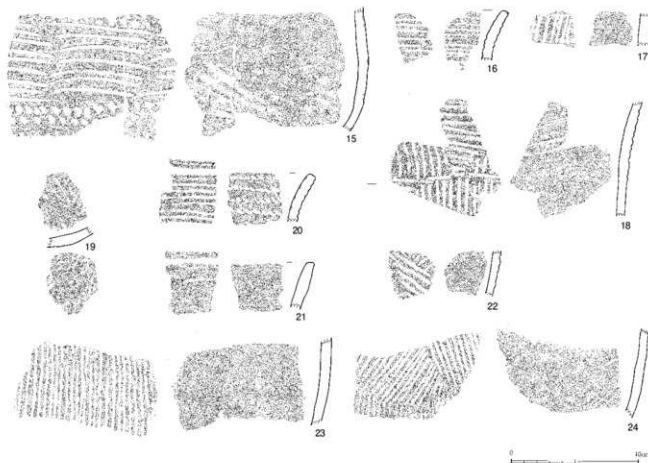
23～27は石斧集積（デボ）遺構内から出土した土器と石斧である。

23・24は土器である。23は胴部片で外面に縦位の沈線が、内面はヘラ状工具によるナデ調整が施されている。

24は底部に近い胴部片で外面は斜位の、底部に近い箇所は縦位の沈線で折帯文風の文様が施され、内面はヘラ状工具によるナデ調整が施されている。

2点とも前・中期土器I類の曾畑式土器に比定できる。

25～27は磨製石斧である。25はやや緑色を帯びた灰黒色のホルンフェルス製の全磨製石斧である。最大長13.1cm、最大幅5.2cm、厚みは体部中央付近で1.6cmを測る。扁平な剥片を素材とした可能性が高い。切っ先はほぼ直線で、刃こぼれ痕と思われる微細な割離が残される。研磨は丁寧で、刃部及び側縁部を中心に各部位で細かな面

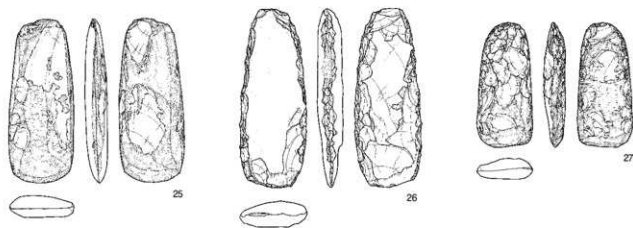


第25図 縄文時代前期集石遺構内出土遺物2・石斧集積（デボ）遺構内出土遺物1

取り仕上げが見られる。

26は灰黒色地に黄淡色の粉がかかったような状態のホルンフェルス製の刃部磨製石斧である。最大長14.2cm、最大幅5.3cm、厚みは体部中央付近で2.0cmを測る。扁平な剥片を素材とし、表面が素材礫の礫面で、裏面に剥離面に相当する。両側縁部と頭部は繰り返し調整剥離を行い、右側縁の上部には敲打痕が残される。刃部両面は磨いて仕上げているが、切っ先には激しい刃こぼれ痕が確認できる。

27は凝灰岩質安山岩製の部分磨製石斧である。最大長9.9cm、最大幅4.4cm、厚みは体部中央付近で1.7cmを測る。残存形状からやや厚手の剥片を素材とした可能性が高い。整形に当たっては、平坦剥離状の大剥離から始まり、小剥離を繰り返し行い、最終段階で丁寧な研磨仕上げを行っている。面取りの研磨仕上げは25と同じで、刃部付近の研磨状況からは、研ぎ直しが繰り返された状況が見てとれる。



第26図 縄文時代前期石斧集積（デボ）遺構内出土遺物2

第5表 縄文時代前期集石遺構内出土土器観察表

洞窟番号	土器番号	器種	遺構番号	出土区	層位	埋位	法量 (cm)			文様・調整		胎土				調査時の遺構番号	備考		
							口径	底径	器高	外面	内面	白色粒子	黒色粒子	角閃石	雲母			輝石	
24	7	深鉢	1号集石	F-3 17-18	-	胴部	-	-	-	沈線・短沈線	ナゲ	○	○				集石 96号		
	8	深鉢	2号集石	D-23	-	口縁部	-	-	-	条痕 (工具)	条痕 (工具)	○	○				集石 267号		
	9	深鉢				胴部	-	-	-	条痕 (工具)	条痕 (工具)	○	○						
	10	深鉢				胴部	-	-	-	沈線	ナゲ	○	○	○					
	11	深鉢				胴部	-	-	-	沈線	ナゲ	○	○						
	12	深鉢				底面	-	-	-	沈線	ナゲ	○	○	○					
	13	深鉢	底面	-	-	-	沈線	条痕 (工具)	○	○									
14	深鉢	4号集石	L-17	-	口縁部	-	-	-	ナゲ	ナゲ	○	○				集石 99号			
25	15	深鉢	11号集石	D-20	-	胴部	-	-	-	刺突・沈線	ヘラケズリ・ナゲ	○	○		○		集石 272号		
	16	深鉢	12号集石	G-20	-	口縁部	-	-	-	刺突・沈線	沈線	○	○				集石 276号		
	17	深鉢				胴部	-	-	-	沈線	浅い沈線・ナゲ	○	○		○				
	18	深鉢				胴部	-	-	-	沈線	ナゲ	○	○						
	19	深鉢				底面	-	-	-	ナゲ	浅い沈線・ナゲ	○	○	○					

第6表 縄文時代前期集石・石斧集積（デボ）遺構内出土土器観察表

探検 番号	掲載 番号	器種	遺構番号	出土区	層位	部位	法量 (cm)			文様・調整		胎土			調査時の 遺構番号	備考
							口径	径深	器高	外面	内面	白色 胎子	黒色 胎子	内突 石		
25	20	深鉢	13号集石	D-23	—	口縁部	—	—	—	刺突・沈線	刺突	○	○			集石269号
	21	深鉢	17号集石	D-18	—	口縁部	—	—	—	条痕	ナデ	○	○			集石280号
	22	深鉢	17号集石	D-18	—	胴部	—	—	—	沈線	ナデ	○	○			
	23	深鉢	石斧集積 (ゾボ)	D-24	—	胴部	—	—	—	沈線	ナデ	○	○			石斧集積 (ゾボ)
	24	深鉢	石斧集積 (ゾボ)	D-24	—	胴部	—	—	—	沈線	ナデ	○	○			

第7表 縄文時代前期石斧集積（デボ）遺構内出土土器観察表

探検 番号	掲載 番号	器種	石材	遺構番号	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	取上番号	備考
26	25	磨製石斧	珪	石斧集積(ゾボ)	D-24	—	13.1	5.2	1.6	179.8	一括-1	
	26	磨製石斧	珪	石斧集積(ゾボ)	D-24	—	14.2	5.3	2.0	205.5	一括-2	
	27	磨製石斧	珪(埋立石)	石斧集積(ゾボ)	D-24	—	9.9	4.4	1.7	99.0	一括-3	

3 土器

本遺跡から出土した縄文時代前期・中期の土器は形態的特徴や文様からⅠ類からⅣ類に分類した。それぞれの分類に該当する土器型式は次のとおりである。

Ⅰ類：曾畑式土器

Ⅱ類：深溝式土器

Ⅲ類：春日式土器

Ⅳ類：条痕土器

Ⅳ類のうち、Ⅳ-1-a類は西之齒式土器の範疇に含まれる。

Ⅰ類～Ⅳ類土器は、全て主に調査区の北東側から出土する傾向にあった。Ⅰ類土器は、E-20区付近からJ-18区付近を結ぶラインより北東側に集中して出土している。これは、調査区の北西側約三分の一の範囲となる。Ⅱ類土器とⅣ類土器は、共にM-11区付近とE-16区付近を結ぶラインより北東側に主に出土している。これは、調査区全体のほぼ半分にあたる。グリッド毎のⅡ類土器とⅣ類土器の出土状況は異なるが全体的な出土状況はほぼ重なる。Ⅲ類土器はJ-20区のⅣ層から出土している。Ⅰ～Ⅳ類土器は、層位的にⅣb層とⅤa層を中心としたⅣ・Ⅴ層から出土している状況である。

土器については、次項で類毎に詳細な説明を行う。

(1) Ⅰ類土器

Ⅰ類土器は曾畑式土器に該当する。調査区内でも主に北東側に集中して出土し、調査区内の南西側からの出土は数点のみである。また、出土層はⅣ・Ⅴ層を中心とする。Ⅰ類土器の出土状況は第28・29図に示した。

曾畑式土器は、これまで主に文様帯やその区画、文様に着目して編年が行われ、多くの研究者が曾畑式土器の

編年観を示してきた。ここでは、部位ごとの文様構成に着目して遺構内出土の土器(掲載番号2・3)も含めて次のように分類した。なお、特殊な土器、小形品については、部位に関わらず「その他」として扱った。

口縁部（第一文様帯）

1類 刺突文を施すもの

2類 沈線文（横線）を施すもの

3類 三角文もしくは三角文から派生した四角文を施すもの

4類 折帯文を施すもの

5類 羽状文を施すもの

6類 1～5類以外のも

胴部

1類 主として三角文・四角文を施すもの

2類 主として三角文・四角文以外の文様を施すもの

底部

1類 底部を等分する沈線を施すもの

2類 底部を等分する沈線のないもの

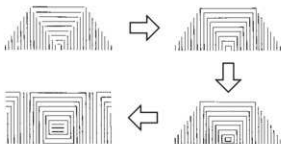
その他

特殊な土器、小形品

口縁部3類の三角文もしくは三角文から派生した四角文については、本遺跡出土の土器から第27図のような変化が見てとれることから同類とした。また、同じようにX字状の文様も折帯文から派生した文様として捉え口縁部第4類とした。

以下、分類に従い、部位ごとに述べる。なお、掲載番

三角文—四角文



折帯文—X字状文



第 27 図 1 類土器文様模式図

号 2 及び 3 は遺構内出土の土器であるが、再掲して説明を加える。

【口縁部】

口縁部文様は、第一文様帯を対象とした。口縁端部が欠損しているも第一文様帯の文様が伺い知れるものについては、口縁部として扱った。

口縁部 1 類 (第 30 図 3・28～31)

口縁部 (第一文様帯) に刺突文をもつ一群である。園化できたものは 5 点であった。28・29 は刺突文を巡らすのが、その下の文様は横位の沈線文で施される。口縁部内面にも数条の刺突文を施している。30 の口縁には山形突起が付き、文様は上部から刺突文と短沈線文を交互に施している。口縁部内面にも文様が施され、刺突文と沈線文で文様を構成している。3 (再掲) は口縁端部が欠損しているが、第一文様帯は刺突文を巡らすものと思われる。頸部から胴下部には四角文が施されるが、各四角文は横位の刺突文で区画されている。底部文様帯については不明だが、少なくとも 5 つの文様帯をもつ。器形は口縁部が開き、胴下部が口縁部より張ることから間延びした印象を受ける土器である。口縁部内面の文様の有無については不明である。31 は 1 条の刺突文を口縁端部に施し、その下には三角形をモチーフとした文様が施されている。口縁部内面には、刺突文と短沈線が横位に施される。

口縁部 2 類 (第 31～34 図 32～70)

口縁部 (第一文様帯) に横位の沈線が施される一群である。その中でも 32～45 は沈線文の下に三角文もしくは三角文から派生した四角文が施される。32 は規格性のない短沈線が施されている。復元口径 34.0 cm で口縁部は直線的に開く。内面にも外面と似たような間延びした沈線が施される。33 には文様帯を区画する沈線等はないが、規格性のある文様構成である。第一文様帯の下には胴部まで三角文が施されているが、底部文様帯は不明である。口縁部内面にも横位の沈線が数条巡る。胴部から口縁部にかけて外傾し、胴部はさほど張ることなく底部に至る。復元口径は 24.0 cm である。34 の文様も規格性をもつ。口縁部下から 2 段の四角文が残る。35 は 32 ほどではないが、第一文様帯に施される沈線の間隔が広くなる。36 は、口縁部を短沈線で施し、その下部に四角文の一部が見える。35・36 とも口縁部内面にも沈線文が施される。37～39 は小片であるが、沈線の下に四角文が施されて、内面には横位の沈線が施される。40 には穿孔が見られる。44 は、四角文を施した後、横位の沈線が上書きされている。28～45 は口縁部内面にも施文され、そのほとんどが横位の沈線文である。45 の内面には刺突文が施される。

46～51 の 6 点は第一文様帯に沈線文を、その下に折帯文を施すものである。46 は口径 20.4 cm を測り、口縁部はやや外反し、胴下半はやや張る器形である。第一文様帯に沈線文からその下に 2 段の折帯文、数条の短沈線文、折帯文と文様帯を構成し、少なくとも 4 つの文様帯をもつ。胴部の短沈線文は区画線とも考えられるが、5～6 条あることから文様帯とした。47 は復元口径 20.0 cm、胴部から直線的に立ち上がり、口縁部は外反する器形である。46 と同様な文様構成で胎土も似ていることから同一個体の可能性もあるが、器形が異なったため別個体として扱った。46・47 とも口縁部内面に沈線文が巡る。48 の口縁部内面には刺突文が施されるが、外面には横位の沈線文が施文される。49・50 の口縁部内面にも外面と同じように横位の短沈線文が施される。51 は第一文様帯の沈線に斜位の沈線文が上書きされる。

52・53 は第一文様帯に横位の沈線文、その下に縦位の沈線文が施されている。52 の縦位の沈線文については、四角文の可能性も考えられる。53 の口縁端部は欠損するが、縦位の沈線の上位に横位の沈線が見てとれる。第一文様帯に横位の沈線文、その下に縦位の沈線文、四角文、折帯文と続く。文様帯としては 4 つ残存している。口縁部内面にも沈線が数条巡る。

54～70 については第一文様帯に沈線文が施されるが、それ以下の文様が不明のものを掲載した。ただし、小片については他の文様の一部である可能性も否定できない。器形については、口縁部が外反するか直線的に開くものである。54 については底部の文様は不明だが、全面同一の文

様が施されていると思われる。口縁部内面には1条の刺突文が巡る。55は波状口縁となる。54～70は口縁部内面にも施文されるが、61は2本の沈線間を斜位の短沈線で充填し、63・64は沈線文と刺突文を組み合わせている。その他は短沈線もしくは沈線で施文される。

口縁部3類 (第34～36図 71～91)

第一文様帯に三角文もしくは四角文が施される一群である。全体的に口縁部は外反するか、やや開き気味となる。71は文様帯が3つ残り、上から四角文、折帯文、四角文が順に施され、底部文様帯については不明である。口縁部内面には沈線文が施される。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部でやや開き気味となる。復元口径は24.0 cmである。72は口縁部から胴下半部まで四角文で構成され、底部は横位の沈線で施文されている。文様帯を区画する沈線等は見られない。口縁部内面は刺突文が3条巡る。外反する口縁部から若干の丸みをもつ胴部は、なだらかに底部に至る。復元口径25.2 cm、器高30.5 cmを測る。73は口縁部のみ残存し、四角文が施され、内面には沈線が数条施される。復元口径は24.8 cmである。74は口縁部から胴下半部まで四角文で施されている。底部については欠損のため不明である。口縁部内面には短沈線が4～5条巡る。直線的に立ちあがった胴部は口縁部で外反する。復元口径21.4 cmである。75と76は接合しなかったが同一個体であることから、75は76の実測図を基に図上復元してある。口縁部が欠損しているが、文様構成の全体を把握できる資料である。口縁部から胴部までの第一文様帯には四角文が2段施され、第二文様帯との区画に押し引き文が2条巡る。第二文様帯は横位の沈線文で構成され、底部中央まで徐々に短くなり終結する。口縁部内面には押し引き文が3条施文される。復元した口径は20.0 cm程度、器高は14.6 cm程度である。口縁部は外反し、短い胴部は直線的に伸びる。77の四角文は規格性に乏しく、広い間隔の沈線で施文されている。復元口径は25.0 cmである。78は四角文が2段施されているが、2段目の横位の沈線ははずれていて文様帯という意識をもたずに施文されている。復元口径は21.4 cmである。79の内面には3条の刺突文と沈線文が交互に施文される。復元口径は20.2 cmである。80の四角文は三角文から派生した事が推察できないくらい完全な四角を意識して施文されている。復元口径は20.0 cmである。82の内面には横位の沈線間に刺突文が施され、復元口径は18.4 cmである。83の内面には羽状文、84・85の内面には押し引き文が施される。89の第一文様帯の三角文は、三角を区画する斜位の沈線文が施される。第二文様帯は四角文、第三文様帯は三角文、第四文様帯は横位の沈線文で構成される。口縁部内面には3条の沈線が巡る。底部から胴部にかけて丸みをもって立ち上がった器形は、胴部から口縁部まで直線的に伸びるが、口縁部で外反する。復

元口径30.7 cm、器高31.3 cmを測る。90・91は横位と斜位の沈線で三角文が施されている。

口縁部4類 (第36・37図 2・92～99)

第一文様帯に折帯文もしくはそれをモチーフとした文様が施されるものである。器形は直線的に開くか、外反する口縁部に、胴部は張り付いたものである。93などの折帯文は規格性をもった文様となっているが、92や2(再掲)は規格性に乏しい施文となっている。92の第一文様帯には折帯文に部分的に横位の短沈線があるが、斜位の沈線と横位の沈線の施文順の規則性はない。真っ直ぐ立ち上がる胴部は口縁部で外反する器形となる。93は第一文様帯に折帯文、第二文様帯に四角文、第三文様帯は羽状文、第四文様帯には四角文、底部文様帯には縦位の沈線文が施される。文様帯を区画する沈線等はないが、文様帯を意識した施文である。口縁部内面には3条の短沈線文が施される。底部から緩やかに湾曲し、胴下半で多少屈曲した胴部は開き気味に立ち上がり、そのまま口縁部に至り、底部が幾分外反する。口縁部には対称の修飾孔が残る。復元口径18.7 cm、器高18.9 cmを測る。2(再掲)は文様帯を意識せずに施文した折帯文が胴部まで続く。内面には刺突が横位に2条施される。95の文様帯は十字状にも見えるが、折帯文から派生した文様として捉えた。文様は緻密さを欠き、内面の刺突も間隔をおいて施文される。復元口径14.8 cmを測る。97は折帯文の下位に三角文があるが、その三角を区画する短沈線が施される。外反する口縁部は波状を呈す。

口縁部5類 (第37・38図 100～105)

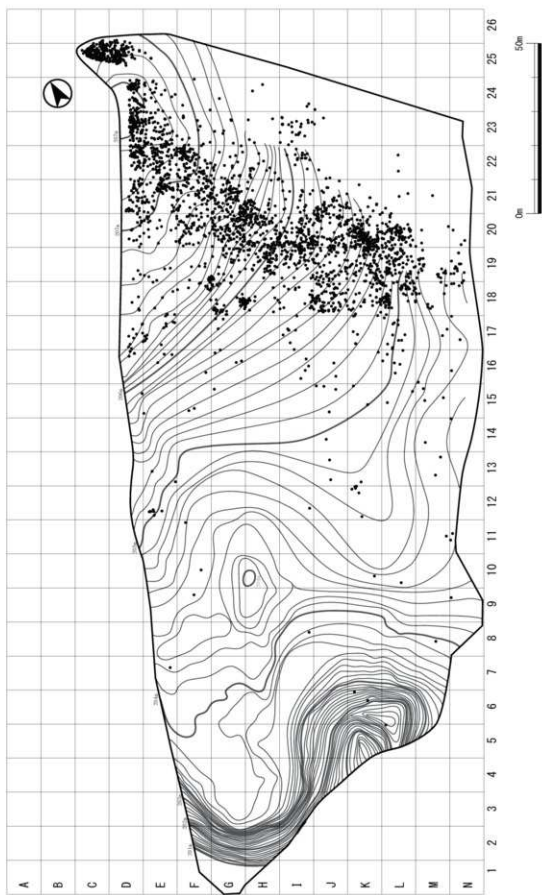
第一文様帯に羽状文が施されるものである。100・101の器形は異なるが縦位と斜位の沈線で施文が行われている。内面にも横位の沈線が施される。復元口径は、それぞれ22.6 cmと26.5 cmである。102と103と105は同一個体と思われる。外面には横位の羽状文が数段に亘って、内面には刺突文が4条施されている。直線的に伸びる体部と口縁部で外反する器形が特徴的である。104は口縁部で押し引き文、その下位に羽状文、さらにその下位に横位の沈線文がある。内面の施文が特徴的で、羽状文が途中で押し引き文に変わる。

口縁部6類 (第38図 106～120)

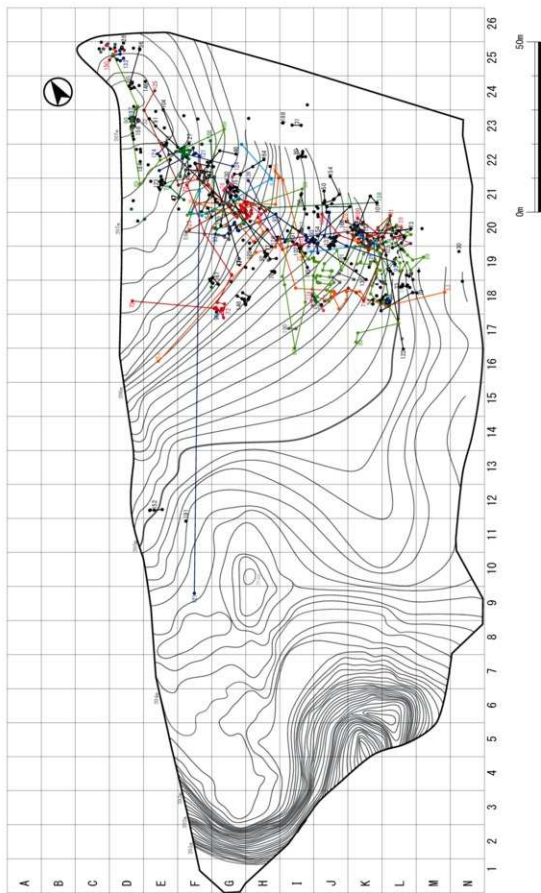
口縁部1～5類以外の文様か、文様構成が不明確なものである。106は格子目状の施文である。107・112は縦位もしくは斜位の沈線文に横位の沈線文を上書きするものである。107の内面には、外面と同じような文様が施される。全体的に口縁部が外反するが、何点か口縁部のみが極端に外反するものもある。

【胴部】

本遺跡出土の管煙土器には三角文もしくはそこら



第 28 图 绳文时代前・中期 I 期土器全出土分布图



第 29 圖 縄文時代前・中階 1 段土器出土分布図 (縮小分)

派生した四角文が施文されているものが圧倒的に多い。そこで、胴部については主として三角文もしくは四角文で文様が構成されているものを胴部1類、それ以外を胴部2類とした。

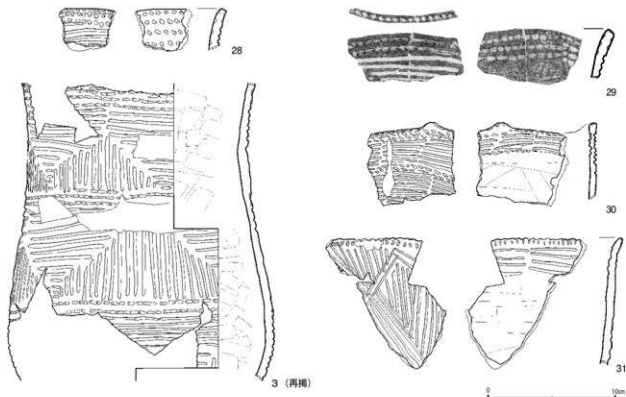
胴部1類 (第39～41図 121～147)

胴部に主として三角文もしくは四角文を配するものである。121・122は口縁下部から胴下半部まで四角文を施文する。121の残存部上位に縦位の沈線が僅かに残るが、その文様を推察できるまでにはない。胴部は直線的に立ち上がる器形である。122の器形は張りのない胴部に口縁部が外に開くことにより、くびれた頸部をもつ。123は、胴部に四角文、その上位には斜位の沈線で施文がされている。胴部から口縁部に向かっては幾分内弯する器形である。124・125は胴部に2段の四角文が見られるが、いずれも粗雑な施文である。126は胴部に2段の四角文が施される。その上位に短沈線文が施されるが、口縁部文様帯に横位の短沈線が施文されたことも考えられる。127は、四角文に横位の沈線が2条上書きされる。128・129は胴部から底部付近まで四角文が施される。130・131には文様帯を区画すると思われる横位の刺突文が僅かに残る。132は頸部をもつ器形で、密な施文である。133～137にも四角文もしくは四角文と推察される文様が施される。138は、横位の刺突文が四角文の施されている文様帯を区画している。140は縦位の沈線に横位の沈線が

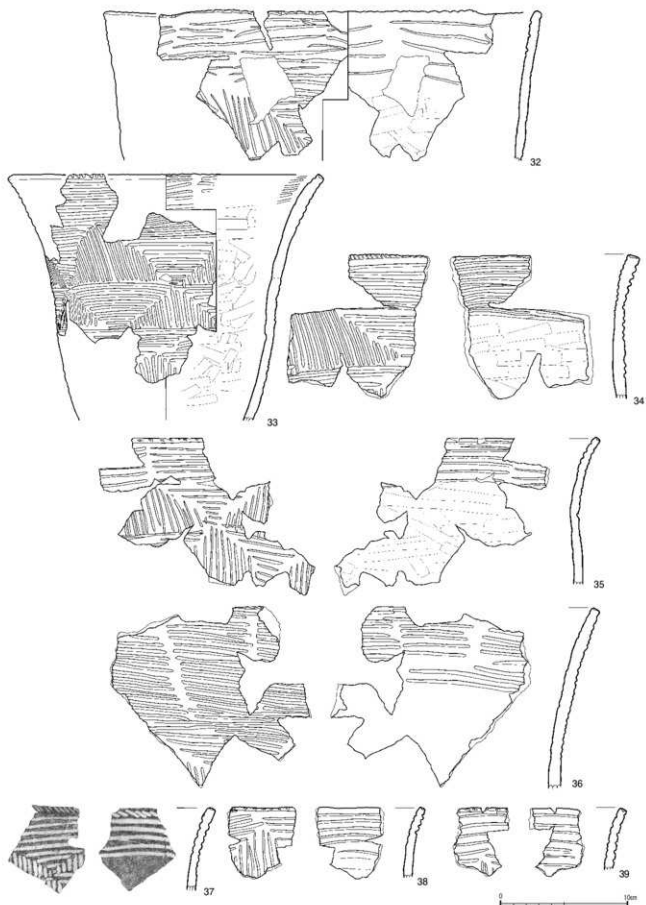
上書きされる。146は平底気味となるが、底部と胴部の屈曲部まで四角文が施される。147も胴下部まで四角文が施されている。

胴部2類 (第42・43図 148～167)

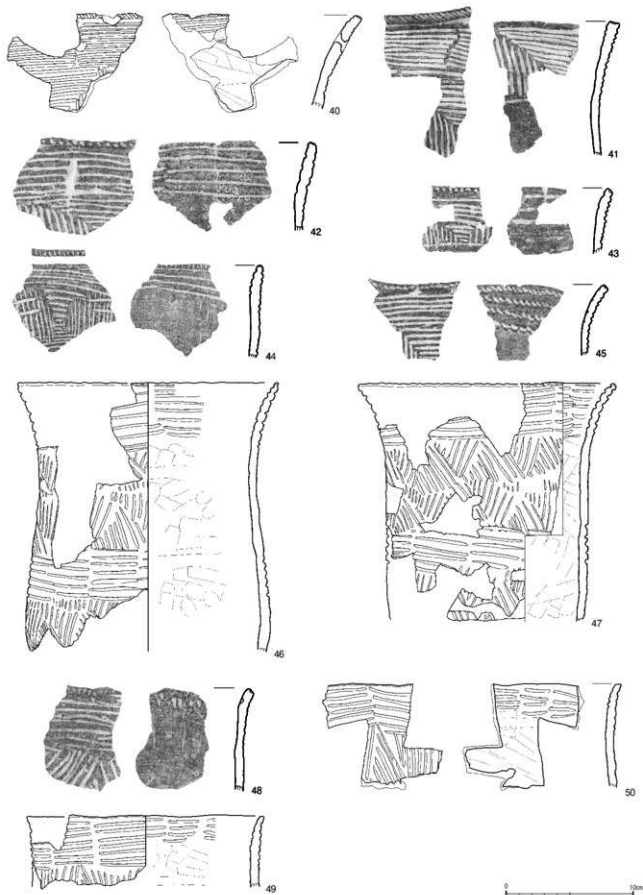
胴部に主として三角文もしくは四角文以外の文様が施される一群である。148は斜位の沈線で折帯文風の文様が数段施され、その間に横位の沈線が4～5条巡る。この横位の沈線が文様帯を区画するものか文様帯となるかは判然としない。149は横位の沈線が残るが、四角文の一部であることも考えられる。口縁部が外に開く器形となる。150は斜位の沈線に横位の沈線が上書きされている。151は、100などと同じような文様構成で、縦位の沈線を施した後斜位の沈線を引いている。152・153は、間隔の空いた斜位の沈線に縦位の沈線が構成されている。154は、折帯文風の文様が胴下部まで施され、底部は横位の沈線が施される。155は折帯文が2段施されるが、折帯文が横方向に半分ずれることにより見かけ上、X字状となる。158・159は、2本の横位の沈線間に縦位の短沈線を施している。160は文様の規格性が崩れ、全体像は不明である。161・164は二重施文されている。163は縦杉状の文様、その下位に横位の短沈線で施文された文様帯がある。166の上位には横位と縦位の沈線で文様が構成され、その下位には横位と斜位の文様が施文されている。167は折帯文風の施文が底部まで残る。



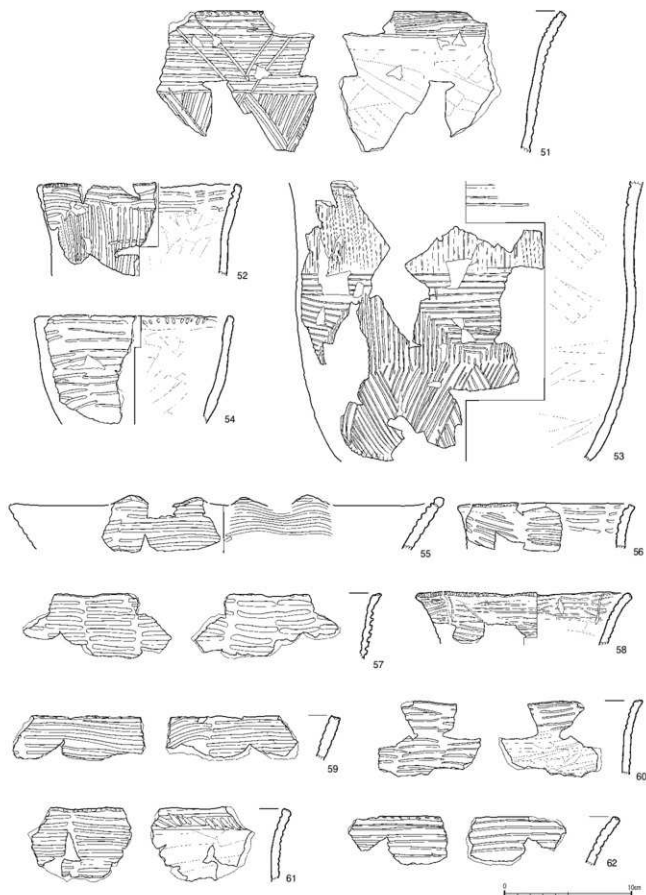
第30図 縄文時代前・中期1類土器1



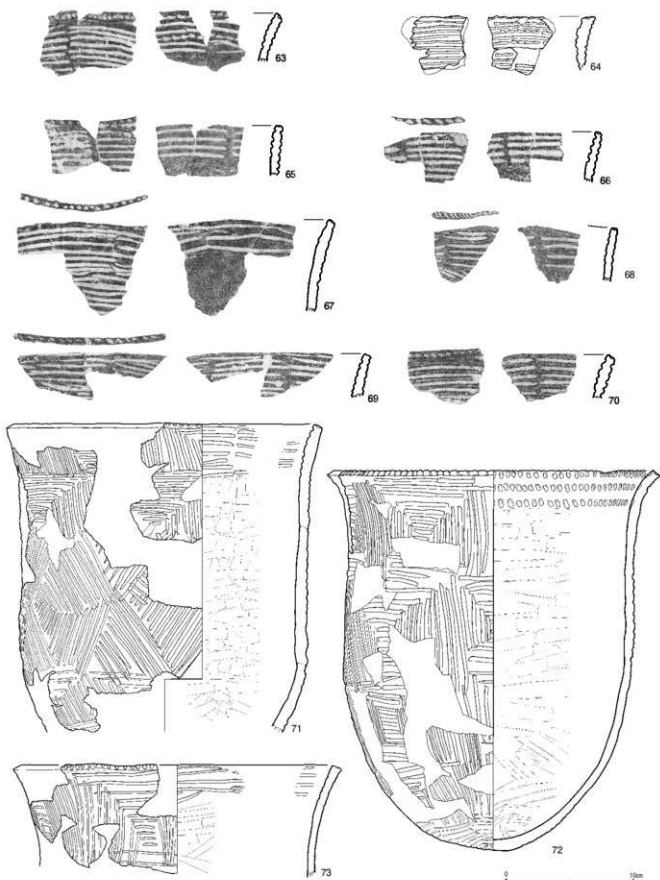
第31図 縄文時代前・中期I類土器2



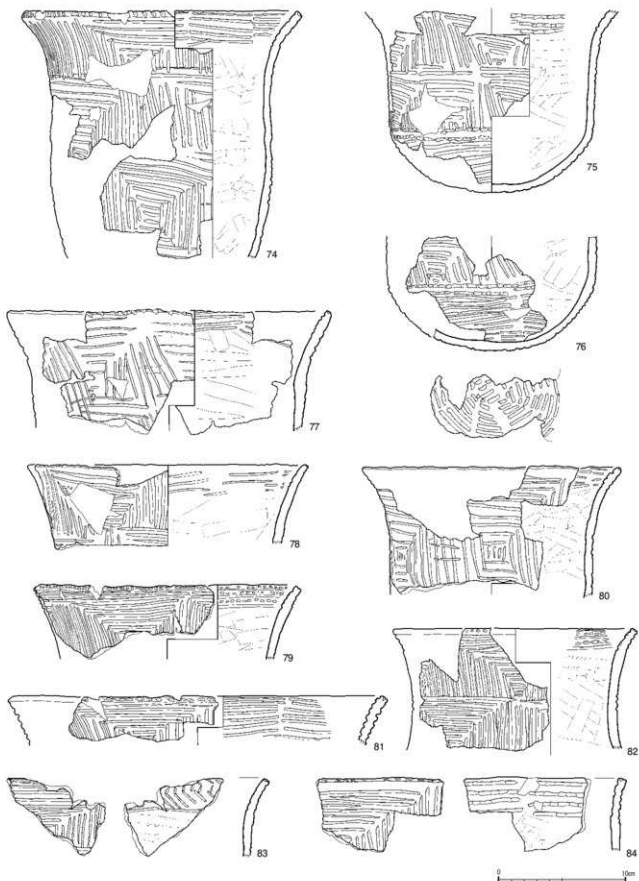
第 32 図 縄文時代前・中期 I 類土器 3



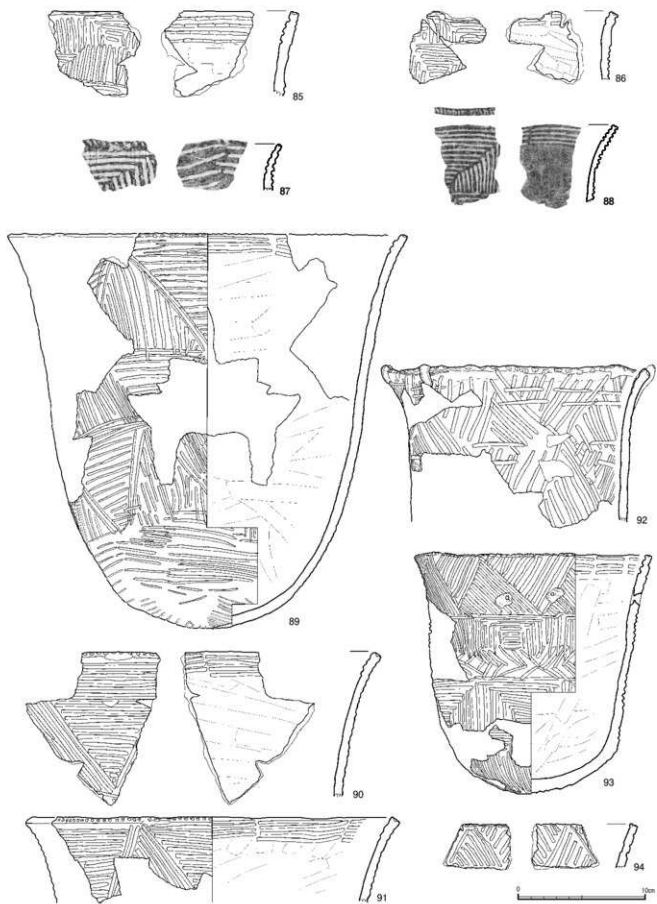
第33図 縄文時代前・中期Ⅰ類土器4



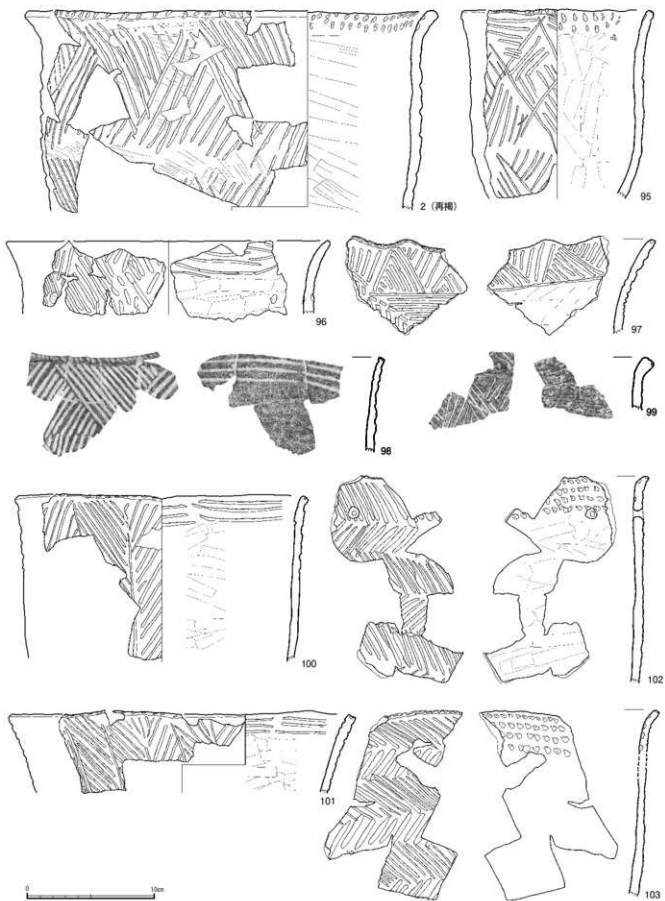
第 34 図 縄文時代前・中期 I 類土器 5



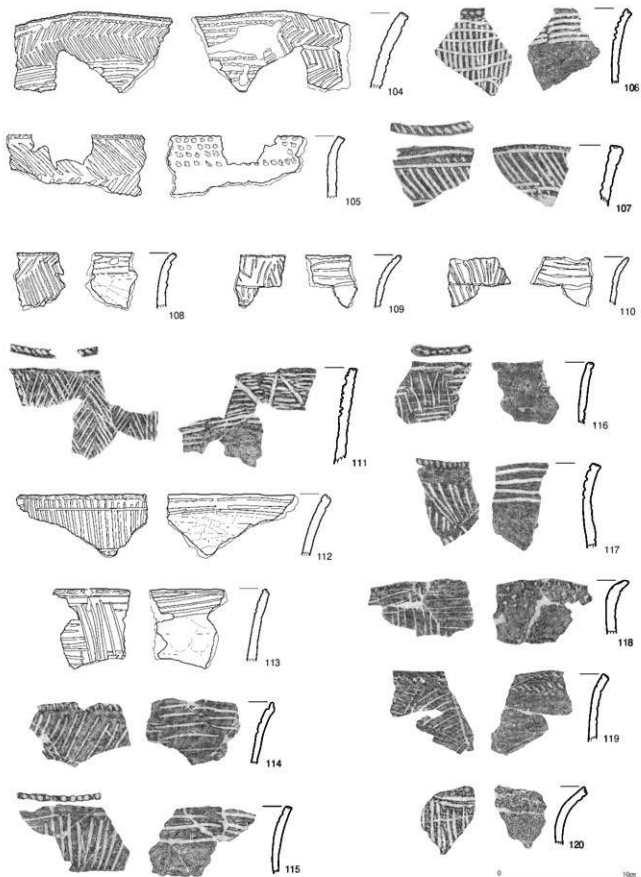
第 35 図 縄文時代前・中期 I 類土器 6



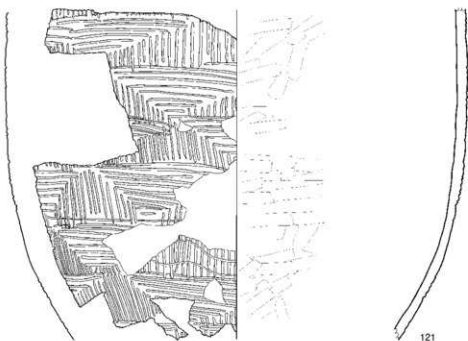
第 36 図 縄文時代前・中期Ⅰ類土器 7



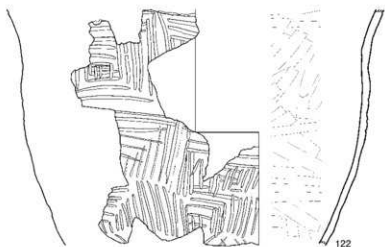
第 37 図 縄文時代前・中期 I 類土器 8



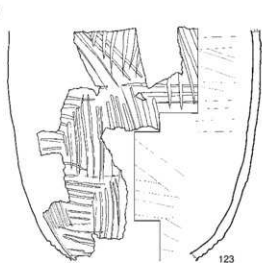
第 38 圖 縄文時代前・中期 I 類土器 9



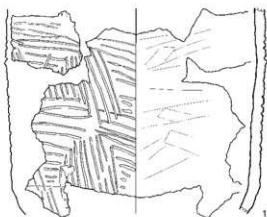
121



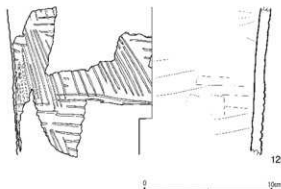
122



123



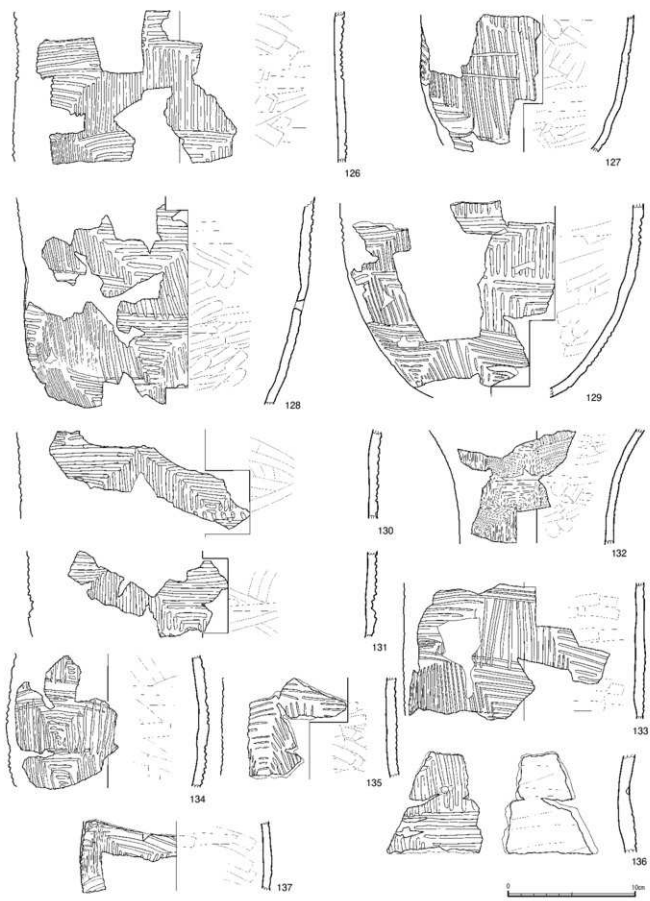
124



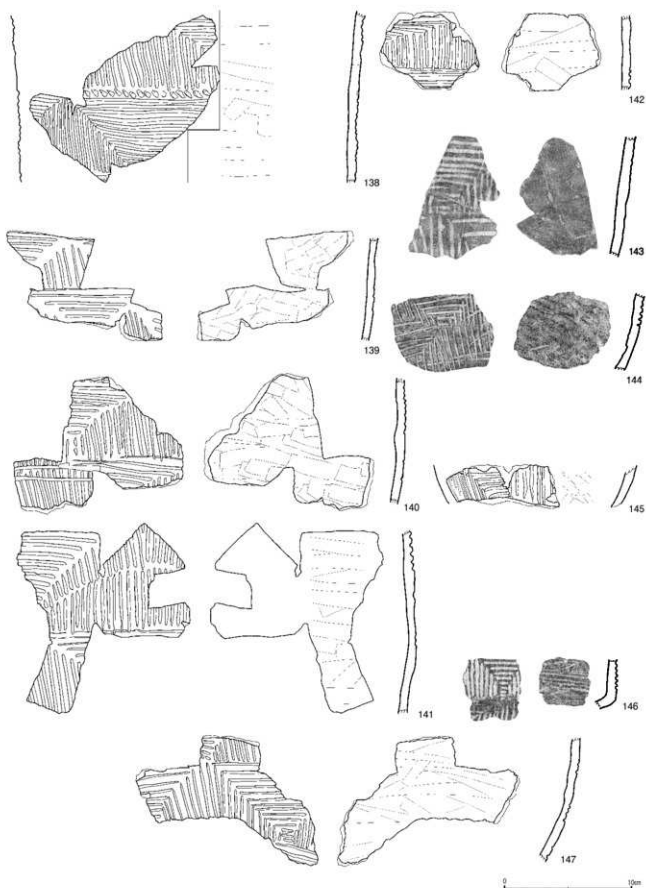
125



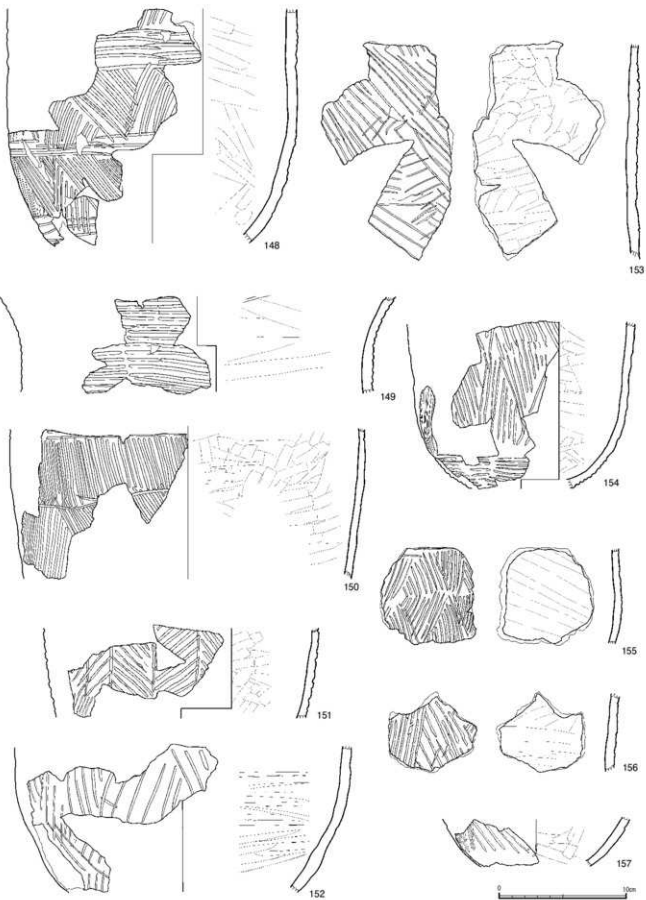
第39図 縄文時代前・中期Ⅰ類土器 10



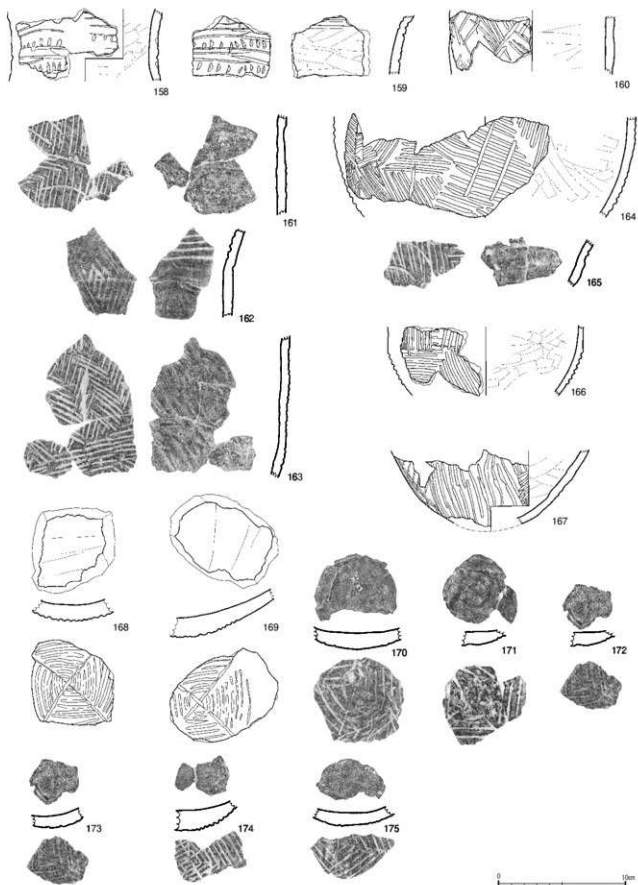
第40図 縄文時代前・中期Ⅰ類土器Ⅺ



第 41 図 縄文時代前・中期 I 類土器 12



第 42 図 縄文時代前・中期 I 類土器 13



第 43 図 縄文時代前・中期 I 類土器 14



第 44 図 縄文時代前・中期 I 類土器 15

第8表 縄文時代前・中期Ⅰ類土器観察表1

備考欄：() は口唇部施文

标本 番号	器種	出土区	層位	部位	法量 (cm)		土文様・調整		胎土			取上番号	備考
					口径	底径	外面	内面	白色 粒子	褐色 角石	炭屑		
28	深鉢	D-25	V a	口縁部			刺突・沈線	刺突・ナゲ	○		○	65366	(新製)
29	深鉢	J-20	IV b	口縁部			刺突・沈線	刺突・ナゲ	○	○	○	7717	(新製)
30	深鉢	K-19	V a	口縁部			刺突・短沈線	刺突・短沈線・ナゲ	○	○	○	5467	(新製)
31	深鉢	F-23	IV b	口縁部			刺突・沈線	刺突・短沈線・ナゲ	○			54800	(新製)
32	深鉢	D-22-23	IV b	口縁部	34.0		四角文	沈線・ナゲ	○	○	○	109096	(牛ヤシ)
33	深鉢	L-18 ~ 20	IV b	口縁部	24.0		三角文	短沈線・ナゲ	○			42665	(牛ヤシ)
34	深鉢	K-18	IV b	口縁部			三角文	沈線・ナゲ	○	○		76837	(牛ヤシ)
35	深鉢	F-19 ~ 21	IV b	口縁部			四角文	短沈線・ナゲ	○			36908	(新製)
36	深鉢	D-22 ~ 23	IV b	口縁部			沈線・四角文	短沈線・ナゲ	○	○		66279	(牛ヤシ)
37	深鉢	F-22	IV b	口縁部			三角文	沈線・ナゲ	○	○		109888	(牛ヤシ)
38	深鉢	E ~ H-20	IV b	口縁部			四角文	沈線・ナゲ	○	○		116721	(新製)
39	深鉢	G-19-21	IV b	口縁部			四角文	沈線・ナゲ	○	○		82318	(新製)
40	深鉢	L-20	—	口縁部			沈線・四角文	沈線・ナゲ	○	○		イコウ・括	(牛ヤシ)
41	深鉢	D-E-23	V a	口縁・胴部			沈線・四角文	四角文・ナゲ	○	○		114221	(牛ヤシ)
42	深鉢	F-21	IV b	口縁部			沈線・四角文	沈線・ナゲ	○	○		111623	(新製)
43	深鉢	D-25	V a	口縁部			四角文	ナゲ	○	○		65369	(新製)
44	深鉢	K-18	V a	口縁部			四角文	沈線・ナゲ	○	○		73663	(牛ヤシ)
45	深鉢	E-18	懸胎	口縁部			沈線・四角文	刺突・ナゲ	○	○		—	(押引風刺突)
46	深鉢	F-6-20	IV b	口縁・胴部	20.4		沈線・折帯文	沈線・ナゲ・短沈線	○	○		81921	(新製)
47	深鉢	F-6-20 ~ 22	IV b	口縁・胴部	20.6		沈線・折帯文	沈線・ナゲ・短沈線	○	○	○	110806	(新製)
48	深鉢	D-24	V b	口縁部			沈線・折帯文	刺突・沈線・ナゲ	○	○		88171	(新製)
49	深鉢	J-1-20-21	IV b	口縁部	18.4		沈線・折帯文	短沈線・ナゲ	○	○		77167	(新製)
50	深鉢	J-20-21	IV b	口縁部			沈線・折帯文	短沈線・ナゲ	○	○		77222	(新製)
51	深鉢	F-6-20 ~ 22	IV b	口縁部			沈線・折帯文	沈線・ナゲ	○	○		81842	(新製)
52	深鉢	L-1-18	V b	口縁部			沈線	沈線・ナゲ	○	○		26019	(新製)
53	深鉢	L-6-18 ~ 20	IV b	口縁・胴部			四角文・折帯文・沈線	沈線・ナゲ	○	○		6222	(新製)
54	浅鉢	F-20-21	IV b	口縁・胴部			沈線	刺突・ナゲ	○	○		109079	(新製)
55	鉢	L-6-19-20	IV b	口縁部			沈線	沈線・ナゲ	○	○		72938	(新製)
56	深鉢	F-21	F a	口縁部			短沈線	短沈線・ナゲ	○	○		73430	(新製)
57	深鉢	L-20	IV b	口縁部			短沈線	短沈線・ナゲ	○	○	○	85939	(新製)
58	深鉢	F-6-20	IV b	口縁部			短沈線	短沈線・ナゲ	○	○		77523	(牛ヤシ)
59	深鉢	K-20	IV b	口縁部			沈線	沈線・ナゲ	○	○		78849	(牛ヤシ)
60	深鉢	L-6-19-20	F a	口縁部			短沈線	短沈線・ナゲ	○	○		73161	(牛ヤシ)
61	深鉢	K-19-20	IV b	口縁部			沈線	沈線・ナゲ	○	○		77771	(新製)
62	深鉢	D ~ H-20	IV b	口縁部			沈線	沈線・ナゲ	○	○		116726	(新製)
63	深鉢	G-20	IV b	口縁部			沈線	押引風刺突・沈線	○	○		116021	(新製)
64	深鉢	D-22-23	IV b	口縁部			沈線	押引風刺突・沈線	○	○		114315	(新製)
65	深鉢	F-23	IV b	口縁部			沈線	沈線・ナゲ	○	○		80913	(新製)
66	深鉢	H-19	V a	口縁部			短沈線	短沈線・ナゲ	○	○		29945	(新製)
67	深鉢	L-20	IV b	口縁部			沈線	沈線・ナゲ	○	○		78992	(新製)
68	深鉢	L-24	IV	口縁部			短沈線	短沈線・ナゲ	○	○		49626	(牛ヤシ)
69	深鉢	D ~ H-20 ~ 24	V a	口縁部			沈線	沈線・ナゲ	○	○		86768	(新製)
70	深鉢	H-19	V a	口縁部			沈線	沈線・ナゲ	○	○		55587	(新製)
71	深鉢	J-1-19-20	D a ~ B1	口縁・胴部	24.0		四角文・折帯文	沈線・短沈線・ナゲ	○	○	○	25135	(新製)
72	深鉢	D ~ H-19-20	F a ~ V a	底部	25.7	36.5	四角文	短沈線・ナゲ・短沈線	○	○		16786	(牛ヤシ)
73	深鉢	L-19-20	IV b	口縁部	24.8		四角文	沈線・ナゲ	○	○		71455	(新製)
74	深鉢	F-21 ~ 23	IV b	口縁・胴部	21.4		四角文	沈線・短沈線・ナゲ	○	○		109096	(牛ヤシ)
75	深鉢	G-19-20-21	D a ~ B1	口縁・胴部	20.0	14.6	押引風刺突・四角文	折帯文・短沈線・ナゲ	○	○		115227	(新製)
76	深鉢	G-19-20-21	IV b	口縁・胴部	25.0		押引風刺突・四角文	ナゲ	○	○		110846	(新製)
77	深鉢	D ~ H-19-20	IV b	口縁・胴部	25.0		四角文	沈線・短沈線・ナゲ	○	○		36289	(牛ヤシ)
78	深鉢	H-19	F a	口縁部	21.4		四角文	沈線・ナゲ	○	○		34900	(牛ヤシ)
79	深鉢	K ~ H-18	F a ~ V a	口縁部	20.2		四角文	刺突・沈線・ナゲ	○	○		51942	(新製)
80	深鉢	F-22	IV b	口縁・胴部	20.6		四角文	沈線・ナゲ	○	○	○	81021	(牛ヤシ)
81	深鉢	K-L-20	IV b	口縁部	20.2		四角文	沈線・ナゲ	○	○		77166	(新製)
82	深鉢	L-18	IV b	口縁部	18.4		四角文	刺突・沈線・ナゲ	○	○		26645	(新製)
83	深鉢	G-20	V a	口縁部			四角文	沈線・ナゲ	○	○		118097	(新製)
84	深鉢	K-L-19	V a	口縁部			四角文	押引風刺突・ナゲ	○	○		78275	(新製)
85	深鉢	D-25	V a	口縁部			四角文	押引風刺突・ナゲ	○	○		67822	(押引風刺突)
86	深鉢	F-21	IV b	口縁部			四角文	短沈線・ナゲ	○	○		114600	(新製)
87	深鉢	H-19	V a	口縁部			四角文	沈線・ナゲ	○	○		48877	(新製)
88	深鉢	E-23	IV b	口縁部			四角文	沈線・ナゲ	○	○		111752	(牛ヤシ)
89	深鉢	D ~ H-17 ~ 24	D a ~ V a	底部	30.7	31.3	三角文	沈線・土具ナゲ	○	○		3190	(新製)

第9表 縄文時代前・中期I類土器観察表2

備考欄：() は口唇部施文

序回 番号	発掘 番号	器種	出土区	層位	部位	法量 (cm)			主文様・調整		胎土				取上番号	備考
						口径	底径	器高	外面	内面	白色 粒子	黒色 粒子	角閃 石	重石		
36	90	深鉢	P-23	IV b	口縁部				三角文	沈線・ナゲ	○	○	○		10037 1E.0	外全面にスス付着 (複製)
	91	深鉢	F-22-23	IV a-V a	口縁部	28.4			三角文	沈線・燧石直垂・ナゲ	○	○	○		109118 1E.0	(複製)
	92	深鉢	F-19-20	IV a-V a	口縁部	26.0			新野文	沈線・ナゲ	○	○	○		35313 1E.0	(複製)
	93	深鉢	E-1-19-20	IV a-V a	底部	18.7	18.9		折衝・四角・羽状文	沈線・ナゲ	○	○	○	○	30724 1E.0	(複製)
	94	深鉢	I-18	IV a	口縁部				新野文	新野文・ナゲ	○	○	○		72550	(複製)
37	95	深鉢	P-24	V a	口縁部	14.8			新野文 (X字状)	刺突・ナゲ	○	○	○	○	86263 1E.0	(複製)
	96	深鉢	G-19	V	口縁部	25.5			新野文	沈線・ナゲ	○	○	○		28412 1E.0	穿孔
	97	深鉢	K-1-18	IV a	口縁部				新野文	新野文・ナゲ	○	○	○		72552 1E.0	(複製) 遊状口縁
	98	深鉢	K-18-20	IV a	口縁部				新野文	沈線・ナゲ	○	○	○		73014 1E.0	(複製)
	99	深鉢	F-22	V b	口縁部				新野文	ナゲ	○	○	○		80872 1E.0	(複製)
	100	深鉢	J-8-20	IV a-V a	口縁部	22.6			羽状文	沈線・ナゲ	○	○	○		77692 1E.0	(複製)
	101	深鉢	J-1-19-21	IV a-V a	口縁部	26.5			羽状文	沈線・ナゲ	○	○	○		73699 1E.0	(複製)
	102	深鉢	I-19-20	IV a-V a	口縁部				羽状文	刺突・燧石直垂・ナゲ	○	○	○		37167 1E.0	穿孔 (キザミ)
	103	深鉢	I-19-20	IV a-V a	口縁部				羽状文	刺突・燧石直垂・ナゲ	○	○	○		30269 1E.0	(複製) (キザミ)
38	104	深鉢	K-P-22-24	V a-V a	口縁部				押引風刺突・羽状文	押引風刺突・羽状文	○	○	○		65445 1E.0	(押引風刺突)
	105	深鉢	I-1-20	V	口縁部				羽状文	刺突・ナゲ	○	○	○		-	(複製)
	106	深鉢	F-22	IV b	口縁部				格子状	沈線・ナゲ	○	○	○		119734	(複製)
	107	深鉢	F-22	IV b	口縁部				沈線	沈線・ナゲ	○	○	○		-	(複製)
	108	深鉢	P-25	IV b	口縁部				沈線	沈線・ナゲ	○	○	○		69055 1E.0	(複製)
	109	深鉢	I-17	IV b	口縁部				沈線	沈線・ナゲ	○	○	○		49050 1E.0	(キザミ)
	110	深鉢	J-8-18	IV a-V a	口縁部				沈線	沈線・ナゲ	○	○	○		26086 1E.0	(複製)
	111	深鉢	J-8-20	IV a-V a	口縁部				羽状文	沈線・ナゲ	○	○	○		77712 1E.0	(複製)
	112	深鉢	C-25	IV a-V a	口縁部				沈線	沈線・ナゲ	○	○	○		65436 1E.0	(複製)
	113	深鉢	P-25	IV b	口縁部				沈線	沈線・燧石直垂・ナゲ	○	○	○		69124	(複製)
	114	深鉢	I-20	IV b	口縁部				沈線	沈線・ナゲ	○	○	○		77523	(キザミ)
	115	深鉢	K-P-16-19	IV a-V a	口縁部				沈線	沈線・ナゲ	○	○	○		48898 1E.0	(複製)
	116	深鉢	P-25	V a	口縁部				沈線	沈線・ナゲ	○	○	○		65327	(複製)
	117	深鉢	F-22	V a	口縁部				沈線	沈線・ナゲ	○	○	○		114889	(複製)
	118	深鉢	P-24	V a	口縁部				沈線	刺突・ナゲ	○	○	○		86773 1E.0	(複製)
	119	深鉢	G-1-20	IV a-V a	口縁部				沈線	刺突・ナゲ	○	○	○		78067 1E.0	(複製)
	120	深鉢	K-20	V a-V a	口縁部				沈線	刺突・ナゲ	○	○	○	○	85513 1E.0	(複製)
39	121	深鉢	K-P-9-22	IV a-V a	胴部				四角文	ナゲ	○	○	○		109945 1E.0	内面スス付着
	122	深鉢	J-1-19-20	V a	胴部				四角文	ナゲ	○	○	○		79279 1E.0	(複製)
	123	深鉢	F-P-21-23	IV a-V a	胴部				四角文	ナゲ	○	○	○		109085 1E.0	(複製)
	124	深鉢	E-1-6-22	IV a-V a	胴部				四角文	ナゲ	○	○	○		80921 1E.0	(複製)
	125	深鉢	E-1-6-24	IV a-V a	胴部				四角文	ナゲ	○	○	○		81667 1E.0	(複製)
	126	深鉢	B-1-19-21	IV a-V a	胴部				四角文	ナゲ	○	○	○		35271 1E.0	(複製)
	127	深鉢	F-22-23	IV a-V a	胴部				四角文	ナゲ	○	○	○		116723 1E.0	(複製)
	128	深鉢	E-1-18-20	IV a-V a	胴部				四角文	ナゲ	○	○	○		74152 1E.0	穿孔あり
	129	深鉢	K-1-20	IV a-V a	胴部				四角文	指摺直線・ナゲ	○	○	○		73900 1E.0	(複製)
40	130	深鉢	E-1-19-21	IV a-V a	胴部				刺突・四角文	ナゲ	○	○	○		77367 1E.0	(複製)
	131	深鉢	B-1-19-20	IV a-V a	胴部				四角文	ナゲ	○	○	○		35083 1E.0	(複製)
	132	鉢	P-25	IV a-V a	胴部				四角文	指摺直線・ナゲ	○	○	○		65373 1E.0	(複製)
	133	深鉢	J-19-20	IV a-V a	胴部				四角文	ナゲ	○	○	○	○	73735 1E.0	(複製)
	134	深鉢	I-1-18	IV a-V a	胴部				四角文	ナゲ	○	○	○		25049 1E.0	(複製)
	135	深鉢	P-22	IV b	胴部				四角文	ナゲ	○	○	○		116342 1E.0	(複製)
	136	深鉢	P-23	V a	胴部				四角文	ナゲ	○	○	○		114198 1E.0	末貫通の穿孔
	137	深鉢	K-19-20	V a	胴部				四角文	ナゲ	○	○	○		79115 1E.0	(複製)
41	138	深鉢	F-1-19-20	IV a-V a	胴部				刺突・四角文	ナゲ	○	○	○		81195 1E.0	(複製)
	139	深鉢	E-1-19-20	IV a-V a	胴部				四角文	ナゲ	○	○	○		77375 1E.0	(複製)
	140	深鉢	K-1-19	IV a-V a	胴部				四角文	ナゲ	○	○	○		76679 1E.0	(複製)
	141	深鉢	B-1-6-20	IV a-V a	胴部				四角文	ナゲ	○	○	○		112567 1E.0	(複製)
	142	深鉢	G-18-21	IV a-V a	胴部				四角文	ナゲ	○	○	○		29259 1E.0	(複製)
	143	深鉢	F-22	V a	胴部				四角文	ナゲ	○	○	○		111929 1E.0	(複製)
	144	深鉢	P-23	V a	胴部				四角文	ナゲ	○	○	○		117909	(複製)
	145	深鉢	I-19-20	IV a-V a	胴部				四角文	ナゲ	○	○	○		36811 1E.0	(複製)
	146	深鉢	F-24	IV b	底部				四角文	条痕・ナゲ	○	○	○		85433	(複製)
	147	深鉢	C-10-25	IV a-V a	胴部				四角文	ナゲ	○	○	○		65398 1E.0	(複製)
	148	深鉢	G-10-22	IV a-V a	胴部				新野文	ナゲ	○	○	○	○	29268 1E.0	(複製)
42	149	深鉢	K-19-20	IV a-V a	胴部				沈線	ナゲ	○	○	○		79884 1E.0	(複製)
	150	深鉢	C-10-25	IV b	胴部				沈線	ナゲ	○	○	○		69112 1E.0	(複製)
	151	深鉢	K-20	IV a-V a	胴部				羽状文	ナゲ	○	○	○		72915 1E.0	(複製)

第10表 縄文時代前・中期1類土器観察表3

備考欄：()は口唇部施文

帰国 番号	掲載 番号	器種	出土区	層位	部位	法線 (cm)			土文様・調整		胎土				取上番号	備考
						口径	底径	器高	外面	内面	白色 粒子	黒色 粒子	灰 質	稜 石		
42	152	深鉢	F-12	IV b	胴~底部				沈線	ナゲ	○	○			115331 注カ	
	153	深鉢	D-25	V a	胴部				沈線	短線・ナゲ	○	○			67294 注カ	
	154	深鉢	F-120~2	IV b	胴~底部				沈線	ナゲ	○	○			77215 注カ	
	155	深鉢	F-23	IV b	胴部				折帯文	ナゲ	○	○			8469	
	156	深鉢	K-20	IV b	胴部				沈線	ナゲ	○	○			シノ250 一括	
	157	深鉢	E-18-19	IV a	胴~底部				沈線	ナゲ	○	○			72714 注カ	
	158	深鉢	D-23/24	V a	V 4	胴部			削突・沈線	ナゲ	○	○			114202 注カ	口縁下部
	159	深鉢	D-24	V b	胴部				削突・沈線	ナゲ	○	○			114374 注カ	口縁下部
	160	深鉢	J-20	-	胴部				沈線	ナゲ	○	○				表・括
	161	深鉢	D-23	V a	V 4	胴部			沈線	ナゲ	○	○			114219 注カ	
43	162	深鉢	D-23	V a	V 4	胴部			沈線	沈線・ナゲ	○	○	○		114325 注カ	
	163	深鉢	E-120~2	V b	V 4	胴部			沈線	ナゲ	○	○	○		79006 注カ	
	164	深鉢	G-18-22	V b	V 4	胴部			沈線	ナゲ	○	○			86661 注カ	
	165	深鉢	F-120~2	V a	胴部				沈線	ナゲ	○	○			114224 注カ	
	166	深鉢	J-40-20	IV a	胴~底部				沈線	ナゲ	○	○			72866 注カ	
	167	深鉢	F-6-18-19	V b	V 4	底部			沈線	ナゲ	○	○			121100 注カ	
	168	深鉢	D-25	IV b	底部				クモの巣状	ナゲ	○	○			69088	
	169	深鉢	F-22	V a	底部				クモの巣状	ナゲ	○	○			112186	
	170	深鉢	K-20	V	底部				クモの巣状	ナゲ	○	○			82890	
	171	深鉢	E-18-20	V a	底部				クモの巣状	ナゲ	○	○			79973 注カ	
	172	深鉢	M-20	V a	底部				クモの巣状	ナゲ	○	○			71974	
	173	深鉢	D-21	V a	底部				クモの巣状	ナゲ	○	○			118056	
	174	深鉢	F-21	V b	V 4	底部			クモの巣状	ナゲ	○	○			113061 注カ	
	175	深鉢	F-23	IV a	底部				クモの巣状	ナゲ	○	○			109765	
	176	深鉢	L-19	IV b	底部				クモの巣状	ナゲ	○	○			77451 注カ	
	177	深鉢	F-22	-	底部				クモの巣状	ナゲ	○	○			-	
	178	深鉢	K-20	V a	底部				クモの巣状	ナゲ	○	○			78612	
	179	深鉢	H-20-21	IV b	底部				クモの巣状	ナゲ	○	○			116191 注カ	
	44	180	深鉢	K-19	IV b	底部				クモの巣状	ナゲ	○	○			77699
181		深鉢	L-17	V a	底部				クモの巣状	ナゲ	○	○			10061	
182		深鉢	D-22	V a	底部				クモの巣状	ナゲ	○	○			114288	
183		深鉢	G~I-20	V b	V 4	底部			クモの巣状	ナゲ	○	○			85960 注カ	
184		深鉢	D-8-22	V a	V 1	底部			沈線	ナゲ	○	○			114291 注カ	
185		深鉢	J-20	IV b	底部				沈線・短沈線	ナゲ	○	○			76628	
186		深鉢	F-6-18-19	V a	V 4	底部			沈線・短沈線	ナゲ	○	○			120336 注カ	
187		浅鉢	D-23	V a	口縁~胴部	26.0			沈線・ナゲ	ナゲ	○	○			118371 注カ	
188		深鉢	L-23	V a	口縁~底部	11.6	3.4	10.6	沈線	沈線・ナゲ	○	○			54882 注カ	小形品 (削突)
189		深鉢	H-9-8~20	V a	胴部				沈線	ナゲ	○	○			117927 注カ	小形品
190		深鉢	E-18-20	V b	V 4	胴~底部			沈線	ナゲ	○	○			24952 注カ	小形品
191		深鉢	F-11	V a	口縁~胴部	8.4			ナゲ	ナゲ	○	○			141320	小形品 (キザリ)

【底部】

底部については、底部中央を起点とした等分線があるものを底部1類、それ以外のものを底部2類とした。底部は、口縁部と比較すると固化した点数が少なくなる。

底部1類 (第43・44図 168~183)

底部中央を起点とする等分線をもつ一群で、いわゆる蜘蛛の巣状の文様を施すものである。168~179は4等分線、180は2等分線、181は6等分線、182・183は8等分線を基準として蜘蛛の巣状の文様を施している。

底部2類 (第44図 184~186)

底部中央を起点とする等分線をもたないものである。184は縦位の沈線で、185は横位の沈線で、186は縦位と横位の沈線で施文されている。

【その他】(第44図 187~191)

187は復元口径26.0cmで、胴部から口縁部へは直線的に外傾し、丸底と思われる浅鉢である。口縁部は多少波打っており、口唇部は丸く収める。文様は底部上半に横位の短沈線が数条残るが、底部全体に施されると思われる。本遺跡出土の管煙式土器の中でも底部文様帯のみに施文される特殊なものである。調整は内面、外面とも丁寧なナゲである。

188~191は小形品である。188は口縁部には横位の沈線が巡り、胴部には折帯文、底部には縦位の沈線が施される。口縁部内面にも2条の短沈線が施される。平底に近い底部で、胴部から口縁部へは直線的に立ち上がり口縁部が外反するが、全体的にいびつな器形である。復元口径11.6cm、器高は10.6cmである。189は、口縁部

部と底部を欠いている。斜位と縦位の沈線で施文し、文様帯を区画する横位の沈線がある。口縁端部は外反すると思われる。190は口縁部を欠損している。胴上部に2条の沈線間を斜位の短沈線で充填し、底部は横位の沈線で文様が構成されている。器壁の厚さも一定でなく、全体的にいびつな器形である。191は胴下部までは施文がない。底部については欠損のため不明である。直線的に立ち上がった口縁部は端部のみが外反する。

上記のとおり分類した結果、本遺跡出土の曾加式土器の特徴は次のとおりまとめた。

(文様等)

- ・口縁部（第一文様帯）に刺突を施すものは僅かで、横位の沈線文を施すものが多い。
- ・文様帯を刺突文等で区画する土器は少ない。
- ・全面施文と思われる土器から5つの文様帯をもつ土器がある。
- ・文様に三角文もしくは三角文から派生した四角文を施す土器が多く、次に折帯文を施す土器が多い。
- ・規格性のある施文、粗雑な施文の両方が見られる。
- ・底部文様については、等分線を施すものが多い。
- ・沈線は全体的に浅い傾向にある。

(器形)

- ・口縁部は外反するか、開くものがほとんど明確に内弯するものはない。
- ・胴部は幾分張るか、直線的に立ち上がるものが多い。
- ・平口縁が多いが、波状口縁もいくつか見られる。

(器種)

- ・深鉢がほとんどであるが浅鉢が1点あり、深鉢の小形品も数点出土している。

(調整)

- ・工具ナデによるものが多く、条痕が残ったものは少ない。

(胎土)

- ・滑石を含むものはない

(2) II類土器

II類土器は縄文時代前期末から中期前葉に位置づけられる深浦式土器に該当する。この土器は調査区の北東側を中心にIV・V層から出土し、その状況については第45・46図に示した。なお、本類土器の深浦式土器とIV類土器の糸痕文土器の出土状況は同じ傾向にある。

ここでは、「総覧 縄文土器」に掲載されている深浦式土器の編年を参考にしながら、主にII類土器の文様に着目して、次のように分類を行った。

1類 連点文(1)

貝殻をロッキングしながら貝殻腹縁により器面

に連点文を施すもの。

ロッキングすることにより相交弧文に見えるものこの類に含めた。

2類 連点文(2)

貝殻を押し引いて施文するもので、ロッキングを行わないか、ロッキングが確認できないもの。

3類 相交弧文

ロッキングしながら貝殻腹縁で刺突もしくは押圧するもの。

4類 突帯と連点文で文様を構成するもの。

5類 貝殻刺突文で文様を構成するもの。

6類 無文のもの。

以下、分類に従い説明を行う。

II-1類 (第47～52図 192～223)

192～205は口縁部もしくは口縁部を含むもので、206～223は胴部を含むものである。いずれも連点文を施すものの中でも貝殻腹縁でロッキングにより施文する一群である。

器形は口縁端部で若干外反するものもあるが、直線的に開くものが多い。胴部の張りは少なく丸底の底部に至る。口唇部を面取りしているものがあるが、ほとんどは丸く収める。1類の口縁部は14点図化した。その中の8点が波状口縁か突起をもつ。また、14点中9点の口唇部には刺突が施される。

文様は縦位、横位、斜位の連点文で構成され、1類の半数以上が口縁部内面にも連点文が施される。外面は丁寧な器面調整を行った後に施文するものと、条痕調整痕を残したまま施文するものがある。内面調整に関しては条痕による器面調整後にナデもしくは部分的なナデが行われるものが多い。

192はかなり大形で、復元口径36.0cm、復元器高40.4cmを測る。深浦式土器で最大のものは一漆松山遺跡で出土した深鉢形土器であるが、本土器はそれより若干小さい。胴部と底部は接合していないが、器形や文様、胎土等から同一個体と判断して復元した。器形は、胴部から口縁部にかけて直線的に開き、口縁部はやや外反する。波状口縁の口唇部による刺突が浅く施される。胴部に張りはなく、底部は尖底気味の丸底となる。板状の粘土を積み上げて成形するために粘土の継ぎ目付近で器壁は薄くなる。文様は縦位、横位、斜位の直線的な連点文を幅広く施すために文様構成がわかりづらい。横位と縦位の連点文で四角形の区画を作り、その一対の対角線上に連点文を施すものである。口縁部内面にも横位の連点文が巡る。表面はナデ、内面は条痕で調整した後部分的なナデを行っている。193は復元口径12.4cm、器高18.3cmを測る。山形突起をもち、口縁部は直線的にやや

開く。胴部は若干の張りをもちながら丸底の底部に至る。横位の連点文が口縁部と胴部に巡り、縦位の連点文が口縁部から底部まで下る。195は復元口径22.6 cm、胴下部が少し膨らみ、口縁部は直線的に開く。口縁部にはリボン状の突起があり、4か所を想定する。内面は条痕調整後に一部ナゲが行われ、連点文も横位に施される。196の突起は楕円状で中が窪んでいる。口縁部は直線的に開き、胴上部で幾分かびれ、胴下部で少し膨らむ器形である。内面はナゲ調整ではあるが、部分的に条痕が観察される。復元口径は20.3 cmである。195、196とも口唇部には貝殻刺突が施される。194、197～199、203は直線的に開く口縁部に横位、斜位の連点文が施されている。200は波状口縁となり、波頂部が内湾する。197の復元口径は、21.8 cmである。201、202は口唇部が平坦に仕上げられ、幅の狭い連点文が施され、同一個体と思われる。204は胴部から口縁部へ直線的に開き、波状口縁となる。縦位と斜位の連点文が残る、内面には文様はない。調整は、内外面とも条痕後一部ナゲ調整が行われている。205は胴部から口縁部にかけてかすかに外反し、口縁部にはリボン状の突起をもつ。連点文が横位、縦位、斜位に施され、口縁部内面にも連点文が施文される。

206～223は胴部で、18点を図化した。器形は胴部から口縁部にかけて直線的に開くものが多い。胴部から底部にかけては直線的にすぼまるものと湾曲しながら底部に至るものがある。文様構成の全体像が分かるものは少ないが、横位、縦位、斜位の連点文をほぼ直線的に施すものが多い。表面の調整は条痕調整の後にナゲを行っているが、条痕のみの調整後施文するものもある。内面調整に関しては、条痕での器面調整後部分的にナゲを行っているものが多いが、条痕の残らないナゲのみのものもある。209、220～222の文様は連点文にも相交弧文にも見えるが、連点文の要素が強いことから本類に分類した。貝殻腹縁の湾いやロッキング手法の違いによるものと思われる。210は胴部全面に亘ってまばらに施文するが、文様構成が不明瞭である。213の胴部中央に横位の連点文があるが、左端付近で連点文のパターンが変わっていることから施文工具を換えたことが考えられる。215と216は横位の連点文を巡らすか、同一個体と思われる。218は胴部から底部にかけて残存しているが、胴下部から底部には施文されていない。

II-2類 (第53～55図 224～234)

連点文を施すが、押し引き風な施文をするものである。ロッキングを行わないか、ロッキングが確認できないものは本類に分類した。224～231は口縁部もしくは口唇部を含むものである。

口縁部は外傾か外反し、胴部は直立するものが多い。図化した口縁部のうち半数は波状口縁が突起をもつ。また、そのほとんどが口唇部に刻みか刺突をもつ。文様は

縦位、横位、斜位の直線的な連点文で構成されているが、中には曲線的な連点文もある。

224～231は口縁部である。224は直線的に開く器形で山形突起をもつと思われ、口唇部には刻みが入る。文様は横位、縦位、斜位の連点文で構成する。口縁部内面にも連点文が施される。内外面とも器面調整の条痕を明確に残す。225は口唇部に豆粒状の粘土を3つ貼り付けていることと口唇部に刻みがない点以外は、器面調整および文様構成は224と同じである。224の復元口径は44.0 cm、225の復元口径は43.6 cmといずれもかなり大きい。226の文様構成も225と同じと思われ、内外面とも調整の条痕が明確に残る。227、228とも内外面に連点文が施される。227の内面調整はナゲ、228は条痕がしっかり残る。229は直立する胴部と外傾する口縁部で波状口縁となる器形である。口唇部には爪形の刺突が施される。230は229と同じ器形であるが、多少波打ったような平口縁となる。

232～234は胴部である。232は張りの少ない胴部に口縁部が開く器形である。文様は間隔の空いた連点文が施される。外面には条痕が残るが、内面の口縁部付近は条痕後のナゲ調整が行われる。233は胴部から口縁部にかけての部位であるが、229と同一個体と思われる。234は張りの少ない胴部であるが、細かい連点文が施される。内面には条痕が明瞭に残る。

II-3類 (第55・56図 235～241)

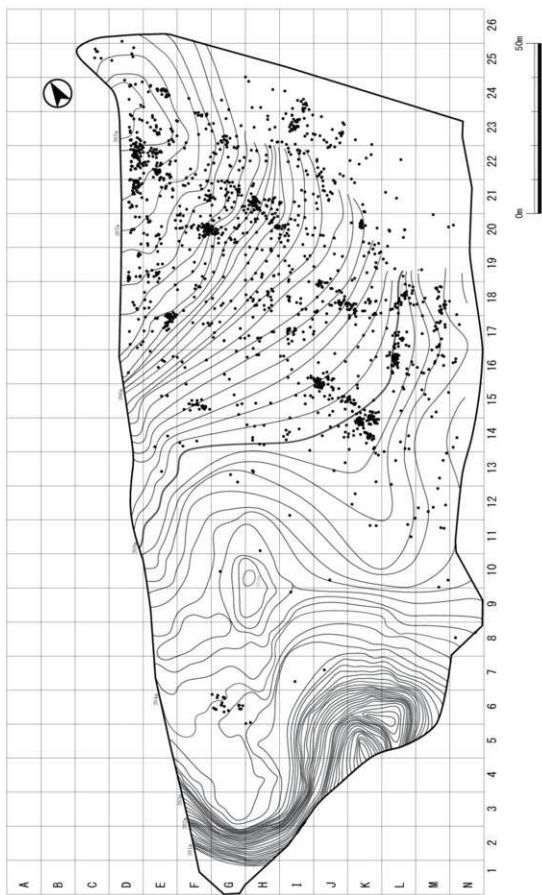
相交弧文を施すものである。ロッキングを行って施文するが、連点文と異なり、明らかに文様の両端が鋸歯状なるものを本類に分類した。235～237は口縁部で、238～241は胴部である。

235は直立する口縁部で、その端部が若干外反する。口縁部に沿って相交弧文、その直下に曲線的な相交弧文が施される。内面にも口縁部に沿い、相交弧文が残る。口唇部には貝殻刺突が入る。236と237は若干外に開く口縁部で、内外面とも相交弧文が施される。236の口唇部には貝殻刺突が残る。238は胴部片であるが、内外面とも丁寧なナゲ調整が行われている。胴中央部に相交弧文が2段に亘って施されている。239～241はいずれも胴部片で横位の相交弧文が施されている。

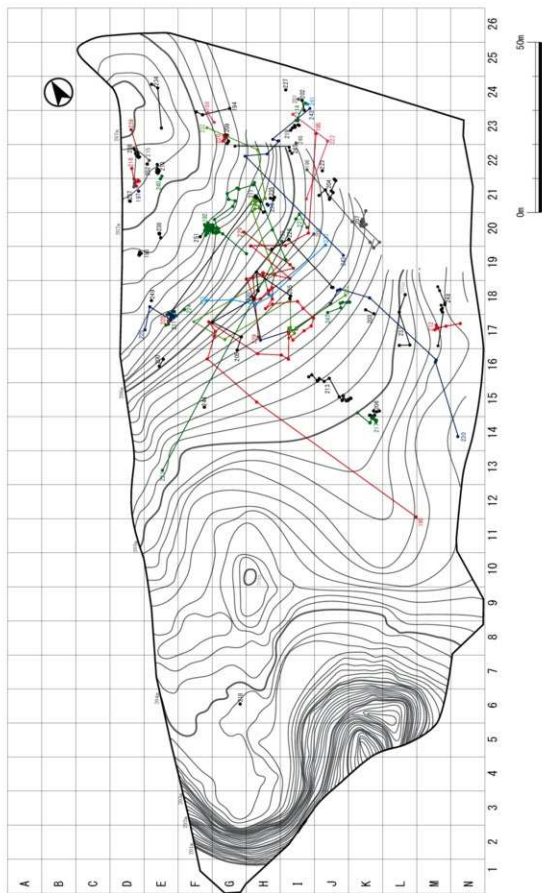
II-4類 (第56図 242～246)

突帯と連点文で文様を構成する一群である。

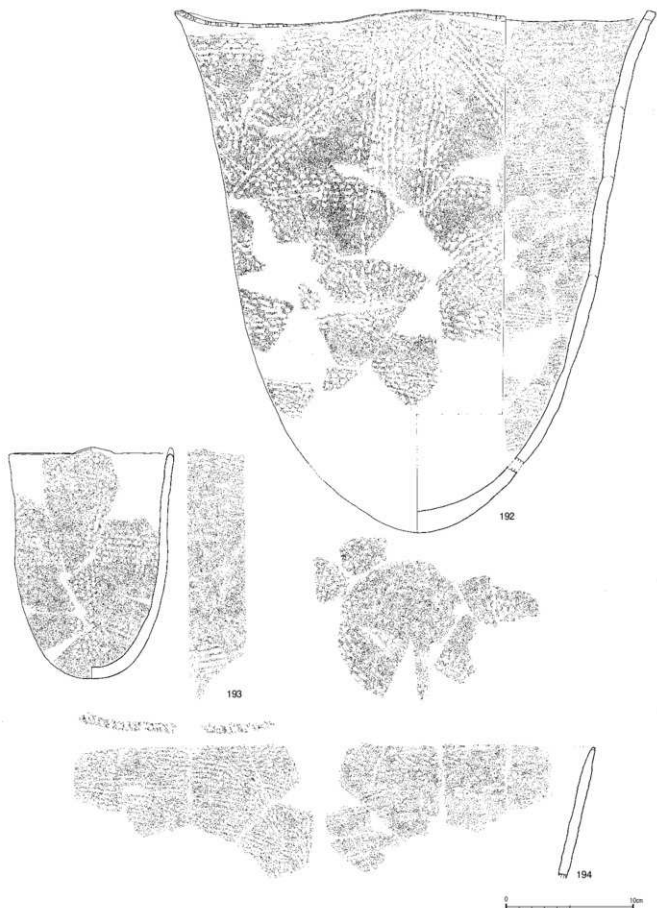
242は口径13.4 cm、器高は19.0 cm程度となる。内傾気味に立ち上がった胴部は頸部から口縁部にかけて外傾する。平口縁で丸底と思われる。口縁部には頸部まで6本の細い突帯を垂下させ、横位に巡る5本の細い突帯を挟んで頸部から胴部まで2本の細い突帯が下る。突帯以外の器面には連点文が施される。243と245は胴部片であるが、器面の一部に垂下する細い突帯と連点文で文様が構成され、内面はいずれもナゲで器面調整が行われて



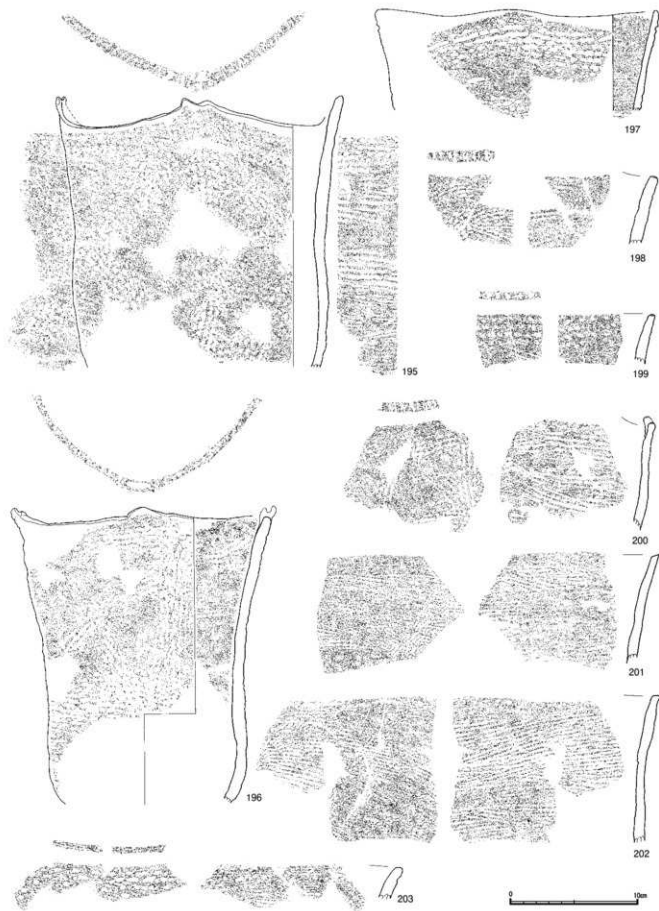
第 45 图 新石器时代前·中阶 II 期土器全出土分布图



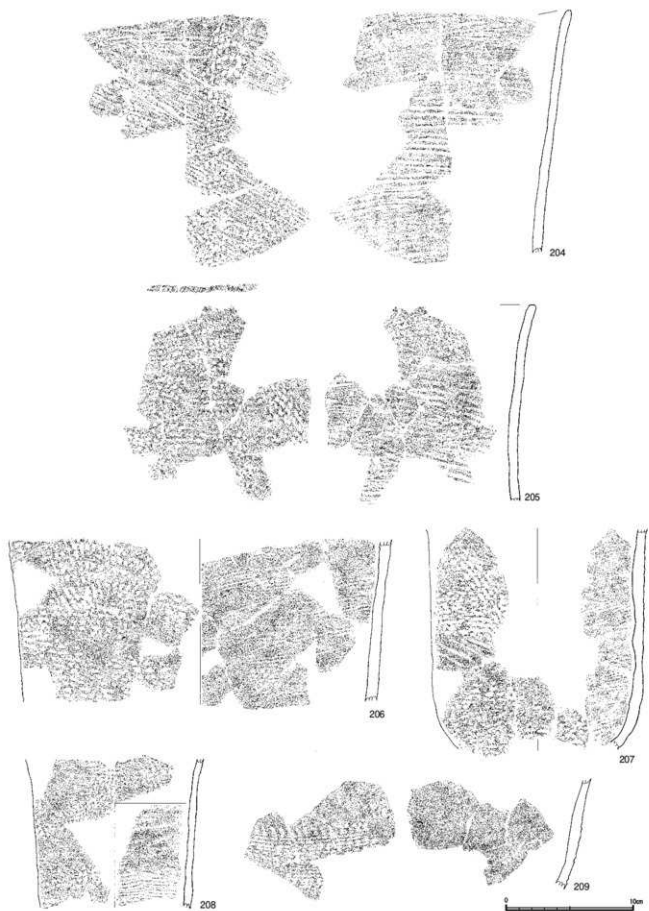
第 46 圖 縄文時代前・中期Ⅱ-3 類土器出土分布図 (掲載分)



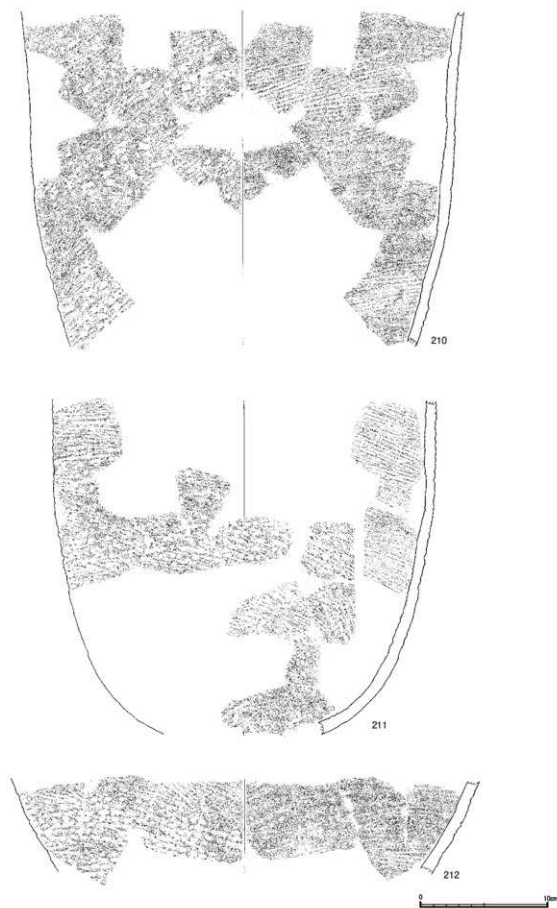
第 47 図 縄文時代前・中期Ⅱ - 1 類土器 1



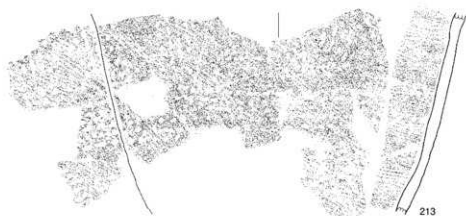
第48図 縄文時代前・中期Ⅱ-1類土器2



第 49 図 縄文時代前・中期Ⅱ - 1 類土器 3



第50図 縄文時代前・中期Ⅱ-1類土器4



213



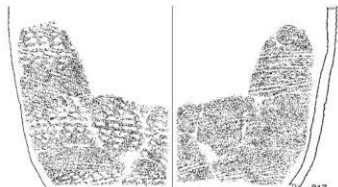
214



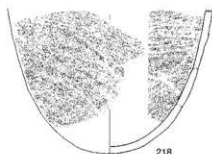
215



216



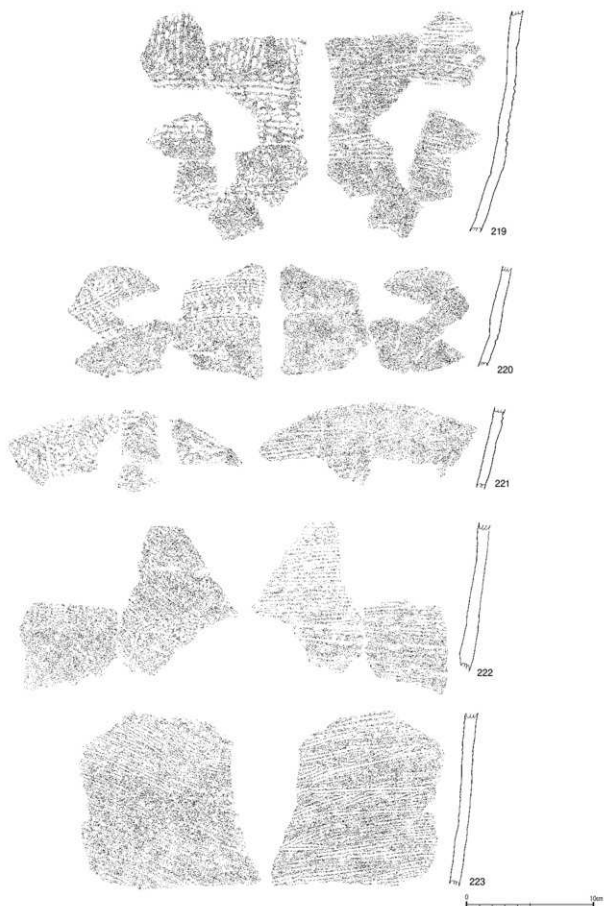
217



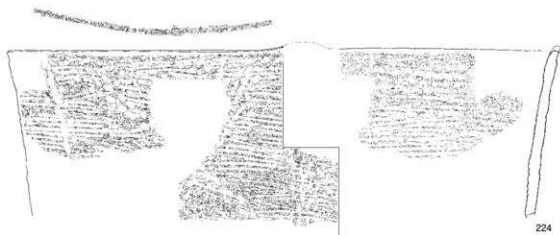
218



第51図 縄文時代前・中期Ⅱ-1類土器5



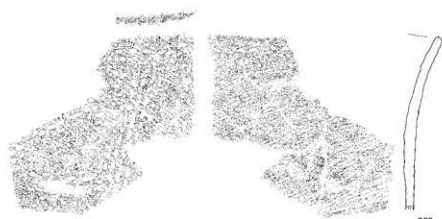
第52図 縄文時代前・中期Ⅱ-1類土器6



224



225



226



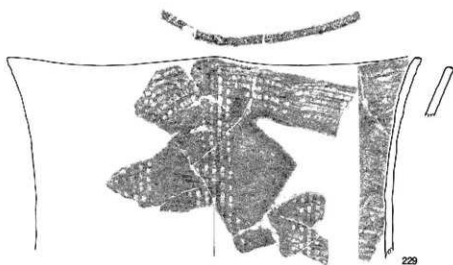
227



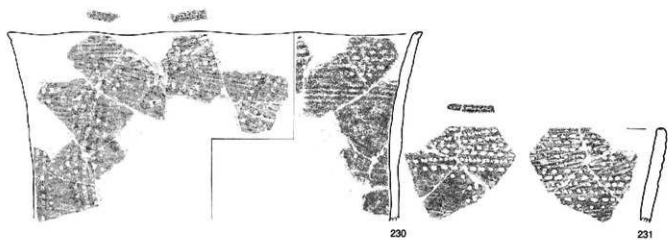
228



第53図 縄文時代前・中期Ⅱ-2類土器1



229



230

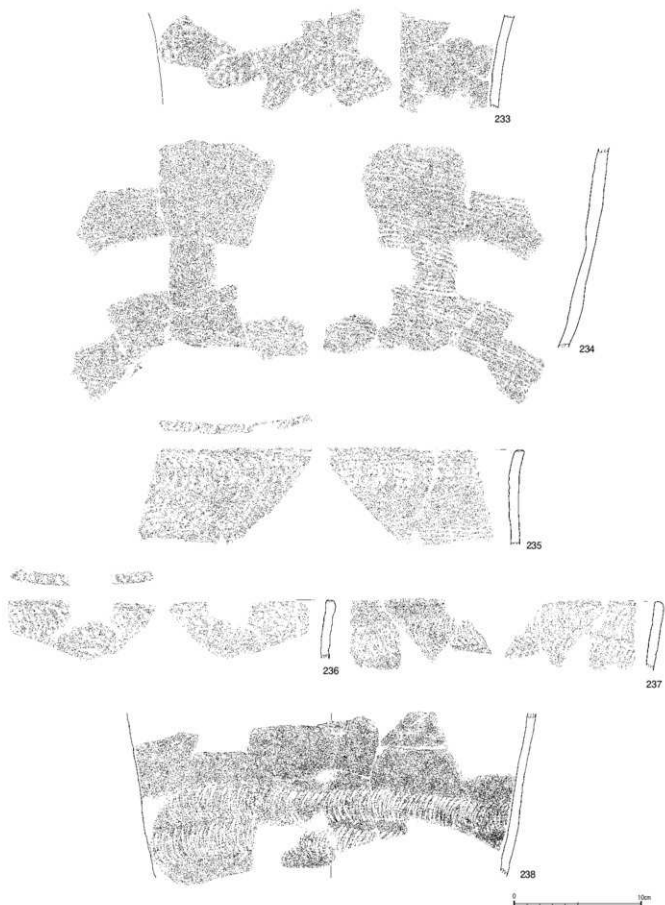
231



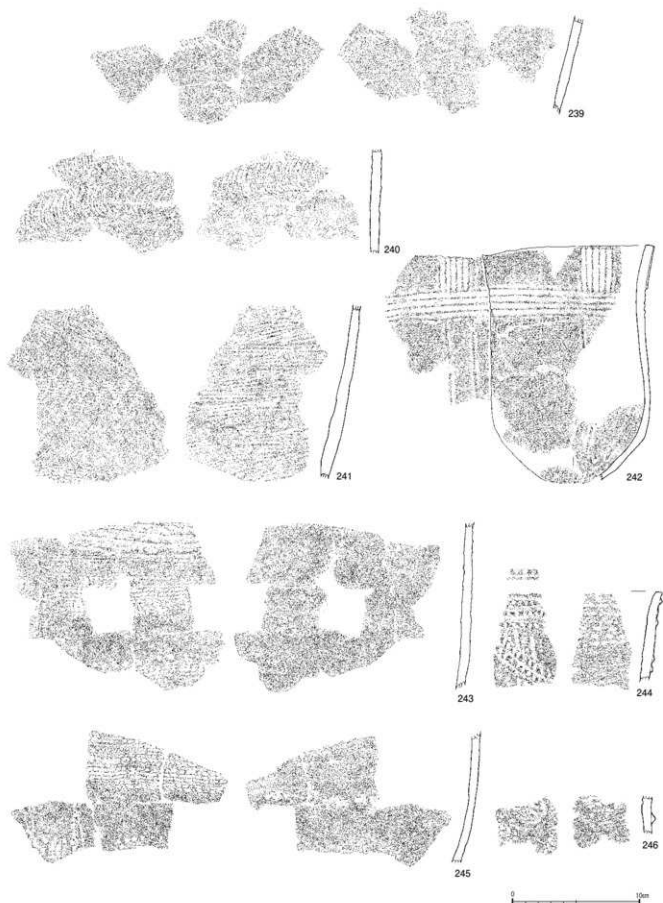
232

0 10cm

第54図 縄文時代前・中期Ⅱ-2類土器2



第55図 縄文時代前・中期Ⅱ-2類土器3・Ⅱ-3類土器1



第56図 縄文時代前・中期Ⅱ-3類土器2・Ⅱ-4類土器

いる。2点は同一個体の可能性もある。244は直線的に開く口縁部で口縁に沿って巡る2本の突帯と斜めに伸びる2本の突帯上には刻みが入る。内面には連点文が施される。246は曲線的な突帯と連点文で文様が構成され、内面にも連点文が見える。

II-5類 (第57図 247~249)

貝殻刺突文が文様構成の一要素として施されるものであるが、確認されたのは3点のみである。247は直線的に立ち上がる口縁部で、口唇部には刻みが施される。押し引き風の連点文に沿うように貝殻刺突文が施されている。内面にも連点文が施される。248は直線的に開く口縁部は波状を呈し、口唇部には貝殻による刺突が施される。文様は連点文、相交弧文風の連点文、貝殻刺突文で構成される。内面にも連点文が施される。249はボール状の浅鉢で横位、縦位の連点文と山形に施された貝殻刺突文で文様が構成される。復元口径は248で23.5cm、249で14.5cmを測る。

II-6類 (第57図 250~252)

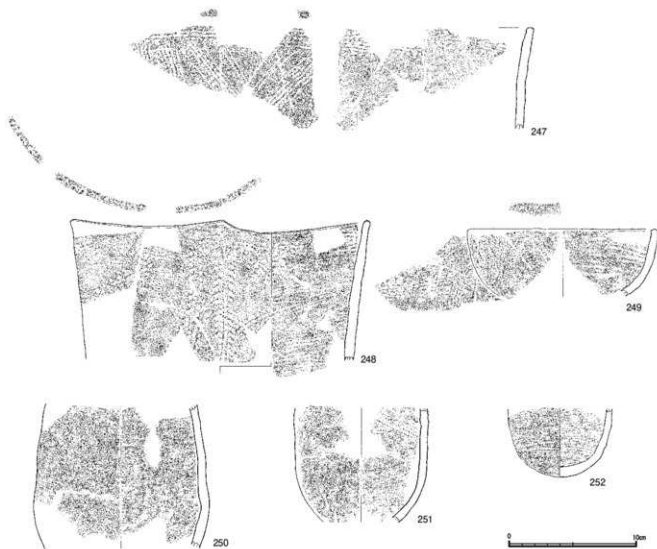
無文のものである。ただし、口縁部が欠損していることから文様が口縁部に施文される可能性もある。

250は内傾しながら立ち上がる胴部である。内外面ともナデで器面調整を行っている。251は胴部の直立する器形で、外面はナデ、内面は条痕調整後に一部ナデが行われている。252は丸底の小形品である。内外面とも条痕で器面調整を行った後、ナデ調整が行われている。

以上のような分類から、本遺跡出土のII類土器の特徴を次のようにまとめることができる。

(器形)

- ・口縁部は直線的に立ち上がり、外傾もしくは外反するものが多い。
- ・口縁部形態は平口縁、波状口縁や突起のつくものがある。
- ・底部は丸底である。



第57図 縄文時代前・中期II-5類土器

第11表 縄文時代前・中期Ⅱ類土器観察表

備考欄：() は口唇部施文

标本番号	器種	出土区	層位	部位	法量 (cm)		土文様・調整		胎土		取上番号	備考	
					口径	底径	外面	内面	黒色 粒子	角閃 石			
47	192 深鉢	F-119-2	IV-V	完形	30.0	-	縦.4	連点文	連点文・条線後ナツ	○	○	37205 1E.0	(貝殻刺突)
	193 深鉢	F-19	B3-Va	口縁～底部	12.4	-	縦.3	連点文	連点文・条線後ナツ	○	○	102258 1E.0	
	194 深鉢	F-6-23-24	IV a	口縁部	-	-	-	連点文	連点文・条線後ナツ	○	○	75320 1E.0	(貝殻刺突)
48	195 深鉢	F-115-21	IV-V	口縁～胴部	22.6	-	-	連点文	連点文・条線後ナツ	○	○	5692 1E.0	(貝殻刺突) リボン状突起
	196 深鉢	F-119-22	IV-V	口縁～底部	20.3	-	-	連点文	連点文・条線後ナツ	○	○	73483 1E.0	(貝殻刺突) 突起
	197 深鉢	B-21-22	V a	口縁部	21.9	-	-	連点文	条線後ナツ	○	○	117554 1E.0	波状口縁
49	198 深鉢	F-6-23	IV b	口縁部	-	-	-	連点文	条線後一部ナツ	○	○	80937 1E.0	(貝殻刺突) 波状口縁
	199 深鉢	F-20	IV a	口縁部	-	-	-	連点文	連点文・ナツ	○	○	35696 1E.0	(貝殻刺突)
	200 深鉢	F-16	IV-V	口縁部	-	-	-	連点文	条線	○	○	6227 1E.0	(貝殻刺突)
	201 深鉢	F-24	IV	口縁部	-	-	-	連点文	条線後一部ナツ	○	○	49549	
	202 深鉢	F-23-24	IV-V	口縁部	-	-	-	連点文	条線後一部ナツ	○	○	49566 1E.0	
50	203 深鉢	K-18	B3-Vc	胴部	-	-	-	連点文	連点文・条線後ナツ	○	○	25263 1E.0	(爪形の刺突)
	204 深鉢	J-21	IV b	口縁～胴部	-	-	-	連点文	条線後一部ナツ	○	○	73532 1E.0	波状口縁
	205 深鉢	G-116-9-10	B3-Vc	口縁～胴部	-	-	-	連点文	連点文・条線後ナツ	○	○	5777 1E.0	(刺突) リボン状突起
	206 深鉢	K-14-15	B3-Vc	胴部	-	-	-	連点文	条線後一部ナツ	○	○	13801 1E.0	
	207 深鉢	J-K-20	B3-Vc	胴～底径	-	-	-	連点文	条線後ナツ	○	○	76858 1E.0	
51	208 深鉢	K-118-20	B3-V	胴部	-	-	-	連点文	条線後一部ナツ	○	○	34925 1E.0	
	209 深鉢	G-25	B3-Vb	胴部	-	-	-	連点文	条線後ナツ	○	○	82155 1E.0	
	210 深鉢	F-7-21-22	B3-Vc	胴部	-	-	-	連点文	条線後一部ナツ	○	○	101784 1E.0	
	211 深鉢	F-8-7-21	B3-Vc	胴～底径	-	-	-	連点文	条線	○	○	111586 1E.0	
	212 深鉢	M-N-17	B3-Va	胴部	-	-	-	連点文	条線後一部ナツ	○	○	48827 1E.0	
52	213 深鉢	F-8-119-16	IV a	胴部	-	-	-	連点文	条線後一部ナツ	○	○	17670 1E.0	
	214 深鉢	F-7-22-24	B3-V a	胴部	-	-	-	連点文	条線後一部ナツ	○	○	49623 1E.0	
	215 深鉢	B-7-21-22	B3-Vc	胴部	-	-	-	連点文	条線後一部ナツ	○	○	111175 1E.0	
	216 深鉢	B-21-22	B3-Va	胴部	-	-	-	連点文	条線後一部ナツ	○	○	116290 1E.0	
	217 深鉢	K-14-15	B3-Va	胴部	-	-	-	連点文	条線後一部ナツ	○	○	11991 1E.0	
53	218 深鉢	G-6	V a	胴～底径	-	-	-	連点文	条線後ナツ	○	○	142424	
	219 深鉢	F-7-23-24	Vc-Vc	胴部	-	-	-	連点文	条線後一部ナツ	○	○	54778 1E.0	
	220 深鉢	G-25	B3-Vc	胴部	-	-	-	連点文	ナツ	○	○	82116 1E.0	
	221 深鉢	F-115-20	IV b	胴部	-	-	-	連点文	条線後一部ナツ	○	○	78935 1E.0	
	222 深鉢	F-7-21-22	B3-Va	胴部	-	-	-	連点文	条線後一部ナツ	○	○	53858 1E.0	
54	223 深鉢	J-22	IV b	胴部	-	-	-	連点文	条線	○	○	73515	
	224 深鉢	B-7-17-18	B3-Vc	口縁部	44.0	-	-	連点文	連点文・条線	○	○	113765 1E.0	(キザミ) 波状口縁
	225 深鉢	E-17-19	B3-Vc	口縁～胴部	43.6	-	-	連点文	連点文・条線	○	○	109061 1E.0	丘状突起
	226 深鉢	B-7-11-20	IV-V	口縁部	-	-	-	連点文	連点文・条線	○	○	25114 1E.0	(爪形の刺突)
	227 深鉢	F-24	IV	口縁部	-	-	-	連点文	連点文・ナツ	○	○	92465	波状口縁
55	228 深鉢	E-17-18	V a	口縁部	-	-	-	連点文	連点文・条線	○	○	117129 1E.0	(キザミ) 波状口縁
	229 深鉢	G-117-20	V	口縁部	32.0	-	-	連点文	連点文・条線後ナツ	○	○	33349 1E.0	(爪形の刺突) 波状口縁
	230 深鉢	B-8-V11-18	B3-Vc	口縁部	32.3	-	-	連点文	連点文・条線後ナツ	○	○	24952 1E.0	
	231 深鉢	L-17-18	B3-Vc	口縁部	-	-	-	連点文	連点文・条線後ナツ	○	○	46943 1E.0	(刺突) リボン状突起
	232 深鉢	F-7-17-21	B3-Vc	胴部	-	-	-	連点文	条線後ナツ	○	○	24945 1E.0	
56	233 深鉢	F-7-19-20	B3-Va	口縁部	-	-	-	連点文	条線後ナツ	○	○	25460 1E.0	
	234 深鉢	E-23-24	B3-Va	胴部	-	-	-	連点文	条線	○	○	85448 1E.0	
	235 深鉢	B-21	B3-Vc	胴部	-	-	-	相交張文	相交張文・条線後ナツ	○	○	84882 1E.0	(貝殻刺突)
	236 深鉢	B-1-21-22	IV b	口縁部	-	-	-	相交張文	相交張文・条線後ナツ	○	○	121044 1E.0	
	237 深鉢	B-7-8-21	V a	口縁部	-	-	-	相交張文	相交張文	○	○	118057 1E.0	内面二段施文
57	238 深鉢	B-7-21-22	B3-Vb	胴部	-	-	-	相交張文	ナツ	○	○	114297 1E.0	
	239 深鉢	B-22-23	Vc-Vc	胴部	-	-	-	相交張文	相交張文・ナツ	○	○	114294 1E.0	
	240 深鉢	B-20-22	IV b	胴部	-	-	-	相交張文	相交張文・ナツ	○	○	111734 1E.0	
	241 深鉢	F-24	IV	口縁部	-	-	-	相交張文	条線	○	○	40626	
	242 深鉢	F-20	V a	口縁～底径	13.4	-	縦.0	連点文・交番文	ナツ	○	○	114477 1E.0	波状口縁
58	243 深鉢	G-119-21	B3-Vc	胴部	-	-	-	連点文・交番文	ナツ	○	○	49677 1E.0	
	244 深鉢	F-15	IV b	口縁部	-	-	-	連点文・交番文	連点文・条線後ナツ	○	○	5336	突帯にキザミ
	245 深鉢	G-1-22	IV b	胴部	-	-	-	連点文・交番文	ナツ	○	○	80985 1E.0	
	246 深鉢	F-25	IV a	胴部	-	-	-	連点文・交番文	ナツ	○	○	80352	
	247 深鉢	J-K-18	B3-Vc	口縁部	-	-	-	連点文	連点文・ナツ	○	○	25186 1E.0	(キザミ)
59	248 深鉢	M-17-18	B3-Vc	口縁部	23.6	-	-	連点文	連点文・条線後ナツ	○	○	48857 1E.0	(貝殻刺突)
	249 深鉢	F-18	V a	口縁～胴部	14.5	-	-	連点文・山形突起	条線後一部ナツ	○	○	115459 1E.0	(貝殻刺突)
	250 鉢	-	-	胴部	-	-	-	無文・ナツ	ナツ	○	-		
	251 鉢	F-20	IV b	胴部	-	-	-	無文・ナツ	条線後一部ナツ	○	○	116229 1E.0	
	252 鉢	F-22	V a	底径	-	-	-	無文・条線後ナツ	条線後ナツ	○	○	111930 1E.0	

(文様)

- ・主文様要素として貝殻連点文、突帯文、相交弧文がある。
- ・貝殻連点文を主文様要素とし、直線的なモチーフで文様を構成するものが多い。
- ・貝殻連点文は貝殻腹縁で器面を削り取る手法と押し引いて施文する手法がある。また、器面を削り取る手法でも連点がまばらなものもある。
- ・貝殻連点文と相交弧文はいずれも基本的に貝殻腹縁をロッキングしながら施文する手法であるため、いずれか判断できないものがある。
- ・器面全体に施文される傾向にある。
- ・口唇部には貝殻刺突、爪形の刺突やキザミを施すものがある。
- ・口縁部内面にも貝殻連点文、相交弧文を施すものがある。

(調整)

- ・内面は条痕調整を行った後、ナデ調整を行うものが多いが、ほとんどに条痕を残す。
- ・外面はナデ調整を行うが、条痕を残すもの、残さないものがある。

(3) III類土器 (第59図 253～258)

III類土器は、縄文時代中期に位置づけられる春日式土器に該当する。図化したのは口縁部片4点、胴部片2点の計6点である。253～256は春日式土器特有のキザリパー形の口縁部であるが、総じて内湾の度合いが弱い。口縁部は急激に内側に折れるが、その屈曲部から頸部までが長く、幾分間延びた器形である。口唇部は器壁が厚く、平坦面をもち、貝殻による刺突が施される。口縁部の屈曲部の上下に沈線を巡らせ、その沈線の下方から上方に向けて刺突を密に施す。また、内外面とも横位や斜位の条痕で器面調整を行っているが、口縁部外表面はナデによる調整である。復元口径は253が27.6cm、254が26.0cmを測る。

257と258は胴部片である。257は幾分胴部が張る器形で内外面とも横位の条痕での器面調整である。258は胴下部で器壁が厚くなる。突帯を曲線的に貼り付け、突帯にはキザミが入る。

(4) IV類土器

IV類土器は条痕文土器と呼称されている土器である。器面調整の条痕を内外面に残すものを条痕文土器とした。条痕文土器は主に調査区の北西側半分のIV・V層から出土した。深浦式土器の出土状況と概ね重なる傾向にある。出土状況については第60図に示した。

本遺跡出土の条痕文土器の口縁部は器形と文様で次のように分類し、胴部・底部は一括で記載した。

(器形)

- 1類 口縁部が直線的に開くもの
- 2類 口縁部が湾曲し頸部を形成するもの
- 3類 1類・2類に分類しなかったもの

(文様)

- a類 条痕が文様化しているもの
- b類 荒い条痕のもの
- c類 a類・b類以外の条痕が施されるもの
- d類 突帯のつくもの

IV-1類

全体的に口縁部が直線的に開くものを1類としたが、直立するもの、口縁部がやや外反するものも含まれた

IV-1-a類 (第61・62図 259～270)

1類のうち、条痕が文様化されているもの、もしくは、その可能性があるものもこの一群に含めた。1類の中でも図化した点数が多い。

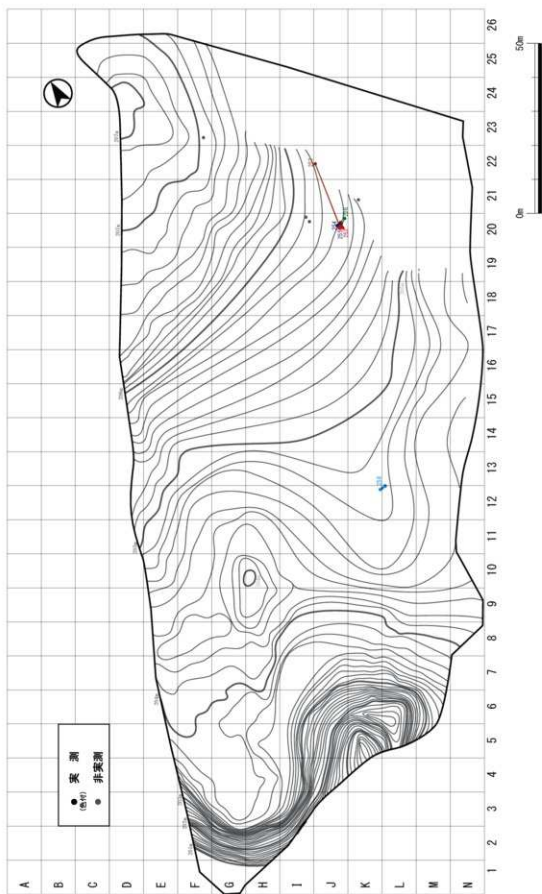
口縁部は直線的に開くものが多いが、265は外反し、270は直立する。267は他の口縁部と比べて外傾の度合いが強い。268の口縁部は直線的に立ち上がるが、口縁部下から急にすばまる器形である。269は胴部から口縁部にかけて直線的に開くが、口縁部で少し外反する。ほとんどが平口縁であるが、263が波状口縁、267が僅かに波状となる。口唇部はほとんどが丸く収め、261・266・267・270にはキザミが、259・264には貝殻刺突が施される。261のキザミは口唇部外端に入り、270のキザミは部分的に施されている。

259・264は、横位の条痕を施した後に曲線の条痕を施すものである。259は横位の条痕で器面調整を行った後に部分的にナデ消し、さらに、幅の狭い工具で上書きを施している。内面は斜位の条痕を施した後、幅の異なる工具で条痕を部分的に上書きしている。260は斜位の条痕を施した後方向の異なる斜位の条痕、縦位の条痕を施す。261はこの類の他の土器と比較して異質で、雰囲気としては縄文時代早期の土器を思わせる。器壁が厚く、口唇部外端部が高く、そこにはキザミが施される。縦位の条痕の後に楕円形の条痕を施している。胎土には砂礫を含む。262は横位の条痕の後に斜位の条痕を施している。263・265は縦位の条痕を施した後に曲線の条痕を施すものである。266・267は口縁部全体に縦位の条痕を施すが、その丁寧さが際立つ。268～270は条痕を施すが、その後部分的にナデ消しを行うことで残った条痕が強調されている。269と270には穿孔が残る。260の胎土には砂礫、261の胎土には砂礫と雲母が入る。

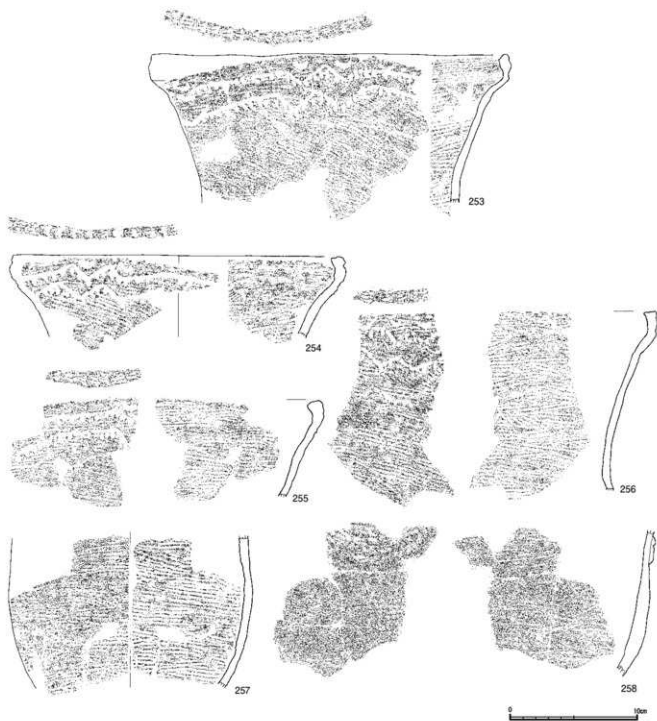
IV-1-b類 (第62・63図 271～274)

一つ一つの条痕が明瞭でなく粘土がはみ出したように見える荒い条痕の一群である。

273のみが口縁部に山形の突起をもつが他は平口縁で、



第 58 圖 縄文時代前・中期 III 期土器出土分布図



第59図 縄文時代前・中期Ⅲ類土器

第12表 縄文時代前・中期Ⅲ類土器観察表

備考欄：() は口唇部施文

神岡 番号	札帳 番号	器種	出土区	層位	部位	法量 (cm)		主文様・調物		胎土			取上番号	備考	
						口径	底径	器高	外面	内面	白色 粒子	黒色 角閃 石			雲母
30	253	深鉢	J-20	B-a/B-b	口縁部	27.6	-	-	流条・ナヅ・貝殻条施文	ナヅ・貝殻条施文	○	○		73037 1E.D.	(貝殻刺突)
	254	深鉢	J-20	IV b	口縁部	26.9	-	-	流条・ナヅ・貝殻条施文	ナヅ・貝殻条施文	○	○	○	73760 1E.D.	(貝殻刺突)
	255	深鉢	J-20	B-a	口縁部	-	-	-	流条・ナヅ・貝殻条施文	ナヅ・貝殻条施文	○	○	○	73060 1E.D.	(貝殻刺突)
	256	深鉢	J-20	B-a/B-b	口縁部	-	-	-	流条・ナヅ・貝殻条施文	ナヅ・貝殻条施文	○	○	○	73044 1E.D.	(貝殻刺突)
	257	深鉢	J-20	B-a/B-b	胴部	-	-	-	ナヅ・貝殻条施文	ナヅ・貝殻条施文	○	○	○	73054 1E.D.	
	258	深鉢	K-1-12-13	B-a/B-b	胴部	-	-	-	ナヅ・貝殻条施文	ナヅ・貝殻条施文	○	○		8421 1E.D.	突部に貝殻刺突

口唇部は丸く収め、キザミ等は施さない。

外面の条痕は横位か斜位に施されるが、274はその後に部分的にナデ調整が行われる。内面は条痕を施した後部分的にナデ調整が行われるが、273は条痕を施した後、ナデ消しが行われている。

271・272・274の胎土には砂礫と金雲母を含む。

IV-1-c類 (第63・64図 275～284)

基本的に口縁部が直立か、直線的に立ち上がり、条痕がa類・b類に分類しなかったものである。

全て平口縁であるが、284には山形突起がつく。口唇部は丸く作るが、平坦に仕上げるものもある。281～283には口唇部にキザミが施されるが、283のキザミは浅い。胴部から底部にかけても直線的な器形であるが、283は胴部から膨らみをもちながら底部に続く。

条痕は横位に施されるものが多く、その後さらにナデ調整が行われる。277・280は条痕を施した後、ナデ消ししている。278・279の内面はナデ調整が行われ、他は条痕の後に部分的にナデ調整を行っている。

278には穿孔が残る。

IV-1-d類 (第65図 285～287)

1類の中で口縁部に突帯が巡るものである。図化した3点は同一個体と思われる。

直線的な口縁部、胴上部から弯曲しながら底部へと続く器形である。平口縁で、口唇部は丸く、口唇部外端に刺突が入る。

キザミが施された1条の突帯が口縁部に巡る。外面は荒い条痕による調整が行われる。内面は条痕調整の後に部分的なナデ調整が施されるが、全体的に粗雑な器面調整である。胎土には砂礫を含む。

この類の土器は器形、文様の特徴から西之備式土器に比定される。

IV-2類

2類はb類しか出土していない。

IV-2-b類 (第66図 288・289)

口縁部が弯曲し、頸部を形成すると思われる器形に、荒い条痕が施されるものである。

288の口縁端部は直立するが、289は若干内弯する。いずれも平口縁で口唇部は幾分細く丸まる。外面は荒い条痕で、内面は丁寧な器面調整である。口縁上部には炭化物が付着している。2点は同一個体の可能性も考えられる。

IV-3類 (第66図 290・291)

1類と2類に分類しなかったものである。

290はいずれにも分類ができなかったが、内外面とも条痕による調整が施されていることから、IV類として掲載した。口縁部はやや外反し、波状口縁で丸まる口唇部にはキザミが施される。口縁部には棒状工具による刺突文が3条巡り、波頂部の下には瘤状の粘土を2個縦に貼

り付けている。IV類として扱ったいわゆる条痕文土器とは異なる土器である。

291は口縁端部に微隆突帯を巡らすものか、口唇部を平坦にするために粘土がはみ出したか判断できなかったことから3類とした。良好な焼成で他の条痕文土器とは異なる雰囲気をもつ。また、器壁の厚さが一定でない。

【胴部】(第67・68図 292～298)

胴部は7点を図化した。胴部下半から直線的に立ち上がるものと弯曲しながら立ち上がるものがある。外面は条痕を施した後部分的にナデを行うが、294は縦位に丁寧な条痕を施している。内面は全て条痕を施した後部分的にナデを行う。296は細身の器形となる。

【底部】(第68・69図 299～303)

底部は5点を図化した。299・302・303は平底、300・301は丸底である。299の外面は工具によるナデが施されるが、器面調整は荒い。内面調整は条痕後に部分的なナデが行われる。胎土には砂礫が観察できる。300・301の調整は内外面とも条痕の後に部分的なナデが施される。300・301の胎土には小礫を多少含む。302は内外面とも荒い条痕で、胎土に砂礫と金雲母を含む。302の外面は条痕が残る内面はナデ、303の外面は荒い条痕に内面はナデが施される。301には3か所穿孔が残る。

本遺跡出土のIV類土器の特徴を次のようにまとめることができる。

(器形)

- ・胴部から口縁部にかけて直線的に開くものが多い。
- ・平口縁がほとんどであるが、波状口縁と山形突起をもつものが数点ある。
- ・口唇部は丸く収め、約半数には刺突もしくはキザミが施される。
- ・底部は丸底、平底がある。

(条痕)

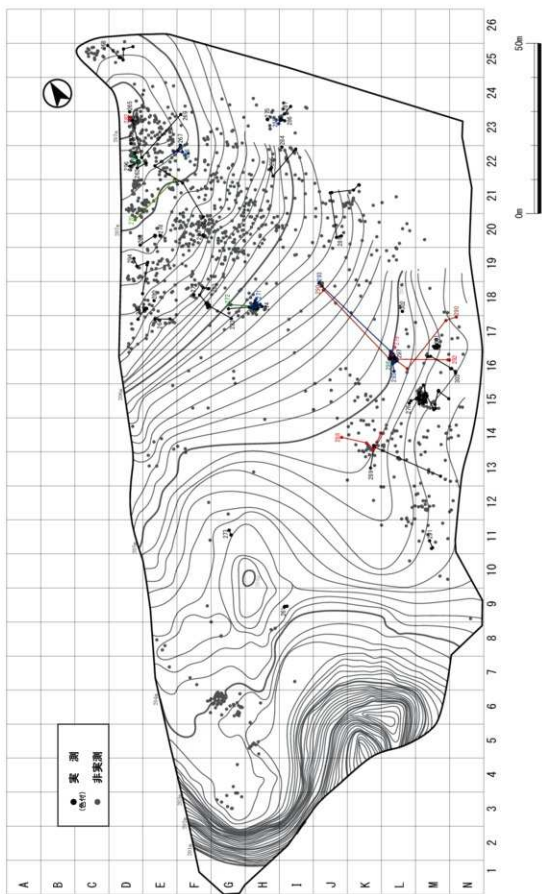
- ・一つ一つの条痕がしっかりしたもの、全体的に条痕が浅いもの、荒い条痕のものがある。
- ・条痕が文様化したものがある。
- ・内外面とも条痕を施した後、部分的にナデが行われる。

(胎土)

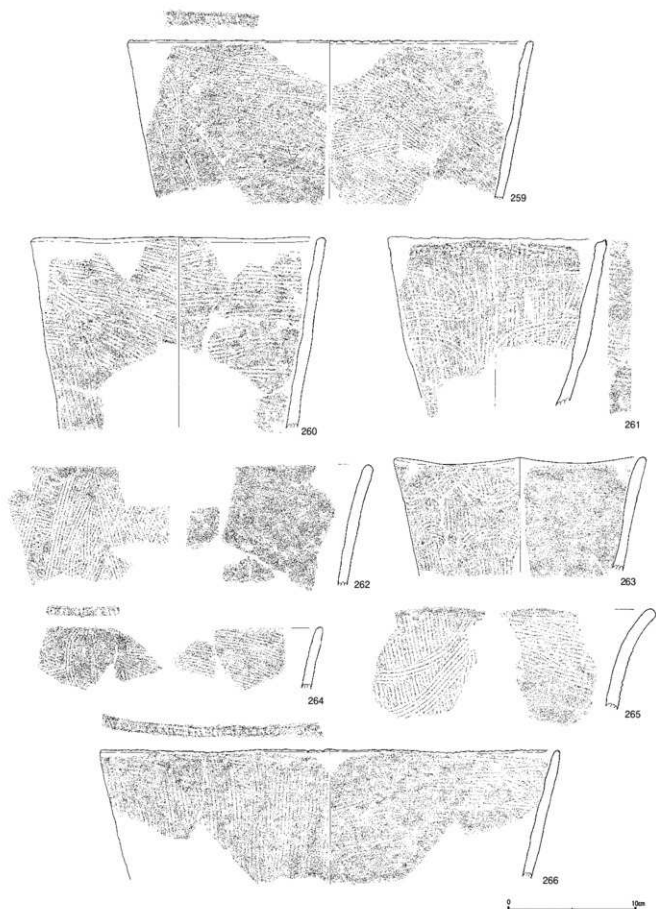
- ・胎土に金雲母を含むものがある。

(焼成)

- ・焼成は絶じて良好である。



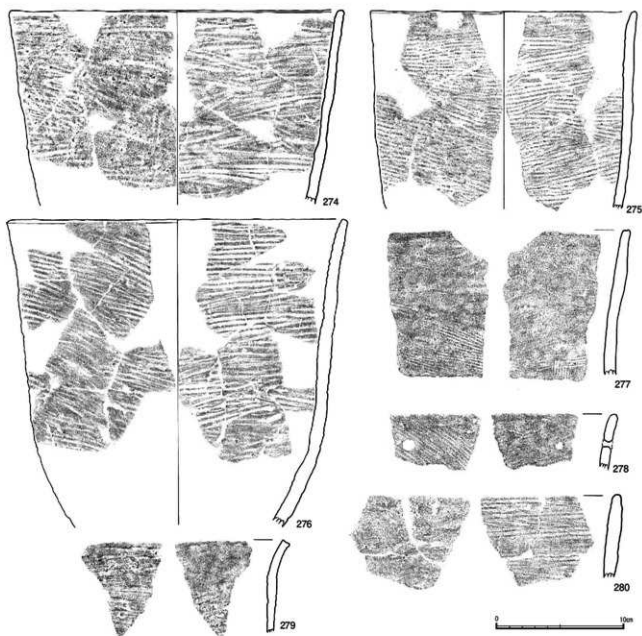
第 60 圖 縄文時代前・中期Ⅳ類土器出土分布図



第61圖 縄文時代前・中期Ⅳ-1-a類土器 1



第62圖 縄文時代前・中期IV-1-a類土器2・IV-1-b類土器1

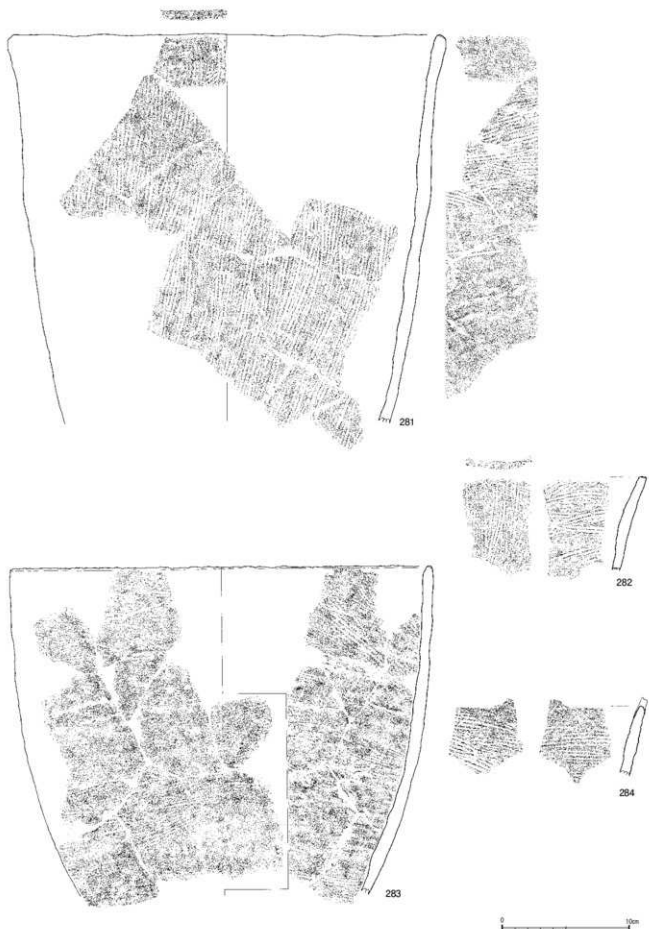


第 63 図 縄文時代前・中期Ⅳ-1-b 類土器 2・Ⅳ-1-c 類土器 1

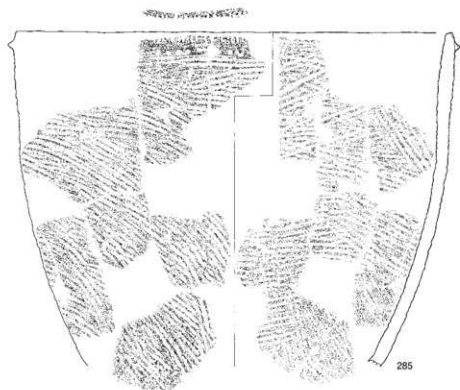
第 13 表 縄文時代前・中期Ⅳ類土器観察表 1

備考欄：() は口唇部断面

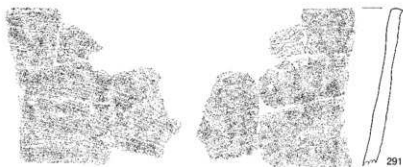
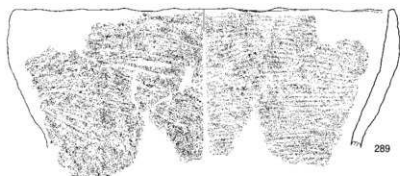
編入 番号	陶器 番号	器種	出土区	層位	部位	法量 (cm)			主文様・図案		胎土				取上番号	備考
						口径	直径	器高	外面	内面	白色 粒子	茶色 粒子	黄褐色 質	黒石		
61	259	深鉢	D-E-17・18	B-Va	口縁～胴部	31.4	-	-	縦条状曲線	条痕	○	○			115466 注①	(口唇部突)
	260	深鉢	B-22	B-Va	口縁～胴部	22.4	-	-	条痕	条痕後一部ナズ	○	○	○		116304 注①	胎土に砂礫、金雲母
	261	深鉢	I-9	Vb	口縁～胴部	17.0	-	-	縦条状曲線	条痕後ナズ	○	○	○		142003 注①	胎土に赤・黄礫 (赤黄ナズ)
	262	深鉢	B-F-22	Va	口縁部	-	-	-	条痕	ナズ	○	○			114086 注①	
	263	深鉢	B-E-20	B-Va	口縁部	9.9	-	-	縦条状曲線	条痕後ナズ	○	○			115652 注①	
	264	深鉢	E-17	IVb	口縁部	-	-	-	縦条状曲線	条痕	○	○			113792 注①	(口唇部突)
	265	深鉢	B-25	Va	口縁部	-	-	-	縦条状曲線	条痕・ナズ	○	○			116385	焼成良好
	266	深鉢	E-F-21	IVb	口縁部	36.0	-	-	ていびいな条痕	条痕後一部ナズ	○	○			399093 注①	焼成良好 (キズ)
	267	深鉢	F-F-20～21	B-Va	口縁部	35.6	-	-	ていびいな条痕	条痕後一部ナズ	○	○			399093 注①	焼成良好 (キズ)
	268	深鉢	C-F-25	B-Va	口縁～胴部	-	-	-	部分的条痕	条痕後一部ナズ	○	○			65325 注①	
62	269	深鉢	D～F-22①	V-Va	口縁～胴部	22.8	-	-	ナズ後部分的条痕	ナズ・一部条痕	○	○			84655 注①	焼成孔
	270	深鉢	B-E-20～21	B-Va	口縁部	-	-	-	部分的条痕	部分的条痕	○	○			110821 注①	焼成良好 (キズ)
	271	深鉢	H-18	B-Va	口縁部	23.0	-	-	粗い条痕	粗い条痕	○	○	○		29797 注①	胎土に砂礫、金雲母
	272	深鉢	G-H-18	B-Va	口縁部	-	-	-	粗い条痕	条痕後一部ナズ	○	○			29424 注①	胎土に砂礫、金雲母
	273	深鉢	G-11	B-Va	口縁部	-	-	-	粗い条痕	条痕後ナズ	○	○			141536 注①	山形突起



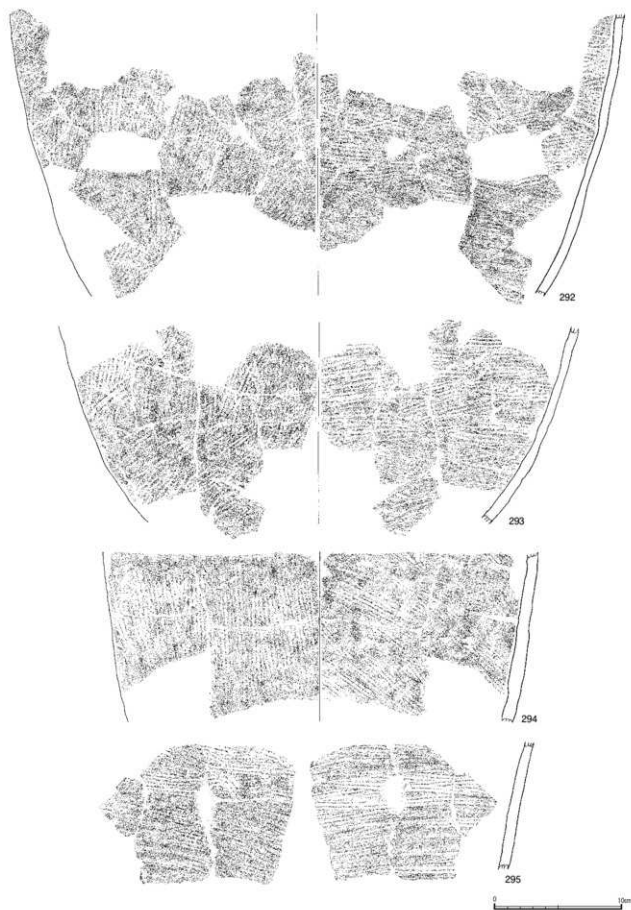
第 64 図 縄文時代前・中期Ⅳ-1-c 類土器 2



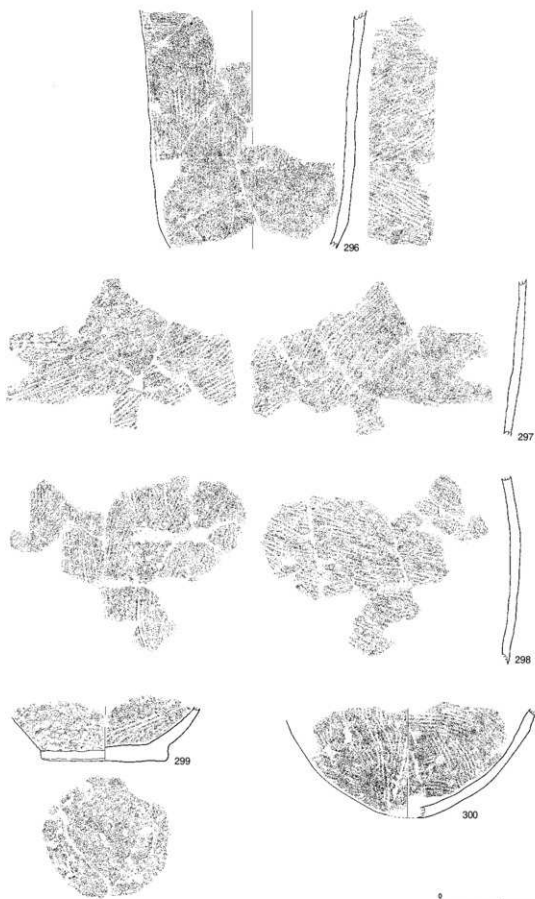
第 65 図 縄文時代前・中期IV-1-d 類土器



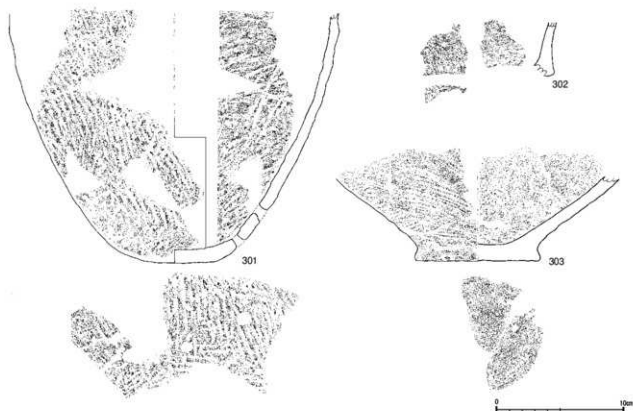
第66図 縄文時代前・中期IV-2-b類土器・IV-3類土器



第67図 縄文時代前・中期Ⅳ類土器（胴部①）



第68図 縄文時代前・中期IV類土器(胴部②・底部①)



第 69 図 縄文時代前・中期Ⅳ類土器（底部②）

第 14 表 縄文時代前・中期Ⅳ類土器観察表 2

検出 番号	陶器 番号	器種	出土区	層位	部位	法量 (cm)			土文様・調物		胎土					取上番号	備考
						口径	底径	器高	外面	内面	白色 粒子	黒色 炭灰 質	黄白 質	礫石			
63	274	深鉢	G-II-18	B-V	口縁～胴部	26.0	-	-	粗い条痕・一部ナズ	粗い条痕・一部ナズ	○	○	○	○	2961 1E.0	胎土に砂礫、金雲母	
	275	深鉢	H-23	V-b	口縁～胴部	20.8	-	-	条痕後ナズ	条痕後一部ナズ	○	○	○	61327 1E.0	口縁上部ナズ		
	276	深鉢	L-9-15	B-V	口縁～胴部	20.0	-	-	条痕後ナズ	条痕後一部ナズ	○	○	○	6947 1E.0	内：口縁上部ナズ		
	277	深鉢	F-18	V-a	口縁～胴部	-	-	-	上：ナズ、下：条痕	ナズ、条痕	○	○	○	11870			
	278	深鉢	F-20	V-a	口縁部	-	-	-	条痕	ナズ	○	○	○	11865	細径孔		
	279	深鉢	L-17	V-a	口縁部	-	-	-	浅い条痕	ナズ	○	○	○	51691	焼成良好		
64	280	深鉢	E-17-18	IV-b	口縁部	-	-	-	条痕後ナズ	条痕	○	○	○	110338	外面粗い器面調整		
	281	深鉢	J-K-20～22	IV-b	口縁～胴部	33.6	-	-	条痕後一部ナズ	ナズ、条痕	○	○	○	73554 1E.0	(キヤミ)		
	282	深鉢	D-23	V-a	口縁部	-	-	-	条痕	条痕後一部ナズ	○	○	○	116376	焼成良好		
	283	深鉢	E-9-17-18	B-V	口縁～胴部	33.0	-	-	条痕後ナズ	条痕後ナズ	○	○	○	28083 1E.0	(キヤミ)		
	284	深鉢	F-22	IV-b	口縁部	-	-	-	条痕	条痕後ナズ	○	○	○	81696			
	285	深鉢	H-1-23	V-a	口縁～胴部	34.0	-	-	粗い条痕	条痕後一部ナズ	○	○	○	54803 1E.0	胎土に炭・4ヶ所、赤銅葉		
65	286	深鉢	L-23	V-a	口縁～胴部	-	-	-	粗い条痕	条痕後一部ナズ	○	○	○	54892 1E.0	胎土に炭・4ヶ所、赤銅葉		
	287	深鉢	L-23-24	B-V	口縁～胴部	-	-	-	粗い条痕	条痕後一部ナズ	○	○	○	49527 1E.0	胎土に炭・4ヶ所、赤銅葉		
	288	深鉢	J-K-14	IV-a	口縁～胴部	26.8	-	-	粗い条痕	条痕	○	○	○	11124 1E.0	胎土に炭・内面7ヶ所赤銅葉		
	289	深鉢	K-9-13-14	IV-a	口縁部	30.0	-	-	粗い条痕	条痕	○	○	○	4481 1E.0	胎土に炭・内面7ヶ所赤銅葉		
66	290	深鉢	J-V-8～9	B-V	口縁部	36.2	-	-	条痕後一部ナズ	条痕後一部ナズ	○	○	○	13006 1E.0	胎土に砂礫・散在、18ヶ所		
	291	深鉢	M-11	IV-a	口縁部	-	-	-	浅い条痕	ナズ	○	○	○	7181 1E.0	焼成良好		
	292	深鉢	L-9-16	B-V	胴部	-	-	-	条痕後一部ナズ	条痕後一部ナズ	○	○	○	13133 1E.0			
	293	深鉢	J-V-18～19	B-V	胴部	-	-	-	条痕後一部ナズ	条痕後一部ナズ	○	○	○	10201 1E.0			
67	294	深鉢	b-E-18-19	IV-b	胴部	-	-	-	条痕	条痕	○	○	○	116260 1E.0	焼成良好		
	295	深鉢	H-1-22	B-V	胴部	-	-	-	条痕後一部ナズ	条痕後一部ナズ	○	○	○	80978 1E.0	新契による渾点文風		
	296	深鉢	D-22	B-V	胴部	-	-	-	条痕後一部ナズ	条痕後一部ナズ	○	○	○	111952 1E.0			
	297	深鉢	L-16	IV-b	胴部	-	-	-	条痕後一部ナズ	条痕後一部ナズ	○	○	○	13910 1E.0			
68	298	深鉢	L-16	B-V	胴部	-	-	-	条痕後一部ナズ	条痕後一部ナズ	○	○	○	12231 1E.0			
	299	深鉢	F-20～23	B-V	底部	-	-	-	板状工具ナズ	条痕後ナズ	○	○	○	116690 1E.0	胎土に砂礫		
	300	深鉢	D-25	V-b	底部	-	-	-	条痕後一部ナズ	条痕後一部ナズ	○	○	○	114310	胎土に小礫多少		
	301	深鉢	M-17	B-V	底部	-	-	-	粗い条痕	粗い条痕	○	○	○	48799 1E.0	底部に3ヶ所の細径孔		
69	302	鉢	L-18	V-a	底部	-	-	-	条痕	ナズ	○	○	○	51859			
	303	鉢	M-N-16	IV-a	底部	-	-	9.8	粗い条痕	ナズ	○	○	○	70288 1E.0	胎土に砂礫		

4 V層出土の石器

(1) 石剣 (第70図 304)

石剣は最大長 35.2 cm、幅 3.2 cm、厚さ 2.1 cm、重さが 297.5g で、先端部の幅 0.7 cm、基部幅 1.24 cm、基部厚 0.98 cm で、E-21 区で出土した。なお、石剣の帰属時期等については、平成 24 年 7 月 29 日「天神段遺跡の石剣について」として検討を行い、以下にとりまとめている。

ア 石器の出土状況

(ア) IV b 層から V a 層にかけて掘り下げたところ、長さ 35.2 cm の石器が出土した。

(イ) この層は、縄文時代晩期と縄文時代前期の遺物包含層である。

(ウ) この石器は、晩期のピークが過ぎ、前期の遺物が主体となりつつある時点で出土した。

(エ) 周辺では、前期の管煙式土器が出土しており、この石器は前期のものである可能性が高い。

(オ) 遺構等の確認は、

- ① 晩期遺構検出面である V a 層での平面確認
- ② 石器の長軸・短軸に沿ったミニトレンチによる断面観察
- ③ IV 層まで掘り下げ再度平面観察を実施したが、遺構を捉えることが出来なかった。このため、包含層出土品との結論に至る。

イ 石器の観察所見

(ア) 頁岩素材、最大長 35.2 cm で断面は楕円形

(イ) 全面に研磨が施され、先端は斜めに基部は横位に研磨されており部位を意識している。

(ウ) 先端部や側面を鋭利に加工しておらず、狩猟等に用いる実用石器とは言い難い。

(エ) このような特徴に類似するものは、東日本で見られる石剣がある。

(オ) 基部を平坦にする特徴は、東日本の早期末から前期に見られる石剣に類似する。

ウ 石器の評価

(ア) 観察所見や類似資料等から石剣と判断

(イ) 時期は、縄文時代前期の管煙式土器段階

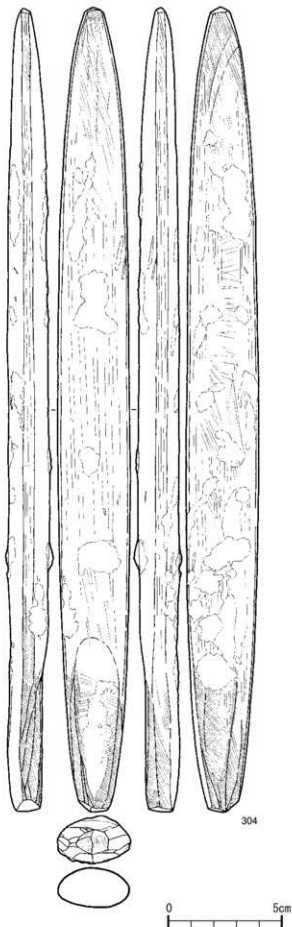
(ウ) 石剣の類似は、県内では曾於市桐木耳取遺跡(22cm)、時期は前期から中期とされる。

(エ) 最大長で見ると、大分県緒方町(豊後大野市)で採取された資料が類似

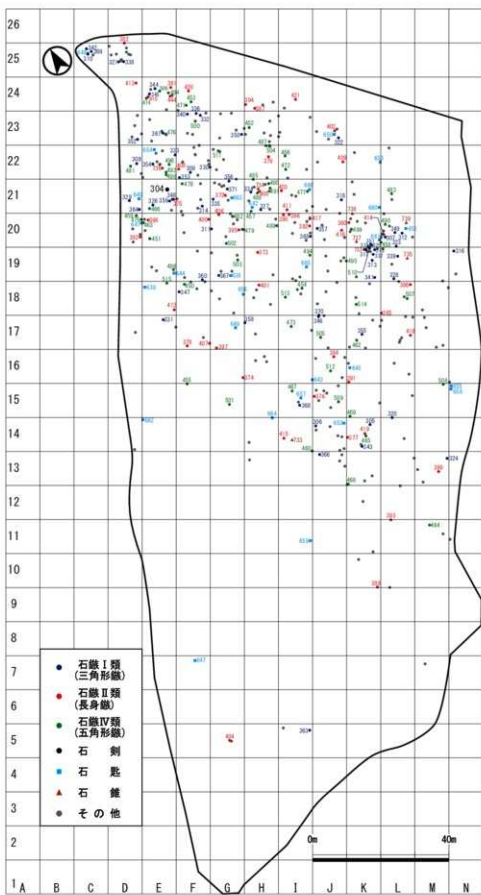
(オ) 九州では石剣を含めた刀剣形石製品の時期は後晩期が多く、前期に遡る資料は極めて少ない。

(カ) 現段階における九州最古の石剣であり、東日本との関わりも考えられる貴重な資料と評価

以上のことから、石剣は管煙式土器に伴う非実用的石器の可能性が高く、その平坦な基部は東日本の石剣の特徴に近く、加えて、九州最古の石剣である可能性が高い



第70図 V層出土石器1(石剣)



第71図 V層出土石器出土分布図(掲載分)

資料と判断している。一方、石剣の埋納等を示唆する掘り込み遺構等は確認できなかったとされている。

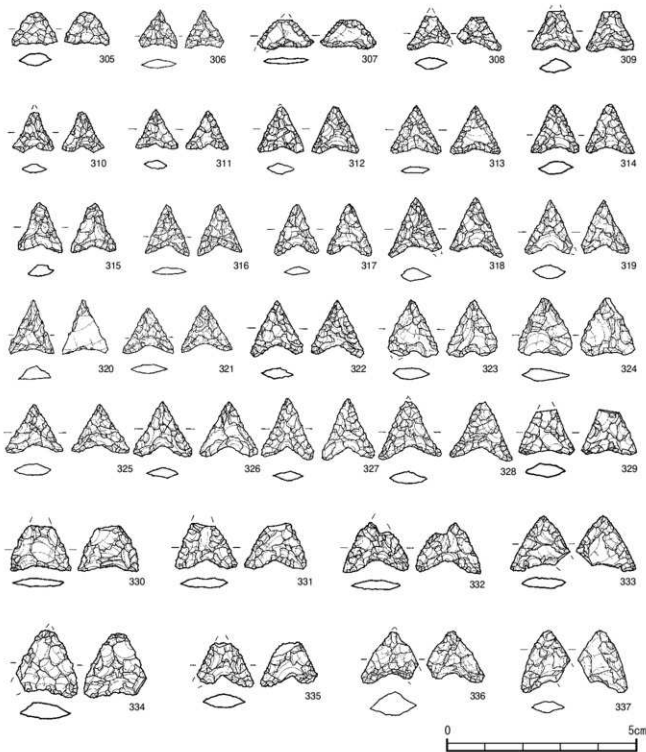
なお、上記のとおりまとめには記載されていないが、石剣の表面の20か所程に瘤状のマンガン分の沈着が確認できる。また、先端部と基部では側面の面取を強く行っているが、中央部周辺では楕円形の仕上げとなっている。なお、基部は2面の平坦面で構成され、柄部とみら

れる10.5cm程は平坦にし、側面は角度を違えながら丁寧に仕上げている。

(2) 石鏃

石鏃は三角形鏃、長身鏃、円脚鏃、U脚鏃、五角形鏃、非対称鏃に区分して表示した。

しかし、五角形鏃は近年、縄文時代晩期に急速に分布



第72図 V層出土石器2 (I類①)

の拡大が指摘されるもので、本遺跡のIV層の縄文時代晩期土器群からも大量に出土することから、五角形鏃は上層からの混入の可能性が考えられる。したがって、V層の石鏃は、三角形鏃、長身鏃、円脚鏃、U脚鏃、非対称鏃で構成された可能性が指摘される。

ア I類 (三角形鏃) (第72～74図 305～371)

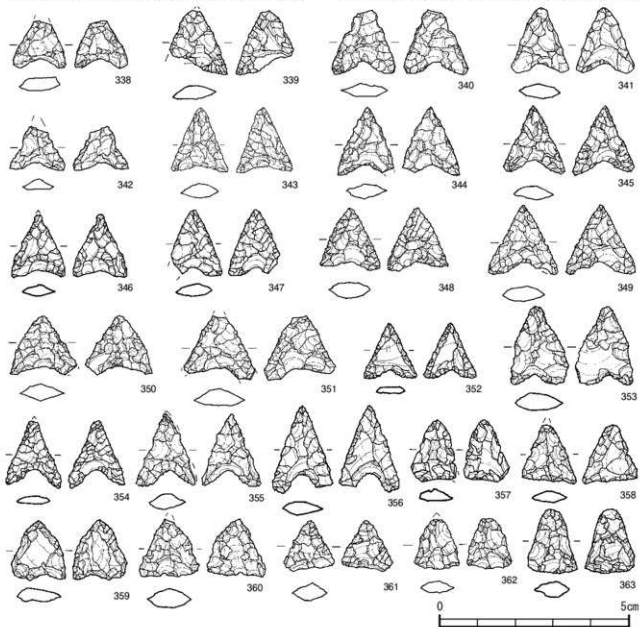
正三角形と若干長さが幅を上回る三角形からなり、基部は凹基が平基を凌駕する。

305～311はやや小振りな正三角形で、305はほぼ平基、306ははわずかに凹み、310と311では中央部が快られる。なお、順に姫島産黒曜石、上牛鼻産黒曜石、安山岩、桑ノ木津留産黒曜石、安山岩、霧島系黒曜石、三船産黒曜石と、安山岩を除きいずれも異なる産地の黒曜石が使用

されている。上記7点より若干大きい一群が312以下の資料で、320・348が姫島産、312・318・328・339・345・353が針尾・淀姫産、347・354・364が腰岳産、308が桑ノ木津留産、311・316・322・336が三船産、306・369が上牛鼻産、313が霧島系黒曜石で、327・334が玉髄、326・340・341・351・359・363が頁岩、329・343・360・362・365がチャートで、他の25点が安山岩で、安山岩の使用度が高いことが見てとれる。

316・327・345等の快りは深く、313・314・330・334等の快りは浅い。また、313・322・325・345等の各側縁は直線的で、324・336・337等では若干弯曲する傾向がみられる。

366・367・370はやや大振りで、365が典型的な正三角形を呈している。353～357は長身鏃で掲載ミス。石鏃



第73図 V層出土石器3 (I類②)

整形は両面とも入念に行っているが、313・320・352等の一部で腹面を残すものもある。

イ II類 (長身織) (第75・76図 372~421)

いわゆる長身や二等辺三角形を一括して50点を抽出した。なお、410で3.0cm, 411で3.25cm, 412で3.09cm, 418で3.01cm, 419で3.66cm, 420で3.8cmと3.0cmを

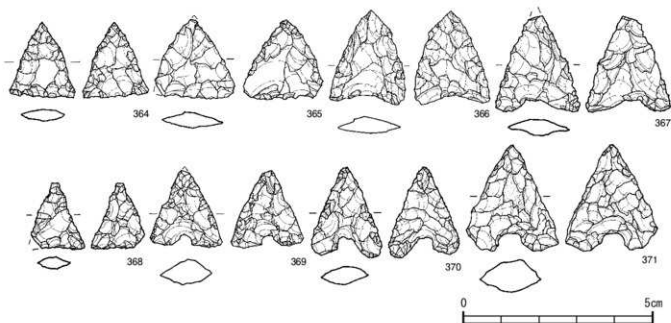
超す長さのものも存在する。

373~380が平基で、他が凹基となる。

石材では安山岩が21点、黒曜石では針尾・淀姫産が10点、腰岳産2点、姫島産、桑ノ木津留産、三船産、霧島系がそれぞれ1点で、残りはチャート、頁岩、玉髄などで、安山岩依存が高い。U字状の基部をもつ403・405・406・408等は酷似する。また、406・408・409・411

第15表 V層出土石器観察表1

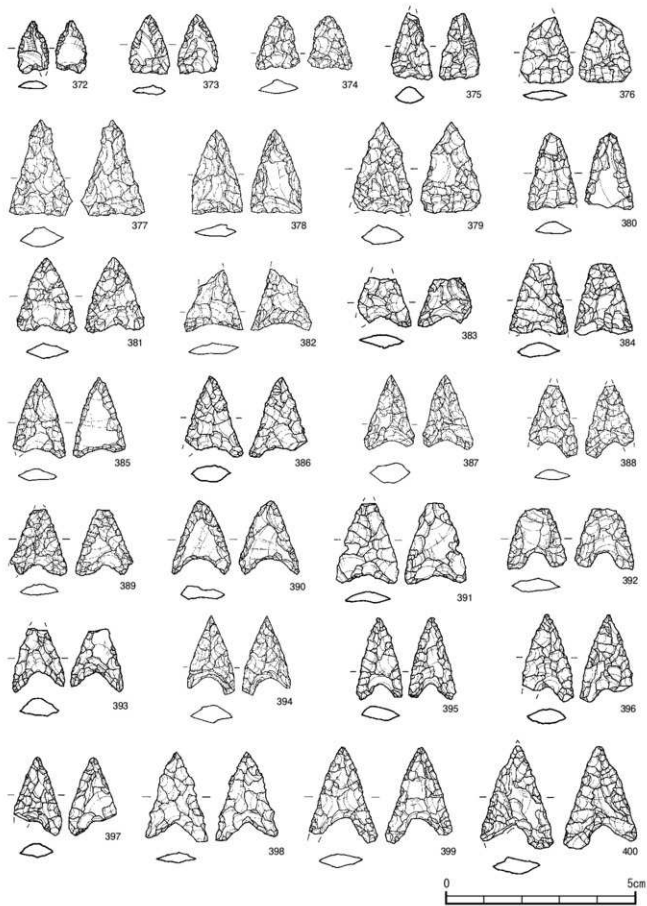
採出 番号	掲載 番号	器種	石材	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
70	304	石剣	SH	E-21	V a	35.20	3.20	2.10	297.50	111777	
	305	打製石鏃	姫島	K-14	V a	0.85	1.20	0.30	0.25	14117	三角形織
	306	打製石鏃	上牛鼻	J-14	V	0.97	1.00	0.23	0.17	12542	三角形織
	307	打製石鏃	AN1	L-20	V a	(0.74)	(1.42)	0.16	0.18	79721	三角形織
	308	打製石鏃	桑ノ木津留	D-22	V a	(0.90)	(1.14)	0.30	0.21	118653	三角形織
	309	打製石鏃	AN1	F-22	V a	(1.05)	1.25	0.35	0.33	112283	三角形織
	310	打製石鏃	霧島系	C-25	V a	1.05	1.08	0.25	0.17	70430	三角形織
	311	打製石鏃	三船	G-19	V a	1.00	1.10	0.28	0.16	117989	三角形織
	312	打製石鏃	針尾・淀姫	L-20	V c	1.21	1.20	0.27	0.25	80354	三角形織
	313	打製石鏃	霧島系	K-19	V a	1.26	1.30	0.20	0.21	78441	三角形織
	314	打製石鏃	AN1	F-21	V a	1.24	1.24	0.34	0.34	114636	三角形織
	315	打製石鏃	AN1	K-19	V a	1.25	1.14	0.38	0.28	79155	三角形織
	316	打製石鏃	三船	N-19	V a	1.87	1.16	0.20	0.18	54593	三角形織
	317	打製石鏃	AN1	K-19	V a	1.33	1.15	0.20	0.18	79890	三角形織
	318	打製石鏃	針尾・淀姫	J-21	V a	1.55	(1.35)	0.30	0.33	81170	三角形織
	319	打製石鏃	AN1	K-19	V a	1.40	(1.27)	0.34	0.33	79243	三角形織
	320	打製石鏃	姫島	L-14	V	1.94	1.15	0.38	0.38	14073	三角形織
	321	打製石鏃	AN1	D-25	V a	1.22	1.36	0.26	0.24	66417	三角形織
	322	打製石鏃	三船	J-23	V	1.43	1.36	0.38	0.36	50072	三角形織
	323	打製石鏃	AN1	L-20	V a	1.46	(1.30)	0.29	0.47	79718	三角形織
	324	打製石鏃	AN2	M-13	V a	1.50	1.41	0.32	0.55	75384	三角形織
	325	打製石鏃	AN1	K-20	V a	1.24	1.50	0.30	0.34	79282	三角形織
	326	打製石鏃	SH1	E-21	V a	1.40	1.53	0.28	0.35	115000	三角形織
	327	打製石鏃	CC1B	H-21	V a	1.60	1.35	0.28	0.30	116995	三角形織
	328	打製石鏃	針尾・淀姫	L-19	V a	(1.52)	1.62	0.31	0.43	78150	三角形織
	329	打製石鏃	CH1B	D-21	V b	(1.20)	1.45	0.38	0.52	119030	三角形織
	330	打製石鏃	AN2	F-22	V a	(1.20)	1.56	0.23	0.47	112262	三角形織
	331	打製石鏃	AN1	E-17	V a	(1.20)	1.65	0.25	0.46	117216	三角形織
	332	打製石鏃	CC1B	F-23	V a	(1.30)	1.69	0.27	0.46	82434	三角形織
	333	打製石鏃	AN1	E-22	V a	1.33	(1.54)	0.24	0.44	112225	三角形織
	334	打製石鏃	CC1B	H-21	V a	(1.70)	(1.62)	0.47	0.93	121996	三角形織
	335	打製石鏃	AN1	G-21	V a	(1.11)	(1.43)	0.35	0.43	116541	三角形織
	336	打製石鏃	三船	F-23	V a	1.40	(1.60)	0.65	0.77	81966	三角形織
	337	打製石鏃	AN1	K-19	V a	1.64	(1.38)	0.32	0.55	78470	三角形織
	338	打製石鏃	日東	D-25	V a	(1.15)	1.45	0.34	0.61	69172	三角形織
	339	打製石鏃	針尾・淀姫	L-19	V a	(1.66)	(1.48)	0.35	0.58	79920	三角形織
	340	打製石鏃	SH	F-23	V a	1.70	1.72	0.32	0.65	85482	三角形織
	341	打製石鏃	SH2	K-19	V c	1.72	1.52	0.40	0.66	80305	三角形織
	342	打製石鏃	AN1	C-25	V c	(1.22)	1.50	0.29	0.38	70368	三角形織
	343	打製石鏃	CH2C	K-14	V a	1.67	1.50	0.42	0.69	14188	三角形織
	344	打製石鏃	AN2	E-24	V a	1.83	(1.50)	0.41	0.58	88210	三角形織
	345	打製石鏃	針尾・淀姫	E-24	V a	1.80	1.61	0.35	0.54	88834	三角形織
	346	打製石鏃	姫島	J-17	V b	1.65	1.45	0.30	0.48	26050	三角形織
	347	打製石鏃	腰岳	F-18	V a	1.75	(1.35)	0.35	0.59	118886	三角形織
	348	打製石鏃	姫島	E-21	V b	1.65	1.55	0.43	0.63	121418	三角形織
	349	打製石鏃	AN1	L-20	V a	1.80	1.80	0.40	0.84	79700	三角形織
	350	打製石鏃	霧島系	G-23	V a	1.58	(1.80)	0.46	0.73	84411	三角形織
	351	打製石鏃	SH3	K-20	V b	(1.73)	(1.98)	0.42	0.89	87783	三角形織
	352	打製石鏃	AN1	D-23	V a	1.44	1.38	0.15	0.29	118229	三角形織
	353	打製石鏃	針尾・淀姫	F-22	V a	2.08	1.48	0.47	1.22	117626	長身織
	354	打製石鏃	腰岳	E-22	V a	(1.75)	1.50	0.22	0.39	114048	長身織
	355	打製石鏃	AN1	K-17	V a	1.89	(1.53)	0.38	0.64	25355	長身織
	356	打製石鏃	AN2	G-21	V b	2.30	1.54	0.37	0.86	119140	長身織
	357	打製石鏃	AN1	J-20	V a	1.64	(1.21)	0.37	0.63	79592	長身織



第74図 V層出土石器4 (I類③)

第16表 V層出土石器観察表2

挿図 番号	掲載 番号	器種	石材	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
73	358	打製石鏃	AN2	H-17	V a	1.55	1.40	0.34	0.57	29829	三角形鏃
	359	打製石鏃	SH5	E-21	V a	1.56	1.42	0.46	0.89	112336	三角形鏃
	360	打製石鏃	CH3	F-19	V a	1.51	1.54	0.49	0.83	121149	三角形鏃
	361	打製石鏃	CR	E-23	V a	1.32	1.32	0.50	0.67	114271	三角形鏃
	362	打製石鏃	CH2A	H-22	V a	(1.30)	1.15	0.30	0.39	86599	三角形鏃
	363	打製石鏃	SH1	I-5	V a	1.69	1.30	0.43	0.73	143823	三角形鏃
	364	打製石鏃	腰岳	D-21	V a	1.96	1.75	0.38	0.89	117511	三角形鏃
	365	打製石鏃	CH3B	I-20	V c	(2.10)	(2.10)	0.50	1.87	80548	三角形鏃
	366	打製石鏃	AN2	J-13	V	2.47	2.00	0.43	1.65	15215	三角形鏃
	367	打製石鏃	AN2	G-19	V a	(2.47)	2.17	0.41	1.49	121127	三角形鏃
74	368	打製石鏃	ケイ質頁岩	I-15	V	1.73	(1.34)	0.32	0.51	21393	三角形鏃
	369	打製石鏃	上牛鼻	C-25	V c	(2.02)	1.89	0.68	1.67	71134	三角形鏃
	370	打製石鏃	針尾・淀姫	J-18	V a	2.38	1.82	0.48	1.37	26983	三角形鏃
	371	打製石鏃	AN1	G-21	V a	2.80	2.45	0.82	3.83	117665	三角形鏃
	372	打製石鏃	桑ノ木津留	G-21	V a	(1.35)	0.80	0.17	0.17	116957	長身鏃
	373	打製石鏃	薄島系	H-19	V a	1.52	1.08	0.38	0.39	35607	長身鏃
	374	打製石鏃	CC1B	G-16	V a	1.38	1.17	0.35	0.44	9909	長身鏃
	375	打製石鏃	針尾・淀姫	E-21	V b	(1.72)	1.06	0.45	0.67	121416	長身鏃
	376	打製石鏃	CH1B	J-15	V	(1.75)	(1.35)	0.30	0.67	23126	長身鏃
	377	打製石鏃	AN2	K-14	V a	2.53	1.60	0.54	1.32	14207	長身鏃
75	378	打製石鏃	HP2	F-17	V a	2.17	1.33	0.34	0.90	25597	長身鏃
	379	打製石鏃	SH3	H-22	V a	(2.40)	(1.58)	0.60	1.28	86669	長身鏃
	380	打製石鏃	船島	K-20	V c	(2.02)	(1.28)	0.34	0.63	80430	長身鏃
	381	打製石鏃	二船	E-24	V b	1.95	1.55	0.43	0.78	86838	長身鏃
	382	打製石鏃	AN1	D-25	V a	(1.63)	1.54	0.30	0.57	66321	長身鏃
	383	打製石鏃	AN1	D-20	V a	(1.26)	(1.38)	0.43	0.52	117274	長身鏃
	384	打製石鏃	針尾・淀姫	J-16	V	(1.92)	(1.55)	0.40	1.07	21764	長身鏃
	385	打製石鏃	AN2	L-18	V a	2.10	(1.35)	0.30	0.55	79965	長身鏃
	386	打製石鏃	ケイ質頁岩	L-18	V a	2.13	(1.47)	0.44	0.72	48900	長身鏃
	387	打製石鏃	針尾・淀姫	H-24	V b	2.00	1.37	0.55	0.93	61408	長身鏃
388	打製石鏃	OP	K-10	V a	(1.93)	(1.29)	0.30	0.33	3564	長身鏃	
389	打製石鏃	腰岳	G-22	V a	(1.82)	(1.58)	0.30	0.53	86900	長身鏃	
390	打製石鏃	AN2	I-20	V a	1.93	1.53	0.38	0.66	99548	長身鏃	
391	打製石鏃	AN2	K-16	V	(2.12)	1.65	0.30	0.84	23180	長身鏃	
392	打製石鏃	針尾・淀姫	I-20	V c	(1.68)	1.58	0.37	0.73	80711	長身鏃	
393	打製石鏃	AN2	M-16	V	(1.68)	1.35	0.45	0.74	20492	長身鏃	
394	打製石鏃	AN2	H-24	V b	2.08	1.25	0.50	0.73	60418	長身鏃	
395	打製石鏃	針尾・淀姫	G-20	V a	2.15	1.20	0.35	0.73	117872	長身鏃	
396	打製石鏃	針尾・淀姫	I-20	V b	2.30	(1.35)	0.40	1.00	99551	長身鏃	



第 75 图 V 层出土石器 5 (Ⅱ類①)

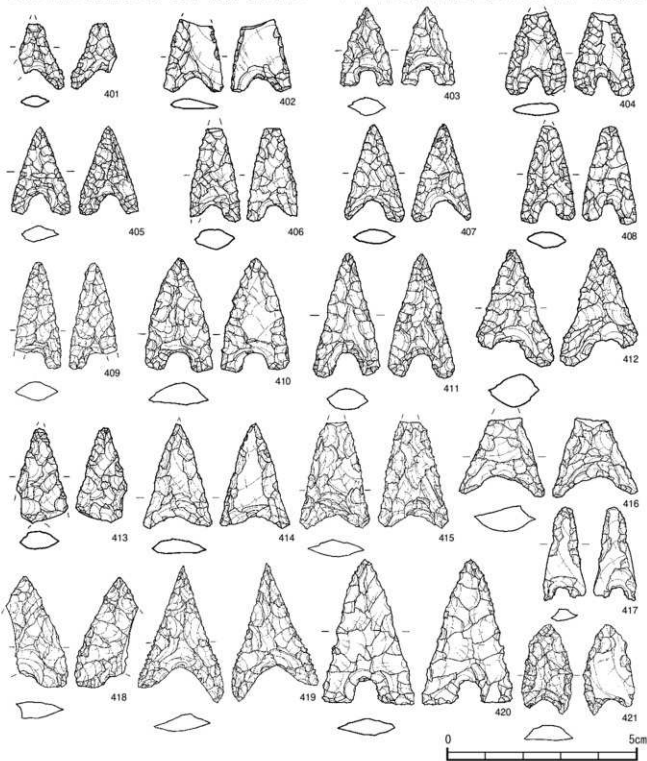
はより長身の二等辺三角形に属する。390・402・414は両面を、380・410は腹面を広く残す。

ウ Ⅲ類 (円脚, U脚脚) (第77図 422~449)

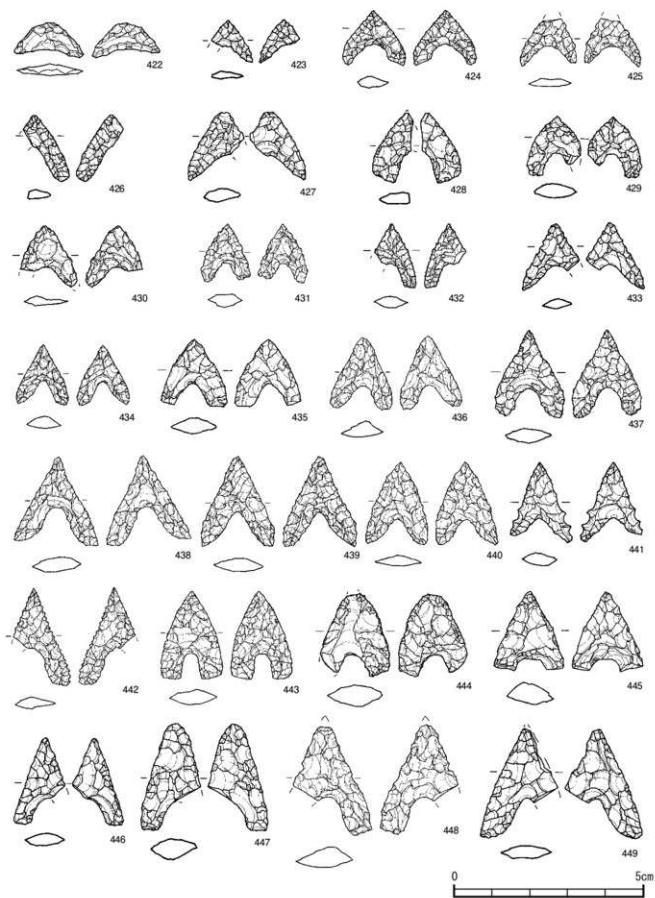
円脚ないしはU脚と呼称される一群 28点を抽出した。422は安山岩製の半月形で、縄文時代晩期に散見される異形石器の可能性もある。他は、側縁が弯曲気味の

424・428・437等と、直線的な433・438・442等に大別できる。なお、441はいわゆる側縁仕上げで、442も意識的な仕上げが見られる。

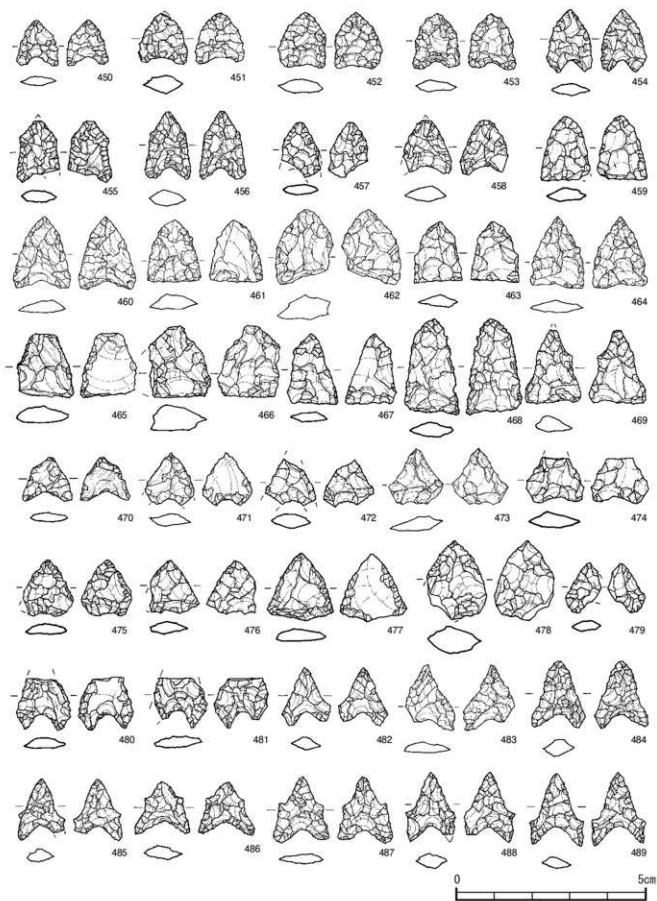
石材別では、チャート10点、針尾・淀姫産黒曜石3点、上牛鼻産2点、姫島産2点、腰岳産1点、安山岩9点、頁岩1点と、チャート及び安山岩の依存度が高い。加えて、チャート、安山岩石材は、総じて大きい個体への選択傾



第76図 V層出土石器6 (Ⅱ類②)



第 77 图 V 层出土石器 7 (Ⅲ類)



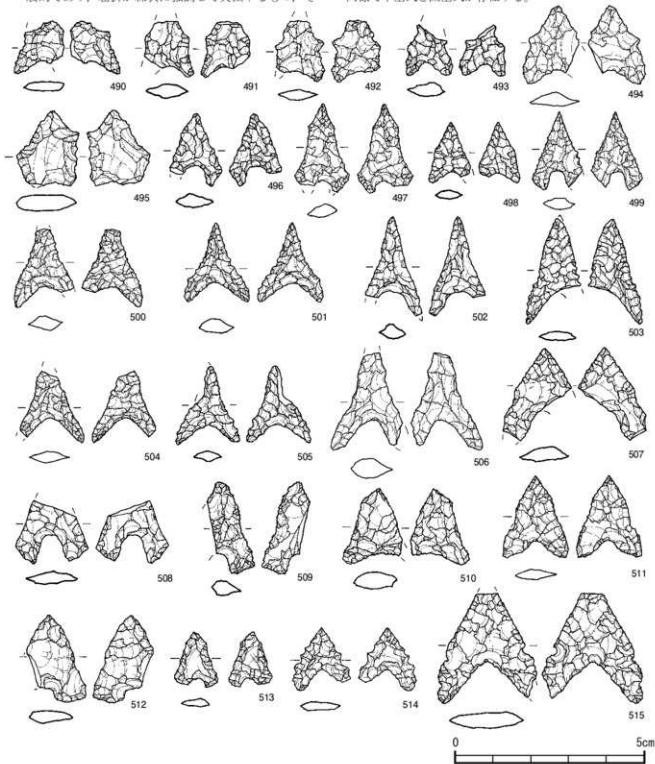
第 78 图 V 层出土石器 8 (IV 类①)

向が見てとれる。

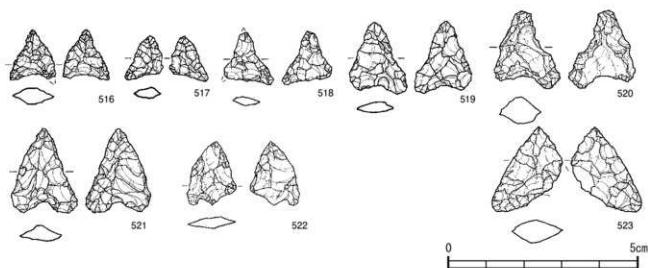
エ IV類 (五角形鏃) (第78・79図 450～515)

両側縁の一角が屈折して肩部をもつもので、将棋の駒型や野球のホームベース状を呈するものを五角形鏃として一括している。なお、屈折部は概ね上部に設けるのが一般的であり、屈折が棘状に強調して突出するもの、そ

の屈折が緩やかなもの、弓状に丸くなるもの等多彩である。また、側縁部の下部で鋭角に内側に屈折して脚端部に至るものでは、屈折部を上位に設けるものと下位に設けるものがあり、前者では脚端部が尖り、後者では箱形となる傾向がみられる。また、長幅が近似するものや長軸が卓越する長身のものまで見られ、底辺は三角形鏃と同様で平基式と凹基式が存在する。



第79図 V層出土石器⑨ (IV類②)



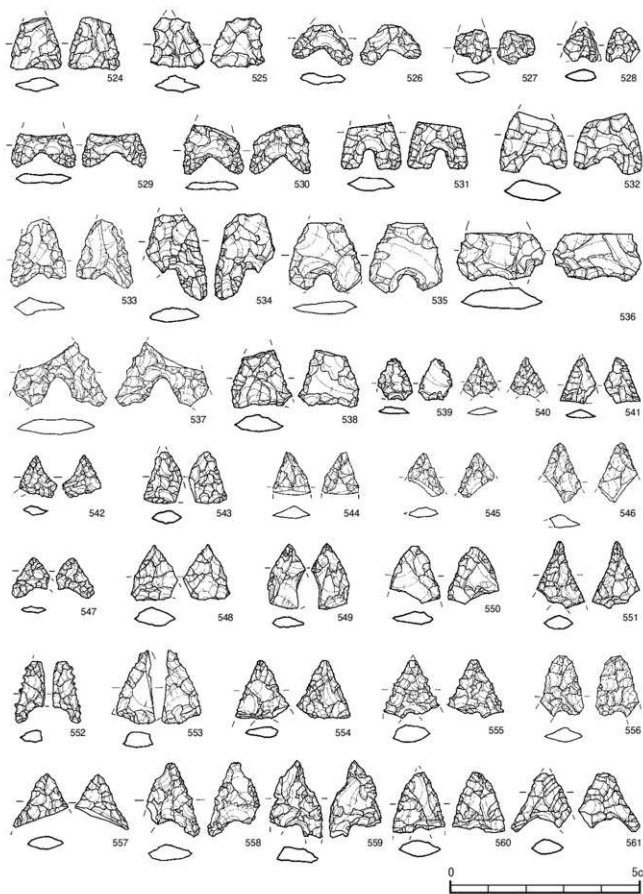
第80図 V層出土石器10 (V類)

第17表 V層出土石器観察表3

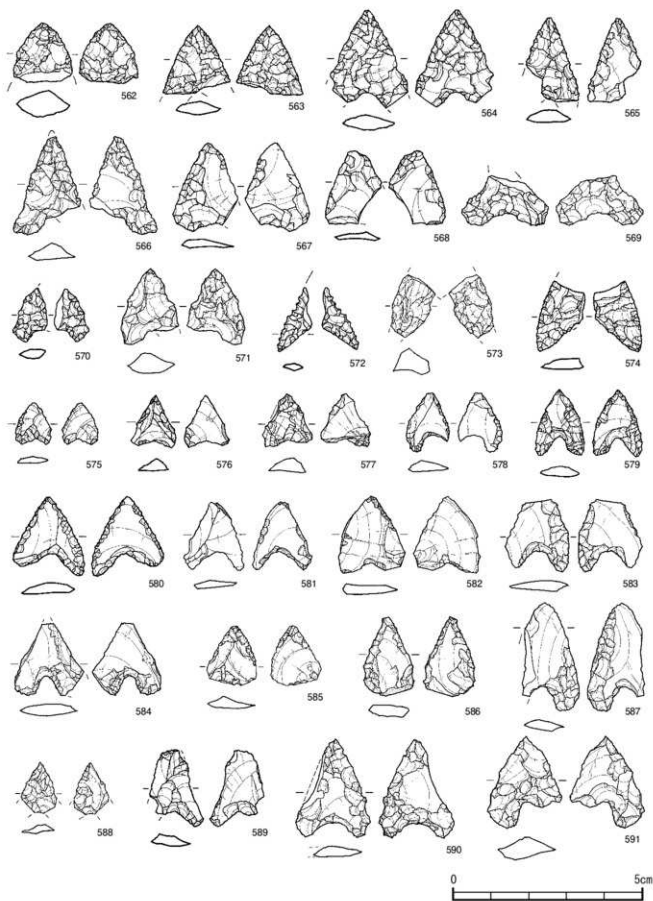
挿入 番号	掲載 番号	器種	石材	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
75	397	打製石器	CC1B	G-17	Va	2.05	(1.25)	0.40	0.71	26288	長身燧
	398	打製石器	CC1B	E-20	Va	2.35	1.62	0.30	0.70	115607	長身燧
	399	打製石器	AN1	M-13	Vc	2.52	(1.76)	0.38	1.00	71319	長身燧
	400	打製石器	腰岳	F-20	Va	2.70	1.90	0.40	1.43	116841	長身燧
	401	打製石器	AN2	H-18	Va	1.74	(1.19)	0.30	0.42	29898	長身燧
	402	打製石器	AN2	J-23	V	(1.90)	1.60	0.28	0.78	49967	長身燧
	403	打製石器	AN2	I-21	Vc	2.04	1.38	0.50	0.88	84480	長身燧
	404	打製石器	針尾・皮総	G-5	Va	(2.20)	1.60	0.30	1.18	143515	長身燧
	405	打製石器	針尾・皮総	H-21	Va	2.25	1.55	0.40	0.84	86990	長身燧
	406	打製石器	AN2	G-20	Va	(2.48)	1.28	0.53	1.40	130005	長身燧
	407	打製石器	AN2	F-17	Va	2.57	1.50	0.38	1.01	26279	長身燧
	408	打製石器	CH	F-22	Vb	2.55	1.45	0.40	1.40	114486	長身燧
	409	打製石器	針尾・皮総	J-22	Vb	2.80	(1.24)	0.55	1.32	54126	長身燧
	410	打製石器	AN1	E-24	Vb	3.00	1.79	0.60	2.42	88825	長身燧
76	411	打製石器	SH3	I-21	Va	3.25	1.75	0.63	2.36	83834	長身燧
	412	打製石器	SH3	E-18	Va	3.09	1.96	0.81	2.30	117148	長身燧
	413	打製石器	針尾・皮総	D-24	Vb	(2.45)	(1.32)	0.46	1.23	88194	長身燧
	414	打製石器	AN2	L-20	Va	(2.75)	1.80	0.40	1.27	79900	長身燧
	415	打製石器	AN2	I-14	V	(2.81)	1.83	0.45	1.68	14790	長身燧
	416	打製石器	AN2	J-20	Vc	(2.12)	2.28	0.70	2.14	80464	長身燧
	417	打製石器	AN2	I-20	Vc	2.50	1.13	0.28	1.02	80525	長身燧
	418	打製石器	CH2B	L-17	Va	3.01	(1.45)	0.50	1.60	52143	長身燧
	419	打製石器	AN2	K-14	Va	3.66	2.27	0.47	1.68	14159	長身燧
	420	打製石器	AN2	F-24	Va	3.80	2.40	0.30	3.21	87015	長身燧
	421	打製石器	CH2B	I-24	V	2.40	1.37	0.60	1.42	52089	長身燧
	422	打製石器	AN2	D-20	Va	0.90	1.80	0.30	0.32	117281	円・U脚燧
	423	打製石器	AN2	J-15	V	1.15	(1.10)	0.25	0.13	23160	円・U脚燧
	424	打製石器	上牛鼻	G-23	Va	1.40	1.55	0.30	0.41	84407	円・U脚燧
425	打製石器	針尾・皮総	H-16	V	(1.37)	1.50	0.22	0.29	10932	円・U脚燧	
426	打製石器	CH2C	J-16	V	1.75	(1.20)	0.25	0.28	22478	円・U脚燧	
427	打製石器	鷓鴣島	G-21	Va	1.80	(1.50)	0.30	0.49	116925	円・U脚燧	
428	打製石器	SH1	J-13	V	(1.85)	(1.10)	0.35	0.51	15262	円・U脚燧	
429	打製石器	針尾・皮総	E-22	Va	1.58	(1.40)	0.36	0.53	114061	円・U脚燧	
430	打製石器	AN2	H-21	Vb	(1.70)	(1.56)	0.27	0.39	88945	円・U脚燧	
431	打製石器	CH2C	H-24	Va	1.55	1.31	0.36	0.50	60354	円・U脚燧	
432	打製石器	CH2A	H-23	Vb	1.72	(1.12)	0.30	0.37	89014	円・U脚燧	
433	打製石器	AN2	G-21	Va	1.75	(1.50)	0.25	0.36	118570	円・U脚燧	
434	打製石器	CH2B	J-13	V	1.60	1.39	0.38	0.41	15240	円・U脚燧	
435	打製石器	AN2	G-22	Va	1.73	1.72	0.43	0.79	114523	円・U脚燧	
436	打製石器	CH2A	L-17	Va	1.93	1.63	0.44	0.88	51839	円・U脚燧	
437	打製石器	上牛鼻	H-17	Va	2.27	1.83	0.41	1.05	29843	円・U脚燧	
438	打製石器	CH2A	J-13	V	2.34	2.17	0.47	1.03	15253	円・U脚燧	
439	打製石器	針尾・皮総	K-15	V	2.38	1.92	0.37	0.92	14588	円・U脚燧	
440	打製石器	AN2	K-11	V	2.17	1.61	0.34	0.68	8625	円・U脚燧	
441	打製石器	鷓鴣島	F-17	Va	2.07	1.62	0.38	0.56	25548	円・U脚燧	

第18表 V層出土石器観察表 4

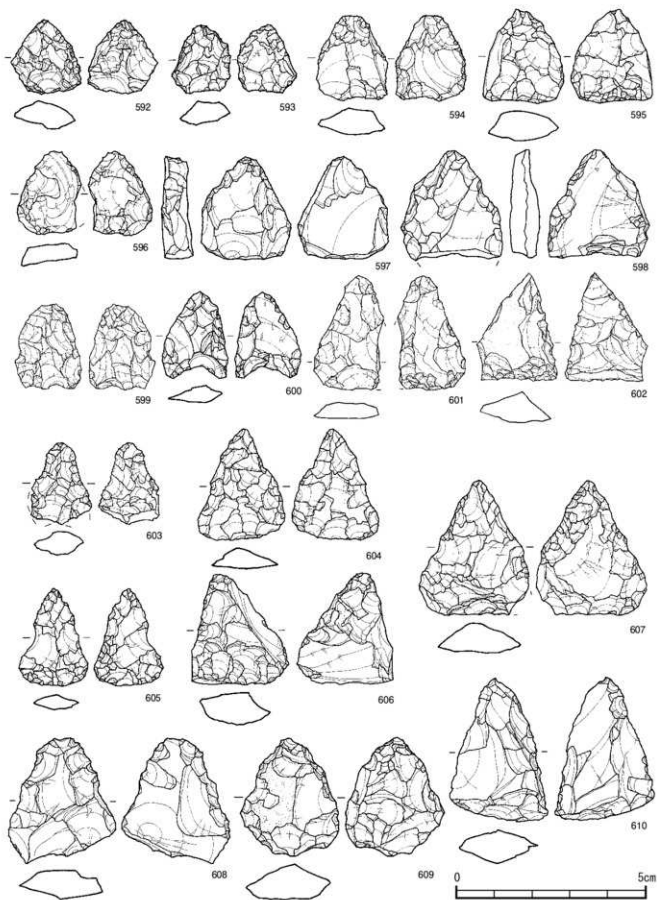
種別 番号	掲載 番号	器種	石材	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
77	442	打製石鏃	CR2A	J-14	V	2.55	(1.47)	0.40	0.68	15107	内・U脚鏃
	443	打製石鏃	CR2A	J-14	V	2.33	1.60	0.42	1.10	14900	内・U脚鏃
	444	打製石鏃	腰岳	E-24	V a	(2.20)	(1.88)	0.62	1.73	86832	内・U脚鏃
	445	打製石鏃	CR2C	J-21	V b	2.08	1.86	0.65	1.58	84916	内・U脚鏃
	446	打製石鏃	AN2	F-19	V a	2.30	(1.35)	0.30	0.67	117443	内・U脚鏃
	447	打製石鏃	AN1	G-22	V b	2.80	(1.50)	0.55	1.49	122100	内・U脚鏃
	448	打製石鏃	CR2B	J-14	V	(3.85)	(2.03)	0.56	1.59	12544	内・U脚鏃
	449	打製石鏃	AN2	E-20	V a	2.90	(2.05)	0.30	1.14	119068	内・U脚鏃
	450	打製石鏃	CR2A	F-18	V a	1.20	1.10	0.30	0.28	118735	五角形鏃
	451	打製石鏃	腰岳	E-20	V a	(1.30)	1.28	0.55	0.67	117403	五角形鏃
	452	打製石鏃	CR2A	H-23	V a	1.45	1.25	0.35	0.56	84432	五角形鏃
	453	打製石鏃	CR2C	F-24	V a	1.45	1.22	0.30	0.57	85478	五角形鏃
	454	打製石鏃	腰岳	I-18	V	1.62	1.19	0.35	0.51	36333	五角形鏃
	455	打製石鏃	腰岳	F-15	V a	(1.60)	(1.18)	0.30	0.52	6114	五角形鏃
	456	打製石鏃	CR2B	I-22	V a	1.75	1.20	0.40	0.73	82492	五角形鏃
	457	打製石鏃	三動	H-21	V a	(1.40)	(1.05)	0.25	0.37	130232	五角形鏃
	458	打製石鏃	総島	L-20	V c	(1.41)	(1.26)	0.43	0.57	85728	五角形鏃
	459	打製石鏃	SH3	D-20	V a	1.70	(1.30)	0.35	0.77	118449	五角形鏃
	460	打製石鏃	総島	I-14	V	1.92	1.51	0.39	0.78	14738	五角形鏃
	461	打製石鏃	SH3	H-16	V a	1.65	1.39	0.37	0.82	一括	五角形鏃
	462	打製石鏃	OC1B	K-17	V a	1.97	1.52	0.67	1.69	25329	五角形鏃
	463	打製石鏃	OH1A	E-20	V a	1.59	1.27	0.37	0.63	117327	五角形鏃
	464	打製石鏃	AN1	M-11	V	1.91	1.42	0.35	0.75	8721	五角形鏃
	465	打製石鏃	OH1B	K-14	V a	1.66	1.44	0.52	1.29	14161	五角形鏃
	466	打製石鏃	OH1B	E-21	V a	1.89	(1.54)	0.66	2.06	114986	五角形鏃
	467	打製石鏃	ケイ質貫刃	I-15	V	1.88	1.35	0.28	0.48	21294	五角形鏃
	468	打製石鏃	AN2	K-13	V a	2.51	1.40	0.35	1.23	21725	五角形鏃
	469	打製石鏃	OC2B	K-15	V	1.93	1.48	0.59	1.12	22761	五角形鏃
78	470	打製石鏃	OP	F-21	V a	1.14	1.29	0.26	0.19	114648	五角形鏃
	471	打製石鏃	腰岳	F-24	V a	(1.42)	(1.32)	0.34	0.47	85497	五角形鏃
	472	打製石鏃	AN1	I-22	V c	(1.22)	(1.32)	0.37	0.46	86556	五角形鏃
	473	打製石鏃	AN1	I-17	V	1.47	1.45	0.42	0.56	27966	五角形鏃
	474	打製石鏃	針葉	E-24	V b	(1.32)	1.52	0.49	0.81	88827	五角形鏃
	475	打製石鏃	桑ノ木津留	D-20	V a	1.45	(1.35)	0.30	0.59	117303	五角形鏃
	476	打製石鏃	桑ノ木津留	E-23	V b	1.40	(1.33)	0.30	0.55	114428	五角形鏃
	477	打製石鏃	CR2B	I-21	V b	1.79	1.71	0.39	1.07	83881	五角形鏃
	478	打製石鏃	桑ノ木津留	F-21	V a	(2.10)	(1.58)	0.75	2.02	112360	五角形鏃
	479	打製石鏃	腰岳	G-20	V a	1.30	(0.95)	0.28	0.27	118382	五角形鏃
	480	打製石鏃	OH1B	H-21	V a	(1.35)	1.45	0.30	0.60	82312	五角形鏃
	481	打製石鏃	上牛鼻	D-22	V a	(1.30)	(1.40)	0.30	0.52	114147	五角形鏃
	482	打製石鏃	OC1B	G-20	V a	1.50	1.28	0.33	0.35	118396	五角形鏃
	483	打製石鏃	針尾・総島	I-21	V b	1.74	1.32	0.34	0.47	54332	五角形鏃
	484	打製石鏃	CR2B	E-24	V a	1.75	1.40	0.45	0.79	86827	五角形鏃
	485	打製石鏃	OC1B	H-21	V a	(1.62)	(1.33)	0.35	0.36	85558	五角形鏃
	486	打製石鏃	OR1A	E-19	V a	1.38	1.46	0.37	0.44	117427	五角形鏃
	487	打製石鏃	OC1B	H-22	V a	1.65	1.45	0.25	0.46	86678	五角形鏃
	488	打製石鏃	CC1C	H-21	V a	(1.81)	1.31	0.40	0.48	86994	五角形鏃
	489	打製石鏃	OC1B	H-20	V b	1.89	1.44	0.32	0.44	120001	五角形鏃
	490	打製石鏃	OC1B	L-20	V a	(1.35)	(1.30)	0.26	0.40	79088	五角形鏃
	491	打製石鏃	CR2C	H-21	V a	(1.45)	(1.30)	0.35	0.60	84876	五角形鏃
	492	打製石鏃	OC2A	E-22	V a	(1.61)	(1.25)	0.32	0.54	115034	五角形鏃
	493	打製石鏃	CH	F-22	V a	(1.30)	1.20	0.35	0.37	112236	五角形鏃
	494	打製石鏃	総島	I-19	V c	2.08	(1.48)	0.38	0.83	80723	五角形鏃
	495	打製石鏃	CR2B	J-19	V a	2.00	1.64	0.43	1.54	78537	五角形鏃
	496	打製石鏃	腰岳	E-22	V a	(1.90)	1.38	0.35	0.52	114027	五角形鏃
	497	打製石鏃	腰岳	M-14	V a	(2.30)	1.41	0.36	0.77	74684	五角形鏃
	498	打製石鏃	OC1B	E-22	V a	(1.60)	(1.12)	0.25	0.27	116410	五角形鏃
	499	打製石鏃	AN2	K-20	V b	(2.08)	(1.36)	0.30	0.52	83510	五角形鏃
	500	打製石鏃	総島	F-23	V b	(2.65)	(1.59)	0.41	0.69	82433	五角形鏃
	501	打製石鏃	AN2	G-15	V	2.10	1.70	0.38	0.57	8556	五角形鏃
	502	打製石鏃	AN2	G-20	V b	(2.60)	(1.50)	0.40	0.61	119332	五角形鏃
	503	打製石鏃	針尾・総島	G-19	V a	(2.80)	(1.45)	0.25	0.66	117975	五角形鏃
	504	打製石鏃	針尾・総島	H-22	V b	(1.90)	(1.72)	0.30	0.50	89009	五角形鏃
	505	打製石鏃	AN2	J-17	V a	(2.05)	1.70	0.30	0.48	25783	五角形鏃
	506	打製石鏃	H*2	E-24	V b	(2.56)	(1.90)	0.56	1.43	88213	五角形鏃
	507	打製石鏃	上牛鼻	L-18	V a	(2.40)	(1.80)	0.35	1.05	48933	五角形鏃



第 81 图 V 层出土石器 11 (VI 类①)



第 82 图 V 层出土石器 12 (V 类②)



第 83 图 V 层出土石器 13 (VI 類③)

459・461・463は長幅比が小さく、屈折部を上部に設けた将棋の“駒型”で、先端部は鋭利さを欠く。464の先端部は鋭く、467～469は長身を呈している。471～484は屈折部が低い位置にあり明確に内側に屈折する一群で、その中央部をU字状に挟めるものと舌状に尖るものがある。前者が471～476や479～484で、後者が477・478である。なお、前者の471～476では長幅に差が無いが、479～484では長軸が卓越して長身を呈している。

485～494では屈曲部が棘状に突出する。486と487、485と488と489も相似形で、前者は上部、後者は下部とそれぞれ屈折位置が異なる。なお、後者はいわゆる飛行機織に近い。495は未製品ないしはリダクション、496と497は腰岳産黒曜石を使用、500～506はその形状から、五角形の変容形とした。503と505の側縁部は鋸歯状に仕上げ、501と514もその部類とみられる。なお、515の両側縁下部の挟入部は個性的で、鋸歯縁と解すべきか結束目的と解すべきか課題である。また、511と512の側縁も酷似している。

石材に関しては、503・514・515の鋸歯縁石礫が針尾・淀姫産黒曜石に限られることは注目される。また、棘状に突出し相似形と指摘した485～514では玉髄が多用されている。

オ V類 (非対称鎌) (第80図 516～523)

一部は製作途中を含む可能性もあるが、左右非対称を成すものとして8点を抽出した。

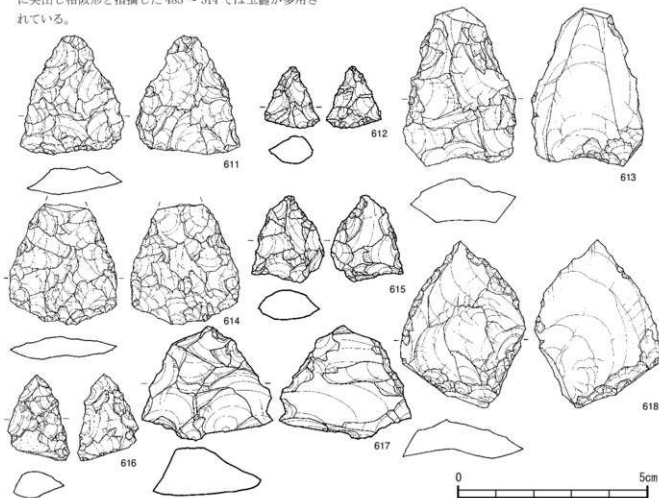
516や517がその典型で、516・518～520では右側縁部が、517では左側縁部が長く仕上げられる。

カ VI類 (欠損品及び未製品) (第81～84図 524～618)

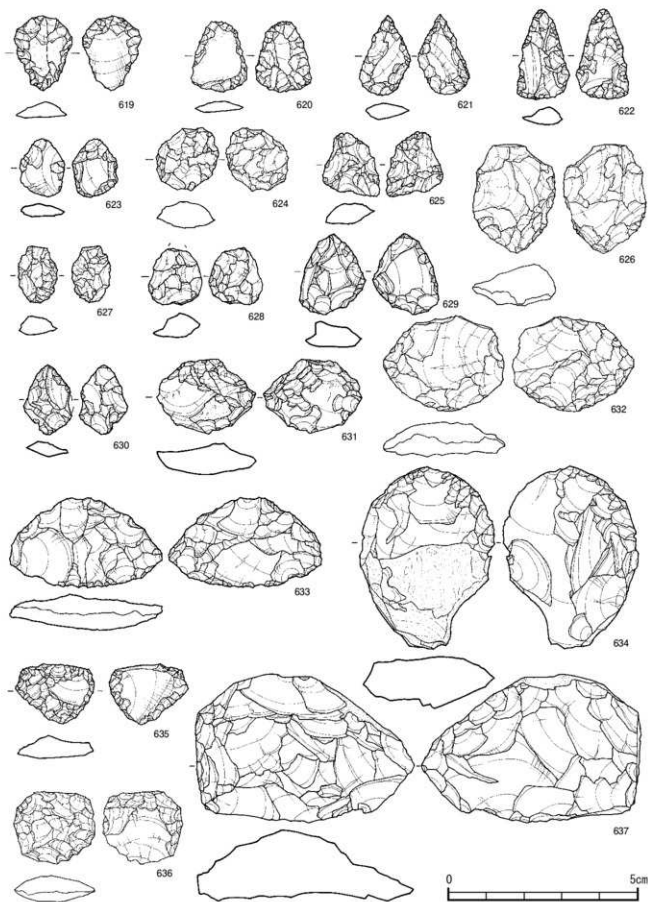
524～538・569は先端部が、539～568は基部や脚部が欠損している。

575～591は剥離面を多く残す資料で、579や580は完成品に近く、他は製作途中及びその段階での欠損品とみられる。

592～618は未製品と判断したもので、両面の剥離面が多く残され、体部も厚い状態で放棄されている。両面整形が行われた595・599・607・609の体部は厚い状態で残され、597・608・613は側縁部への粗い一次剥離で終了している。



第84図 V層出土石器14 (VI類④)



第 85 图 V 层出土石器 15 (周边加工石器)

第19表 V層出土石器観察表5

種別 番号	掲載 番号	器種	石材	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
79	508	打製石鏃	CR2A	M-15	V b	(1.67)	1.91	0.34	0.64	79428	五角形鏃
	509	打製石鏃	腰岳	J-15	V	(2.40)	(1.17)	0.43	0.73	22767	五角形鏃
	510	打製石鏃	AN1	K-19	V a	1.93	(1.54)	0.47	1.04	78349	五角形鏃
	511	打製石鏃	AN2	G-22	V a	2.15	1.70	0.29	0.61	86899	五角形鏃
	512	打製石鏃	CR2B	J-16	V	2.30	(1.60)	0.30	1.09	22372	五角形鏃
	513	打製石鏃	CR2A	I-18	V	1.42	1.14	0.22	0.27	36326	五角形鏃
	514	打製石鏃	針尾・定鋸	K-18	V a	1.62	1.52	0.27	0.37	25832	五角形鏃
	515	打製石鏃	針尾・定鋸	E-18	V a	(2.90)	(2.60)	0.45	2.23	117169	五角形鏃
	516	打製石鏃	桑ノ木津留	G-21	V a	(1.27)	1.20	0.42	0.41	118293	非対称鏃
	517	打製石鏃	桑ノ木津留	K-19	V a	1.20	1.00	0.30	0.23	78319	非対称鏃
80	518	打製石鏃	OB	L-20	V c	(1.36)	(1.29)	0.25	0.25	81439	非対称鏃
	519	打製石鏃	AN2	G-18	V	1.95	1.50	0.30	0.59	30515	非対称鏃
	520	打製石鏃	日東	E-24	V a	2.14	1.81	0.73	1.61	85458	非対称鏃
	521	打製石鏃	肥島	F-23	V a	2.20	1.70	0.45	1.13	85503	非対称鏃
	522	打製石鏃	AN1	M-13	V a	1.69	1.30	0.32	0.47	14394	非対称鏃
	523	打製石鏃	日東	F-24	V b	(2.24)	(1.90)	0.59	1.82	95582	非対称鏃
	524	打製石鏃	OH1B	J-15	V	(1.38)	1.35	0.35	0.67	22769	欠損品
	525	打製石鏃	AN2	G-19	V a	1.30	1.40	0.45	0.69	118364	欠損品
	526	打製石鏃	桑ノ木津留	H-23	V a	(1.05)	1.60	0.30	0.32	89016	欠損品
	527	打製石鏃	三輪	G-20	V a	(0.90)	(0.95)	0.30	0.21	118383	欠損品
81	528	打製石鏃	腰岳	E-22	V a	(0.90)	(0.90)	0.30	0.23	114033	欠損品
	529	打製石鏃	CH	E-24	V a	(0.83)	1.63	0.25	0.32	85471	欠損品
	530	打製石鏃	桑ノ木津留	L-20	V a	(1.28)	1.54	0.24	0.46	78655	欠損品
	531	打製石鏃	OC1B	G-18	V	(1.25)	1.58	0.40	0.74	30542	欠損品
	532	打製石鏃	AN2	I-21	V b	(1.60)	1.78	0.52	1.45	83761	欠損品
	533	打製石鏃	肥島	K-10	V b	(1.80)	1.48	0.48	0.87	4191	欠損品
	534	打製石鏃	上牛鼻	J-15	V	(2.30)	(1.60)	0.40	1.23	23135	欠損品
	535	打製石鏃	AN2	G-22	V a	(1.88)	(1.96)	0.37	1.11	85517	欠損品
	536	打製石鏃	AN2	I-21	V b	(1.30)	2.35	0.55	1.90	84206	欠損品
	537	打製石鏃	三輪	J-18	V a	(1.70)	(2.48)	0.46	1.14	26133	欠損品
82	538	打製石鏃	AN1	F-20	V a	(1.45)	(1.57)	0.43	0.96	118502	欠損品
	539	打製石鏃	腰岳	E-21	V b	1.05	(0.90)	0.20	0.21	120941	欠損品
	540	打製石鏃	上牛鼻	H-23	V a	(1.03)	(0.91)	0.23	0.14	63371	欠損品
	541	打製石鏃	三輪	J-20	V a	(1.20)	(0.95)	0.20	0.17	79839	欠損品
	542	打製石鏃	OC1B	I-22	V a	1.07	(0.95)	0.29	0.15	81034	欠損品
	543	打製石鏃	三輪	D-23	V a	(1.35)	(1.00)	0.35	0.39	112010	欠損品
	544	打製石鏃	針尾・定鋸	K-22	V b	(1.14)	1.00	0.37	0.25	54210	欠損品
	545	打製石鏃	AN1	L-18	V a	(1.15)	(0.94)	0.30	0.19	51899	欠損品
	546	打製石鏃	AN2	K-17	V a	(1.50)	(1.00)	0.32	0.33	25800	欠損品
	547	打製石鏃	三輪	J-19	V a	1.05	(0.98)	0.15	0.11	79499	欠損品
83	548	打製石鏃	肥島	I-19	V a	1.45	(1.20)	0.50	0.53	36451	欠損品
	549	打製石鏃	AN1	I-20	V a	1.69	(1.00)	0.31	0.43	79541	欠損品
	550	打製石鏃	AN1	F-21	V a	(1.50)	(1.32)	0.33	0.43	114587	欠損品
	551	打製石鏃	CR2C	J-23	V	(1.76)	(1.23)	0.38	0.59	49975	欠損品
	552	打製石鏃	針尾・定鋸	I-18	V	(1.65)	(0.73)	0.35	0.37	36421	欠損品
	553	打製石鏃	ケイ質頁岩	L-17	V a	1.93	(0.96)	0.38	0.70	49655	欠損品
	554	打製石鏃	SH	J-16	V	(1.52)	(1.37)	0.36	0.60	21972	欠損品
	555	打製石鏃	腰岳	J-20	V a	(1.52)	(1.43)	0.44	0.71	99583	欠損品
	556	打製石鏃	CR2B	J-14	V	1.61	(1.15)	0.40	0.64	15111	欠損品
	557	打製石鏃	桑ノ木津留	D-23	V a	(1.45)	(1.45)	0.35	0.45	116352	欠損品
84	558	打製石鏃	上牛鼻	E-22	V a	1.95	(1.38)	0.43	0.75	114031	欠損品
	559	打製石鏃	上牛鼻	L-20	V b	(2.02)	(1.34)	0.41	0.98	99610	欠損品
	560	打製石鏃	針尾・定鋸	G-20	V a	(1.54)	(1.35)	0.44	0.65	117814	欠損品
	561	打製石鏃	肥島	H-20	V b	(1.52)	(1.55)	0.40	0.69	118767	欠損品
	562	打製石鏃	桑ノ木津留	J-19	V c	(1.54)	(1.53)	0.67	1.39	80604	欠損品
	563	打製石鏃	上牛鼻	G-5	V a	(1.78)	(1.69)	0.44	1.02	143514	欠損品
	564	打製石鏃	針尾・定鋸	K-16	V	(2.50)	(2.10)	0.40	1.51	21751	欠損品
	565	打製石鏃	SH2	K-13	V	(2.23)	(1.32)	0.37	0.92	17831	欠損品
	566	打製石鏃	針尾・定鋸	K-20	V c	(2.65)	(1.73)	0.48	1.29	80424	欠損品
	567	打製石鏃	AN2	L-16	V	2.35	(1.70)	0.35	0.94	14043	欠損品
85	568	打製石鏃	AN1	D-20	V a	1.93	(1.48)	0.25	0.66	115575	欠損品
	569	打製石鏃	三輪	E-23	V a	(1.85)	1.90	0.60	1.52	118247	欠損品
	570	打製石鏃	腰岳	L-12	V	(1.40)	(0.90)	0.25	0.28	17283	欠損品
	571	打製石鏃	日東	F-23	V b	(2.00)	(1.58)	0.54	1.26	88116	欠損品
	572	打製石鏃	針尾・定鋸	E-23	V a	(1.80)	(0.80)	0.20	0.17	112123	欠損品
	573	打製石鏃	三輪	I-24	V a	(1.65)	(1.19)	0.70	1.07	58639	欠損品

第20表 V層出土石器観察表6

挿入番号	掲載番号	器種	石材	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
82	574	打製石器	CH	H-7	V a	(1.83)	(1.22)	0.28	0.57	142248	欠損品
	575	打製石器	三船	K-20	V a	1.11	0.93	0.20	0.14	79268	欠損品
	576	打製石器	AN7	F-15	V	1.35	1.18	0.40	0.30	21373	欠損品
	577	打製石器	三船	G-23	V a	1.38	1.29	0.40	0.39	88884	欠損品
	578	打製石器	SH3	L-20	V a	1.50	1.20	0.29	0.31	80370	欠損品
	579	打製石器	CH2A	F-23	V a	1.75	1.30	0.30	0.55	87016	欠損品
	580	打製石器	CH2A	K-12	V a	2.05	1.88	0.30	0.90	21675	欠損品
	581	打製石器	CH2A	F-20	V a	1.77	1.55	0.25	0.43	79666	欠損品
	582	打製石器	CH2A	F-21	V b	2.00	1.73	0.31	0.94	83963	欠損品
	583	打製石器	AN2	K-18	V c	(1.96)	1.70	0.26	0.79	80310	欠損品
	584	打製石器	CH2A	F-20	V a	(1.89)	(1.94)	0.30	0.90	85953	欠損品
	585	打製石器	CH2A	F-23	V	1.58	1.32	0.31	0.48	49746	欠損品
	586	打製石器	AN1	C-25	V a	2.09	1.34	0.30	0.96	69923	欠損品
	587	打製石器	AN2	F-22	V c	(2.90)	(1.88)	0.30	1.79	84474	欠損品
	588	打製石器	CC1C	K-18	V a	(1.35)	(0.91)	0.25	0.21	25879	欠損品
	589	打製石器	AN2	K-20	V c	(2.00)	(1.33)	0.37	0.62	80414	欠損品
	590	打製石器	AN2	J-20	V a	2.58	2.00	0.32	1.07	75998	欠損品
	591	打製石器	AN1	F-20	V c	2.50	1.99	0.60	1.50	80534	欠損品
	592	打製石器	三船	H-16	V	1.91	1.84	0.71	2.02	10934	未製品
	593	打製石器	桑ノ木津留	H-21	V a	1.75	1.55	0.65	1.70	86977	未製品
	594	打製石器	CC2A	F-22	V a	2.29	1.87	0.74	2.84	112185	未製品
	595	打製石器	CH2A	J-15	V	2.50	2.15	0.70	4.54	22790	未製品
	596	打製石器	三船	F-23	V a	2.18	1.64	0.55	1.81	112119	未製品
	597	打製石器	CH2B	L-18	V b	2.65	2.40	0.85	6.08	81398	未製品
	598	打製石器	CC2B	F-18	V	(2.90)	2.65	0.80	5.93	37704	未製品
	599	打製石器	AN2	K-17	V a	2.29	1.75	0.60	2.45	25318	未製品
	600	打製石器	AN	H-18	V	2.30	1.75	0.45	1.45	30670	未製品
	601	打製石器	SH2	L-17	V a	3.03	(1.77)	0.50	2.54	51846	未製品
	602	打製石器	AN2	M-17	V b	2.83	2.10	0.90	4.04	51230	未製品
	603	打製石器	CC1B	K-13	V a	(2.12)	(1.58)	0.63	1.84	21727	未製品
	604	打製石器	CH2B	M-19	V c	2.96	2.30	0.60	3.35	73685	未製品
	605	打製石器	CH2A	K-14	V a	2.60	1.80	0.40	1.71	14189	未製品
606	打製石器	針尾・産総	H-21	V b	2.93	2.51	0.88	5.88	119219	未製品	
607	打製石器	CH2B	D-17	V a	3.55	(2.95)	1.10	9.38	117236	未製品	
608	打製石器	AN2	J-22	V b	3.25	2.80	0.75	6.71	83296	未製品	
609	打製石器	CH2B	H-18	V	3.10	2.60	1.00	7.99	34664	未製品	
610	打製石器	ケイ質頁岩	K-19	V c	3.80	2.55	0.88	6.98	79291	未製品	
611	打製石器	CH2B	L-16	V	3.14	2.71	0.73	5.12	14057	未製品	
612	打製石器	桑ノ木津留	J-19	V a	1.61	1.35	0.70	1.60	80080	未製品	
613	打製石器	SH2	L-15	V a	4.17	2.97	1.47	16.42	一括	未製品	
614	打製石器	CH2B	M-17	産総	(3.20)	2.83	0.64	5.91	59291	未製品	
615	打製石器	CC1B	G-20	V b	2.25	1.86	0.88	3.40	119306	未製品	
616	打製石器	三船	K-13	V	2.29	1.51	0.70	1.97	一括	未製品	
617	打製石器	SH2	J-14	V	3.00	3.50	1.25	9.90	15137	未製品	
618	打製石器	SH2	J-17	V b	4.44	3.30	1.07	11.25	26111	未製品	
619	周辺加工石器	磨岳	H-22	V a	1.96	1.52	0.57	1.20	83391	削器	
620	周辺加工石器	SH2	D-25	V a	1.85	1.48	0.39	1.04	一括	削器	
621	周辺加工石器	SH3	F-22	V a	2.06	1.35	0.55	1.33	112272	削器	
622	周辺加工石器	桑ノ木津留	F-19	V a	2.30	1.34	0.47	1.12	115551	削器	
623	周辺加工石器	AN1	F-19	V a	1.52	1.18	0.33	0.58	115545	削器	
624	周辺加工石器	OB	D-23	V a	1.65	1.65	0.70	1.73	116369	削器	
625	周辺加工石器	三船	F-19	V a	1.68	1.44	0.55	1.20	118728	削器	
626	周辺加工石器	CH2A	G-21	V a	2.88	2.18	1.09	6.55	116526	削器	
627	周辺加工石器	三船	G-23	V b	1.50	1.03	0.56	0.84	88975	削器	
628	周辺加工石器	桑ノ木津留	H-14	V a	(1.45)	1.40	0.65	1.25	9034	削器	
629	周辺加工石器	SH2	J-15	V	2.15	1.75	0.65	2.31	22809	削器	
630	周辺加工石器	日東	F-21	V a	1.80	(1.25)	0.40	0.78	112414	削器	
631	周辺加工石器	桑ノ木津留	L-17	V a	2.00	2.60	0.80	3.84	49049	削器	
632	周辺加工石器	CC1B	F-18	V a	2.50	3.20	0.92	62.20	118708	削器	
633	周辺加工石器	CH2B	H-18	V	2.40	4.05	0.90	7.15	34679	削器	
634	周辺加工石器	針尾・産総	J-19	V c	4.85	3.60	1.35	20.20	80037	削器	
635	周辺加工石器	磨岳	G-19	V b	1.59	2.04	0.68	1.83	119370	削器	
636	周辺加工石器	CH2B	F-23	V a	1.99	2.18	0.71	2.90	63328	削器	
637	周辺加工石器	AN2	M-20	V c	3.96	5.78	1.88	41.53	145921	削器	
638	石匙	OP	G-19	V a	1.52	(1.50)	0.35	0.56	119911	横型	
639	石匙	CC1B	F-18	V a	2.31	2.12	0.52	1.69	115515	横型	

(3) 周辺加工石器 (第 85 図 619 ~ 637)

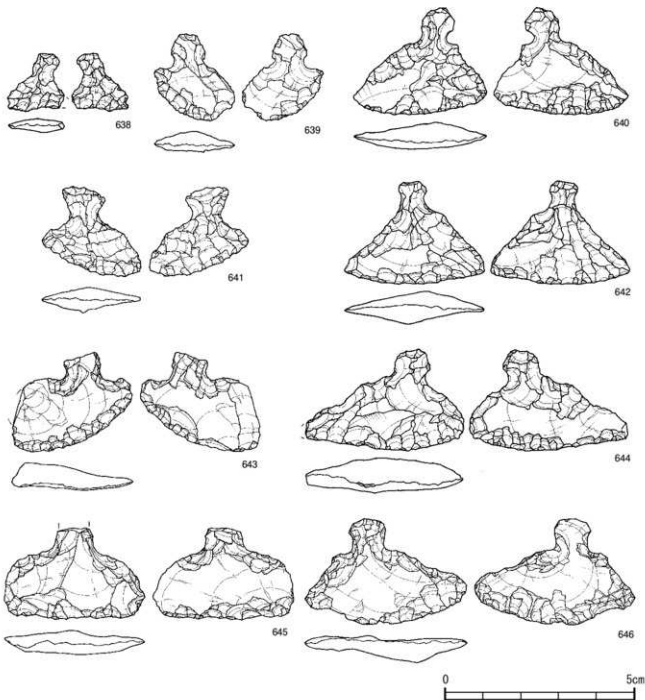
621・622 の先端部は尖頭状に仕上げ、619・620・623 では体部を薄く仕上げ、いずれも腹面を多く残し、打痕部を取り除く二次加工が認められる。

624・626・627・628 は小型であるが、両面を加工することから凸レンズ状を呈している。631・632・633 については横長に図示したが、削器状の機能も考慮される。634 の上部は端正な曲線を呈している。633 は両面に多数の剥離痕が残されるが、機能は明らかでない。

(4) 石匙 (第 86 ~ 90 図 638 ~ 669)

剥片の一縁を刃部とし、対峙する側縁部の一部に両側から快入調整を行いその部分を擴部とするものを一括した。

638 は小型で左右非対称、639・641 は小型で斜刃、643・647 はその拡大版である。なお、645 以外の形状はいずれも左右非対称で、擴み部も片方に偏る傾向がみられる。638 は右端が、643・644・659 では左端が、657 では両端が、646・648・654 では刃部の一部が欠損する。

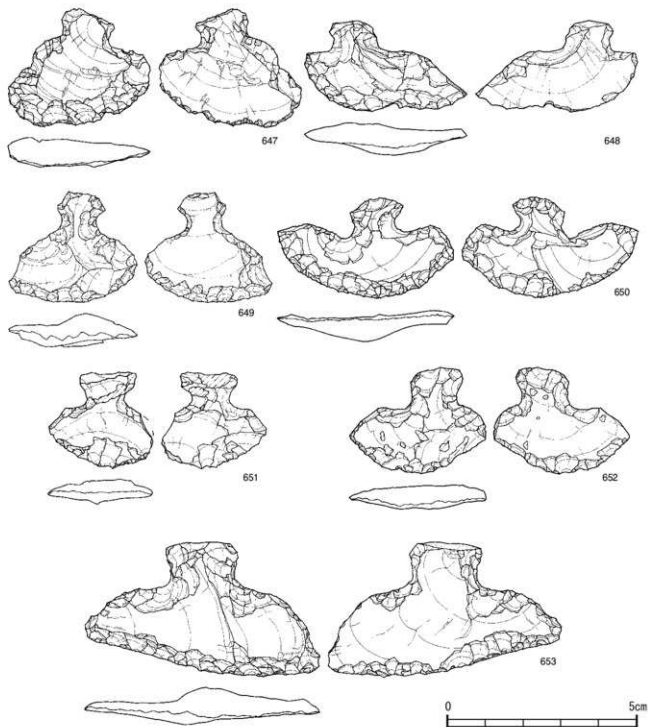


第 86 図 V 層出土石器 16 (石匙①)

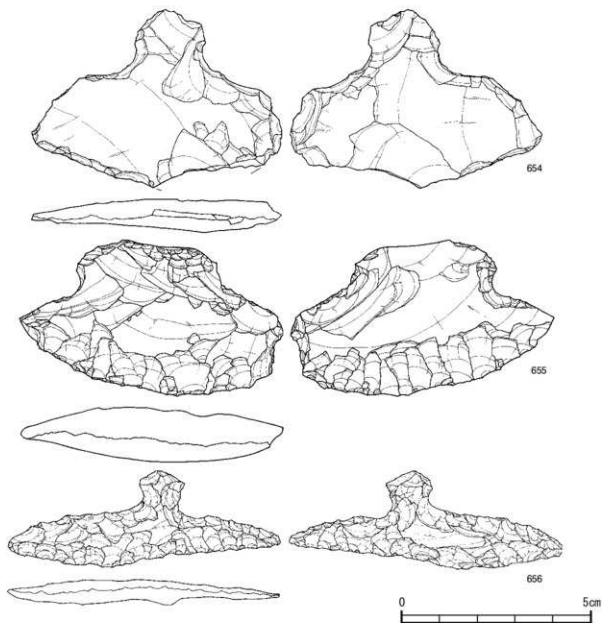
刃部では、639・641・643等が斜刃、640・642・645等が直刃、648・650・652・655等の丸刃が見られ、656はいわゆるサブマリーン型で直刃を成し、サブマリーン型は縄文時代中期以降盛行することが知られている。660は刃部はリダクション石器で、661と662の両側もその可能性が考えられる。664・665は縦型と判断している。

666～669も両端に抉入部をもつもので、その機能は石匙とみられる。

647は三船産黒曜石、655が姫島産黒曜石、642・645・653・656・659・666～668が安山岩で、他は玉髄及びチャートが使用されていることから、玉髄やチャート等の硬質・緻密な石材が石匙に選択されたと言える。



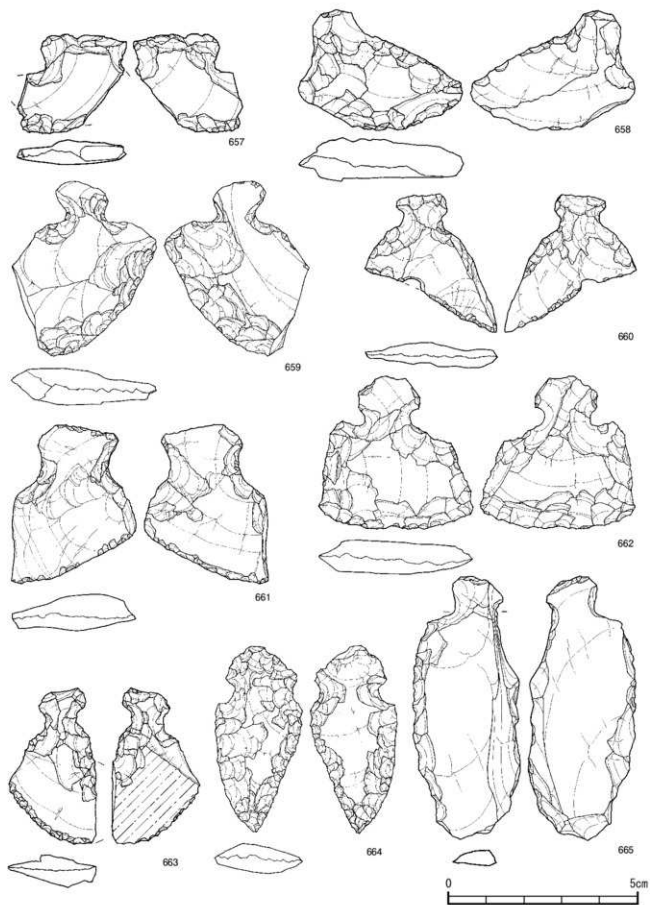
第 87 図 V層出土石器 17 (石匙②)



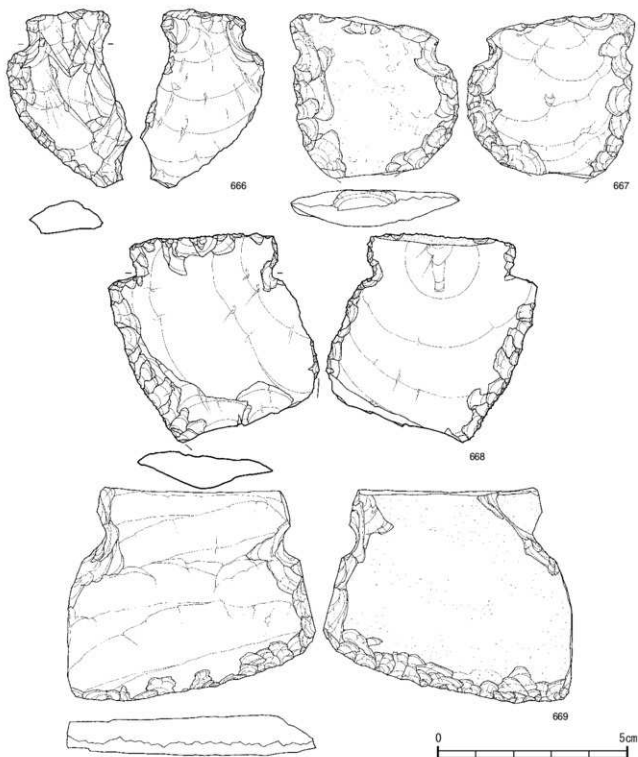
第 88 図 V層出土石器 18 (石匙③)

第 21 表 V層出土石器観察表 7

挿図 番号	掲載 番号	器種	石材	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
86	640	石匙	CC2A	D-21	V a	3.50	2.80	0.65	4.42	118039	模型
	641	石匙	CH2A	D-20	V a	2.33	2.61	0.68	2.28	117296	模型
	642	石匙	AN2	H-21	V b	2.70	3.70	0.80	4.79	119500	模型
	643	石匙	CH2A	J-16	V	2.63	(3.15)	0.72	4.05	21830	模型
	644	石匙	CH2A	E-19	V b	2.70	(4.20)	0.90	7.05	117424	模型
	645	石匙	AN2	K-16	V	(2.42)	3.70	0.64	4.95	21748	模型
87	646	石匙	CH2A	J-21	V a	2.80	4.24	0.71	4.50	81056	模型
	647	石匙	三杉	F-7	V a	3.10	3.76	0.78	6.10	141566	模型
	648	石匙	CH3A	C-25	V a	2.40	4.23	0.84	5.85	70429	模型
	649	石匙	CC1B	G-17	V a	2.91	3.33	0.90	4.91	28326	模型
	650	石匙	CC2B	J-23	V	2.63	4.58	0.79	5.23	50112	模型
	651	石匙	CC1B	L-20	V a	2.54	(2.74)	0.68	2.83	79094	模型
	652	石匙	CC1C	J-14	V	2.78	3.57	0.64	4.37	12615	模型
	653	石匙	AN2	K-22	V	3.57	6.20	1.02	12.29	43461	模型



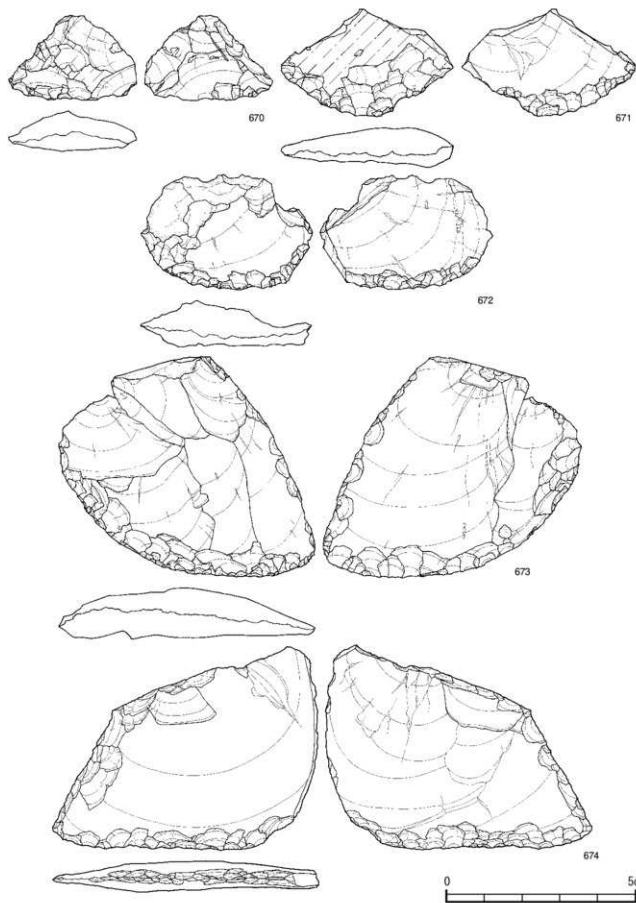
第89图 V层出土石器19(石匙④)



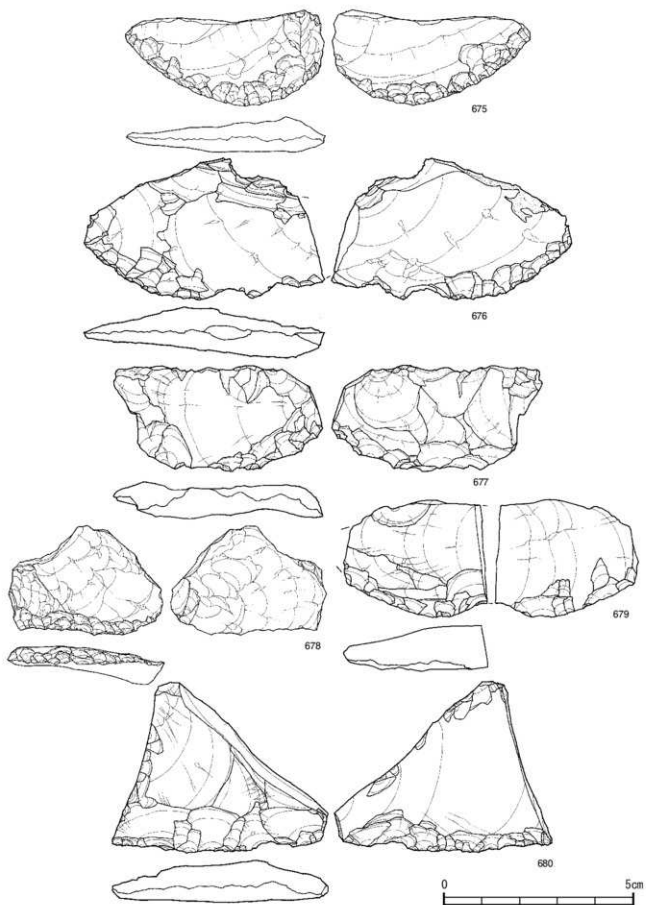
第 90 図 V層出土石器 20 (石器⑤)

第 22 表 V層出土石器観察表 8

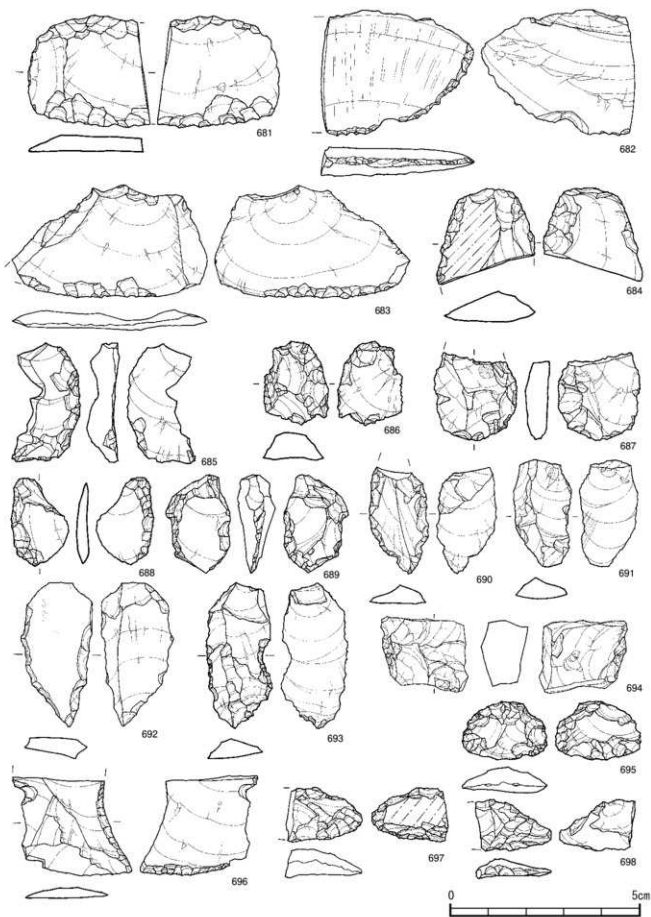
挿図 番号	掲載 番号	器種	石材	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
88	654	石歌	IF2	E-22	V a	4.70	6.60	0.90	20.70	114099	模型
	655	石歌	肥島	S-15	V b	4.12	6.91	1.48	34.98	79460	模型
	656	石歌	AN2	G-18	V	2.59	7.17	0.75	7.25	33944	模型
	657	石歌	CH1C	I-15	V	2.56	(2.86)	0.60	4.70	21426	模型
89	658	石歌	CC1C	S-15	V a	3.19	4.37	1.17	10.76	19285	模型
	659	石歌	AN2	I-11	V	4.64	3.81	0.97	11.51	23622	模型



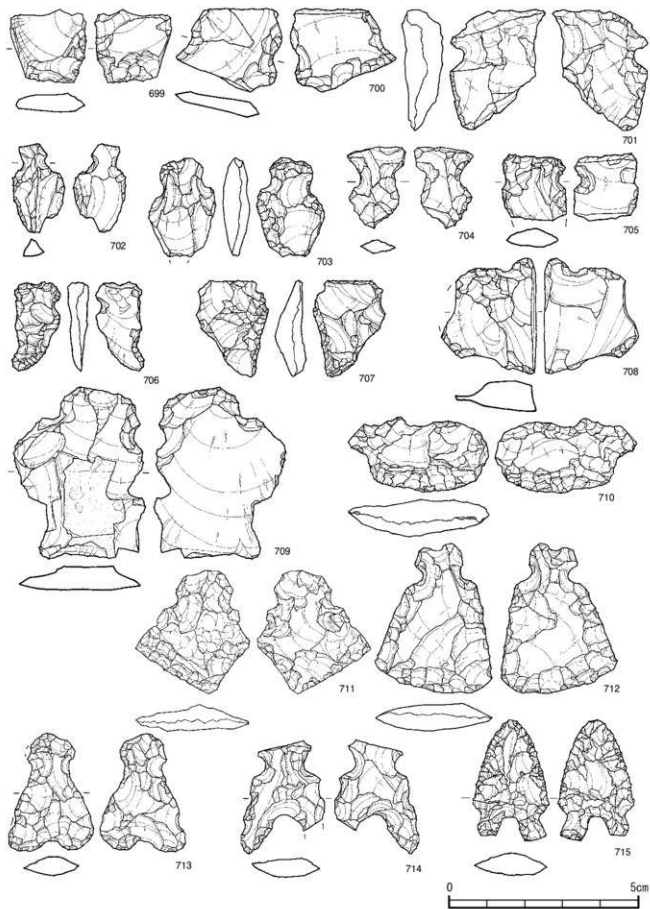
第91图 V层出土石器21(削器①)



第 92 图 V 层出土石器 22 (附器 2)



第93图 V层出土石器23(附器③)



第 94 图 V 层出土石器 24 (块入石器)

(5) 削器等 (第 91 ~ 93 図 670 ~ 698)

定型化は見られないが、刃部形成等の二次加工が行われた一群を一括している。

670 ~ 672 は横広剥片の端部に刃部形成を加えたもので、石匙様の刃部が見られる。673・674 も同様で、剥片端部に鋭角な刃部が付けられるが、安山岩とホルンフェルスを使用している。675 ~ 683 は横長型でいずれも欠損する。なお、679 は縦型の可能性もあり、678 は 1 点のみ片刃で、腹面から刃部加工を行っている。

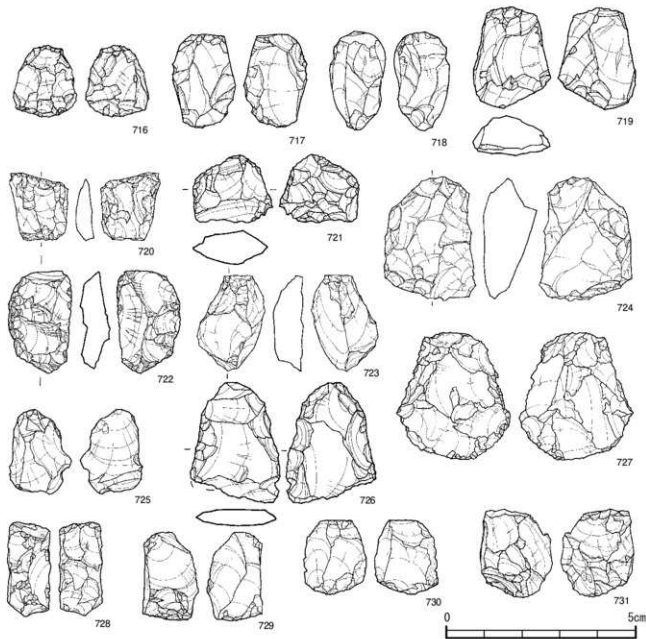
684 ~ 693 は、縦長な不定形剥片に二次加工や使用痕が認められる。695 は周辺加工石器、697 と 698 は小型石匙の一部とも想定できる。

(6) 挟入石器 (第 94 図 699 ~ 715)

699 ~ 715 は、楕円状あるいは体部の一角に挟入部をもつもので、一部は石匙の楕部の可能性もある。

701 の上部挟入部は、左右で深さが異なる。702 ~ 705 は類似し、706・707 の剥片使用も類似する。708 は上部のみに、709 では上部の左右に挟入部をもつ。

713・714 も石匙の楕部に類似する頭部をもち、下縁部の中央部が挟られるもので、714 の挟入部は深く、楕部上部と下縁部左側が欠損する。使用石材はハリ質安山岩で共通する。715 は琵琶産黒曜石を使用し、ドーム状の頭部と体下部、下縁部中央の 3 箇所に挟入部をもつもので、体部の最大圧が 0.65 cm と一般的な石匙より厚く仕上げられている。縦型の 712 もハリ質安山岩を使用し、そ



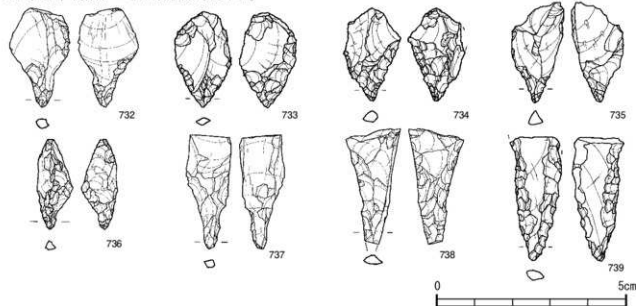
第 95 図 V 層出土石器 25 (楕形石器)

の形状及び使用石材の共通性も含めて、縄文時代早期前半資料に類似するが、頭部中央部の挿入が異なる。

(7) 楔形石器 (第95図 716～731)

基本的に、平面形が四辺形を呈し、縦断面形状が凸レンズ状で、頭部に上部からの調整剥離や打撃痕、端部に下部からの調整剥離や使用痕、衝撃痕の認められる16点を抽出対した。

716・721・725・726の下部端部は欠損し、727はマスカリ状に下部が広がり丸刃を呈す。716・721・725・726・727等では、側縁部への調整剥離痕が見られる。



第96図 V層出土石器26 (石錐)

第23表 V層出土石器観察表 9

種別 掲載 番号	掲載 番号	器種	石材	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
89	660	石錐	CC1C	K-21	V b	3.61	3.42	0.68	3.82	83569	
	661	石錐	CR2B	L-20	V a	4.20	3.25	0.96	10.87	78660	
	662	石錐	AN2	E-14	V b	4.02	4.07	0.89	13.18	111107	
	663	石錐	CC1B	G-21	V a	4.10	2.31	0.84	4.34	116506	
	664	石錐	CC2B	H-14	V a	4.91	2.31	0.83	8.38	8563	
	665	石錐	SH2	I-19	V	6.90	2.80	0.80	14.96	37473	
90	666	石錐	AN1	I-19	V	4.67	3.25	0.95	12.65	36440	
	667	石錐	AN1	D-25	V a	(4.35)	4.46	1.00	21.37	67343	
	668	石錐	AN1	G-20	V a	(5.50)	5.60	0.95	25.70	118020	
	669	石錐	CC1B	K-17	V a	5.66	6.54	1.11	35.45	25304	
91	670	削器	SH3	N-16	V b	2.25	3.38	1.04	4.40	79415	
	671	削器	CC1B	F-22	V a	2.83	4.56	1.04	10.90	112222	
	672	削器	CC1B	D-20	V a	3.00	4.52	1.22	12.54	117276	
	673	削器	AN2	G-18	V a	5.82	6.80	1.30	50.00	122445	
	674	削器	HF2	L-15	V	5.38	6.97	0.78	31.50	14068	
	675	削器	CR2B	H-16	V a	2.51	5.24	0.96	10.76	11477	
92	676	削器	AN1	D-23	V a	3.75	(6.35)	1.05	25.21	114240	
	677	削器	AN2	G-20	V a	2.78	5.54	0.97	15.39	118394	
	678	削器	AN1	D-25	V a	2.91	4.12	1.02	9.26	67286	
	679	削器	CR2B	D-25	V b	3.12	(3.80)	1.22	15.19	70834	
	680	削器	AN2	M-13	V	4.50	5.70	1.10	23.75	72629	
93	681	削器	AN2	F-20	V b	2.97	(3.22)	0.45	5.22	131875	
	682	削器	SH3	D-25	V c	3.30	(4.00)	0.78	10.10	71608	
	683	削器	AN2	M-20	V a	2.96	(5.18)	0.66	5.35	71953	

(8) 石錐 (第96図 732～739)

回転穿孔することを目的とした一群で、8点を抽出しているが、定型的な形状は存在していない。

732は、断面三角形の剥片の先端部の両面を凸レンズ状に加工している。同様の加工は小型であるが736にも見られ、735もそれらに類似している。733と734でも両面加工が行われているが、先の3点と比べると尖頭状に仕上げている。なお、732で2.59cm、733で2.49cm、734で2.46cmと長さの類似性が指摘できる。737～739の先端部は突出する形状で類似している。

第24表 V層出土石器観察表 10

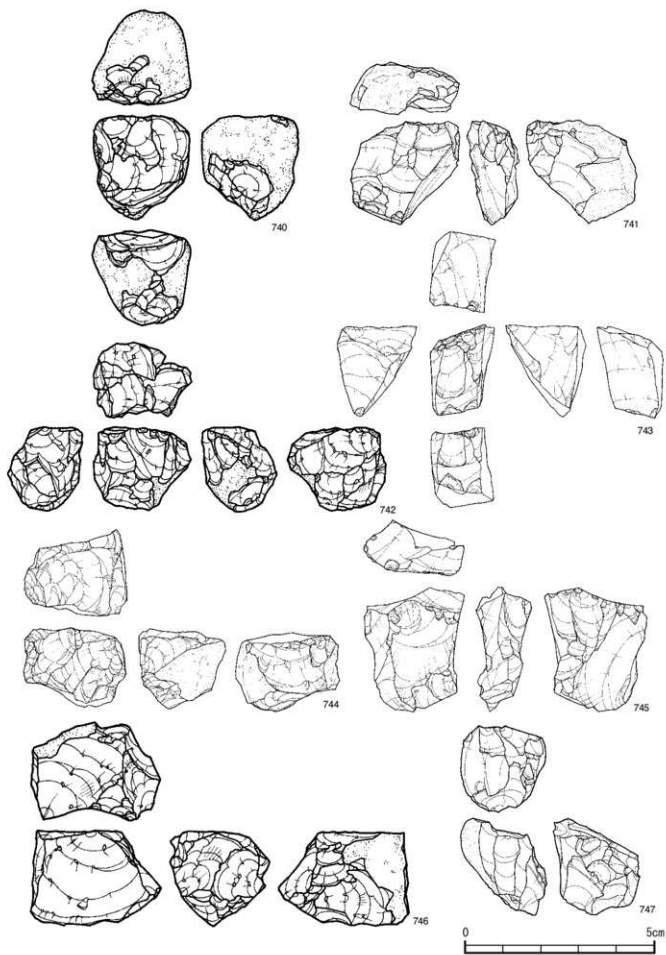
採掘 番号	掲載 番号	器種	石材	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考	
93	684	削器	CHC	G-23	V _a	(2.50)	2.65	0.75	5.32	88542		
	685	削器	AN1	K-19	V _a	3.15	1.80	0.85	3.99	79891		
	686	削器	上舟轟	L-17	V _a	2.20	1.70	0.70	2.82	49047		
	687	削器	AN1	K-20	V _a	(2.15)	2.30	1.00	4.15	79677		
	688	削器	AN2	F-18	V _b	1.50	2.30	0.30	1.95	118981		
	689	削器	CC1B	F-22	V _a	2.59	1.67	1.00	3.64	112235		
	690	削器	AN2	M-18	V	(2.80)	1.50	0.70	2.20	51325		
	691	削器	腰岳	F-21	V _a	2.80	1.55	0.82	2.10	112331		
	692	削器	H ₂	H-19	V	3.80	1.90	0.58	3.75	35247		
	693	削器	CH2A	G-20	V _a	3.80	1.75	0.60	2.90	117885	両面加工	
	694	削器	AN1	K-17	V _a	2.00	2.30	1.25	6.74	28551		
	695	削器	凝灰岩	F-20	V _a	1.52	2.21	0.62	1.26	117321	両面加工	
	696	削器	AN2	G-20	V _a	2.60	3.15	0.40	2.87	130236		
	697	削器	AN1	I-23	V _b	1.40	(1.93)	0.73	2.04	100598		
	698	削器	AN2	L-19	V _a	1.35	(2.00)	0.50	1.04	79934		
	94	699	挿入石器	腰岳	F-22	V _b	1.90	2.00	0.54	2.24	119643	
		700	挿入石器	AN2	L-19	V _a	2.20	2.75	0.45	3.23	79730	
		701	挿入石器	三船	I-5	V _a	3.18	2.52	1.08	6.77	143794	
702		挿入石器	AN1	L-10	V _a	2.35	1.40	0.45	1.95	3431		
703		挿入石器	AN1	K-20	V _a	(2.60)	1.80	0.70	2.77	78618		
704		挿入石器	AN2	E-24	V _a	2.15	1.52	0.37	1.17	88840		
705		挿入石器	AN1	K-19	V _a	(1.75)	1.70	0.50	1.82	79191		
706		挿入石器	CC1B	H-22	V _a	2.30	1.28	0.55	1.47	86963		
707		挿入石器	AN1	K-19	V _a	2.52	1.88	0.75	2.63	79878		
708		挿入石器	AN1	D-25	V _c	3.10	(2.50)	0.80	5.41	70483		
709		挿入石器	AN1	D-22	V _a	4.50	3.50	0.60	10.72	114128		
710		挿入石器	三船	G-21	V _a	1.98	3.75	0.95	6.18	117704		
711		挿入石器	CH2A	J-18	V _a	3.30	3.03	0.70	4.36	26158		
712		挿入石器	AN2	I-21	V _b	3.93	3.04	0.72	7.61	83754	縦型	
713		挿入石器	AN2	F-22	V _b	3.10	2.20	0.60	3.10	119038		
714		挿入石器	AN2	F-22	V _b	(3.00)	2.20	0.60	2.90	119650		
715		挿入石器	腰岳	D-14	V _c	3.17	2.00	0.64	3.20	111126		
95		716	楔形石器	CR	H-21	V _a	1.85	1.70	0.70	2.67	116997	
	717	楔形石器	CH2A	G-22	V _a	2.47	1.67	0.87	3.70	84732		
	718	楔形石器	SH3	K-21	V _a	(2.60)	1.47	1.36	4.82	82630		
	719	楔形石器	AN1	F-22	V _a	2.70	2.00	1.10	5.54	120567		
	720	楔形石器	AN1	J-18	V _a	1.79	1.55	0.75	1.76	26173		
	721	楔形石器	CC1B	E-22	V _a	1.74	2.04	0.86	2.93	112171		
	722	楔形石器	08 (大きな平鈍物)	D-25	V _a	2.65	1.65	0.80	3.19	65345		
	723	楔形石器	AN2	K-18	V _a	2.52	1.78	0.87	3.95	25826		
	724	楔形石器	SH2	H-24	V _a	3.29	2.44	1.61	12.29	60327		
	725	楔形石器	三船	H-23	V _a	2.22	1.63	0.73	2.94	86765		
	726	楔形石器	H ₂	K-13	V	3.20	(2.30)	0.40	3.93	17869		
	727	楔形石器	三船	J-14	V	3.34	3.00	1.64	13.43	12636		
	728	楔形石器	08 (大きな平鈍物)	L-20	V _a	2.48	1.12	0.98	3.15	80362		
	729	楔形石器	腰岳	M-17	V _a	2.30	1.45	0.86	2.60	48802		
	730	楔形石器	AN2	F-21	V _a	1.95	1.65	0.80	2.50	131876		
	731	楔形石器	三船	E-23	V _a	2.28	1.92	1.15	4.30	118256		
	96	732	石鏃	AN1	K-19	V _a	2.59	1.60	0.73	2.21	79892	
		733	石鏃	CH2A	I-14	V	2.49	1.47	0.61	2.09	12508	
734		石鏃	CC1B	H-21	V _a	(2.46)	1.44	0.92	2.07	87005		
735		石鏃	三船	L-19	V _a	2.65	1.35	0.70	1.90	79923		
736		石鏃	AN1	F-22	V _a	2.35	0.90	0.90	1.52	113038		
737		石鏃	CH3	K-20	V _a	3.00	1.19	0.72	2.59	79228		
738		石鏃	CH3	K-20	V _a	(3.03)	1.44	0.81	2.22	99589		

(9) 石核 (第97・98図 740～756)

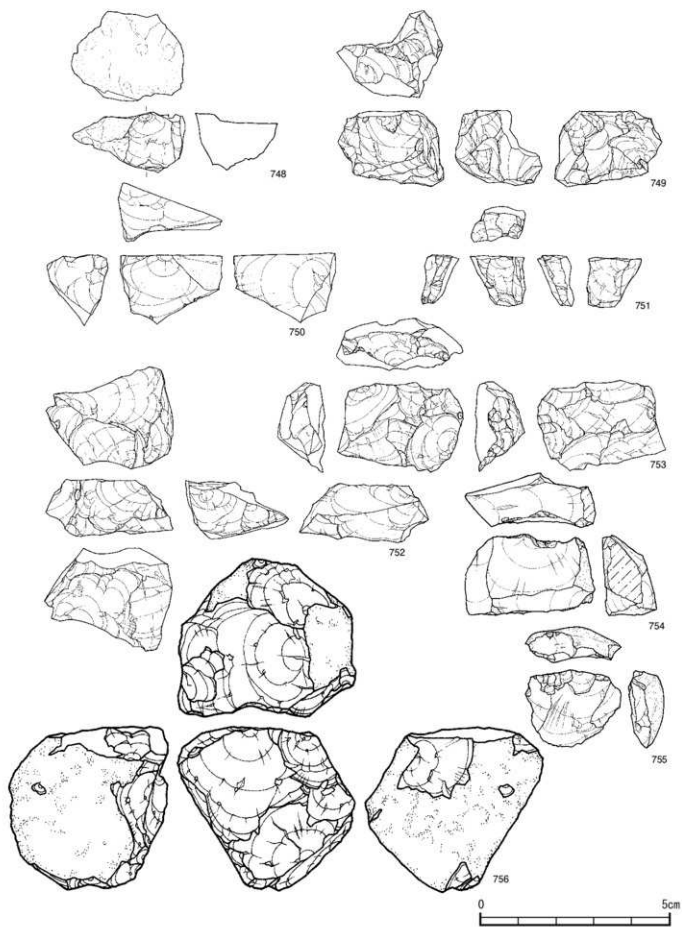
747は、良質の頁岩を用いたもので、本遺跡Ⅸ層以下の細石核に類似する。

740・742は三船産、745は針尾・淀姫産とみられる黒曜石の小礫を素材としたもので、740・741は縦打面、742と744は単刺面打面石核から小型不定形刺片を取り

出している。746や、やや大型の756も同様で、石材は三船産黒曜石と共通する。741や743、745、749等は分割礫素材の分割面を打面としたもので、いずれも小型不定形刺片を取り出している。また、748は縦面を打面としたようである。



第 97 图 V 层出土石器 27 (石核①)



第98図 V層出土石器28(石核②)

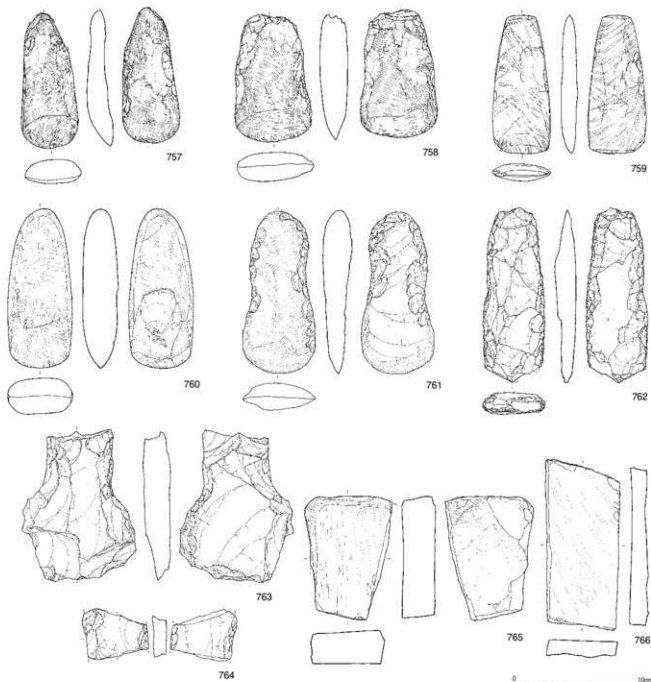
(10) 磨製石斧 (第 99 図 757 ~ 761)

757 の正面はボジ、裏面はネガな剥離面の可能性は高く、丁寧な研磨仕上げが見られる。なお、切っ先は鋭く残され、刃こぼれ等は見られない。また、体部上位に着装部が残される。758 は粘板岩質の頁岩で、頭部の一部が欠損する。両側縁には剥離痕や敲打痕等が残されるが、両面及び刃部は入念な研磨仕上げが見られ、切っ先には刃こぼれ痕が残される。759 は扁平な楕形で、両面とも入念な研磨仕上げを行い、稜線で側縁を形成する。760 は肉厚で重量があり、切っ先は若干弯曲する。761 は中

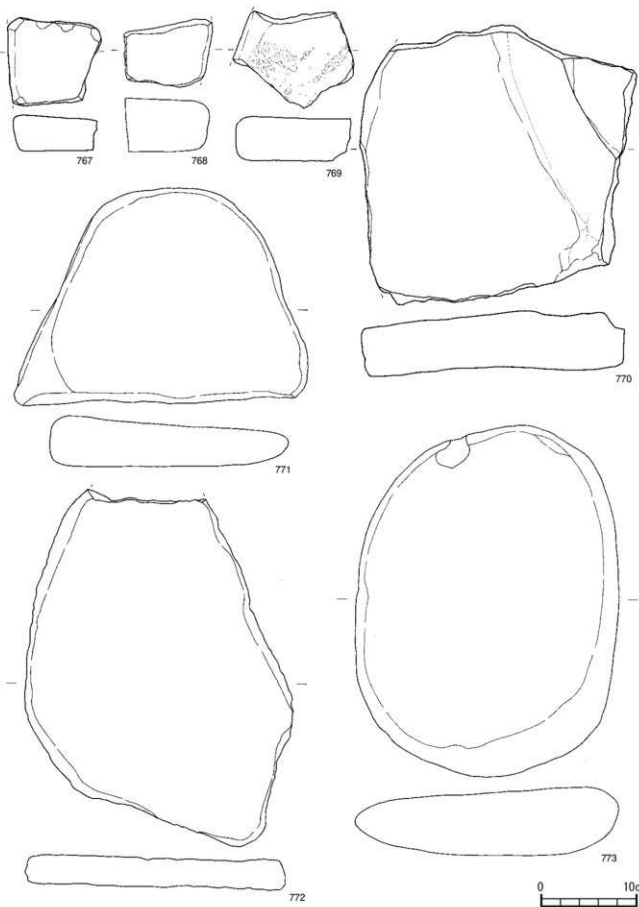
尖部が凹む分銅型で、表面は礫面を使用し、裏面は剥離面で、刃部周辺のみを研磨で仕上げている。

(11) 打製石斧 (第 99 図 762 ~ 764)

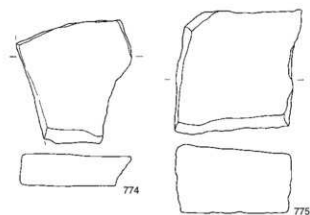
762・764 が扁平な板状剥片素材の周縁部に剥片剥離を行った短冊形で、763 がラケット形となる。762 の刃部が、763 では刃部、頭部共に欠損する。



第 99 図 V 層出土石器 29 (磨製・打製石斧、礫石)



第 100 図 V層出土石器 30 (石皿①)



(12) 砥石 (第99図 765・766)

2点とも破損品で、765は左上部が残存しており、平滑な両面は光沢を保っている。

(13) 石皿 (第100・101図 767～776)

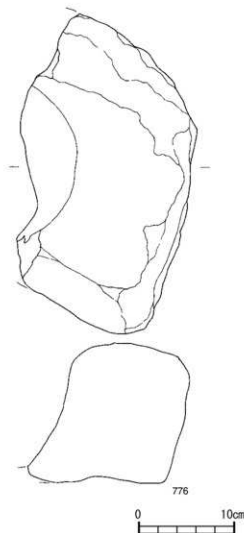
776以外は、全て扁平な板状礫を素材としている。全体形状をとどめるのは772と773で、770は大型であった可能性が高い。

776は軟質砂岩を用いたもので、作業面の摩耗度は高く、臼状の深い使用面が形成される。

(14) 磨・敲石 (非掲載)

磨・敲石は観察表で示した。

その多くで、表裏の敲打痕に加え、磨石併用が認められる。また、ほとんどで側縁部に敲打痕、両面を磨石の磨面とすることから、横断面が向き合う平坦から緩やかなレンズ状を成している。なお、程に集中するようである。



第101図 V層出土石器31 (石皿②)

第25表 V層出土石器観察表 11

挿入 番号	掲載 番号	器種	石材	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
96	739	石錐	AN2	L-20	Vc	3.30	(1.40)	0.35	1.62	81506	
	740	石核	三粒	L-20	Va	2.75	2.35	2.40	20.00	86906	
	741	石核	針尾・産地	H-21	Va	2.23	2.90	1.37	9.68	86999	
	742	石核	三粒	L-22	V	2.20	2.60	1.90	10.40	45130	
	743	石核	AN1	N-19	Va	2.45	1.70	2.14	7.67	54666	
	744	石核	三粒	H-13	V	2.07	2.71	2.33	14.20	10767	
	745	石核	針尾・産地	I-17	Va	3.29	2.63	1.50	8.98	25777	
97	746	石核	三粒	H-23	Va	2.50	3.40	2.60	22.50	84427	
	747	石核	SH2	J-20	Vc	2.53	2.28	2.25	8.52	80626	
	748	石核	豊島系	E-17	Va	1.61	2.97	2.41	9.36	25576	
	749	石核	豊島系	L-17	Va	2.00	2.80	2.30	9.41	25920	
	750	石核	那島	L-21	Vb	1.86	2.69	1.58	4.80	54438	
	751	石核	上牛鼻	H-23	Vb	1.34	1.47	0.97	1.52	60257	
	752	石核	三粒	J-23	Va	1.50	3.38	2.75	11.60	54733	
98	753	石核	豊島系	D-25	Vb	2.39	3.34	1.38	9.20	67196	
	754	石核	CC1B	J-17	Va	2.12	3.44	1.42	10.32	25786	
	755	石核	上牛鼻	K-21	Vb	2.03	2.53	0.92	4.66	84312	
	756	石核	三粒	M-18	Va	4.30	4.65	4.15	83.00	72992	
	757	磨製石斧	SH	M-17	Va	10.80	4.50	2.00	114.18	75519	
	758	磨製石斧	SH	J-16	V	10.20	6.10	2.30	204.06	21757	
	759	磨製石斧	HF	G-7	Va	11.06	4.67	1.42	98.50	141520	
99	760	磨製石斧	SA	K-20	Va	12.80	5.15	2.90	312.00	79843	
	761	磨製石斧	SA	L-14	Va	12.95	5.86	2.21	180.90	14103	

第26表 V層出土石器観察表 12

挿入 番号	掲載 番号	器種	石材	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考	
99	762	打製石斧	SA	G-23	V a	14.00	4.90	1.70	158.20	86744		
	763	打製石斧	HF	L-13	V a	12.20	9.05	2.28	262.50	14498		
	764	打製石斧	HF	J-23	V b	(4.10)	(5.27)	(1.03)	29.80	57127		
	765	砥石	SA	G-19	V a	(9.89)	(7.03)	2.88	293.50	117063		
100	766	砥石	SA	F-18	V a	(13.62)	5.98	1.65	224.00	118724		
	767	石皿	AN	D-25	V a	9.25	9.90	3.85	600.00	66407		
	768	石皿	SA	D-25	V a	7.20	9.50	5.70	608.00	64920		
	769	石皿	SA	D-25	V a	10.30	12.70	4.80	854.00	67346		
	770	石皿	AN	F-21	V a	29.60	29.20	6.90	9500.00	114546		
	771	石皿	SA	J-15	V	23.10	30.10	5.40	5400.00	22787		
	772	石皿	AN	I-19	V	37.80	28.40	3.70	5900.00	36301		
	773	石皿	SA	F-22	V a	37.40	27.80	7.30	11100.00	112000		
	774	石皿	AN	G-19	V a	13.10	12.50	3.50	800.00	119910		
	775	石皿	GR	M-20	V a	13.20	13.40	7.30	2260.00	71972		
101	776	石皿		軟質砂岩	F-22	V a	33.90	19.10	14.80	8300.00	111999	

第27表 V層出土石器観察表 13 (非掲載①)

器種	石材	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	残率 (%)	取上番号	備考
磨・敲石	SA	G-21	V a	12.00	8.10	4.70	535.50	100	116443	
磨・敲石	SA	H-14	V a	10.90	8.35	4.70	700.00	100	9031	
磨・敲石	SA	D-20	V a	10.10	8.70	4.80	611.00	100	115580	115579 と接合…260g
磨・敲石	SA	D-20	V a						115579	115580 と接合…351g
磨・敲石	AN	D-25	V a	10.40	8.20	5.20	725.00	100	65331	
磨・敲石	AN	I-20	V a	9.70	8.90	3.90	540.00	100	85934	
磨・敲石	AN	E-23	V a	10.50	8.70	5.45	776.00	100	112032	
磨・敲石	GR	K-14	V a	9.70	8.30	5.75	680.00	100	14209	
磨・敲石	GR	M-14	V	8.90	6.60	4.50	401.00	100	20629	
磨・敲石	AN	K-19	V a	7.85	7.65	6.15	493.00	100	78344	
磨・敲石	AN	G-20	V a	7.10	5.20	4.20	221.00	100	117878	
磨・敲石	SA	F-18	V a	6.90	4.85	4.30	197.50	100	118739	
磨・敲石	SA	D-22	V b	7.80	5.00	3.50	182.00	100	114286	表正面に敲打痕あり
磨・敲石	AN	H-23	V a	4.80	4.65	3.55	107.00	100	82365	
磨・敲石	SA	J-14	V	5.80	5.30	3.80	129.00	100	12541	
磨・敲石	AN	K-13	V	4.30	4.30	3.30	86.00	100	17835	
磨・敲石	AN	G-21	V a	2.45	2.20	10.45	10.75	100	116487	
棒状敲石	SA	I-20	V a	9.65	2.60	2.00	66.50	100	99549	
磨石	AN	H-21	V a	14.20	9.10	5.55	953.50	100	118338	
磨石	AN	H-21	V a	12.10	9.60	4.50	778.00	100	118339	
磨石	AN	E-18	V a	12.50	8.60	4.60	676.50	100	115455	
磨石	AN	D-15	V b	12.40	8.10	5.90	778.50	100	110406	
磨石	AN	H-15	V	11.40	8.20	5.30	700.00	100	8535	
磨石	AN	J-16	V	10.20	7.90	5.95	671.50	100	22452	
磨石	AN	G-18	V	8.20	7.60	4.80	554.50	100	28399	
磨石	AN	J-19	V	8.90	8.50	5.50	568.00	100	37456	
磨石	AN	L-18	V a	9.80	9.60	4.10	512.00	100	51948	
磨石	AN	N-15	V a	9.40	8.70	4.90	562.00	100	77339	
磨石	AN	F-22	V a	11.00	9.30	4.60	781.00	100	119672	
磨石	AN	E-21	V a	10.15	8.90	5.10	712.00	100	118517	
磨石	SA	K-14	V a	9.10	8.80	5.15	530.00	100	14228	
磨石	GR	L-22	V	9.10	8.00	4.35	490.00	100	43455	
磨石	AN	G-16	V a	7.70	6.45	3.70	195.00	100	9923	
磨石	AN	K-19	V a	8.20	6.70	4.30	279.00	100	80026	
磨石	AN	E-18	V a	8.40	7.10	5.10	443.00	100	118881	
磨石	AN	G-H-17	V a	8.60	7.80	4.20	394.00	100	一括	
磨石	AN	K-22	V b	7.45	6.90	5.40	372.00	100	54302	

第 28 表 V 層出土石器観察表 14 (非掲載②)

器種	石材	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	残率 (%)	取上番号	備考
磨石	AN	J-23	V	6.20	5.60	2.40	114.00	100	49886	
磨石	AN	M-14	V	6.50	4.50	4.00	157.50	100	19163	
磨石	SA	F-21	V a	6.50	4.80	3.00	131.10	100	112502	
磨石	AN	L-13	V	5.00	4.90	4.35	136.00	100	17918	
磨石	AN	J-9	V	5.50	4.30	3.00	94.50	100	一括	
磨石	AN	K-16	V	4.45	3.50	3.55	82.00	100	21746	
磨石	SA	K-17	V a	5.20	4.00	3.20	76.50	100	25319	
磨石	SA	G-22	V a	11.00	9.75	5.40	950.00	100	84786	
磨石	AN	F-21	V b	11.90	10.10	6.00	1117.00	100	131861	
磨石	AN	D-23	V b	11.75	10.10	6.45	1073.00	100	114379	
磨石 (欠)	AN	E-22	V a	8.80	7.10	4.20	416.50	60	115036	表面中央に凹あり
磨石 (欠)	AN	F-20	V a	3.95	5.80	3.05	74.00	40	119278	表面中央に凹あり
磨石 (欠)	SA	H-21	V a	12.00	7.75	4.00	462.00	70	84831	
磨石 (欠)	ざくろ石	G-3	V a	7.40	5.90	7.00	337.50	20	142375	
磨石 (欠)	ざくろ石	E-22	V a	-	-	-	15.00	-	115071	計測せず
磨石 (欠)	SA	H-20	V a	5.20	8.65	4.60	241.00	50	117905	
磨石 (欠)	SA	F-20	V a	4.80	8.10	5.50	201.00	50	118477	
磨石 (欠)	SA	H-18	V a	4.80	7.90	5.45	209.50	40	29805	
磨石 (欠)	ざくろ石	M-16	V	-	-	-	57.00	-	51077	形がわからない
磨石 (欠)	SA	M-16	V	-	-	-	27.00	-	51044	計測せず
磨石 (欠)	SA	I-19	V	7.30	10.70	6.10	635.00	50	37506	
磨石 (欠)	SA	F-22	V a	3.40	3.05	1.30	14.15	50	114475	
磨石 (欠)	GR	M-14	V a	9.10	10.60	6.40	840.00	60	14344	
磨石 (欠)	SA	J-18	V b	5.60	8.30	4.80	205.00	20	25919	
磨石 (欠)	SA	E-20	V b	3.60	2.30	1.30	13.50	30	119023	
磨石 (欠)	AN	I-23	V a	12.80	10.50	7.50	1112.00	60	54797	
磨石 (欠)	AN	D-20	V a	10.20	9.00	4.65	524.00	70	118418	
磨石 (欠)	AN	M-17	V a	2.90	3.80	2.30	24.00	40	52166	
磨石 (欠)	AN	G-17	V a	-	-	-	78.50	-	29969	計測せず
磨石 (欠)	AN	J-20	V a	6.80	9.50	4.60	223.00	40	79628	
磨石 (欠)	AN	D-20	V a	9.40	9.15	4.60	595.50	80	115661	
磨石 (欠)	AN	H-22	V a	6.20	8.40	3.50	276.00	40	82353	
磨石 (欠)	AN	D-21	V a	9.00	10.10	5.00	596.00	70	117551	
磨石 (欠)	AN	E-22	V b	6.30	2.90	4.00	88.47	40	114108	
磨石 (欠)	AN	E-22	V b	8.10	2.40	3.50	61.50	20	119698	
磨石 (欠)	AN	J-16	V	8.10	6.10	4.00	240.50	70	22471	
磨石 (欠)	AN	I-7	V	7.80	5.80	5.00	320.50	60	141884	
磨石 (欠)	AN	K-22	V	-	-	-	11.70	-	45857	計測せず
磨石 (欠)	AN	J-16	V	7.50	8.15	5.15	484.50	70	21824	

第2節 縄文時代晩期の調査成果

1 調査の概要

本遺跡の縄文時代晩期の該当層は、IV a層・IV b層であるが、V層からも遺物は出土している。IV b層は縄文時代前・中期の遺構・遺物も確認されている。

調査は、人力による掘り下げで進めながら、遺構を当時の生活面で可能な限り確認するように努めた。

調査の結果、遺構は、竪穴住居跡・落とし穴・土坑・集石遺構等が検出された。遺物は、多くの土器や石器等が出土した。

2 遺構

遺構は、竪穴住居跡1軒、落とし穴16基、土坑139基、集石遺構3基が検出された。(第103図及び付図)

(1) 竪穴住居跡 (第102・104・105図)

検出状況 遺跡の北側E-19・20区の境界、IV層中で検出された。平面プランは、南西側の一角が現在のイモ穴で失われるが、長径230cm、短径220cmのほぼ円形である。検出面から床面までの深さは、南で26cm、中央で30cm、北で35cm程度の掘り込みが確認出来る。南北に配された2か所の柱穴と、柱穴間のやや北寄りの位置で検出した土坑を炉穴と想定できることから竪穴住居跡と認定した。

炉穴については、35～40cmの略円形で5～8cm程の掘り込みが認められることや、埋土が炭化物及び軽石等で構成することから炉穴と認定した。柱穴は20cm程の円形の掘り方で、北側で深さ22cm、南側で深さ15cmの掘り込みを確認している。

住居内の遺物出土状況を第105図に示したが、出土した土器が、入佐式土器に比定できることからこの時期に近い住居であると考える。

埋土状況 埋土については、東側から西方向の中央ベルトで観察し、埋土①→③の順に堆積したことが想定される。埋土①は側壁に添って斜めに堆積する初期のレンズ状堆積物で、砂質の褐色土に1～3mm程の明黄褐色軽石が含まれる。埋土②は埋土①の上位に斜め堆積する砂質の褐色土で、埋土①同様の1mm以下の明黄褐色軽石が含まれるが、埋土①よりも含有量が多い。埋土③は埋土②に被るように中央部に堆積する砂質の茶褐色土で、1mm以下の黄褐色軽石を含んでいる。

出土遺物 (第106・107図 777～798)

住居内の出土遺物は、平面観察では住居の中央部に集中し、かつ、埋土③内に包括される状況が把握されていることから、住居廃絶後、埋土①・②の流入で形成された崖地に廃棄したと推測する。したがって、竪穴住居廃絶と出土遺物には時間差が存在するが、その差は大きくないと思われる。また、土器については、777以外は大振りの深鉢や鉢で構成している。

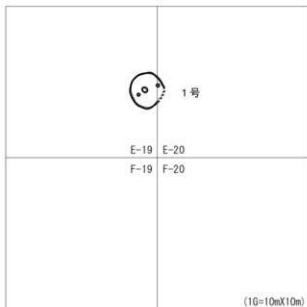
777は口唇部を狭い平坦面に仕上げた小型土器であるが、器種判断はできていない。

778～781の口縁部は開き気味に直直し、口縁部が肥厚する。さらに、782・783は口縁端部が大きく外反し、784・785にその形状を想定している。780は内外面ともヘラ磨きで仕上げられるので、779と同一個体の可能性もある。781は1～3mm程の白色粒を多く含む胎土が特徴的である。784は復元口径15.8cmで、胎土及び焼成等は後述の786と酷似する。785は器壁が厚く重量があり、復元口径は26.0cm、胎土に多量に含まれる輝石や角閃石が光線に反応する。786は深鉢の胴部屈折部から頸部で、橙色を帯びている。787と788は同一個体とみられ、頸部近くに無刻みの三角形突帯を貼り付けているが、789と形状を一にするもので、胎土に長石粒等の白色粒を多量に含むことから、器面のザラザラ感が強い。789の口径は38.8cm、頸部径31.8cm、胴部最大径35.8cmが復元でき、波状口縁の頂部は指で浅く押圧される。

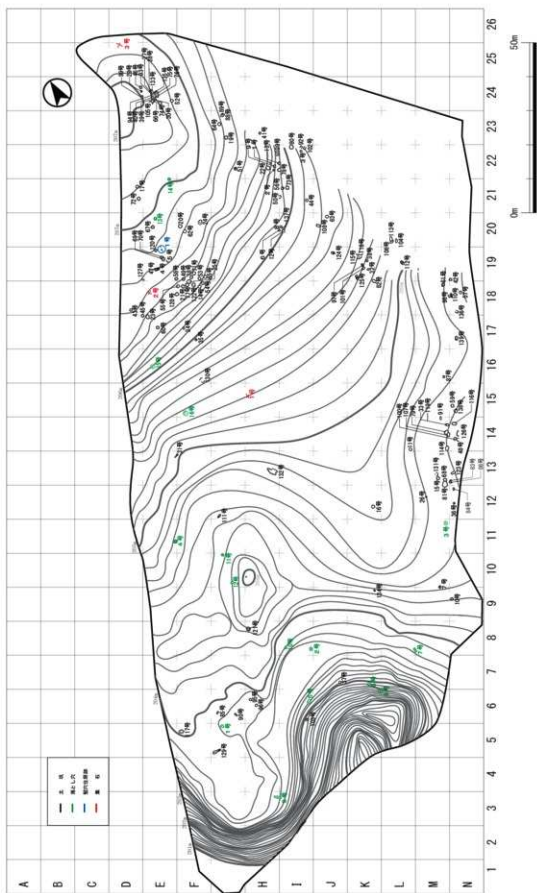
778～789は口径と胴部最大径が近似し、重心が低く、口縁部が肥厚することから後述する深鉢2a類に属する。

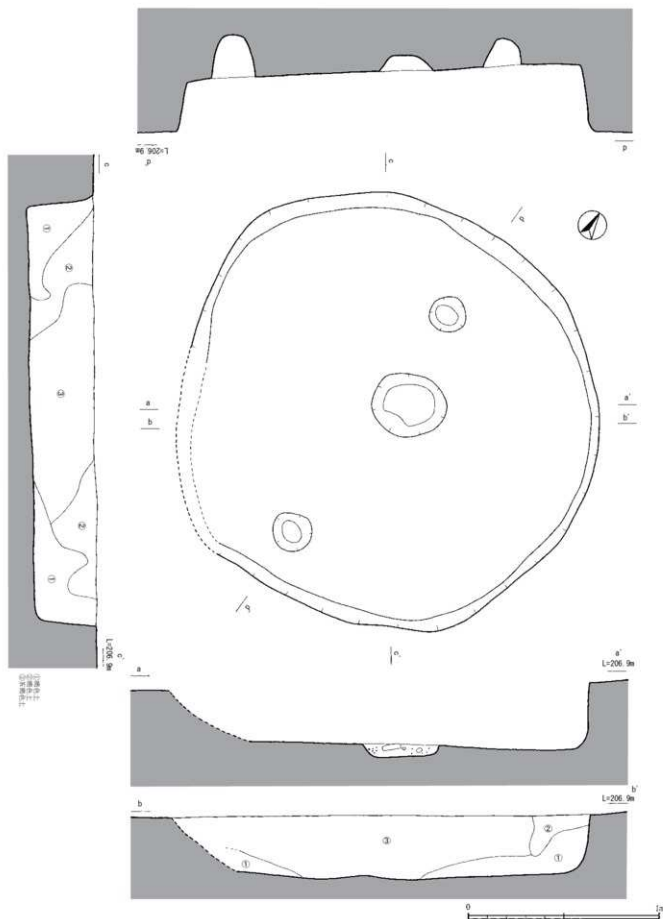
790は胴部、791～793は鉢の底部で接地面は平らとなる。

794は打製石斧の刃部で、ホルンフェルス製の扁平な板状剥片を素材としている。795は、ザクロ石と呼称する粗い黒曜石を素材としているが用途は不明である。両面、左側縁、底面を平滑に仕上げたもので、両面中央部と左側縁中央部に指頭幅の浅い溝状の凹みをもつ、いわゆる溝石器である。796は先端部が角状に尖る磨製石斧の頭部で、体部中央は並行に磨かれて平坦な断面形をなすことから、ツルハシ状の形状が復元される。石材は



第102図 縄文時代晩期竪穴住居跡位置図

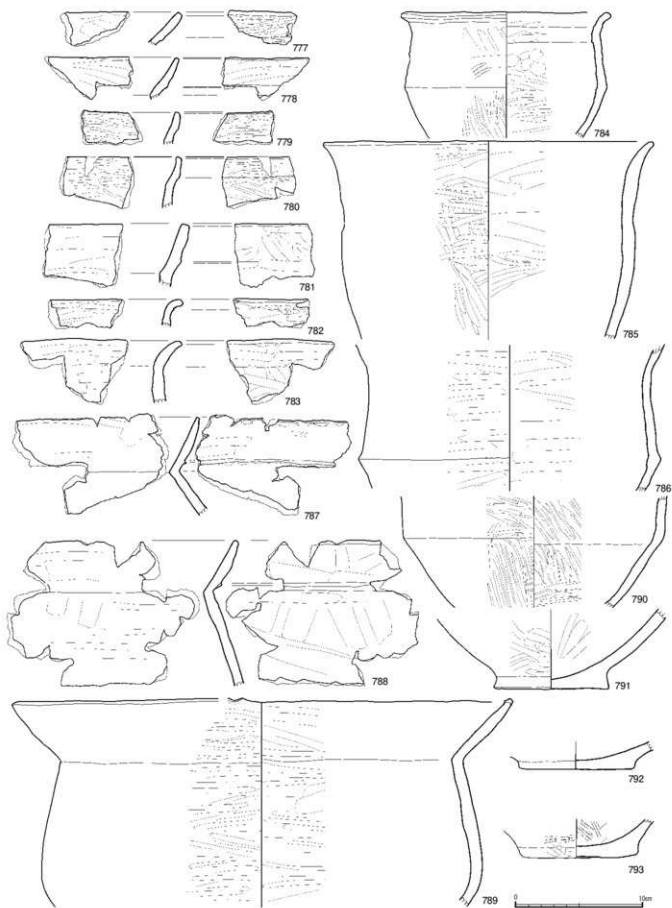




第104圖 縄文時代晩期壑穴住居跡（埋土状況）



第 105 圖 縄文時代晚期整穴住居跡（遺物出土状況）

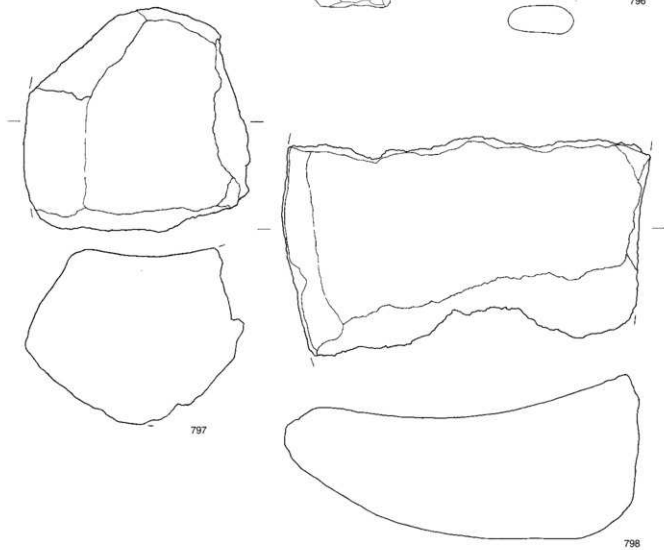
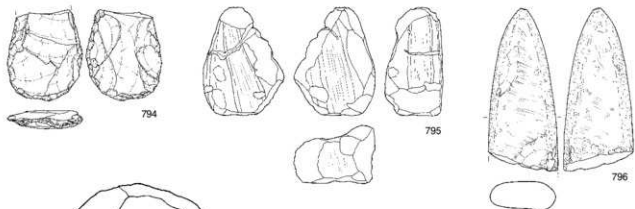


第 106 圖 縄文時代晩期整穴住居跡内出土土器

ホルンフェルスで、敲打整形後、丁寧に磨いて仕上げている。

797は白灰色、798は灰色の凝灰岩製の石皿で、それ

ぞれ明瞭な白面を形成している。797は左側縁の一部、798は上下を欠損するもので、中央部だけが残されている。



第107図 縄文時代晩期整穴住居跡内出土石器

第29表 縄文時代晩期竪穴住居跡内出土土器観察表

検出 番号	高森 番号	器種	出土区	層位	測定	法量 (cm)			文様・調整		胎土			取上番号	備考
						口径	底径	器高	外面	内面	白色 粒子	角閃 石	炭石		
	777	深鉢 2a 類 7	E-19-20	-	口縁部	-	-	-	ミガキ	ナダ	○				焼住1-64-15か
	778	深鉢 2a 類	E-19-20	-	口縁部	-	-	-	ミガキ	ナダ	○				JH1-231 15か
	779	深鉢 2a 類	E-19-20	-	口縁部	-	-	-	ミガキ・ナダ	ミガキ・ナダ	○				JH1-131
	780	深鉢 2a 類	E-19-20	-	口縁部	-	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○				JH1-90 15か
	781	深鉢 2a 類	E-19-20	-	口縁部	-	-	-	ケズリのみナダ	ナダ	○				JH1-12
	782	深鉢 2a 類	E-19-20	-	口縁部	-	-	-	ミガキ	ミガキ	○				JH1-245
	783	深鉢 2a 類	E-19-20	-	口縁部	-	-	-	工具ナダ	工具ナダ	○				JH1-219 3~5mmの炭粒を含む
	784	深鉢 2a 類	E-19-20	-	口縁~胴部	15.8	-	-	ミガキ・ナダ・赤黒	ミガキ・ナダ・赤黒	○				焼住1号15か 赤黒スリキリ3~5mmの炭を含む
	785	深鉢 2a 類	E-19-20	-	口縁~胴部	26.0	-	-	ミガキ	ミガキ	○	○			JH1-252 15か
	786	深鉢 2a 類	E-19-20	-	胴~胴底	-	-	-	ナダ	ナダ	○				JH1-23 15か
	787	深鉢 2a 類	E-19-20	-	口縁部	-	-	-	ナダ・相模産	相模産	○				JH1-247 15か
	788	深鉢 2a 類	E-19-20	-	口縁部	-	-	-	磯産のみナダ	磯産のみナダ	○				焼住1号15か
	789	深鉢 2a 類	E-19-20	-	口縁~胴部	36.6	-	-	ナダ	ナダ・胎ナダ	○				JH1-172 15か
	790	鉢	E-19-20	-	胴部	-	-	-	ミガキ・ナダ	ミガキ・ナダ	○				焼住1号15か
	791	鉢	E-19-20	-	底部	-	9.1	-	ナダ	ナダ	○				JH1-221 15か
	792	鉢	E-19-20	-	底部	-	9.2	-	ナダ	磯産のみナダ	○				JH1-19 15か
	793	鉢	E-19-20	-	底部	-	9.4	-	ケズリ	ケズリのみナダ	○				JH1-176 15か

第30表 縄文時代晩期竪穴住居跡内出土土器観察表

検出 番号	掲載 番号	器種	石材	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
	794	打製石斧	Hf	E-19-20	-	7.28	6.02	1.46	80.9	縄住1号-60	
	795	不明	ザクロ石	E-19-20	-	8.70	6.51	4.63	256.5	縄住1号-113	
	796	磨製石斧	Hf	E-19-20	-	(13.12)	5.60	2.42	265.0	縄住1号-103	
	797	石皿	凝灰岩	E-19-20	-	17.70	17.80	14.50	4200.0	縄住1号-74	
	798	石皿	凝灰岩	E-19-20	-	17.30	29.05	14.00	6800.0	縄住1号-115	

(2) 落とし穴 (第108図~第110図)

落とし穴は検出がV~VII層のものが多いが、埋土の状況等を基に現場担当で検討し縄文時代晩期該当のものとして判断された16基を報告する。

1号落とし穴 (第109図)

G-5区、VI層中で検出された。平面観は、長径約100cm、短径約75cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で約60cmを測る。また、底面で遊伐木痕と思われる小ピットが1基検出された。

埋土は、P7と思われる黄色バミスを含む茶褐色土(埋土①)を主体とし、暗茶褐色土(埋土②)が堆積していた。また、小ピットの埋土は、埋土②と同じであった。埋土中から遺物の出土はなかった。

2号落とし穴 (第109図)

I-8区、VII層で検出された。平面観は、長径約110cm、短径約90cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で約60cmを測る。また、底面で遊伐木痕と思われる小ピットが1基検出された。

埋土は、黄色バミス(P7)を含む黄褐色土(埋土①)、黄色バミスを含む茶褐色土(埋土②)、粘質でバミスを含まない茶褐色土(埋土③)、粘質の黒褐色土(埋土④)が堆積していた。また、小ピットの埋土は、暗褐色土(埋土⑤)と黒褐色土(埋土⑥)であった。埋土中から遺物の出土はなかった。

3号落とし穴 (第109図)

M-11区、IV b層で検出された。平面観は、長径約115cm、短径約105cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で約210cmを測る。また、底面で遊伐木痕と思われる小ピットが1基検出された。

埋土は、IV a層の色調に類似した褐色系の土が堆積していた。黄色バミス(P7)の含有量や土の硬さ等から褐色土(埋土①・②)、暗褐色土(埋土③・⑤)、黒褐色土(埋土④・⑥)の6層に分層した。また、小ピットの埋土は暗褐色土(埋土⑦)であった。埋土中から遺物が2点出土したが小片のため図化はしなかった。

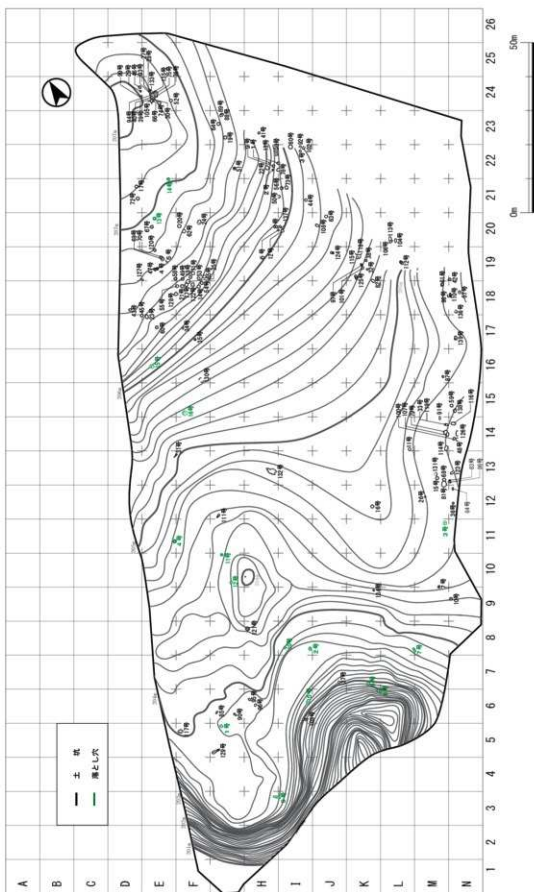
4号落とし穴 (第109図)

E-F-11区、IV b層で検出された。平面観は、長径約105cm、短径約100cmのほぼ円形である。検出面からの深さは、最深部で約150cmを測る。また、底面で遊伐木痕と思われる小ピットが1基検出された。

埋土は、IV a層の色調に類似した褐色系の土が堆積していた。黄色バミス(P7)の含有量や土の硬さ等から褐色土(埋土①・③・⑥~⑨)、黄褐色土(埋土②・④)、暗褐色土(埋土⑤)の9層に分層した。また、小ピットの埋土は埋土⑧と同じであった。埋土中から遺物の出土はなかった。

5号落とし穴 (第109図)

I-6区、VI層中で検出された。平面観は、長径約



第 108 図 縄文時代晩期の落とし穴・土坑位置図

145cm、短径約90cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で約85cmを測る。また、底面で逆茂木痕と思われる小ピットが1基検出された。

埋土は、褐色土の小ブロックを含むやや粘質のあるにぶい黄褐色土(埋土①)とP7と思われる黄色バミスを含むやや粘質のある黄褐色土(埋土②)を主体とし、にぶい黄褐色土(埋土③)、黒褐色土(埋土④)等が堆積していた。また、小ピットの埋土は、明黄褐色土(埋土⑤)を主体とし、にぶい褐色土(埋土⑥)が堆積していた。埋土中から遺物の出土はなかった。

6号落とし穴(第109図)

K-7区、VI層中で検出された。平面観は、長径約105cm、短径約75cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で約35cmを測る。また、底面で逆茂木痕と思われる小ピットが4基検出された。

埋土は、IV b層の色調に類似した黄茶褐色土(埋土①)を主体とし、暗茶褐色土(埋土②)や粘質の明茶褐色土(埋土③)の小ブロック等が堆積していた。また、小ピットの埋土は全て、埋土①の色調に類似していた。埋土中から遺物の出土はなかった。

7号落とし穴(第110図)

L・M-8区、VI層上面で検出された。平面観は、長軸約125cm、短軸約60cmで四隅ともしっかりとした長方形である。検出面からの深さは、最深部で約60cmを測る。また、底面で逆茂木痕と思われる小ピットが5基検出された。

埋土は、IV b層の色調に類似した明茶褐色土(埋土①)や暗茶褐色土(埋土②)が堆積していた。また、小ピットの埋土は全て、埋土①の色調に類似していた。埋土中から遺物の出土はなかった。

8号落とし穴(第110図)

K・L-6区、VI層上面で検出された。平面観は、長軸約125cm、短軸約65cmの隅丸長方形である。検出面からの深さは、最深部で約65cmを測る。また、底面で逆茂木痕と思われる小ピットが7基検出された。

埋土は、IV b層の色調に類似した暗茶褐色土(埋土①)・茶褐色土(埋土②)を主体とし、灰茶褐色土(埋土③)、にぶい褐色土(埋土④)が堆積していた。また、小ピットの埋土は全て砂質で埋土④に近い色調であった。埋土中から遺物の出土はなかった。

9号落とし穴(第110図)

H・I-3区、VII層で検出された。平面観は、長径約210cm、短径約60cmの楕円形で、検出面からの深さは、最深部で約30cmを測る。また、底面で逆茂木痕と思われる小ピットが4基検出された。

埋土は、黄色バミス(P7)を多く含む明褐色土(埋土①)を主体とし、黄色バミスを含む暗褐色土(埋土②)、IV a層の色調に類似した暗茶褐色土(埋土③)等が堆積

していた。また、小ピットの埋土は、IX層及びX層の地山の色調に類似した褐色系の粘質土で、極暗赤褐色土(埋土④)、極暗褐色土(埋土⑤・⑧)、⑧はゴマンシオ状のバミスを含む)、黒褐色土(埋土⑥)、暗褐色土(埋土⑦)、暗赤褐色土(埋土⑨)に分層した。埋土内から遺物の出土はなかった。

10号落とし穴(第110図)

I-8区、VI層中で検出された。平面観は、直径約70cmの円形である。検出面からの深さは、最深部で約100cmを測る。底面で逆茂木痕等の小ピットは確認されなかったが、形状等から落とし穴とした。

埋土は、褐色系の土が堆積していた。P7と思われるバミスの含有量や土の硬さ等で褐色土(埋土①・②)、にぶい褐色土(埋土③)、暗褐色土(埋土④)の4層に分層した。埋土中から遺物の出土はなかった。

11号落とし穴(第110図)

G-10区、V b層中で検出された。平面観は、約直径約80cmの円形である。検出面からの深さは、最深部で約150cmを測る。底面で逆茂木痕等の小ピットは確認されなかったが、形状等から落とし穴とした。

埋土は、褐色系の土が堆積していた。バミスの種類(白・黄・橙色)や含有量、土の硬さ等で褐色土(埋土①・⑤)、黒褐色土(埋土②)、にぶい黄褐色土(埋土③・④)の5層に分層した。埋土中から遺物の出土はなかった。

12号落とし穴(第110図)

G-10区、V b層中で検出された。平面観は、長径約95cm、短径約60cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で約140cmを測る。底面で逆茂木痕等の小ピットは確認されなかったが、形状等から落とし穴とした。

埋土は、褐色系の土が堆積していた。黄色バミス(P7)の含有量、土の硬さ等で褐色土(埋土①～③)、にぶい黄褐色土(埋土④・⑨)、明赤褐色土(埋土⑤)、暗褐色土(埋土⑥)、黒褐色土(埋土⑦・⑧)の9層に分層した。埋土中から遺物の出土はなかった。

13号落とし穴(第110図)

E-20区、V b層中で検出された。平面観は、直径約85cmの円形である。検出面からの深さは、最深部で約85cmを測る。底面で逆茂木痕等の小ピットは確認されなかったが、形状等から落とし穴とした。

埋土は、P7と思われる黄色バミスを含む灰黄褐色土(埋土①)、白色・黄色バミスを含むにぶい黄褐色土(埋土②)、バミスをはほとんど含まないにぶい黄褐色土(埋土③)等が堆積していた。埋土中から遺物の出土はなかった。

14号落とし穴(第110図)

E-21・22区、IV b層で検出された。平面観は、長径約100cm、短径約80cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で約140cmを測る。底面で逆茂木痕等の

小ピットは確認されなかったが、形状等から落とし穴とした。

埋土は、バミスの種類（黄・赤色）や含有量、土の硬さ等で暗褐色土（埋土①～④）、黒褐色土（埋土⑤～⑦）の7層に分層した。埋土中から遺物が70点出土し、1点を図化した（第111図 799）。

15号落とし穴（第110図）

E-16区、VI層中で検出された。平面観は、長径約140cm、短径約115cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で約110cmを測る。底面で逆茂木痕等の小ピットは確認されなかったが、形状等から落とし穴とした。

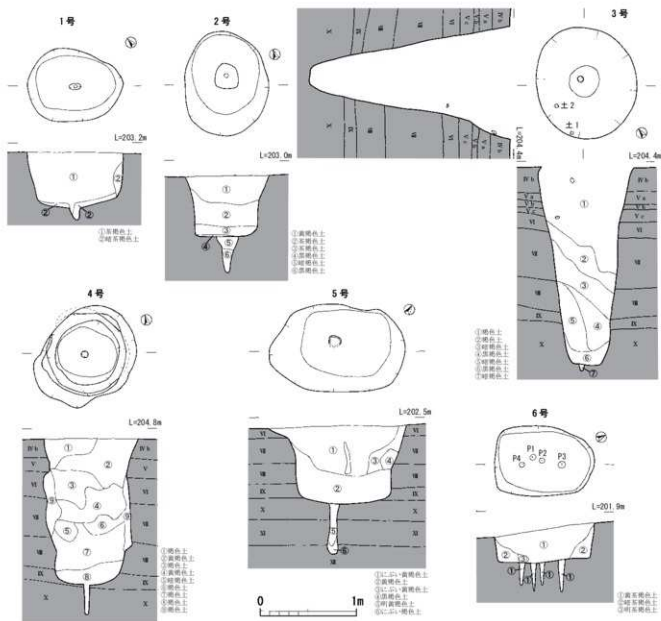
埋土は、黄白色バミスを含む黄茶褐色土（埋土①）、黄茶褐色土と暗黄茶褐色土の混土（埋土②）、暗黄茶褐

色土（埋土③）が堆積していた。埋土中から遺物が出土したが図化はしなかった。

16号落とし穴（第110図）

F-15区、IV b層で検出された。平面観は、長径約145cm、短径約140cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で約180cmを測る。底面で逆茂木痕等の小ピットは確認されなかったが、形状等から落とし穴とした。

埋土は、褐色系の土が堆積していた。バミスの含有量、土の硬さ等で暗褐色土（埋土①）、褐色土（埋土②）、にぶい黄褐色土（埋土③・④）、黄褐色土（埋土⑤・⑥）、にぶい黄褐色土と黒褐色土の混土（埋土⑦・⑧）の8層に分層した。埋土中から遺物は出土したが図化はしなかった。



第109図 縄文時代晩期落とし穴1

落とし穴内出土遺物 (第 111 図 799)

遺物が出土した落とし穴は 16 基中 4 基で、のうち 14 号落とし穴から出土した遺物 1 点のみ図化した。

799 は口縁部に貼付される鱗状突起の右側部に該当し、傾きについては課題も残すが、器壁等からは浅鉢 3 b 類と判断される。黒川式土器に比定できる土器である。

(3) 土坑 (第 112 図～第 129 図)

晩期該当の土坑は 139 基検出された。この 139 基を平面観から Type 1 : 「円・楕円形」、Type 2 : 「隅丸方形・長方形」、Type 3 : 「不定形」の 3 タイプに分け報告することとする。

A Type 1 : 平面観が円・楕円形 (第 112 図～第 127 図) 1号土坑 (第 112 図)

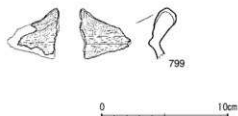
H-22 区, IV b 層で検出された。平面観は、直径 51cm の正円形である。検出面からの深さは、最深部で 3cm と非常に浅い。埋土は、茶褐色土の単一埋土であった。土坑内から出土した土器 1 点を図化した。

2号土坑 (第 112 図)

H-22 区, IV b 層で検出された。平面観は、長径 60cm、短径 53cm のほぼ円形である。検出面からの深さは、最深部で 20cm を測る。埋土は、黄色バミス (P7) を含む暗褐色土 (埋土①) を主体とし、黄色バミスを含む暗黄褐色土 (埋土②) が堆積していた。土坑内から遺物は出土したが図化はしなかった。

3号土坑 (第 112 図)

I-22 区, IV b 層で検出された。平面観は、長径 75cm、短径 65cm のほぼ円形である。検出面からの深さは、最深部で 20cm を測る。埋土は、暗褐色土の単一埋土であった。土坑内から出土した土器 4 点、石器 1 点を図化した。



第 111 図 縄文時代晩期落とし穴内出土土器

4号土坑 (第 112 図)

E-19 区, IV b 層で検出された。平面観は、長径 76cm、短径 70cm のほぼ円形である。検出面からの深さは、掘削を進めたところ 2 段になったので、最深部で 62cm を測る。埋土は、にぶい黄褐色土 (埋土②) を主体とし、上部と下部に暗褐色土 (埋土①・③) が堆積していた。出土遺物は 30 点で土器 1 点、石器 2 点を図化した。

5号土坑 (第 112 図)

E-19 区, IV b 層で、弥生時代住居跡 1 号に切られる形で検出された土器集中土坑である。平面観は、長径が推定で約 75cm、短径が推定で約 70cm の楕円形である。残存部の検出面からの深さは、最深部で 8cm を測る。残存部の埋土は、やや暗茶褐色土の単一埋土であった。土坑内から出土した土器 2 点を図化した。

6号土坑 (第 112 図)

H-1-20 区, IV b 層で検出された。平面観は、一部削平されていたため、長径は推定で約 60cm、短径 55cm のほぼ円形と思われる。検出面からの深さは、最深部で 55cm を測る。埋土は、黄色バミス (P7) を含む黄褐色土 (埋土①) を主体とし、褐色土 (埋土②)、砂質の暗褐色土 (埋土③)、やや粘質のある暗褐色土 (埋土④) がほぼレンズ状に堆積していた。土坑内から出土した土器 1 点を図化した。

7号土坑 (第 112 図)

M-9・10 区, V a 層で検出された。平面観は、長径 90cm、短径 77cm の楕円形である。検出面からの深さは、最深部で 23cm を測る。埋土は、IV a 層の色調に類似した茶褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物は出土したが図化はしなかった。

8号土坑 (第 112 図)

I-20 区, IV b 層で検出された。平面観は、長径 80cm、短径 66cm の楕円形である。検出面からの深さは、最深部で 17cm を測る。埋土は、青灰色硬質土 (埋土③)、黄色バミス (P7) を含む黄褐色土 (埋土②) や暗褐色土 (埋土①) がほぼレンズ状に堆積していた。土坑内から出土した石器を 1 点図化した。

9号土坑 (第 112 図)

H-22 区, IV b 層で検出された。平面観は、長径 85cm、短径 79cm のほぼ円形である。検出面からの深さは、最深部で 11cm を測る。埋土は、黄色バミス (P7) を含

第 31 表 縄文時代晩期落とし穴内出土土器観察表

検出 番号	器種	遺物番号	出土区	層位	部位	法量 (cm)			文様・調整		胎土			調査時の 遺物番号	備考
						口径	底径	器高	外面	内面	白色 粘土	黄白 粘土	解石		
111	浅鉢 3b 類	4 号落とし穴	F-21-22	-	口縁部	-	-	-	ミガキ・ナツ	ミガキ・ナツ	○		○	土坑 112	鱗状突起・3～5mm の器底を含む・精製浅鉢

む暗褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物は出土したが図化はしなかった。

10号土坑 (第112図)

N-9区, V a層で検出された。平面観は、長径90cm, 短径84cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で21cmを測る。埋土は、IV a層の色調に類似した茶褐色土の単一埋土であった。土坑内から出土した土器1点, 石器2点を図化した。

11号土坑 (第112図)

L-14区, IV b層で検出された。平面観は、長径86cm, 短径81cmのほぼ円形である。検出面からの深さは、最深部で53cmを測る。埋土は、暗褐色土の単一埋土で、黄色バミス(P7)が上部が下部よりやや多く含まれる。土坑内から出土した土器4点, 石器1点を図化した。

12号土坑 (第113図)

I-20区, IV b層で検出された。平面観は、一部削平されていたため、長径が推定で約90cm, 短径88cmのほぼ円形と思われる。検出面からの深さは、最深部で60cmを測る。残存部の埋土は、暗茶褐色土(埋土④), 褐色土(埋土③), 黄色バミス(P7)を多く含む黄褐色土(埋土②),

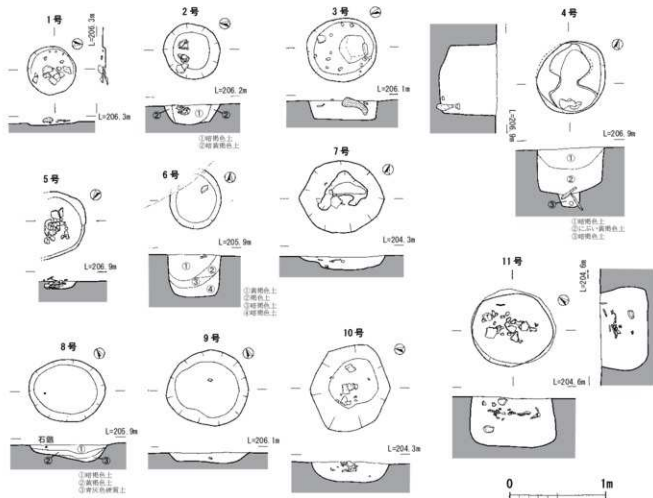
黄色バミスが点在する暗褐色土(埋土①)の順にレンズ状に堆積していたと思われる。土坑内から遺物は出土したが図化はしなかった。

13号土坑 (第113図)

H-1-22区, IV b層で検出された。平面観は、長径98cm, 短径89cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で40cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を多く含むIV a層の色調に類似した褐色土(埋土①), 埋土①より黄色バミスが少ない褐色土(埋土②), 黄色バミスを含む黄褐色土(埋土③)が堆積していた。土坑内から出土した土器3点を図化した。

14号土坑 (第113図)

F-18区, V a層で検出された。平面観は、長径100cm, 短径95cmのほぼ円形である。検出面からの深さは、最深部で23cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を多く含む褐色土(埋土①), 黄色バミスが埋土①より少ないにぶい黄褐色土(埋土②), 埋土①より小粒の黄色バミスを含む暗褐色土(埋土③), V a層の色調に類似した暗褐色土(埋土④)が堆積していた。ただし、埋土④は検出層の色調と類似しているため掘り過ぎの可能性もある。土坑内から出土した土器2点を図化した。



第112図 縄文時代晩期土坑1 (Type 1)

15号土坑 (第113図)

M-13区, IV層で検出された。平面観は、長径99cm, 短径98cmのほぼ円形である。検出面からの深さは、最深度で14cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む黄褐色土の単一埋土であった。土坑内から出土した土器1点, 石器1点を図化した。

16号土坑 (第113図)

K-12区, IV層で検出された。平面観は、長径100cm, 短径98cmのほぼ円形である。検出面からの深さは、最深度で13cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む暗黄褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物は出土したが図化はしなかった。

17号土坑 (第113図)

D-21区, Va層で検出された。平面観は、長径100cm, 短径90cmのほぼ円形である。検出面からの深さは、最深度で65cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む黒褐色土(埋土①), バミスを含まないにぶい黄褐色土(埋土②), 黄色バミスを若干含むにぶい黄褐色土(埋土③), 埋土①・③よりもやや大きめの黄色バミスを含む灰褐色土(埋土④), 埋土①と同じ大きさの黄色バミスを全体的に含む褐色土(埋土⑤)等が堆積していた。土坑内から出土した土器2点を図化した。

18号土坑 (第113図)

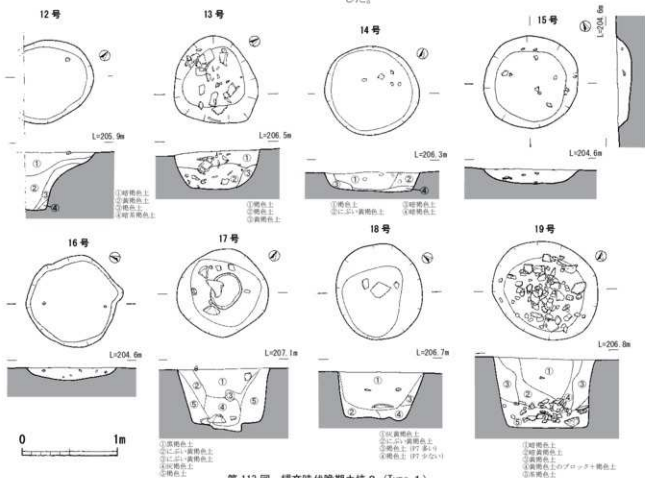
F-19区, IVb層で検出された。平面観は、長径100cm, 短径90cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深度で50cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む灰黄褐色土(埋土①)を主体とし、にぶい黄褐色土(埋土②), 黄色バミスの多い褐色土(埋土③), 黄色バミスの少ない褐色土(埋土④)が堆積していた。土坑内から出土した土器1点を図化した。

19号土坑 (第113図)

G-23区, IVb層で検出された。平面観は、長径116cm, 短径98cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深度で74cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を少し含む暗褐色土(埋土①)や暗黄褐色土(埋土②), 黄色バミスを多く含む黄褐色土(埋土③), 黄褐色土のプロックを含む褐色土(埋土④), 遺物を大量に含む茶褐色土(埋土⑤)が堆積していた。土坑内から出土した土器7点, 石器2点を図化した。

20号土坑 (第114図)

F-20区, IVb層で検出された。平面観は、長径110cm, 短径108cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深度で20cmを測る。埋土は、茶褐色土の単一埋土であった。土坑内から出土した土器4点, 石器2点を図化した。



第113図 縄文時代晩期土坑2 (Type 1)

21号土坑 (第114図)

F-18区, IV b層で検出された。平面観は、長径118cm、短径100cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で75cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含むにぶい黄褐色土の単一埋土であった。土坑内から出土した土器7点、石器1点を図化した。

22号土坑 (第114図)

H-22区, IV b層で検出された。平面観は、長径130cm、短径113cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で52cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を多く含む暗褐色土(埋土①)を主体とし、暗茶褐色土(埋土②)、暗黄褐色土(埋土③)が堆積していた。土坑内から出土した石器2点を図化した。

23号土坑 (第114図)

E-17・18区, IV b層で検出された。平面観は、長径130cm、短径89cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で56cmを測る。埋土は、オリーブ褐色土(埋土⑤)を主体とし、上部に黒褐色土(埋土①)、明黄褐色土(埋土②)、黄褐色土(埋土③)、黄色バミス(P7)が全体に含まれる明黄褐色土(埋土④)が堆積していた。土坑内から出土した土器2点を図化した。

24号土坑 (第115図)

F-20区, V a層で検出された。平面観は、長径120cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で46cmを測る。埋土は、黒褐色土(埋土①)を主体とし、暗褐色土(埋土②)が堆積していた。埋土③は黄色バミス(P7)が密に存在する黄褐色土である。土坑内から出土した土器4点を図化した。

25号土坑 (第115図)

F-18・19区, IV b層で、77号土坑をわずかに切る形で検出された。平面観は、長径135cm、短径125cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で64cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を全体的に含む灰黄

褐色土(埋土①)を主体とし、一部、褐色土(埋土②)・褐色土のブロックが観察できたが、地山の可能性もある。埋土①に含まれる黄色バミスは上部が小さく、下部がやや大きい。土坑内から出土した土器7点、石器2点を図化した。

26号土坑 (第115図)

M-12区, IX層で検出されたため、埋土の状況等を基に調査担当で検討した結果、縄文時代晩期該当の土坑であると判断した。平面観は、長径48cm、短径47cmのほぼ円形である。検出面からの深さは、最深部で60cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む黄褐色土(埋土①)、茶褐色土(埋土②)が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

27号土坑 (第115図)

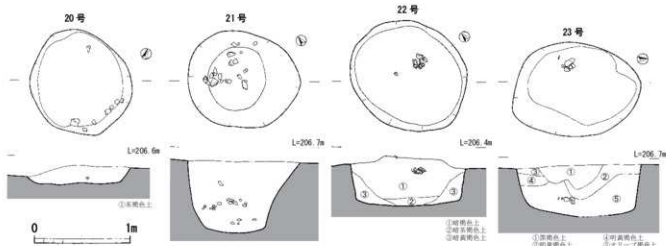
E-24区, IV b層で、28号土坑を切る形で検出された。平面観は、長径50cm、短径42cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で11cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を少し含む褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物の出土はなかった。

28号土坑 (第115図)

E-24区, IV b層で、27号土坑に切られる形で検出された。平面観は、長径が推定で50cm、短径42cmの楕円形であると思われる。検出面からの深さは、残存部の最深部で9cmを測る。残存している埋土は、黄色バミス(P7)を含む褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物の出土はなかった。

29号土坑 (第115図)

D-24区, IV b層で検出された。平面観は、長径65cm、短径56cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で18cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む暗褐色土(埋土①)、黄色バミス(埋土①)より多く含む褐色土(埋土②)が堆積していた。土坑内から遺物は出土したが小片のため図化はしなかった。



第114図 縄文時代晩期土坑3 (Type 1)

30号土坑 (第115図)

E-24区, IV b層で39号土坑に切られる形で検出された。平面観は、長径66cm, 短径が推定で42cmの円形であると思われる。検出面からの深さは、最深部で17cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)だけを含む褐色土(埋土①)、黄色バミスと赤褐色土を少し含む褐色土(埋土②)、黄色バミスを少し含む黒褐色土(埋土③)が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

31号土坑 (第115図)

E・F-13区, IV b層で検出された。平面観は、長径69cm, 短径52cmの楕円形であるが、斜めに掘り込まれており検出面からの深さは、不明である。観察ができた埋土は、暗褐色土(埋土①)、黄褐色土(埋土②)、バミスを含まない黒褐色土(埋土③)、バミスを含む黒褐色土(埋土④)であった。現場担当者で検討を重ねながら調査を進めたが性格不明土坑とした。土坑内から遺物の出土はなかった。

32号土坑 (第115図)

K-19区, IV b層で検出された。平面観は、長径62cm, 短径60cmのほぼ円形である。検出面からの深さは、最深部で15cmを測る。埋土は、上部にIV a層の色調に類

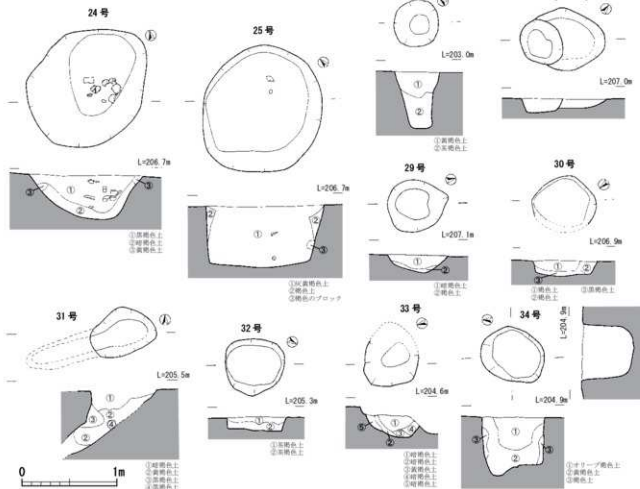
似した茶褐色土(埋土①)、下部に黄色バミス(P7)を含む茶褐色土(埋土②)が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

33号土坑 (第115図)

M-14区, IV b層で、119号土坑に切られる形で検出された。平面観は、推定で直径約55cmの円形であると思われる。深さも推定で約20cm強を測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む暗褐色土(埋土①)、褐色土のブロックを多く含む暗褐色土(埋土②)、黄褐色土(埋土③)、黄色バミスを含む黄褐色土のブロックをわずかに含む暗褐色土(埋土④)、褐色土のブロックを少し含む暗褐色土(埋土⑤)等が堆積していた。土坑内から遺物は出土したが固化はなかった。

34号土坑 (第115図)

F-17区, VI層で検出された。平面観は、長径65cm, 短径57cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で61cmを測る。埋土は、オリーブ褐色土(埋土①)、黄色バミス(P7)が点在する黄褐色土(埋土②)、褐色土(埋土③)等が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。



第115図 縄文時代晩期土坑4 (Type 1)

35号土坑 (第116図)

F-17区, VI層で検出された。平面観は、長径69cm, 短径64cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で57cmを測る。埋土は、オリーブ褐色土(埋土①)、黄色バミス(P7)が点在する黄褐色土(埋土②)、褐色土(埋土③)等が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

36号土坑 (第116図)

N-12区, IV b層で検出された。平面観は、直径64cmのほぼ円形である。検出面からの深さは、最深部で56cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む暗褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物の出土はなかった。

37号土坑 (第116図)

J-7区, VII層で検出された。平面観は、長径70cm, 短径66cmのほぼ円形である。検出面からの深さは、最深部で30cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む黄褐色土(埋土①)を主体とし、黒褐色土(埋土②)も堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

38号土坑 (第116図)

K-19区, IV b層で検出された。平面観は、長径73cm, 短径72cmのほぼ円形である。検出面からの深さは、最深部で28cmを測る。埋土は、IV a層の色調に類似した茶褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物の出土はなかった。

39号土坑 (第116図)

E-24区, IV b層で、40号・66号土坑に切られる形で、30・94号土坑を切る形で検出された。平面観は、推定で直径約70cmの円形であると思われる。検出面からの

深さは、残存部の最深部で26cmを測る。残存部の埋土は、褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物は出土したが腐化はしなかった。

40号土坑 (第116図)

E-24区, IV b層で、39号・94号土坑を切る形で検出された。平面観は、長径84cm, 短径78cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で30cmを測る。埋土は、黄色バミスを少し含む暗褐色土の単一埋土であった。埋土中から遺物の出土はなかった。

41号土坑 (第116図)

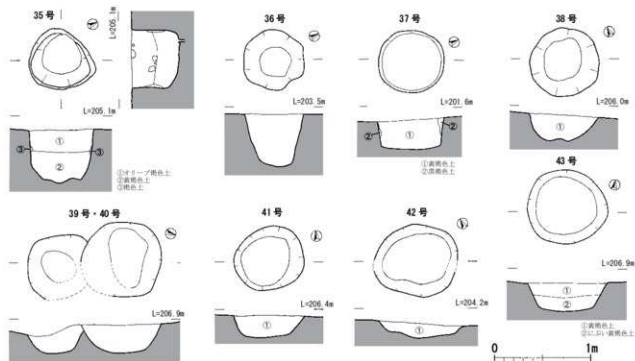
H-23区, IV b層で検出された。平面観は、長径73cm, 短径66cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で23cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を少し含む暗褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物の出土はなかった。

42号土坑 (第116図)

M・N-19区, IV b層で検出された。平面観は、長径88cm, 短径76cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で16cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含むにぶい黄褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物の出土はなかった。

43号土坑 (第116図)

D-18区, IV b層で検出された。平面観は、長径90cm, 短径70cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で30cmを測る。埋土は黄色バミス(P7)を密に含む黄褐色土(埋土①)、黄色バミスが点在するにぶい黄褐色土(埋土②)が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。



第116図 縄文時代晩期土坑5 (Type 1)

44号土坑 (第117図)

I-21区, IV b層で検出された。平面観は、直径81cmのほぼ円形である。検出面からの深さは、最深部で17cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む暗茶褐色土(埋土①)と褐色土(埋土②)が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

45号土坑 (第117図)

D-E-17・18区, IV b層で検出された。平面観は、直径88cmのほぼ円形である。検出面からの深さは、最深部で25cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含むにぶい黄褐色土(埋土③)、暗褐色土(埋土②)、白色バミスを含む暗褐色土(埋土①)の順にレンズ状に堆積していた。土坑内から出土した土器1点を図化した。

46号土坑 (第117図)

D-24区, IV b層で検出された。平面観は、長径93cm, 短径86cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で21cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む黒褐色土(埋土①)、黄色バミスを含む黒褐色土(埋土②)、褐色土のブロックを含む暗褐色土(埋土③)等が堆積していた。土坑内から出土した土器1点、石器1点を図化した。

47号土坑 (第117図)

E-19区, IV b層で検出された。平面観は、長径96cm, 短径81cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で28cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む暗褐色土(埋土①)、バミスほとんど含まれないにぶい黄褐色土(埋土②)が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

48号土坑 (第118図)

N-14区, IV b層で一部削平された形で検出された。平面観は、直径が推定で約100cmの円形であると思われる。残存部の検出面からの深さは、最深部で22cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を少し含む暗褐色土(埋土①)、黄色バミスを含む黄褐色土(埋土②)がややレンズ状に堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

49号土坑 (第118図)

F-19区, IV b層で検出された。平面観は、直径

90cmの円形である。検出面からの深さは、最深部で32cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を全体的に含むにぶい黄褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物は出土したが図化はしなかった。

50号土坑 (第118図)

H-1-21区, IV b層で一部削平された形で検出された。平面観は、直径が推定で約80cmの円形であると思われる。検出面からの深さは、最深部で20cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む暗黄褐色土(埋土①)、黄色バミスを少し含む褐色土(埋土②)がややレンズ状に堆積した。土坑内から出土した土器1点を図化した。

51号土坑 (第118図)

G-22区, IV b層で検出された。平面観は、長径91cm, 短径89cmのほぼ円形である。検出面からの深さは、最深部で35cmを測る。埋土は、褐色土(埋土①~③)を主体とし、黄褐色土(埋土④)、暗褐色土(埋土⑤)が堆積していた。埋土②は黄色バミス(P7)が多く、埋土①は埋土②より少なく、埋土③はほとんど黄色バミスを含まない。土坑内から出土した土器2点、石器2点を図化した。

52号土坑 (第118図)

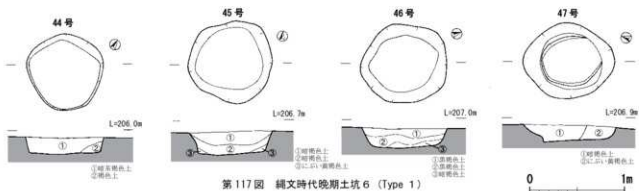
E-24区, IV b層で検出された。平面観は、長径87cm, 短径86cmのほぼ円形である。検出面からの深さは、最深部で52cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む暗褐色土(埋土①)、黄色バミスを多く含む暗黄褐色土(埋土②)、黄色バミスをわずかに含む褐色土(埋土③)、暗褐色土(埋土④)がややレンズ状に堆積していた。土坑内から出土した土器5点を図化した。

53号土坑 (第118図)

F-19区, IV b層で検出された。平面観は、長径97cm, 短径80cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で14cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む褐色土(埋土①)、黄色バミスを多く含むにぶい黄褐色土(埋土②)が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

54号土坑 (第118図)

F-18区, IV b層で検出された。平面観は、長径100cm, 短径90cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で25cmを測る。埋土は、小粒の黄色バミス(P7)



第117図 縄文時代晩期土坑6 (Type 1)

を多く含む暗褐色土(埋土①)、埋土①より大きいバミスを含む暗褐色土(埋土②)、バミスをほとんど含まないにぶい黄褐色土(埋土③)がややレンズ状に堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

55号土坑(第118図)

E・F-18区, IV b層で検出された。平面観は、長径100 cm, 短径80 cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で50 cmを測る。埋土は、茶褐色土の単色埋土だが、上部はバミスが多く(埋土①)、下部はバミスが少ない(埋土②)。土坑内から出土した土器2点を図化した。

56号土坑(第119図)

I-21区, IV b層で検出された。平面観は、長径98 cm, 短径85 cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で27 cmを測る。埋土は、IV a層の色調に類似した暗茶褐色土(埋土①)と茶褐色土(埋土②)が堆積していた。土坑内から出土した土器1点, 石器1点を図化した。

57号土坑(第119図)

N-18区, IV b層で検出された。平面観は、長径98 cm, 短径93 cmのほぼ円形である。検出面からの深さは、最深部で30 cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含むにぶい黄褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物の出土はなかった。

58号土坑(第119図)

E・F-19区, IV b層で検出された。平面観は、長径103 cm, 短径85 cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で42 cmを測る。埋土は、IV a層の色調に類似し、

黄色バミス(P7)を含む茶褐色土(埋土①)を主体とし、暗褐色土(埋土②)が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

59号土坑(第119図)

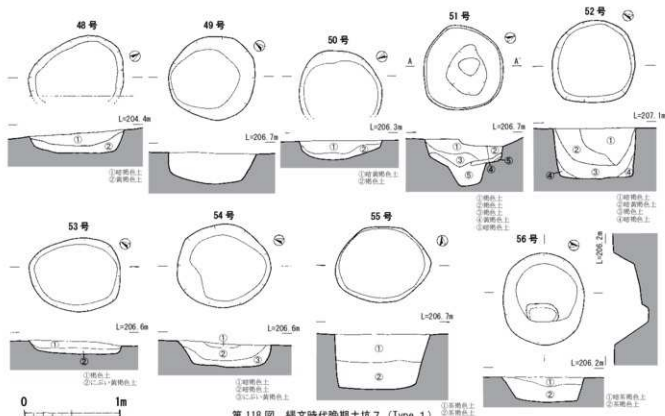
N-15区, IV b層でわずかに小ピットに切られる形で検出された。平面観は、長径99 cm, 短径92 cmのほぼ円形である。検出面からの深さは、最深部で55 cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む暗褐色土(埋土①)、黄色バミスを多く含む暗褐色土(埋土②)、黄褐色土のブロックを含む褐色土(埋土③)、黄色バミスを含む黒褐色土(埋土④)等が堆積していた。土坑内から出土した土器1点, 石器1点を図化した。

60号土坑(第119図)

E-17区, IV b層で検出された。平面観は、長径95 cm, 短径93 cmのほぼ円形である。検出面からの深さは、最深部で44 cmを測る。埋土は、灰黄褐色土(埋土①)、黄色バミス(P7)を含むにぶい黄褐色土(埋土②)、黒褐色土で炭化物を含む埋土③、炭化物を含まない埋土④等が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

61号土坑(第120図)

M-18区, V a層で検出された。平面観は、長径105 cm, 短径88 cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で117 cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を多く含む暗オリーブ褐色土(埋土②)、黄色バミスを含むにぶい黄褐色土(埋土③・④・⑤)等が堆積していた。埋土③は埋土④・⑤より色調が明るい。また、埋土①は



第118図 縄文時代晩期土坑7 (Type 1)

赤褐色土や黒色土のブロックも含んでいた。土坑内から遺物の出土はなかった。

62号土坑 (第120図)

F-20区, V a層で検出された。平面観は、長径100cm, 短径95cmのほぼ円形である。検出面からの深さは、最深部で18cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含むにぶい黄褐色土(埋土①)と暗褐色土(埋土②)がややレンズ状に堆積していた。土坑内から出土した土器1点、石器1点を図化した。

63号土坑 (第120図)

J-20区, IV b層で検出された。平面観は、長径101cm, 短径95cmのほぼ円形である。検出面からの深さは、最深部で14cmを測る。埋土は、黄白色バミスを含む暗茶褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物の出土はなかった。

64号土坑 (第120図)

G-23区, V b層で検出された。平面観は、長径100cm, 短径98cmのほぼ円形である。検出面からの深さは、最深部で15cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む暗茶褐色土(埋土①)、黄色バミスを多く含む黄褐色土(埋土②)が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

65号土坑 (第120図)

F-19区, IV b層で検出された。平面観は、直径95cmの正円形である。検出面からの深さは、最深部で20cmを測る。埋土は、黄白色バミスを含むにぶい黄褐色土の単一埋土であった。土坑内から出土した石器1点を図化した。

66号土坑 (第120図)

E-24区, IV b層で検出された。平面観は、長径103cm, 短径92cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で11cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む褐色土であった。土坑内から遺物は出土したが図化はなかった。

67号土坑 (第120図)

E-20区, IV b層で検出された。平面観は、長径106cm, 短径94cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で14cmを測る。埋土は、黄白色バミスを含むにぶい黄褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物は出土したが図化はなかった。

68号土坑 (第120図)

M-13区, IV層で、一部、ビットに切られる形で検出された。平面観は、長径105cm, 短径95cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で23cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む灰褐色硬質土(ア)と黄褐色土(イ)のブロックが混ざった暗褐色土(埋土①)と黄色バミスを少し含む暗茶褐色土(埋土②)が堆積していた。土坑内から遺物は出土したが図化はなかった。

69号土坑 (第120図)

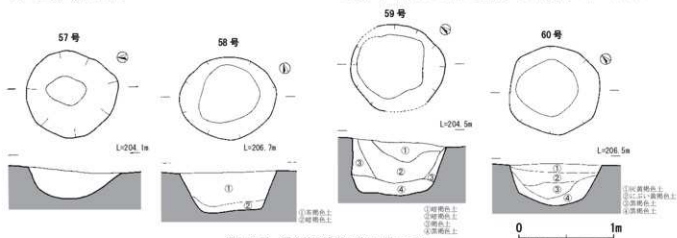
E-19区, IV b層で、70号土坑を切る形で検出された。平面観は、直径106cmの円形である。検出面からの深さは、最深部で24cmを測る。埋土は、IV a層の色調に類似した茶褐色土の単一埋土であった。70号土坑の埋土より含まれるバミスの量が多い。土坑内から遺物は出土したが図化はなかった。

70号土坑 (第120図)

E-19区, IV b層で、69号土坑に切られる形で検出された。平面観は、長径は推定で約120cm, 短径85cmの楕円形であると思われる。検出面からの深さは、最深部で24cmを測る。埋土は、69号土坑の埋土とほぼ同じ茶褐色土の単一埋土であったが、含まれるバミスの量が69号土坑より少ない。土坑内から遺物は出土したが図化はなかった。

71号土坑 (第120図)

F-19区, V a層で検出された。平面観は、長径107cm, 短径100cmのほぼ円形である。検出面からの深さは、最深部で20cmを測る。埋土は、IV b層の色調に類似したにぶい黄褐色土(埋土①)、IV a層の色調に類似した褐色土(埋土②)、V a層の色調に類似した褐色土(埋土③)が堆積していた。埋土①・②は黄色バミス(P7)



第119図 縄文時代晩期土坑8 (Type 1)

を含む。土坑内から遺物は出土したが図化はしなかった。

72号土坑 (第120図)

D-21区, V b層で検出された。平面観は、長径107cm, 短径100cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で25cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含むにふい黄褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物の出土はなかった。

73号土坑 (第121図)

I-21区, IV b層で検出された。平面観は、長径117cm, 短径103cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で60cmを測る。埋土は、IV a層の色調に類似した茶褐色土(埋土①~③)とIV b層の色調に類似した黄褐色土(埋土④)が堆積していた。埋土②は黄褐色土のブロックを含む。埋土①は埋土②よりやや明るく、埋土③はやや暗い色調であった。土坑内から出土した土器6点、石器3点を図化した。

74号土坑 (第121図)

E-E-24区, IV b層で検出された。平面観は、長径119cm, 短径96cmの楕円形である。検出面からの深さは、

最深部で20cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む暗褐色土(埋土①)、黄色バミスを含む黄褐色土(埋土②)、褐色土(埋土③)がレンズ状に堆積していた。土坑内から出土した土器2点を図化した。

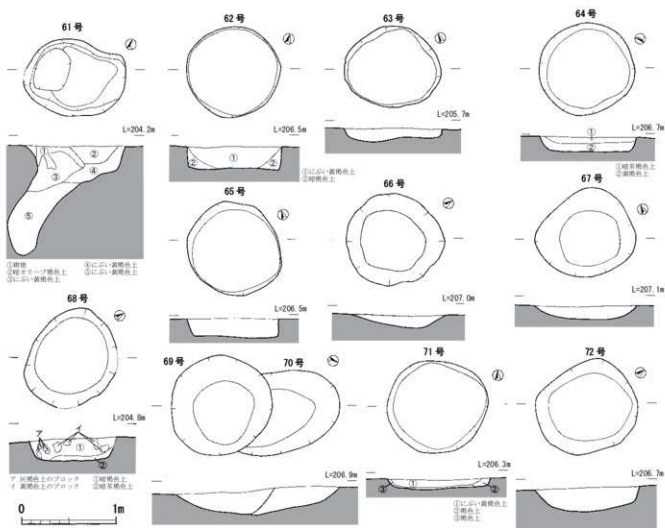
75号土坑 (第121図)

E-24区, IV b層で、94号土坑に切れ、76号・133号・135号土坑を切る形で検出された。平面観は、長径125cm, 短径122cmのほぼ円形である。検出面からの深さは、最深部で25cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む暗褐色土(埋土①・②)で、埋土①は褐色土の小ブロックも含む。

土坑内から遺物の出土はなかった。

76号土坑 (第121図)

E-24区, IV b層で、75号・94号土坑に切られる形で検出された。平面観は、規模は不明だが、残存部の形から楕円形であると思われる。残存部の検出面からの深さは、最深部で10cmを測る。残存部の埋土は、褐色土のブロックと黄色バミス(P7)を少し含む暗褐色土であった。土坑内から遺物の出土はなかった。



第120図 縄文時代晩期土坑9 (Type 1)

77号土坑 (第121図)

F-18区, IV b層で、25号土坑にわずかに切られる形で検出された。平面観は、長径110cm, 短径105cmのほぼ円形である。検出面からの深さは、最深度で19cmを測る。埋土は、IV a層の色調に類似した茶褐色土(埋土①)を主体とし、V a層の色調に近い明黄褐色土(埋土②)が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

78号土坑 (第121図)

H・I-22区, IV b層で一部削平された形で検出された。平面観は、長径は推定で約115cm, 短径は約100cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深度で76cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む暗黒褐色土(埋土①)を主体とし、黄色バミスを多く含む暗黄褐色土(埋土②)、黄色バミスを少し含む黒褐色土(埋土③)、黄褐色土(埋土④)、暗茶褐色土(埋土⑤)がややレンズ状に堆積していた。土坑内から出土した土器2点を図化した。

79号土坑 (第122図)

M-14区, IV b層で、107号土坑に切られる形で検出された。平面観は、長径129cm, 短径が推定で約110cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深度で26cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む暗褐色土(埋土①)・暗黄褐色土(埋土②)が堆積していた。土坑内から出土した土器2点を図化した。

80号土坑 (第122図)

I-22区, V b層で検出された。平面観は、長径135cm, 短径119cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深度で18cmを測る。埋土は、一部、樹痕により攪乱されていたが、小さな黄褐色土のブロックを含む暗黄褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物の出土はなかった。

81号土坑 (第122図)

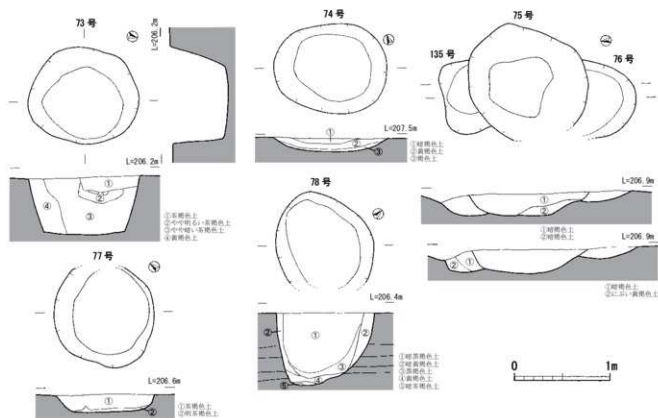
M-12・13区, IV層で、わずかに削平された形で検出された。平面観は、長径184cm, 短径150cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深度で62cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む暗黄褐色土の単一埋土であった。土坑内から出土した土器1点を図化した。

82号土坑 (第122図)

K-18・19区, IV b層で検出された。平面観は、長径132cm, 短径80cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深度で20cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を多く含む茶褐色土のブロックが混ざる暗褐色土(埋土①)を主体とし、V b層の色調に類似した赤茶褐色土(埋土②)が堆積していた。ただし、埋土②は地山で掘り過ぎた感はある。土坑内から遺物は出土したが図化はしなかった。

83号土坑 (第122図)

N-13区, IV層で検出された。平面観は、長径57cm,



第121図 縄文時代晩期土坑10 (Type 1)

短径 39cm の楕円形である。検出面からの深さは、最深部で 39cm を測る。埋土は黄色バミス (P7) を少し含む暗茶褐色土 (埋土①) と黄色バミス を多く含む黄褐色土 (埋土②) がレンズ状に堆積していた。土坑内から遺物は出土したが図化はしなかった。

84号土坑 (第122図)

N-12区, IV b層で検出された。平面観は、長径 84cm, 短径 38cm の楕円形である。検出面からの深さは、最深部で 14cm を測る。埋土は、黄色バミス (P7) を多く含む暗黄褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物の出土はなかった。

85号土坑 (第122図)

G-6区, VII層で検出されたが、埋土の状況や周辺の遺物の出土状況等から縄文時代晩期該当の土坑と判断した。平面観は、長径 90cm, 短径 48cm の楕円形である。検出面からの深さは、最深部で 28cm を測る。埋土は、黄色バミス (P7) を多く含む黄褐色土 (埋土①) を主体とし、V c層の明赤色バミスを含みVI層の色調に類似した茶褐色土 (埋土②) が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

86号土坑 (第123図)

M・N-13区, IV層で検出された。平面観は、長径 92cm, 短径 49cm の楕円形である。検出面からの深さは、最深部で 19cm を測る。埋土は、黄色バミス (P7) を含む暗褐色土の単一埋土であった。土坑内から出土した土器1点を図化した。

87号土坑 (第123図)

M-16区, IV b層で検出された。平面観は、長径 78cm, 短径 56cm の楕円形である。検出面からの深さは、最深部で 16cm を測る。埋土は、黄色バミス (P7) を少し含む黒褐色土 (埋土①)、少量の黄色バミス と黄褐色土のブロックを含む暗褐色土 (埋土②) がレンズ状に堆積していた。土坑内から遺物は出土したが図化はしなかった。

88号土坑 (第123図)

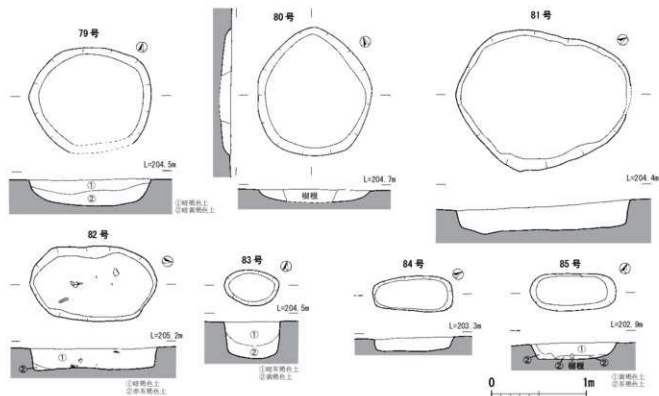
G-23区, Va層で、89号土坑に切られる形で検出された。平面観は、長径 125cm, 短径が推定で約 80cm の楕円形である。検出面からの深さは、残存部の最深部で 19cm を測る。埋土は、黄色バミス (P7) を多く含む暗黄褐色土 (埋土④)、黄色バミス を含む暗褐色土 (埋土⑤)、黄色バミス を少し含む茶褐色土 (埋土⑥) がやレンズ状に堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

89号土坑 (第123図)

G-23区, Va層で 88号土坑を切る形で検出された。平面観は、長径 58cm, 短径 38cm の楕円形である。検出面からの深さは、最深部で 20cm を測る。埋土は、黄色バミス (P7) を多く含む黄褐色土 (埋土①)、黄色バミス を少し含む暗黄褐色土 (埋土②)、水性作用で硬化したと考えられる青灰色硬質土 (埋土③) が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

90号土坑 (第123図)

G-6区, VI層で検出されたが、埋土の状況や周辺の遺物の出土状況等から縄文時代晩期該当の土坑と判断し



第122図 縄文時代晩期土坑 11 (Type 1)

た。平面観は、長径110cm、短径45cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で35cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を多く含む茶褐色土(埋土①)を主体とし、Vc層の明赤色バミスを含みVI層の色调に類似した明茶褐色土(埋土②)、VII層の色调に類似した黒褐色土(埋土③)が堆積していたが、埋土③は地山の可能性があり掘り過ぎた感是否めない。土坑内から遺物の出土はなかった。

91号土坑(第123図)

M-14・15区, IVb層で検出された。平面観は、長径101cm、短径47cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で23cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を少し含む暗褐色土(埋土①)を主体とし、黄色バミスを多く含む暗褐色土(埋土②)がレンズ状に堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

92号土坑(第123図)

I-22区, IVb層で、一部削平されて検出された。平面観は、長径90cm、短径66cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で17cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む暗褐色土の単一埋土であった。土坑内から出土した土器2点を図化した。

93号土坑(第123図)

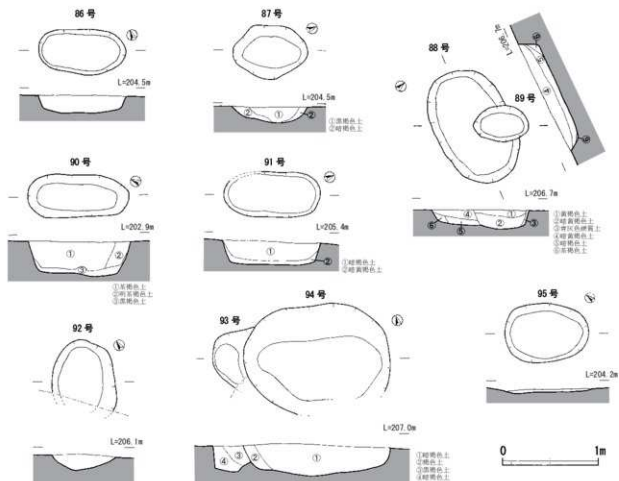
E-24区, IVb層で、94号土坑に切られる形で検出された。平面観は、規模は不明だが、残存部の形状から楕円形であると思われる。残存部の検出面からの深さは、最深部で26cmを測る。残存部の埋土は、黄色バミス(P7)を少し含む黒褐色土(埋土③)、黄色バミスと褐色土の小ブロックを含む暗褐色土(埋土④)が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

94号土坑(第123図)

E-24区, IVb層で、75号・76号・93号・133号土坑を切る形で、39号土坑に切られる形で検出された。平面観は、長径155cm、短径が推定で約115cmの楕円形であると思われる。検出面からの深さは、最深部で32cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む暗褐色土(埋土①)を主体とし、黄色バミスと褐色土の小ブロックを含む褐色土(埋土②)が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

95号土坑(第123図)

H-6区, IVa層で検出された。平面観は、長径89cm、短径63cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で3cmと非常に浅い。埋土は、にがい黄褐色土の



第123図 縄文時代晩期土坑12 (Type 1)

単一埋土であった。土坑内から遺物の出土はなかった。

96号土坑 (第124図)

H-6区, IV a層で検出された。平面観は、長径87cm, 短径63cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で7cmと浅い。埋土は、IV a層の色調に類似した灰黄褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物の出土はなかった。

97号土坑 (第124図)

K-19区, IV b層で検出された。平面観は、長径95cm, 短径60cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で25cmを測る。埋土は、暗褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物の出土はなかった。

98号土坑 (第124図)

M・N-18区の調査区域, IV b層で一部検出された。平面観は、長径が推定で約100cm, 短径が推定で約80cmの楕円形と思われる。検出面からの深さは、最深部で12cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む暗褐色土(埋土①)と褐色土(埋土②)が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

99号土坑 (第124図)

D・E-24区, IV b層で、一部削平されて検出された。平面観は、長径が推定で約60cmの楕円形であると思われる。検出面からの深さは、最深部で15cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を多く含む暗褐色土(埋土①)と黄色バミスを少し含む褐色土(埋土②)が堆積していた。土坑内から遺物は出土したが腐化はしなかった。

100号土坑 (第124図)

N-14区, IV b層で検出された。平面観は、長径102cm, 短径62cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で25cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を多く含む暗黄褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物は出土したが腐化はしなかった。

101号土坑 (第124図)

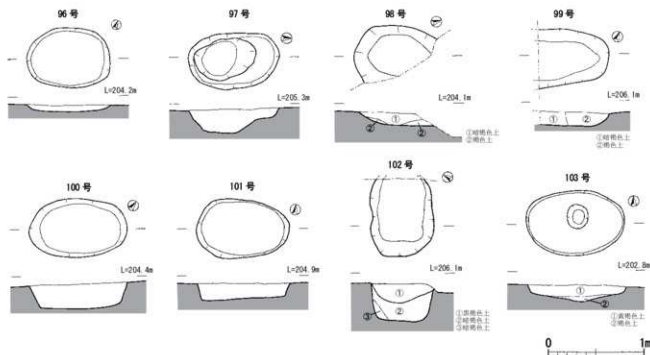
K-19区, IV b層で検出された。平面観は、長径97cm, 短径63cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で18cmを測る。埋土は、暗褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物の出土はなかった。

102号土坑 (第124図)

I-22区, IV b層で、一部削平されて検出された。平面観は、長径が推定で約100cm, 短径が60cmの楕円形であると思われる。検出面からの深さは、最深部で39cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む黒褐色土(埋土①)と暗褐色土(埋土②・③)がややレンズ状に堆積していた。埋土②は埋土③より色調がやや暗かったため分離した。土坑内から出土した土器4点を腐化した。

103号土坑 (第124図)

I-6区, IV b層で検出された。平面観は、長径103cm, 短径66cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で18cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含むIV b層の色調に類似した黄褐色土(埋土①)を主体とし、黄色バミスをわずかに含む褐色土(埋土②)が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。



第124図 縄文時代晩期土坑13 (Type 1)

104号土坑 (第125図)

L-20区, IV b層で検出された。平面観は、長径120cm, 短径68cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で8cmと浅い。埋土は、暗褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物は出土したが図化はしなかった。

105号土坑 (第125図)

E-24区, IV b層で、一部削平された形で検出された。平面観は、規模は不明だが残存部の形状から円形もしくは楕円形であると思われる。残存部の検出面からの深さは、最深部で45cmを測る。埋土は、V a層に類似した色調の土塊を多く含む攪乱土である。自然堆積でなく、人為的に埋められたものと考えられる。検出層や周囲の遺構・遺物の状況等から縄文時代晩期の土坑とした。土坑内から遺物は出土したが図化はしなかった。

106号土坑 (第125図)

L-20区, V b層で検出された。平面観は、長径119cm, 短径75cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で18cmを測る。埋土は、底面付近にV c層の明赤褐色パミスを含むIV b層の色調に類似した黄褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物の出土はなかった。

107号土坑 (第125図)

M・N-14区, IV b層で、79号土坑を切る形で検出された。平面観は、長径122cm, 短径80cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で20cmを測る。埋土は、黄色パミス(P7)を多く含む明茶褐色のブロック(埋

土②)が混ざる黄褐色土(埋土①)であった。土坑内から遺物は出土したが図化はしなかった。

108号土坑 (第125図)

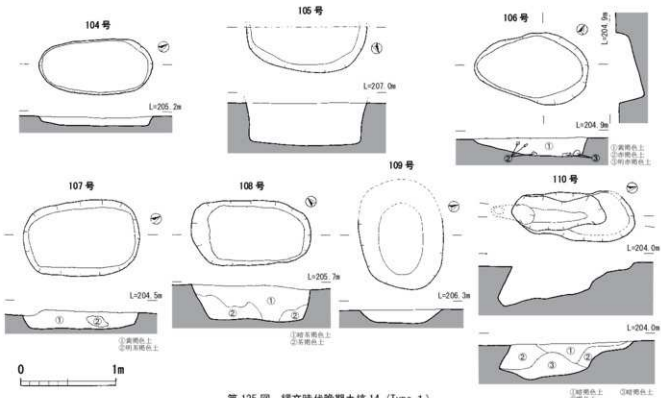
J-20区, IV b層で検出された。平面観は、長径125cm, 短径68cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で37cmを測る。埋土は、P7と思われる黄色パミスを含む暗茶褐色土(埋土①)、黄白色パミスを含みIV a層の色調に類似した茶褐色土(埋土②)が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

109号土坑 (第125図)

H-22区, IV b層で、一部削平された形で検出された。平面観は、長径が推定で約115cm, 短径が推定で約90cmの楕円形であると思われる。残存部の検出面からの深さは、最深部で14cmを測る。残存部の埋土は、黄色パミス(P7)を含むにぶい黄褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物の出土はなかった。

110号土坑 (第125図)

N-18区, V a層で検出された。平面観は、長径130cm, 短径54cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で37cmを測る。埋土は、黄色パミス(P7)を多く含む暗褐色土(埋土①)、黄褐色土の小ブロックと黄色パミスを少し含む褐色土(埋土②)、黄色パミスを含む暗褐色土(埋土③)が堆積していた。埋土③は埋土①よりパミスの量が少ない。土坑内から遺物の出土はなかった。



第125図 縄文時代晩期土坑14 (Type 1)

111号土坑 (第126図)

G-12区, IV b層で検出された。平面観は、長径131cm, 短径58cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で20cmを測る。埋土は、上部にはびい黄褐色土(埋土①)が堆積し、下部に褐色土(埋土②)、黒色土(埋土③)、褐色土と黒色土の混土(埋土④)が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

112号土坑 (第126図)

L-19区, IV b層で検出された。平面観は、長径134cm, 短径83cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で35cmを測る。埋土は、暗褐色土(埋土①)を主体とし、黄褐色土の小ブロックを含む黄茶褐色土(埋土②)が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

113号土坑 (第126図)

L-20区, IV b層で検出された。平面観は、長径140cm, 短径80cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で26cmを測る。埋土は、暗褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物の出土はなかった。

114号土坑 (第126図)

M-14区, IV b層で検出された。平面観は、長径139cm, 短径88cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で25cmを測る。埋土は、黄色パミス(P7)を含む暗褐色土(埋土①)、黄色パミスを多く含む暗黄褐色土(埋土②)等が堆積していた。土坑内から遺物は出土したが図化はしなかった。

115号土坑 (第126図)

K-19区, IV b層で、一部削平された形で検出された。平面観は、規模は不明だが、残存部の形状から円形もしくは楕円形であると思われる。土坑の底面からピットのような約10cmの落ち込みも確認された。検出面からの深さは落ち込み部分では約40cm, 落ち込み以外で最深部で約30cmを測る。残存部の埋土は、黄白色パミスをわずかに含むIV a層の色調に類似した暗茶褐色土(埋土①)を主体とし、その下部に茶褐色土(埋土②)が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

116号土坑 (第126図)

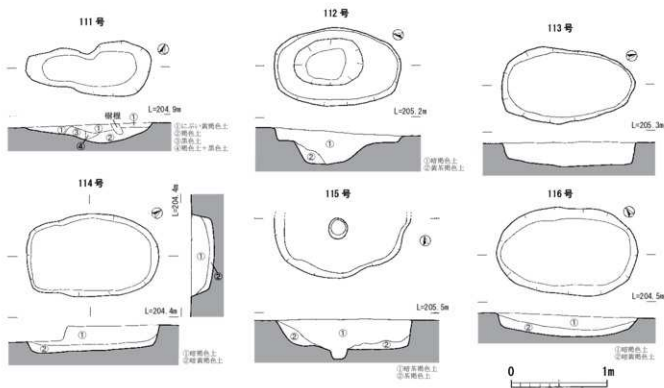
N-14区, IV b層で検出された。平面観は、長径147cm, 短径91cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で22cmを測る。埋土は、暗褐色土(埋土①)、暗黄褐色土(埋土②)がややレンズ状に堆積していた。土坑内から遺物は出土したが図化はしなかった。

117号土坑 (第127図)

F-5区, IV b層で検出された。平面観は、長径155cm, 短径107cmの楕円形である。検出面からの深さは、最深部で66cmを測る。埋土は、黄色パミス(P7)を含む暗褐色土(埋土①)を主体とし、埋土①と同じく黄色パミスを含む褐色土(埋土②)や黒褐色土(埋土③)が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

118号土坑 (第127図)

K-19区, IV b層で、一部消失した形で検出された。



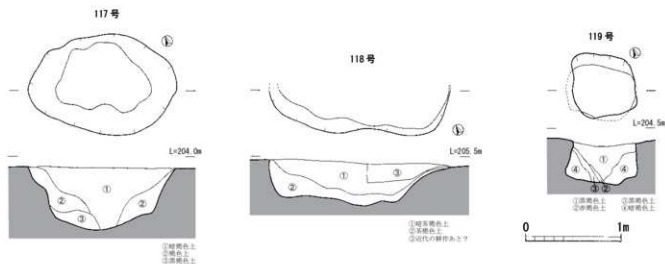
第126図 縄文時代晩期土坑15 (Type 1)

平面観は、規模は不明だが残存部の形状から楕円形であると思われる。残存部の深さは、最深部で45cmを測る。残存部の埋土は、黄白色バミス（P7）の色調に類似した暗茶褐色土（埋土①）を主体とし、その下部に茶褐色土（埋土②）が堆積していた。

また、115号土坑と隣接して検出されており、一連の落ち込みの可能性もあるとされている。土坑内から遺物は出土したが図化はしなかった。

119号土坑（第127図）

M-14区、IVb層で検出された。平面観は、長径68cm、短径66cmの円形に近い。検出面からの深さは、最深部で42cmを測る。埋土は、黄色バミス（P7）を多く含む黒褐色土（埋土①）を主体とし、赤褐色土の小ブロックを含む赤褐色土（埋土②）、黄褐色土の小ブロックと黄色バミスを少し含む黒褐色土（埋土③）、黄褐色土の小ブロックを多く含む暗褐色土（埋土④）等が堆積していた。土坑内から遺物は出土したが図化はしなかった。



第127図 縄文時代晩期土坑16 (Type 1)

イ Type 2：平面観が隅丸方形・長方形（第128図）

120号土坑（第128図）

E-19区、IVb層で検出された。平面観は、長軸80cm、短軸75cmのほぼ隅丸方形である。検出面からの深さは、最深部で30cmを測る。埋土は、黄色バミス（P7）を含む暗褐色土（埋土①）を主体とし、黄色バミスが点在するにぶい黄褐色土（埋土②）が堆積していた。土坑内から出土した土器1点を図化した。

121号土坑（第128図）

H-8区、IVa層で検出された。平面観は、長軸110cm、短軸107cmのほぼ隅丸方形である。検出面からの深さは、最深部で29cmを測る。埋土は、灰茶褐色土（埋土①）を主体とし、黄褐色土（埋土②）、にぶい灰茶褐色土（埋土③）、黄褐色土の小ブロックを含む黄褐色土（埋土④）等が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

122号土坑（第128図）

F-18区、IVb層で検出された。平面観は、長軸125cm、短軸100cmの隅丸長方形である。検出面からの深さは、最深部で59cmを測る。埋土は、黄色バミス（P7）を含む黒褐色の単一埋土であった。土坑内から出土した土器4点を図化した。

123号土坑（第128図）

N-13区、IVa層で、古代のビットに切られる形で検出された。平面観は、長軸131cm、短軸65cmの隅丸長方形である。検出面からの深さは、最深部で36cmを測る。埋土は、黄色バミス（P7）を含む褐色土（埋土④）、黄褐色土（埋土③）、黄色バミスを含む暗褐色土（埋土②）、IVa層の色調に類似した暗茶褐色土（埋土①）の順にレンズ状に堆積していた。土坑内から遺物は出土したが図化はしなかった。

124号土坑 (第128図)

J-19区, IV b層で検出された。平面観は、長軸110cm、短軸66cmの隅丸長方形である。検出面からの深さは、最深部で30cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む暗褐色土(埋土①)を主体とし、IV b層の色調に類似した黄褐色土(埋土②)、黄白色土と黄褐色の小ブロックとの混土(埋土③)等が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

125号土坑 (第128図)

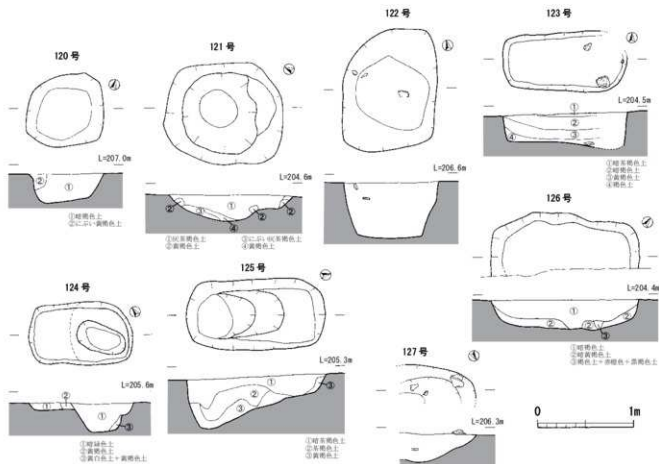
K-19区, IV b層で検出された。平面観は、長軸145cm、短軸75cmの隅丸長方形である。検出面からの深さは、最深部で52cmを測る。埋土は、黄白色バミスを含みIV a層の色調に類似した暗茶褐色土(埋土①)と茶褐色土(埋土②)、黄色バミス(P7)を含む黄褐色土(埋土③)等が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

126号土坑 (第128図)

N-14区, IV b層で一部削平された形で検出された。平面観は、長軸が155cm、短軸が推定で約100cmの隅丸長方形である。検出面からの深さは、最深部で32cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む暗褐色土(埋土①)を主体とし、黄色バミスを多く含む暗黄褐色土(埋土②)、褐色土・赤橙色土・黒褐色土等の小ブロックを含む混土(埋土③)が堆積していた。土坑内から遺物は出土したが図化はしなかった。

127号土坑 (第128図)

D・E-19区, V a層で検出された。平面観は、長軸110cm、短軸80cmの隅丸長方形である。検出面からの深さは、最深部で30cmを測る。埋土は、黄色バミス(P7)を含む暗褐色土の単一埋土であった。土坑内から出土した土器2点を図化した。



第128図 縄文時代晩期土坑17 (Type 2)

ウ Type 3 : 不定形 (第 129 図)

128 号土坑 (第 129 図)

E・F-18 区, IV b 層で検出された。平面観は, 長軸 110cm, 短軸 96cm の不定形である。検出面からの深さは, 最深部で 42cm を測る。埋土は, 暗褐色土 (埋土①) を主体とし, 黄色バミス (P7) を含むにぶい黄褐色土 (埋土②) が堆積していた。土坑内から出土した土器 3 点を図化した。

129 号土坑 (第 129 図)

G-5 区, IV b 層で検出された。平面観は, 長軸 264cm, 短軸 90cm の不定形である。検出面からの深さは, 最深部で 125cm と非常に深い。埋土は, 黄色バミス (P7) を含む IV a 層の色調に類似した茶褐色土 (埋土①) を主体とし, 黄色バミスと鉄分を含む灰褐色土 (埋土②) が堆積していた。土坑内から遺物は出土したが図化はしなかった。

130 号土坑 (第 129 図)

F-16 区, IV a 層で, トレンチャーで大部分を削平された形で検出された。平面観は, 規模は不明で不定形である。残存部の検出面からの深さは, 最深部で 21cm を測る。残存部の埋土は, 黄色バミス (P7) を含む暗灰黄色土の単一埋土であった。土坑内から出土した土器 1 点, を図化した。

131 号土坑 (第 129 図)

M-13 区, IV b 層で, 樹痕により一部のみ検出された。平面観は, 規模が不明で不定形である。残存部の検出面からの深さは, 最深部で 68cm を測る。残存部の埋土は, IV a 層の色調に近い茶褐色土の単一埋土であった。土坑内から出土した土器 3 点, 石器 2 点を図化した。

132 号土坑 (第 129 図)

H-13 区, IV a 層で検出された土器集中土坑である。平面観は, 長軸 317cm, 短軸 167cm の不定形である。検出面からの深さは, 最深部で 15cm を測る。埋土は, 黄白色バミスを含むオリーブ褐色土の単一埋土であった。土坑内から出土した土器 5 点, 石器 1 点を図化した。

133 号土坑 (第 129 図)

E-24 区, IV b 層で, 75 号・94 号・135 号土坑に切られる形で検出された。平面観は, 長軸・短軸とも推定復元できない不定形である。検出面からの深さは, 残存部の最深部で 14cm を測る。残存部の埋土は, 褐色土であった。土坑内から遺物の出土はなかった。

134 号土坑 (第 129 図)

K-9 区, IV b 層で検出された。平面観は, 長軸 63cm, 短軸 46cm の不定形である。検出面からの深さは, 最深部で 13cm を測る。埋土は, IV a 層の色調に類似した暗茶褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物の出土はなかった。

135 号土坑 (第 121 図)

E-24 区, IV b 層で, 75 号土坑に切られる形で検出

された。平面観は, 規模が不明で, 不定形である。残存部の検出面からの深さは, 最深部で 20cm を測る。残存部の埋土は, 黄色バミス (P7) を少し含む暗褐色土 (埋土①), 黄褐色土の小ブロックを含むにぶい黄褐色土 (埋土②) が堆積していた。埋土中から遺物の出土はなかった。

136 号土坑 (第 129 図)

N-18 区, IV b 層で, ビットに切られる形で検出された。平面観は, 長軸が推定で約 100cm, 短軸が約 75cm の不定形である。検出面からの深さは, 最深部で 7cm と浅い。埋土は, 黄色バミス (P7) を含む暗褐色土の単一埋土であった。土坑内から遺物の出土はなかった。

137 号土坑 (第 129 図)

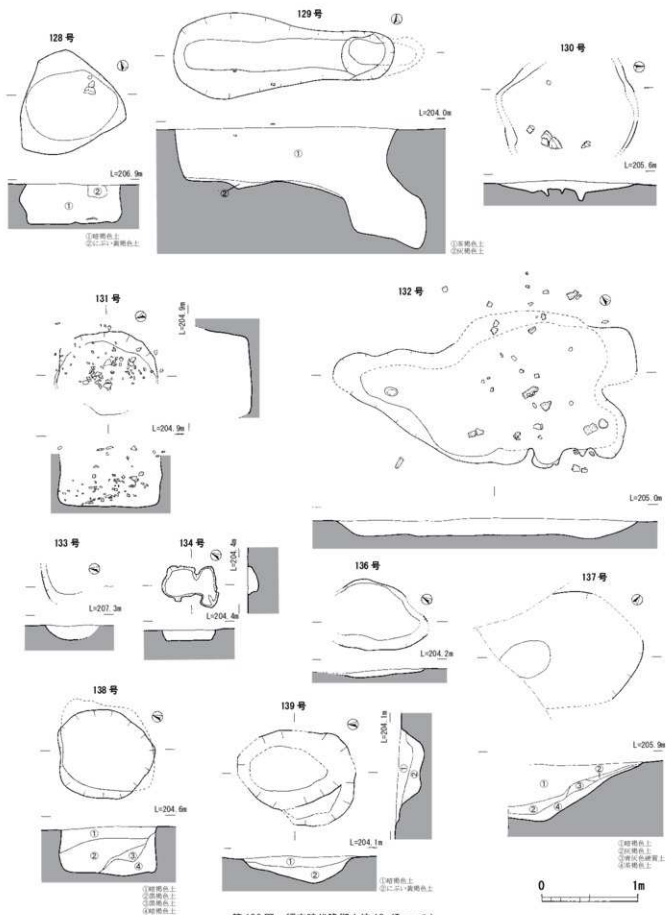
H-1-20 区, IV b 層で, 6 号・8 号・12 号土坑に切られる形で検出された。平面観は, 規模が不明の不定形である。残存部の検出面からの深さは, 最深部で約 60cm を測る。残存部の埋土は, 黄色バミス (P7) を含む暗褐色土 (埋土①) を主体とし, 埋土①と同じく黄色バミスを含む灰褐色土 (埋土②), 水の作用によって硬化したと考えられる青灰色硬質土 (埋土③), P7 と思われる黄色バミスを多く含む茶褐色土 (埋土④) 等が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。

138 号土坑 (第 129 図)

N-15 区, IV b 層で検出された。平面観は, 長軸 99cm, 短軸 93cm の不定形である。検出面からの深さは, 最深部で 51cm を測る。埋土は, 黄色バミス (P7) を含む暗褐色土 (埋土①) と黒褐色土 (埋土②・③), 黄色バミスや黄褐色土のブロックを含む暗褐色土 (埋土④) 等が堆積していた。埋土③は埋土②よりやや明るい色調である。土坑内から出土した土器 1 点, 石器 4 点を図化した。

139 号土坑 (第 129 図)

N-17 区, V a 層で検出された。平面観は, 長軸 120cm, 短軸 100cm の不定形である。検出面からの深さは, 最深部で 26cm を測る。埋土は, 黄色バミス (P7) を多く含む暗褐色土 (埋土①), 黄色バミスと褐色土の小ブロックを少し含むにぶい黄褐色土 (埋土②) が堆積していた。土坑内から遺物の出土はなかった。



第129图 縄文時代晩期土坑18 (Type 3)

(4) 土坑内出土遺物

139 基の土坑中 46 基の土坑内（埋土中と床面、床面付近のもの全て）から出土した遺物 143 点を図化した。

本文中の土器・石器の分類については、P179 以降の包含層出土遺物の項で述べてあるので、参照していただきたい。

図の掲載については、同一土坑から出土した遺物はまとめて掲載してある。また、遺物観察表については、P174～176 に土器、石器別に掲載してある。

1号土坑内出土遺物（第130図 800）

800 は頸部屈折部にリボン状突起を貼付する深鉢 3 a 類で、リボン状突起を起点に口縁部は緩やかに波状を構成する。復元口径は 41.6cm で、胎土に白色粒を多く含み、内外面にススが付着し、焼成はやや軟質の感がある。なお、復元に關しては複数箇所を試みているが、口径に対し器高がやや低い感の復元となる。黒川式土器に比定できる土器で、榎崎 B 遺跡の C 類に該当する。

3号土坑内出土遺物（第130図 801～805）

801 は器壁の薄い浅鉢 2 類の口縁部で、長く緩やかに反転する口縁部は両面とも入念に磨き、短く重ねた口縁端部も同様で、外面には細かい明瞭な凹線文を施す。また、極め細かい胎土は微細な輝石粒を含み、光沢のある褐灰の器面を成す。

802 は算盤玉状の胴部を呈す浅鉢 3 類で、口径は 13.4cm、頸部で再び反して短い口縁部を形成する。なお、外面の凹線文は若干浅く、にがみ黄橙の器面を呈す。802 と同一形状の 803 の算盤玉状胴部は 17.2cm が復元可能で、丁寧な磨きは滑らかで光沢のある器面を保つ。

804 は鉢と判断しているが、口縁部が緩やかな波状を成す可能性も有り、口縁部の傾きは再検討が必要である。両面とも入念にミガキ、口唇部は丸く仕上げる。いずれも黒川式土器の古い段階に比定できる。

805 はホルンフェルス製を石材としたものである。断面形は外縁側が細くなる歪な楕円形を呈し、彎曲状況等から石刀の破損品とみられる。

4号土坑内出土遺物（第130図 806～808）

約 30 点の遺物が出土したが、3 点を図化した。

806 は口縁端部が直立する浅鉢 2 b 類で、両面とも入念にミガキ、薄い器壁で赤褐色の精巧な仕上げを見せる。なお、割れ面も赤いが微細な白色粒を含む。入佐式土器新段階に比定できる土器である。

807・808 はホルンフェルス製の打製石斧である。807 は長さ 18.73cm のラケット状をしており、欠損と再生を繰り返して使用した痕跡が残される。808 は扁平な横長剥片を使用したもので、打面側に調整刻痕を実施している。

5号土坑内出土遺物（第131図 809・810）

809・810 は深鉢で、809 は口縁部へ胴部、810 は底部

である。2 点とも外面・内面がナデ調整が施されている。2 点は接合・復元できなかつたが、同一個体の可能性がある。

6号土坑内出土遺物（第131図 811）

811 は黒川式段階に比定できる精製浅鉢の口縁部である。復元口径は 34.4 cm を測る。器壁はやや厚い傾向が見られ、肩部の屈折も若干角張る状況が見られる。頸部の屈折は強く、口縁部とも近く、浅鉢 3 b 類の特徴を残している。

8号土坑内出土遺物（第131図 812）

812 はホルンフェルス製の打製石織である。石織 1 類の三角形織で二等辺三角形形状を呈する。袈りが浅い。

10号土坑内出土遺物（第131図 813～815）

813 は径 8.0 cm の深鉢の底部で、二次焼成の影響でもろくにがみ橙を呈している。

814 は真岩製、815 は安山岩製の打製石織である。814 は石織 IV 類の五角形織で小型のものである。815 は石織 I 類の三角形織で基部はほぼ水平である。

11号土坑内出土遺物（第132図 816～820）

816～819 は黒川式土器段階に比定できる土器である。816 は鉢の口縁部に粘土紐を貼り付けたもので、窓付きの山形突起と右端部に盤状突起を有する。817 は口縁部がわずかに内湾する 3 b 類の深鉢で、微細から 2mm 程の白色粒を多量に含む胎土を用いている。818 は復元口径 47.8 cm の水盤形をした粗製浅鉢で、指頭圧痕を重ねて器壁を薄し、入念なミガキで仕上げ内面は今でも滑らかで且つ光沢を保っている。なお、1mm に満たない白色粒を主とする胎土は、堅牢な焼成である。819 は深鉢の胴部で、内外面とも丁寧にナデで仕上げている。

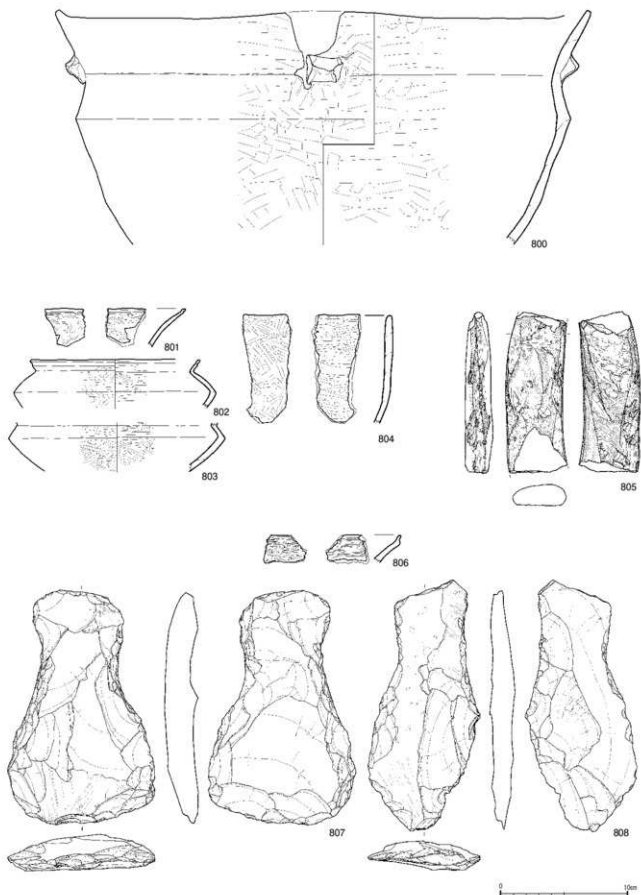
820 は玉髄製の打製石織である。石織 IV 類の五角形織に属する。基部の袈りは浅い。

13号土坑内出土遺物（第132図 821～823）

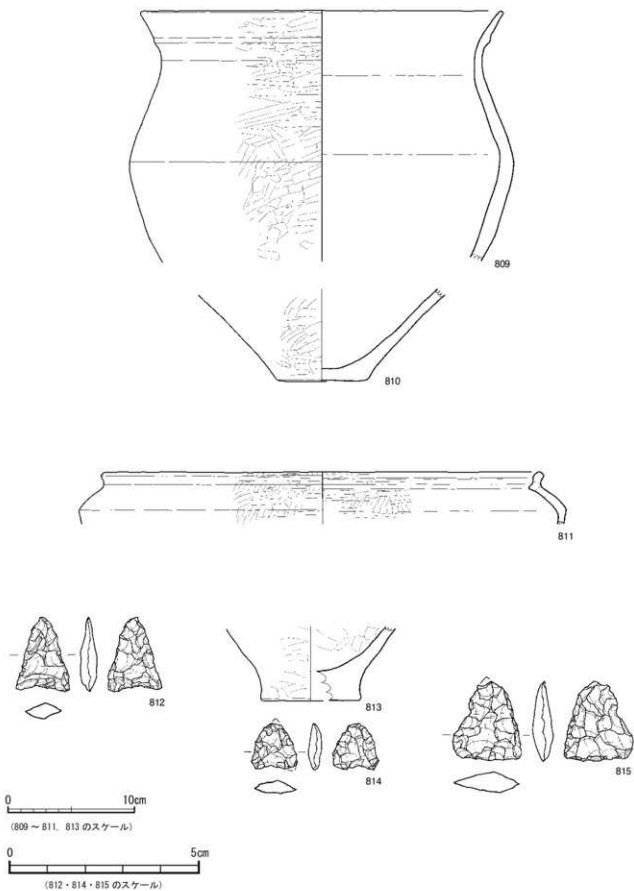
821 の形状は不明であるが鉢の口縁部資料で、両面とも入念にミガキ仕上っている。胎土に含まれる微細な輝石や角閃石は、敏感に光線に反応する。822 は中華鐘形の粗製浅鉢で、口縁部と底部接地面が欠損する。現状での最大幅が 54 cm であることから、60 cm 程の口径があったと推測される。復元図からは、接地面に近い部分まで残されるとみられるが、組織痕の圧痕は認められない。内面はナデに磨きを重ねて仕上げているが、内面の下部は黒色の平滑な面をなし、それに重なる状況でスス状の炭化物が付着する。823 は深鉢 3 b 類に属する胴部である。外面・内面ともミガキ仕上げを行っている。

14号土坑内出土遺物（第133図 824・825）

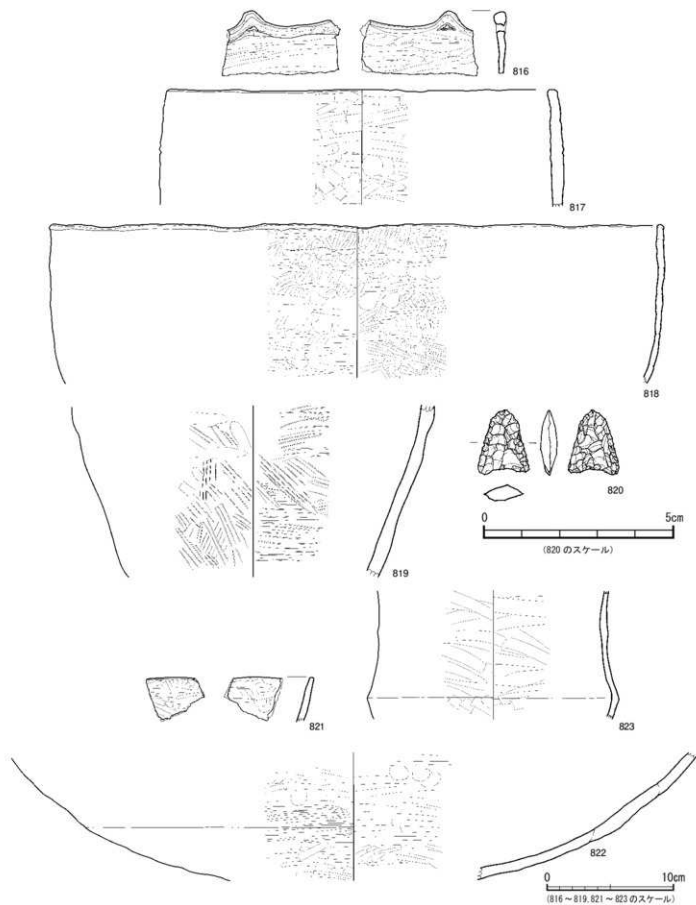
824・825 は黒川式段階に比定できる粗製浅鉢の口縁部である。824 は口縁端部がやや内側に湾曲する。2 点とも外面の条痕は明瞭に残される。



第130図 縄文時代晩期土坑(1・3・4号)内出土遺物



第 131 図 縄文時代晩期土坑（5・6・8・10号）内出土遺物



第132図 縄文時代晩期土坑(11・13号)内出土遺物

15号土坑内出土遺物 (第133図 826・827)

826は131号土坑から出土した927(173頁第141図)に類似する精製の広口の鉢形土器と判断される。

827は黒色安山岩製の石錐である。回転穿孔を目的としたものと判断する。側縁調整は腹面方向から剝離で針状に仕上げたものである。

17号土坑内出土遺物 (第133図 828・829)

828・829は黒川式段階に比定できる土器である。828は復元口径が18.8cmの皿状の浅鉢2a類で、口縁端部の内外面に1条の凹線文を巡らす。外面底部周辺にへらケズリ痕を残し、他はミガキ仕上げを行っている。829は深鉢3a類で、口縁部は直線的に外反する。

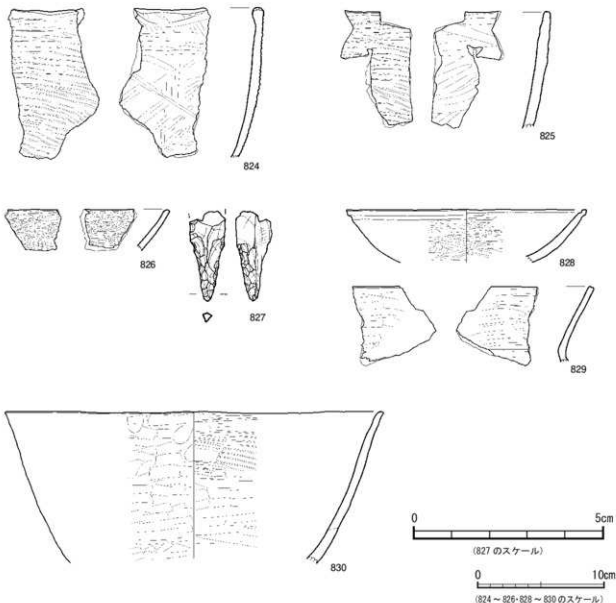
18号土坑内出土遺物 (第133図 830)

土坑内から5点出土しているが、1点を図化した。

830は復元口径が29.8cmの鉢形土器で、内面はナデで仕上げを行っている。

19号土坑内出土遺物 (第134・135図 831～839)

831～837は黒川式段階に比定できる土器である。831は復元口径が33.8cmの深鉢3a類に属する。832は復元口径が44.2cmの水盤形の粗製浅鉢で、内面はナデや指頭圧による調整に磨きを重ねて、器壁を薄く仕上げる。また、石英粒や長石粒を主とする胎土に、少量で極小の金雲母と輝石が確認できる。833はにぶい橙色の器壁で、浅鉢2類土器の特徴である長く外反する頸部をもつ。834は鉢の口縁部である。外面・内面ともナデで仕上げを行っている。835・837は中華鍋形の土器で、835は口縁部～胴部、837は胴部～底部である。835の復元口径は51.0cmで、外面は粗い条痕、内面は丁寧なナデとミガキ



第133図 縄文時代晩期土坑(14・15・17・18号)内出土遺物

を重ね、滑らかで光沢のある仕上げを成す。口縁部の内面直下には深い凹線文を巡らし、胎土には最大3mm程の白色粒を多量に含み、内面には黄褐色、外面は黒褐色と色調が異なる。837は外面にススが付着しており、外面・内面の仕上げは835の内面の仕上げと同様である。836は深鉢の底部で、底面径は7.6cmを測る。

838はチャート製の打製石織で、石織Ⅳ類の五角形織に属する。基部はほぼ水平である。839はホルンフェルス製の打製石斧である。1768(248頁第205図)と類似しており、扁平素材を使用し、頂部は礫面を残す。

20号土坑内出土遺物(第135図 840～845)

840～843は黒川式段階に比定できる土器である。840は波状口縁の深鉢3a類の口縁部で、口縁部に鰭状突起が貼付される。841は粗製浅鉢、842は直線的に外に開く鉢で大量の角閃石、輝石を含む。843は直行する形状の深鉢で、極めて細かい胎土には大量の輝石と角閃石が含まれる。

844・845は2点ともハリ質安山岩製の打製石織である。844は石織Ⅰ類の三角形織に属し、基部は挟りのない平基タイプである。845は石織Ⅳ類の五角形織に属し、基部はほぼ水平である。

21号土坑内出土遺物(第136図 846～853)

846～852は黒川式段階に比定できる土器である。846は精製鉢の口縁部で、光沢のある暗赤褐色の器面と微細な白色粒が特徴的である。口縁部を1.2cm程帯状に肥厚し、その中央部に深く明瞭な比線文を1条巡らす。847は薄い器壁で口縁部は肥厚し、848は肥厚することなく直線的に開く形状で、胎土には白色粒に加え微細な金雲母を含む。849は口縁部端がわずかに外反する傾向がみられ、1mm前後の白色粒が大量に含まれ、深鉢の口縁部とみられる。850は深鉢3類と判断する胴部で、胴部径44.0cmで復元できる。851は底部で、底面径が8.4cmを測る。外面・内面ともナデで仕上げているが、特に、接地面は丁寧に仕上げている。胎土粒は粗く、5mm程の岩粒も散見できる。852は底部で、底面径が7.5cmを測る。胎土内の輝石が光線に反応する。

853は腰岳産黒曜石製の打製石織である。石織Ⅳ類の五角形織に属する。基部は浅い挟りである。

22号土坑内出土遺物(第136図 854・855)

854はチャート製、855は安山岩製の打製石織である。854は石織Ⅳ類の五角形織に属する。基部は浅い挟りである。855は石織Ⅰ類の三角形織に属し、二等辺三角形形状を呈する。挟りは854よりは深く「U字形」を呈する。

23号土坑内出土遺物(第136図 856・857)

856・857は黒川式段階に比定できる土器である。856は深鉢の口縁部と思われる。857は底部から直線的に胴部に立ち上がる形状や円盤状貼り付け底部等の特徴から黒川式土器に比定できる。なお、器面及び破断面に灰白

色の付着物が確認でき、円盤状の接地面及びその周辺が赤化し、著しい亀裂や貫入は被熱等による二次焼成を反映するものとみられる。

24号土坑内出土遺物(第136図 858～861)

858～861は入佐式土器新段階に比定できる土器である。858は鉢の口縁部で、復元口径が18.0cmを測る。ミガキで仕上げを行っている。859は精製浅鉢の口縁部である。ミガキとナデによる丁寧な仕上げを行っている。860は粗製浅鉢の口縁部と判断しているが、深鉢の可能性も捨てきれない。861は深鉢の底部で、底面径は9.0cmを測る。

25号土坑内出土遺物(第137図 862～870)

862～868は黒川式段階に比定できる土器である。862は浅鉢2b類の波状口縁の頂部に該当する。863、864は内面を丁寧に磨いた典型的な粗製浅鉢の口縁部で口唇部が丸い。863の胎土に含む輝石は光線に敏感に反応する。865・866の器壁はやや薄くなるが、形状は863に近い鉢である。865・866の口縁部は肥厚し、866にはぶい褐色の器面を成す。なお、867の傾きは疑問であるが、光線に反応する輝石を胎土に含む。868は深鉢の口縁部で口唇部が波状を成すことから傾きは不明で、1mm程の長石粒と輝石が目立つ。

869は安山岩製、870は頁岩製の打製石織である。2点とも石織Ⅳ類の五角形織に属し、基部はほぼ水平である。

45号土坑内出土遺物(第137図 871)

871は黒川式段階に比定できる土器である。浅鉢3b類で特徴的にみられる鰭状突起ないしはリボン状突起の右側部分とみられる。

46号土坑内出土遺物(第137図 872・873)

872は黒川式段階に比定できる土器である。復元口径が29.0cmを測る。短い頸部の屈折は鋭く、体部は球状を呈する。浅鉢3b類に該当する。色調は光沢のある褐色である。

873はチャート製の打製石織で、石織Ⅳ類の五角形織に属する。挟りはやや浅い。

50号土坑内出土遺物(第137図 874)

874は黒川式段階に比定できる精製浅鉢の口縁部である。頸部の短いマリ形で、体部は球状を呈する。

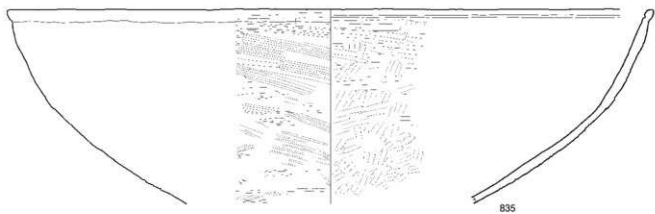
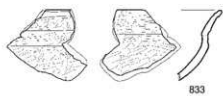
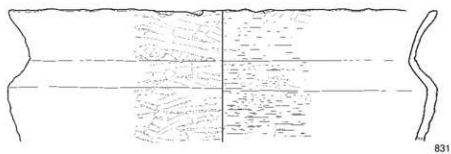
51号土坑内出土遺物(第137図 875～878)

875・876は黒川式段階に比定できる土器である。875は粗製浅鉢、876は粗製深鉢の口縁部と判断できる。

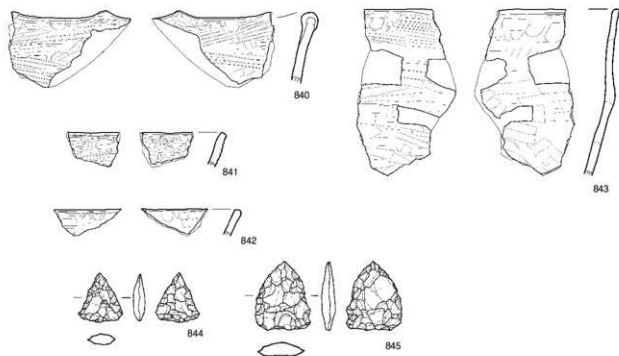
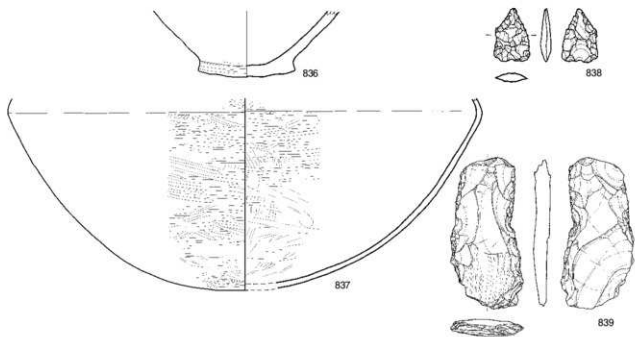
877は腰岳産黒曜石製の打製石織で、石織Ⅳ類の五角形織に属する。挟りは「U字形」を呈する。878はチャート製の削器である。

52号土坑内出土遺物(第138図 879～883)

879は入佐式土器、880～883は黒川式土器段階に比定できる土器である。879は黒色で精製浅鉢2b類に該



第134図 縄文時代晩期土坑(19号-①)内出土遺物



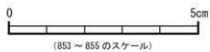
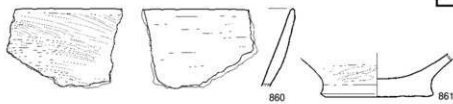
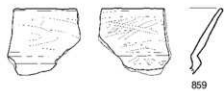
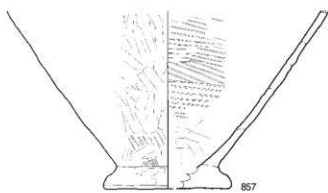
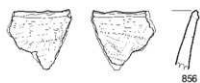
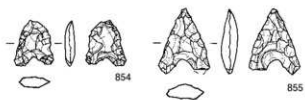
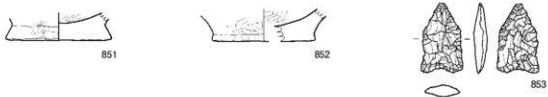
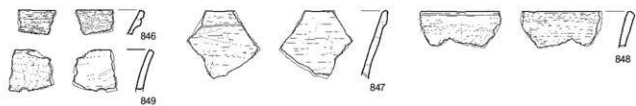
0 10cm

(836-837・839～843のスケール)

0 5cm

(838・844・845のスケール)

第135図 縄文時代晩期土坑(19号-②・20号)内出土遺物

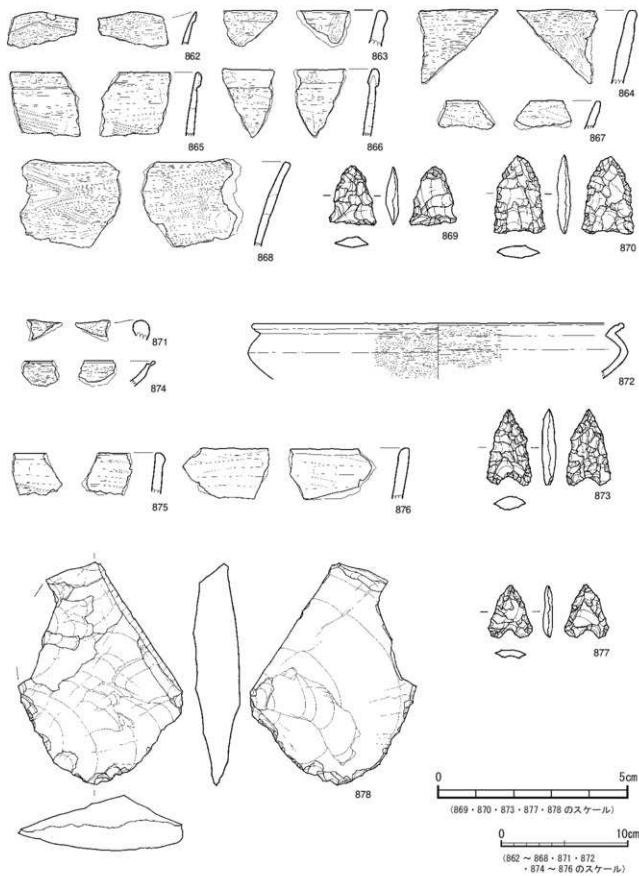


(853 ~ 855のスケール)



(846 ~ 856・861のスケール)

第136図 縄文時代晩期土坑(21~24号)内出土遺物



第137図 縄文時代晩期土坑(25・45・46・50・51号)内出土遺物

当する口縁部で、器壁は薄く、口唇部と口縁部内面は段差で、外面は凹線紋でアクセントをつける。880は精製浅鉢3 a類に該当する。口唇部は狭い平坦面を成し、その直下の内外面に浅い凹線文を残す。復元口径は29.6 cmを測る。器としての最大部は肩部にあり、胴部は緩やかに内湾しながら算盤玉状に屈折する肩部に至り、再び頭部で屈折して反対方向に大きく開きながらやや長めで直線的な口縁部を形成する。入念なミガキは滑らかで光沢のある器面を保つ。椀鉢B遺跡K類と類似する。881は内面調整が丁寧なことから粗製浅鉢の可能性が高い。882は深鉢の口縁部とみられ、両面ともに丁寧にナデて仕上げている。883は両面ともに粗い条痕状の仕上げが施され、胎土に滑石粒を含む。

55号土坑内出土遺物 (第138図 884・885)

884・885は黒川式段階に比定できる土器である。884は調整及び器壁の薄さ等から浅鉢3 b類の蟻突突起とみられる。885はほぼ直立する形状の鉢の口縁部～胴部である。復元口径は30.6 cmを測る。外面はケズリ後工具でナデ、内面は丁寧に横方向にナデて仕上げる。胎土粒子は細かく、多量に含まれる微細な輝石等が光線に敏感に反応する。

56号土坑内出土遺物 (第138図 886・887)

886はやや厚手の精製浅鉢で、口縁部が外反傾向を示すが詳細は明らかでない。丁寧にミガキ上げた器面の色調は黒褐色を呈する。

887はオパール製の打製石織である。石織IV類の五角形織に属し、基部に挟りはない。

59号土坑内出土遺物 (第138図 888・889)

888は黒川式段階の土器に比定できる精製浅鉢3 b類である。復元口径は40.0 cmを測り、口縁部は丸く、頸部との接合点には明瞭な凹線文を巡らす。1 mm前後の白色粒を含む胎土粒子は細かく、肩部から上部では横方向に、下部では縦方向に磨いた器面は滑らかで光沢を保ち、にぶい橙色を呈する。

889は玉軸製の打製石織である。石織I類の三角形織に属し、基部に挟りは見られない。

62号土坑内出土遺物 (第138図 890・891)

890は中華織形の粗製浅鉢である。外面は条痕、内面は丁寧にナデ仕上げを行っている。

891はハリ賀安山岩製の打製石織である。石織I類の三角形織に属し、二等辺三角形形状を呈する。基部はほぼ水平である。

65号土坑内出土遺物 (第138図 892)

892はハリ賀安山岩製の打製石織である。石織IV類の五角形織に属し、基部はほぼ水平である。

73号土坑内出土遺物 (第139図 893・901)

893～898は黒川式段階に比定できる土器である。893893～898は黒川式段階に比定できる土器である。

893は浅鉢3 b類に属する。口縁部は頸部に貼付した1本の粘土紐で形成され、口唇部は丸く両面は滑らかで、光沢のある暗赤褐色を呈する。「く」の字に屈折する頸部は短くして口縁部に至る。胴部から頸部にかけては緩やかに膨らみ、丸みを帯びる。894の穿孔は未完通で、895は深鉢3 a類に属する。2点とも傾きに若干疑問を残す。896～898は深鉢の底部とみられる。底面径が896は10.0 cm、897は9.8 cm、898は9.0 cmを測る。3点とも円盤貼り付け手法により類似した調整と仕上がりが認められる。

899はチャート製、900は安山岩製の打製石織で、2点とも石織IV類の五角形織に属し、基部の挟りが浅い。901は円盤状に周辺加工した磁器である。

74号土坑内出土遺物 (第139図 902・903)

902・903は黒灰色で薄手堅牢、器面調整も入念な精製の浅鉢2 b類に属する。口縁部部の凹線文、肩部の屈折が明瞭である。頸部は長く大きく外反しする。2点は同一個体とみられる。

78号土坑内出土遺物 (第139図 904・905)

904・905は入佐式土器新段階に比定できる土器である。2点とも精製浅鉢2 b類に属する口縁部で、904が暗赤褐色、905がにぶい黄褐色の器面を呈する。

79号土坑内出土遺物 (第139図 906・907)

906・907は黒川式段階の土器に比定できる土器である。906は内面が丁寧に磨かれた粗製浅鉢の口縁部で、口唇部がやや外に張り出す。胎土は長石粒等が多く、ザラついた器面を呈す。907は口縁部が緩やかに内湾する深鉢3 a類に属する口縁部である。

81号土坑内出土遺物 (第139図 908)

908は復元口径は24.2 cmを測り、口縁部がやや内湾する。器形等詳細は明らかでない。

86号土坑内出土遺物 (第139図 909)

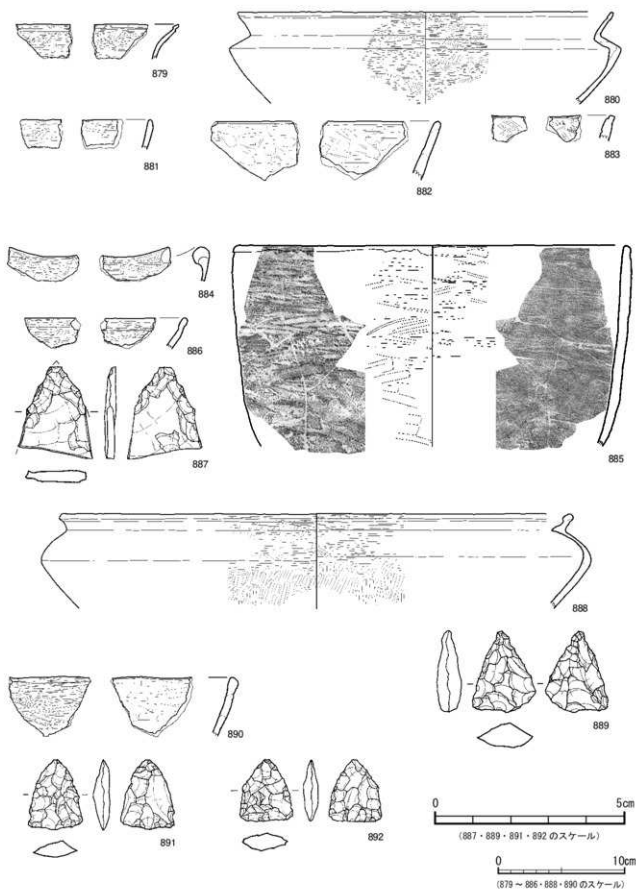
909は深鉢3 a類に属する土器で、器壁が薄い。復元口径は27.2 cmを測る。外面は工具ナデ、内面は条痕後ナデて仕上げている。

92号土坑内出土遺物 (第140図 910・911)

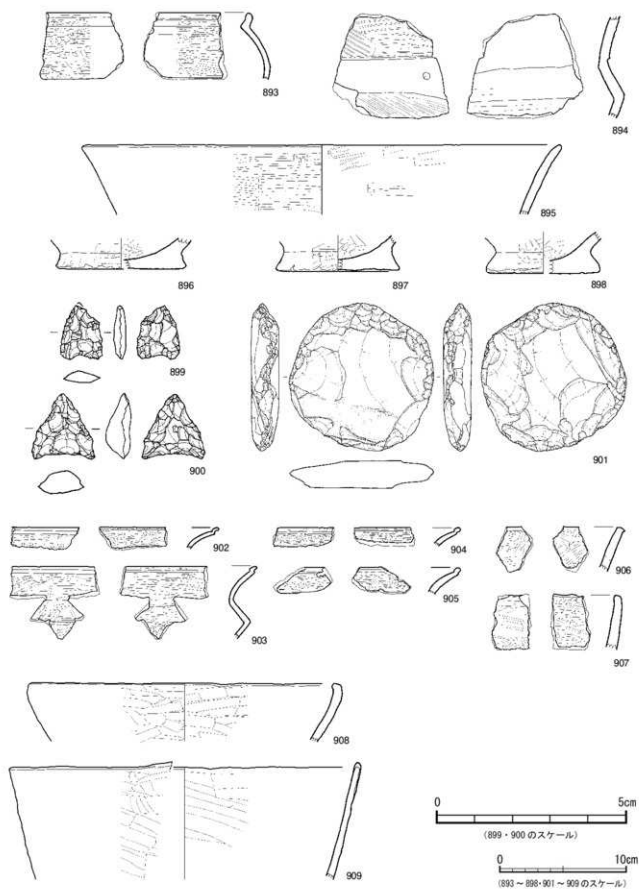
910・911は黒川式段階の土器に比定できる土器である。910は短い頸部と湾曲する肩部により浅鉢3 b類に属すると判断している。911は胴部であるが、器形等詳細は明らかでない。

102号土坑内出土遺物 (第140図 912～915)

912は口縁部が1 cm程度直立する浅鉢2 b類に属する土器で、大型であったと推測される。外面・内面とも入念に磨かれ、薄い器壁で精巧な仕上がりの器面はにぶい橙色と黒灰色で二分し、外面の凹線は細い棒状工具を使用している。913～915は粗製浅鉢の口縁部で、914の胎土には白色粒子や1 mm未満の金雲母が多量に含まれる。



第138図 縄文時代晩期土坑(52・55・56・59・62・65号)内出土遺物



第139回 縄文時代晩期土坑（73・74・78・79・81・86号）内出土遺物

120号土坑内出土遺物 (第140図 916)

916は黒川式段階の土器に比定できる土器である。916は鰭状突起の右側資料で、調整からは精製浅鉢に属すると思われる。

122号土坑内出土遺物 (第140図 917～920)

917は小型鉢の口縁部とみられ、外面・内面とも入念に磨かれ、尖り気味の口唇部を成す。918は深鉢3b類に属し、復元口径は33.0cmを測る。919・920は深鉢の底部である。919は底面径が8.4cmを測る。920は底面径が9.4cmを測る。内面が粘土の接着面で剥離する。胎土に含む1mm程の白色粒が目立つ。

127号土坑内出土遺物 (第140図 921・922)

921・922は黒川式段階の土器に比定できる土器である。2点とも鉢の口縁部で、921は復元口径が43.0cmを測る。形状は緩やかに口縁上部が内弯する。外面はケズリの後部分的にナデ、内面は最終的に横方向にミガキを重ね滑らかで光沢のある仕上がりとなっている。胎土に含む1～3mm程の白色粒が多く、外面には多量のスス状炭化物が残される。922の内面も横方向のミガキを重ねている。

128号土坑内出土遺物 (第140図 923～925)

923～925は黒川式段階の土器に比定できる土器である。榎崎B遺跡M類に類似する。923は器壁が薄く、口縁端部が低いが薄鉢状に肥厚し波状を成す精製浅鉢として図化した。傾き等は大きい疑問でもある。また、薄い器壁に含まれる白色粒は内面で目立つ。924は器種は不明。胎土に含む微細な金雲母が特徴的である。925は精製浅鉢で浅鉢3b類に属する。口縁部は粘土紐を1段積み重ねて形成する。復元口径は38.8cmを測る。突起は口縁部に貼付するリボン状突起に該当する。頸部は短い。体部は緩やかに膨らみ肩部で大きく内弯し、強く屈曲して外反する頸部に至る。底部を欠く。1mm前後の白色粒を含む胎土粒子は細かく、磨き仕上げた外面は滑らかな黒褐色を呈している。

130号土坑内出土遺物 (第141図 926)

926は鉢形土器の胴部である。外面・内面ともケズリの調整が施されている。

131号土坑内出土遺物 (第141図 927～931)

927・928は鉢形土器で、927は復元口径が22.0cmの広口の壘形で胎土に微細な輝石を含む。928は外面がにぶい橙色、外面が褐色と色調が異なる。929は深鉢3b類の胴部～底部であるが、詳細は不明である。

930は黒色安山岩製、931はチャート製の打製石織である。930は石織IV類の五角形織、931は石織III類の円脚織である。931は挟りが深く「U」形をしている。

132号土坑内出土遺物 (第141図 932～937)

932～936は黒川式段階の土器に比定できる土器である。932はやや小型の精製浅鉢で、長い頸部をもつ。933は口縁部が失われるが、精製浅鉢3b類に属する。934

は精製浅鉢の口縁部と思われるが、詳細は不明である。935・936は深鉢3a類に属する土器である。935は復元口径が36.6cmを測る。936は復元口径が24.0cmを測り、器壁が厚く重量感がある。内面屈折部周辺は丁寧にナデしているが下部はケズリや粗いナデ調整が認められる。口縁部の沈線は調整帯を断ち切ることから意図的施文とみられる。

937はホルンフェルス製の磨製石斧である。

138号土坑内出土遺物 (第141図 938～942)

938は黒川式段階の土器に比定できる土器である。深鉢3a類に属し、口縁部は外に直線的に開く形状である。器壁は薄く堅牢な焼成である。

939～942は打製石織で、石織IV類の五角形織に属する。939～941が安山岩製、942が頁岩製である。4点とも基部は水平である。